

# 奇譚クラス

Poster



1954

0

★ 奇譚クラス ★



定價 四 円





縛られた女ばかりの豪華アルバム  
頒価 一部 五百円 (送料六十円)

各書解説文句入、コロタイプ印刷

# 美しき縛しめ 第一集

全部未発表の緊縛女体十六態

客…狼ぐつわ 紅と白 蠟燭責  
…雁子揃目 観念 芋 打虫  
…儀の被 床の置物 鞭 打虫  
…荒目の被 滑車吊 高小手 打虫  
…縄 ぐさり エビ責

縛られた女体の三十二ポーズ  
(九人のモデルを駆使した未発表の秘作)

緊縛三十二態の豪華アルバム  
辻村隆雄氏、塚本鉄三撮影

# 美しき縛しめ 第二集

〇貴めの写真はほしいが、印刷紙に焼けたのは高くて困る、とおっしゃる方は、印刷紙と変らぬ極鮮明コロタイプ印刷の、アルバムを是非お求め下さい。

頒価 一冊 五百円 (送料五十円)

クリスチーヌの受難、全訳

# 被虐の家

キドロドシュツク著、吾妻新訳

可憐なる美女クリスチーヌに対する緊縛と狼ぐつわは汚辱と鞭打と凌辱の地獄図録、サディズムの粋をつくしたクリスチーヌの全訳、吾妻新氏の風情によつて描き出す。

B6判、226頁、上製函入  
ボール紙装、挿絵、15篇入  
定価 320円、送料40円

月刊 K K 通信 定価二十円 半年百円

本誌愛読者を中心にした楽しいグループ

KK特別会員の機関誌として本誌の誇るKK通信は、安価な会費と豊富な内容で、アブマニアのオアシスとして愛されていきます。本誌をお読みの方は是非KK通信も併せて御購読下さい。一昨年発行以来、毎月休みなく発行を続けております。記事、挿絵、写真満載のKK通信をどうぞ。

値が百円の会費で半年間、毎月、会誌KK通信(B6十六頁)をお送りします。

内容

- 一、山法師と静御
- 二、前女スリと園引き
- 三、淀君と千姫
- 四、大公方と侍女
- 五、八百屋お七の最期
- 六、新撰組と芸妓
- 七、十郎左衛門と腰元
- 八、小紫と悪徳本

# 時代物責繪巻

三条春彦・画

各書説明文句入、挿トジ和装表紙  
特価 三百円 (送料五十円)

図画申込みは、囃書房、代理部へ！  
図版重荷造の上巻送し上げます

奇譚クラブ臨時増刊号ノ

サディブラツケイズ著、吾妻新譯

# アリスの人生学校

定価 百円 (送料共)

美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く、サディズム文学の決定版！

第一部 純潔教育 第二部 貞操教育

【キヤピネ版 3枚1組 各200円】  
灸責め3態 (杉 美美峰)  
羞羞責め3態 (雲井久子嬢)  
漢流の飛鳥 (村田那美子嬢)  
高手小手3態 (木田雅子嬢)

# 女体…緊縛 ◎傑作写真集◎ 本誌写真部特写 (全部送料共です)

鞭打ち3態 (杉 美美峰)  
制服の女学生 (雲井久子嬢)  
野外全裸の縛 (村田那美子嬢)  
ナイロンの女体 (杉 美美峰)  
女が女を責める {第一集 第二集}

急襲 手札型15枚 1組 500円  
連続十五枚繰りまで、女が縛られて、さるぐつわをされるまでの過程を描いた優秀作。

川端多奈子嬢  
悦虐姿態集  
第一集 (手札型) 200円  
第二集 (七枚一組)  
定評のあるマゾ、性多奈子嬢の悦虐のポーズ

坂口利子嬢  
股間縛り 5態  
キヤピネ版 5枚1組 500円  
問題の股間縛り十数態の中から、最も強烈で美しさのある五態を選び出しました

村田那美子嬢  
悦虐姿態集  
手札型 5枚1組 200円  
さるぐつわ 3態  
キヤピネ版 3枚1組 300円

中富綾子・並川トミ二嬢  
二女連縛集  
手札型 6枚1組 300円  
自分から縛りのモデルを志願してきた二人の乙女の連縛ポーズ

伊吹真佐子嬢  
椅子責め 5態  
キヤピネ版 5枚1組 500円  
十四頁三百の豊満な女体を縦横に椅子に縛りつけた

伊吹真佐子嬢  
梯子責め 3態  
キヤピネ版 3枚1組 200円  
梯子に縛りつけて宙にうかす女体に喰い込む縄目、サディズムの見果てぬ夢の一つ。

三嬢連縛棒吊り  
(杉・坂口・村田の三嬢)  
キヤピネ版 3枚1組 300円  
これは誠に珍妙なフォトである。企んで出来るものでなく、偶然のチャンスが得た面白い作品。

村田那美子嬢  
坂口利子嬢  
半吊り 2態  
キヤピネ版 2枚1組 200円  
優美にして変化のある半吊り

磔 (大好評傑作！)  
第一組、キヤピネ 2枚1組 200円  
台上の殉教者  
キヤピネ版 2枚1組 200円

吊り3態特集  
(川端多奈子嬢)  
キヤピネ版 3枚1組 500円  
第一組 第二組  
第三組 第四組

男性被縛写真  
第三集 手札 5枚1組 300円  
第四集 型 5枚1組 300円  
男性マゾ写真  
第一集キヤ 3枚1組 300円  
第二集ピネ 3枚1組 300円

女性切腹擬態  
写真シリーズ 8枚  
キヤピネ版 8枚1組 600円

血紅使用の  
切腹擬態写真  
(第一集) (第二集)  
各集手札型 6枚1組 200円

真刀を用いた  
切腹擬態写真  
手札型 6枚1組 300円  
女性切腹姿態 (第二集)  
手札型 6枚1組 300円



# 本誌躍進七十号突破記念

## ◆懸賞原稿募集◆

一、賞金  
一席、四万円 一名

創刊七周年記念の懸賞原稿募集に際しては、多数の方々から御応募を頂き、本誌上に百花爛漫の華を競いました。本誌の躍進を祝し、再び、新人の登場を期待して、広く同好の方々からの傑作を募ります。奮って御投稿あらんことを。

一、内容はアブノーマルな題材を扱い、本誌にふさわしいものを。

### 規定

二席、二万円 三名  
三席、一万円 五名  
四席、五千元 十名  
佳作  
本誌一カ年贈呈 十名  
本誌半カ年贈呈 十名  
本誌三カ月贈呈 十名

一、創作、小説、文庫、研究、告白、体験、等形式は問わず、一枚数は二十枚より百枚迄、一、必ず未発表のものたること、一、締切は 九月三十日、一、入選者発表は本誌十二月号誌上の予定、一、銚子は編集部選、一、封筒に懸賞原稿と朱記の事、原稿の返戻御希望の方は、返券同封されたし、

曙書房編集部懸賞原稿係

## ●女体緊縛寫真優秀作●

各キヤビネ版 3枚1組 300円(送料共)

## 縋帯縛りの特選

アメリカ某社の注文によりそのアイデアを活かしたエキゾチックな緊縛のポーズ清新と奇抜を兼ね備えた野心作。

### 中富綾子嬢 股間縛り 3態

可憐純情の乙女、中富綾子嬢の柔肌に喰い込んだ荒縄の縄目、これぞ垂涎の股しぼり。

### ローソク責め 3態

責め手の厳しい手は、情容赦なく燃える蠟涙が柔肌をやく、マゾ女の苦悶の表情と被虐の美しいポーズ。

### 後手高手小手 2面体

伊吹真佐子嬢  
大鏡を利用して、高手小手の緊縛と胸にかゝった縄目とを同時に一枚の画面におさめたフォトマニア待望の珍品。

### 浅野末乃嬢 さるぐつわ 3態

ニューフェイス浅野末乃嬢の豊満な姿態にかゝった縄とさるぐつわ。

### 萩 千恵子嬢 海老責め 3態

ヤセ型の柔軟な姿態の千恵子嬢を二つ折りに曲げたエビ責めのポーズ、二本の足だけが宙に躍っている。

### 萩 千恵子嬢 猪吊り 3態

両手と両足を一つに括つて吊り上げた猪吊り、こうして吊られていると、だんだんマゾ的な気持ちになつてくるわ、という萩千恵子嬢。

### 萩 千恵子嬢 レインコート 3態

レインコートを纏つて後手に縛り上げられた美貌の萩嬢の美しい被虐の姿態。

### 萩 千恵子嬢 腰巻 3態

腰巻マニアの方々には是非この3態を味つて下さい、屈曲の多い優美な純日本的なポーズを取り揃えました。

### 萩 千恵子嬢 縋帯 3態

白い肌にまといつく縋帯の白さは妖しい倒錯美をかもし出している。縋帯による緊縛感と姿態美。

## ☐新作 マゾ・フォト ☐

春日ルミ嬢・構成

各キヤビネ版 三枚一組 三百円

### 足舐 三態

A、椅子に腰掛けたルミ嬢が男の口へ足を入れている  
B、クローズ、アツ  
C、男が足を持つて舐めようとしている

### 足蹴 三態

A、ハイヒールで頭を蹴られているところ  
B、蹴り倒される男  
C、後手に縛られた男が、思うままに頭をけられる

### 凌辱 三態

男性をケダモノのように足下に踏みにして、喜ぶルミ嬢の得意のポーズの中で特別にマゾヒストの喜ぶ凌辱の姿態を揃えた。

### 人間椅子 三態

A、胸の上へ灰皿を置いて女王様の休息の椅子となつている  
B、人間ソファ  
C、うずくまつて、女王様に背中をかしえているドレイ

### 犬の折檻 三態

A、芸を仕込まれているワン公  
B、女王様を背にしたワン公  
C、さア、歩くのヨ  
(首環とくさりで仕込まれる)

### 人間馬 三態

A、乗馬ズボンに乗馬靴の女王を背に拍車をかけられるところ  
B、鞭を加えられる  
C、馬を走らせる









滝麗子画  
相責め  
女のレスリング





# 九月の責絵 野分 (のわき)

伊勢物語の一節に「むかし業平朝臣、二条の后をぬすみ出しとある古寺にやどりたるに鬼一  
ト口に食いたるとなん」とあるのを九月に因みて野分としてかいてみました。伊藤晴雨





# 物語 絵物 牧場物語

新久 妻 吾 作  
数 亭 画



「ああ、あれが私の牧場！」  
スーザンは足をとめて、思わずつぶやいた。その声には、テキサスの人里はなれた田舎まではるばる旅をつづけてきた疲れがこもっていた。  
ニューヨークをたつとき、恋人の弁護士ゲイリーが一人旅を心配してひきとめたのもかまわず、自分の眼で父の遺産をたしかめたい一心でやってきたのだ。  
その小さな牧場には、支配人グレゴリー夫妻と娘のナシイが、ジョージという腹心の青年をたった一人使っているだけで、勝手気儘に経営を切りまわしていた。だから美しい所有者が突然あらわれて、父の遺言状をみせるとも女ではやってゆけないから売るつもりだと云われたときには、すっかりおどろいてしまった。  
「どうするの、あなた！」  
「なあに、相手は女一人で、しかも孤児だよ。こうなれ



ば俺たちで乗っ取ってしまうさ。まあ俺に任せておけよ。」腹黒い支配人は薄気味のわるい笑いを浮べた。





翌日、支配人はスーザンに申しこんだ。  
「どうせ売るなら、私が買おうじやありませんか、あんたもそのほうがいゝだろう。」  
「ええ、いくらで？」

「千弗。」

スーザンは笑いだしてしまった。

「冗談をおっしゃってるのね。いくらちいさな牧場でも、五千弗以下では手離せないわよ。」  
「いや、あんたは手離すよ。」とグレゴリイはすまして云った。「いくら反対したって承知させる手段はあるんだ、諦めたほうがいゝぜ、こゝは町からはなれた別天地なんだから。」  
ついに、狼は本性をあらわした。



そのまゝスーザンは一室に檻禁され、鍵をかけられ、食事も与えられなかった。  
ロマンチックな夢は破れた、美しい牧場は悪党の巢だった。スーザンは今更のように一人旅を後悔したが、あとの祭だった。  
窓越しに、となりの部屋の食卓がみえる。喉がわいて、思わず視線がむくと、みんなはこれみよがしに肉を頬張りながら嘲笑するのだ、なんとという残酷な拷問だろう、彼女は眼を閉じ、口唇をかねて耐えようとした。  
だが、どんなに頑張っても精神は肉体に勝てない。二日めの夕方、とうとう耐えかねて屈服してしまった。  
「千弗で売るから、早く食べさせて！」  
契約書にサインしたスーザンは、一刻も早く



金を受けとってニューヨークにかえるつもりだった。ところが、グレゴリイは金を払わない。  
「代金はあんたの滞在費でさしひいたげるよ。」  
「まあ、私は滞在なんかしないことよ。」  
「そうはいかない、代金を全部さしひくまで、帰すわけにはいかないのだ。さあ、まずいまの食事代二弗の受取りをかいでもらおう、物事は合法的にしておかないと、あとがうるさいからな。」

その悪賢い抜目のない考えに、スーザンはぞっとするとともに、無性に腹を立てた。  
「いやよ、だれが書くもんですか。」  
怒りに燃えて拒絶した。





「しよりのないお嬢さんだな。」とグレゴリイは落ちついて云った。「じゃあひとつ、痛い目にあわせてやろう。」

「おゝ、なにをするのよ。」

「これから当分一緒にくらすんだから、まず手はじめに教育してやるのさ、なんでも絶対に服従するようにね。」

云うが否や、グレゴリイはスーザンの腰を抱きかゝえ、悲鳴をあげてもがくのもかまわず、物置小舎に引き立てゝいった。そして太い柱に両手両足をしばりつけると、スカートをまくりあげて落ちないように別の麻縄で縛った、それだけでスーザンは気も狂わんばかりだった、生れてはじめてこんな暴力に会う恐怖にもましてあられない姿を男の眼に曝すのが死ぬより辛

い思いだった。

ゆたかな臀部に最初の鞭が当たると、「ゆるして、書くからゆるして！」とスーザンはたちまちさげんだ。が、グレゴリイは聞えぬふりをして鞭をふるいつづけた、準備に手間をかけた以上、折檻をゆつくり楽しむ権利があるということを感じ知らせるために。

「書くから、あゝッ、ゆるしてください！」

「まだ、お前のパンツは破けやしないよ。」思う存分に差かしめてやると縄を解いたときには、主人と召使の立場は逆転していた。スーザンはふたゝびもとの部屋に追いやられ、そこで命令されるまゝに受取をかいいた。

食べのこしの食事をあてがわれて二弗！、しかも日に六弗として、千弗に達するには半年以

上もかゝる。

「どうだい、千弗で売ってよかったろう、さもないとお前は何年もこゝに釘付けだよ。」

「もうお金は要らないから帰してください。おねがいですから。」

恥も外聞もなく床にひざまずいて哀願したがグレゴリイはゆるさなかった。

「法律を無視した取引はしたくないからね、払うものをチャーンと払ってもらい、棒引になったらかえしてやろう。」

合法的なこのカラクリのおかげで、無一物になる自由さえあたえられないのだ。







涙の日はつゞいた。

ある日、ジョージがそ  
つとさゝやいた。

「どこかへ手紙を出し  
たければ書けよ、町へ  
出たときにほりこんで  
やるから。」

「え、本当に？」

ふるえる声でスーザ  
ンは、いとしいゲイリ  
イに走り書きした。

「私はこゝに囚われ  
ています、一日もはやく救い出してください。  
その手紙をポケットに収めると、彼はいきな  
りスーザンを抱きよせて接吻した。それから、  
その場に押し倒そうとした、彼女はおどろきの  
あまり声も出ず、ただ死物狂いで抵抗した。  
「ふん、大それた仕事をたのみやがって、俺の  
自由になるのは厭だ、っていうのか。よし、どう  
するか見ている。」

獣のような怒りで眼を輝かせたジョージは、  
いきなり戸外に走り出ると、通りかゝったグレ  
ゴリーにその手紙をつきつけた。  
「支配人さん、あいつ、こんな手紙をかい  
て、僕にこっそり出してくれて云うんですよ。」  
「なんだと！ おいスーザン、ちよつとこい。」  
恐怖で死んだようになつたスーザンは、皆の  
まえで散々に頬を叩かれた。

「お客様扱いにしなければいゝ氣になつて、とん  
だことをたくらみやがる、もう容謝しないから  
な。ナンシイ、こいつの服を剥ぎとつて作業服



をきせてやれ、そして明日からこき使うんだ。」  
「えゝいゝわ。さあお前、こつちへおいで。」  
ナンシイは手荒くスーザンをひき立て、笑い  
ながら云つた。「ジョージはあたしの彼氏なん  
だからね、へんな色仕掛に出るのは御免だよ。  
……さつさと脱ぐんだ！」

スーザンは力づくで裸にされ、男の労働者の  
着るようなよれたシャツとズパンをあてがわ  
れた。こうして、名実ともにドレイの生活につ  
きおとされたのである。





翌日からはげしい労働がはじまった、朝は暗いうちから起きて、水汲み、炊事、床みがきの雑用に追い廻され、それがすむと牧場に追いやられる。主人は一人ではなく、すべてが勝手な用事をいっつけ、すこしでも気に入らないと鞭がとんだ、いちばん辛いのはジョージとナンシイ

の命令だった、手紙の件でこんなみじめな境遇に陥しいれたジョージは、ズボンを穿くようになつてから一層好色的な眼つきで腿や腰のあたりをジロジロ眺め、次から次と戸外の用事を云いつけては、人気のないところで抱きしめようとする、それに抗えばまたどんな復讐をされるかおそろしく、針で刺されるような思いで三度に一度は抱擁や接吻をされるのだった。

ところがナンシイはそういう気配を知ると、やりばのない嫉妬を無力なスーザンの上に爆発させた、彼女はスーザンに小川まで馬を曳かせ、よしと云うまで馬の脚を洗うように命じながら、うしろに立って尻を蹴ったり、鞭で叩いたりした。

「お前のいやらしい気持を洗い落すように、しつかりと洗うんだよ、私も手伝って悪魔をたゞき出してやるからね。」

もはや脱走以外に、この地獄の生活から逃れるすべはなかった。牧場から町まで六マイルだが、そこには警察もあるはずだ。おま、守らせたまえ！、

チャンスは朝しかなかった、彼女は水汲みに出るふりをして裏手にまわると、そつとそこをぬけた。それから後も見ずに、夢中で走った。

だが、ものゝ五分とたぬうちに馬の蹄が聞えてき



た、いつものように網を張っていたジョージが発見したのだ、それに気づくとスーザンの全身が絵毛立った、彼女は追跡をくらますために林にかけこんだ。そして、大きな樹の洞穴をみつけてもぐりこみ、息をひそめた。

ところがそこはおそろしい蟻の巣だった。たちまち肩から首に。胸に、無数の蟻が這いこんでくる。思わず悲鳴をあげてころがり出たところを、かけつけたジョージに捕えられた。

「あッ、蟻が……、くるしい！」

「まったく、これじゃあ抱きしめることもできやしねえ。残念だな。」

勝手なことを云いながら、ジョージは苦しみもがくのもかまわず、馬乗りになってスーザンをうしろ手にしぱりあげた。





スーザンは馬につながれ、もときた道を歩かされた。脱走が失敗したことや、これからの懲罰を考えると身も世もない思いがしたが、それにもまして現在辛いのは、からだ中を這いまわっている蟻を払い落せないことだった。

「御生だから……逃げないから……この手をほめて！」

「ダメだよ。うちへ帰ったらすっ裸にして洗ってもらうんだな、それまでは俺の代りに、ちっとはアリにも楽しませてやるさ。」

絶えずもがく姿を眺めながら、ジョージはわざとゆっくり、駒をすゝめた。

牧場では、激怒した人たちの折檻が待っていた。支配人は一部始終をきくと、こう云った。

「今日は一日じゆう食事ぬきで、三弗づゝ払わ

せてやる。ナンシイ、お前はこいつを裸にして水をかけてやれ、だがそのまえにすこし鞭を喰わせて思い知らせなくちやならん。」

スーザンは馬の鞍につながれたまゝで、気が遠くなるほど鞭打を受けた、それからやつと身体を洗うことができたが、ナンシイは意地わるくせきたてた。

「服にもまだアリが……。」

「だまってさっさと着るんだよ、私を待たせるつもりかい？」



ふたゝび両手を縛られたスーザンは、食事もあたえられず、一室にほりこまれた。

しばらくすると、しんとした部屋に人の近づく気配がする。ふりむくと、ジョージだった。

あつと声を立てようとする口にすばやく猿ぐつわをはめられ、逃げようとする身体は太い腕に抱きすくめられた。

「待っていたよ、スーザン、今日という今日は可愛がってやるからな。」

叫ぼうにも声が出ず、あふれるのは無念の涙ばかりだった。

すると、ドアがあいた。ナンシイだった。





「あ、ナンシイ、じつはその、こいつがね。」  
あわてゝ飛びのいたジョージは口ごもった。  
ナンシイの眼は異様に光った。  
「ふん、御丁寧に猿ぐつわまでして、あんたの  
本心はわかるわよ。でもね、この子は私の監督

下にあるんだから、指一本だって  
さへせないことよ。」

こそく出てゆくジョージを見  
送った彼女は、こんどはスーザン  
の髪をつかんでゆすぶった。

「よくも私の恋人を誘惑してくれ  
たね、いったいお前のどこがい  
のさ。この顔かい、それとも」

云いながら、頬をつねり、腿を  
つねる、泣き声を立てゝスーザン  
はのたうちまわった。

「どうしてそうあばれるんだらう  
ねえ。」と、スーザンはいっそう  
嗜虐に駆り立てられて叫んだ。

「ようし、そう抵抗するんなら私  
にも考えがある。お立ち！」

彼女はむりにスーザンを引き立てゝじぶんの  
寝室に追いこむと、手足を大の字に開いてベッ  
トの脚に縛りつけた、それから思うがまゝにい  
びりはじめた。嫉妬に狂った女の指先は、美し  
い競争者の肉体をあますところなくさぐり、復  
讐のよろこびに震えるのだった。

「叫べるものなら叫んでごらんよ、どうにもな  
らないじゃないか。これからはババにお願いし  
て、お前をずっとこの部屋に寝かせるからね、  
毎晩可愛がってやるから覚悟おし。」

あらゆる攻撃に身をさらし、眼もくらむ思い  
でスーザンはもがくのだが、声は猿轡に押しつ  
ぶされ、手足に紐が食い入るばかりだった、じ  
ぶんの所有地の牧場でこのような責苦に会って  
いることを、とおいニユーヨークの空の下でゲ



イリイが想像だにしているだろうか。あゝ、恋  
しいゲイリイ、あたしを助けて！

だが、復讐はあたらしい形でつぎつぎに加え  
られた、夜が明けるとスーザンはこのおそろし  
い女主人につき添われて林へ薪集めに行かねば  
ならなかった。

「お前は逃亡の前科があるからね。」

そう云ってナンシイは彼女の脚の間に紐をつ  
け、その一端を樹の幹に縛りつけた、猿廻しの  
猿のように、彼女は紐のゆるす範囲で枯枝をひ  
ろった。

「そら、もっとからだを伸ばせばとどくじやな  
いか。怠けると承知しないよ。」

ハンモックにねそべりながら、ナンシイは無  
理な命令をだして、みじめな姿を楽しんだ。





やっと薪を集めおわると、ナンシイはそれを背負わせてから、幹につないだ紐をほどいて左手にもち、右手に革鞭を握った。

前屈みの姿勢になると、たださえ豊かな臀部がズボンにびったりして、鞭打の欲情をそよることをスーザンは感ずるのである。だが紐でつながれているかぎり、それから逃れることはできないのも明らかだった。急ぐとすれば紐を締められ、足をゆるめれば叩かれる。鞭の響き

はしずかな林にこだまして、この異様な行進の単調な伴奏となるのだった。

家に近づくにつれて、スーザンの苦しみはましてくる。というのは、ジョージの好色的な視線や、グレゴリー夫婦の嘲笑を味わねばならな

いからだった。

「なんて恰好だい、まるでポニイだな、どうやら既へつないだほうがよさそうだぜ。」

「響をはめて、手綱をつけてね。」



「そして、いちばん乗りたいのはジョージらしいわ。」

ナンシイは皮肉たっぷりに云った。

が、ジョージはまだ諦らめていなかった、みじめなスーザンの姿を見るにつけ、ますます征服したい欲望にかられてくる。——もうあの女もドレイみたいなものだ、俺の申し出をことわる勇気はないだろう。

ナンシイの眼をかすめて、彼はスーザンに云い寄った。

「お前をこんな眼に会わせた以上、もう支配人はお前を手離しっこないよ、告訴が恐ろしいからな。どうだ、俺と夫婦になると約束するなら一緒に逃げてやるが。」

「さわらないで！」

じぶんを裏切った憎しみと、こんなところをナンシイに見られたらどんな眼にあうかしれないという恐怖とで、スーザンは身をもがきなが



ただ泣くばかりだった。  
地獄のような日が明け暮れた、一カ月が夢魔  
のようにながれた。

ある日、ニューヨークの弁護士事務所から、  
ゲイリーのスーザンに宛てた手紙が届いた、も  
ちろんグレゴリーはそれを開封した。

長い手紙は、その後のスーザンの安否を気づ  
かう文句からはじまり、到着の知らせもないこ  
とを責め、これ以上あなたの顔を見ずにはいら  
れない、万障繰り合せて明日出発し、明後日そ  
ちらに着くだろうと結んであった。

グレゴリー夫妻は色を失った。

「そんな男がやってきたら私たちの身の破滅だ  
わ、どうしたらいいんでしようねえ。」

「レッ、声が高い。」

スーザンはすっかり汚れきったズボンの膝を  
ついて床を磨いていた。幸か不幸か、夫婦の会  
話は耳に入らなかった。

「スーザンみたいな孤児に弁護士恋人がいる



とはしらなかった。

とにかく、会わせる  
ことは絶対にできな  
い。来たらスーザン  
の受取だけみせて追  
い返すんだな。」

彼はジョージを呼  
んで、明後日は朝か  
ら街道筋を見張るよ  
うに、もし男の姿を  
見かけたらすぐ通知  
するように命じた。

その日、スーザン  
は朝から部屋にとじ  
こめられて、一步も

出されなかった、やがてジョージが、馬に乗っ  
た青年がこの牧場に向ってくるのを知らせた、  
一家はたちまち緊張に包まれた。

ナンシイは部屋に入ってくると、いきなりス  
ーザンの両手を縛り上げた、それから猿  
ぐつわを取り出した。

「ゆるしてください。私、なんにも悪い  
ことをしませんでした。」とスーザンは泣  
き声を出した。

「だまっておとなしく口を開かないと、  
あとでひどいよ。」と女主人はおどした。

口一杯にハンケチを押しこみ、いつも  
よりずっと嚴重に猿ぐつわをかけると、  
ナンシイは彼女の縄尻をとって裏口から  
林にいそがせた、それから厭がるのを打  
ったり抓ったりしながら太い樹の枝に跨



がらせ、あらためて手と脚とをしっ  
かり幹に縛  
りつけた。

なぜこんな目にあうのか、スーザンには分ら  
なかった、ナンシイの立ち去るのを見送りなが  
ら、彼女はしみじみと自分の運命を悲しんだ。  
もがき疲れて涙を流しながら、幾時間たった  
う？ 日は西に傾き、あたりは暗くなった、手  
首の感覚はほとんどなくなってしまう。  
すると、あたりの様子をうかがいながら近づ  
いてきた人影は、あのいやらしいジョージだっ  
た。

「どうせこのへんだろうと思っていた。かわい  
そうに、いい恰好をさせられてるじゃないか。  
いま俺が下ろしてやるよ。」

一難去ってまた一難、スーザンは身にせまる  
危険をかんじて固くなった。





性こりもなく蛇のように自分の肉体をねらっているこの男が今まで目的を果さなからたのは嫉妬ぶかいナンシイの眼が光っているからなの

「ようし、じゃあ、また猿ぐつわだ。」  
こうした悲劇が行われているとは夢にも知らず、スーザンが牧場を売ってとくに立ち去っ

だ。いまは人影一つ見えぬ林の中で、四肢の自由を奪われ、声すら立てられない。絶対絶命だった。スーザンの血は凍る思いだった。

だがそんなことにはおかまいなく、ジョージは手足を解いて抱きおろす力ずくでシャツを奪いとった。逃げようとするとスーザンの白い両手はねじ上げられ、またも呪わしい紐が手首に、露わな胸にまといつくのだ。

「おっと、この前の二の舞をやる気でもそうはさせないよ。待ちに待ったるチャンスだ。いくら暴れたってダメだから観念するがいい。」

バンドに手がかみり、竹の皮をむくようにびっちりしたズボンが剥がされてゆく。必死で争った。地面にころげてもがいた。だが両脚は空しく虚空を蹴り、みるみる夕闇に白い裸身が浮びあがった。

ジョージはゆっくり草の上に腰をおろすと、哀れな犠牲者を引きよせ、膝に抱き上げた。

「声を立てたって家まで届きやしないから、猿ぐつわだけは外してやろう。ただし、おとなしくキッスさせないとまたかませるぜ。いいか。」

「あッ、ああッ、ゆるして！」

たと言ひ張るグレゴリーの言葉に疑いを抱きながら、ひとまず町に戻って考えようと決心した青年并護士ゲイリーは、はるかな林を眺めながら駒を進めていた。

声も立てられず弄ばれる恐ろしさに耐えかねて、スーザンはいくたびも口唇を奪われた。だ







が、度重なるにつれ、男の息が荒くなってくる  
と、彼女はふたたび抑えがたい恐怖におそわれ  
た。

「もう、もうやめて、御生だから……。」

「ゆっくりやるのは厭だとおっしゃるのかい。

早く可愛がってくれと言うんだな。」

「ジョージ、ほかのことはなんでも言うことを  
きくから、あッ！」

「どうせ人身御供に上った身体じゃないか。あ  
まり騒ぐと痛い眼を見せるぜ。」

容謝なく肌をまさぐる手を避けようにも、し  
っかと抱えこまれた縛しめの身はただ浪打つば  
かり。それがまたジョージの血を掻き立てるの  
であらう。膝からひきずりおろすと、あおむけ  
に押し倒した。

「どうせわかることだから、な  
ぜこんな林の中につながれたか  
説明してやろうか。今日ニユー  
ヨークからお前に会いたいとい  
う男が来たんだよ。」

「えッ。」

「支配人はお前がいけないことに  
して追い帰したんだ。こうなれ  
ばますます危いから、お前を手  
ばなす気づかいはないよ。どの  
みちお前は逃れっこないのさ。  
だからもうくだらない夢はあき  
らめて、俺と一緒になっちゃど  
うだ。いやだと言ったってこの

とおり、どうせ  
力づくで手こめ

にあうのだからな。」

スーザンの眼のさきは暗く  
なり、心臓がとまった。ただ  
ひとつの希望の星が消えたの  
だ。その空間に獣のような顔  
がひろがり、近づくのを眺め  
ながら、彼女は眼を閉じた。  
あたしはこの男に汚され、や  
はり暗黒の空に消えるのであ  
らう。

「わかったわ。」と、冷たい  
声でつぶやいた。「なにもか  
もあきらめて、あなたの言う  
なりにになります。……でも、  
縛られたままではいや。縄を

「どうせわかることだから、な  
ぜこんな林の中につながれたか  
説明してやろうか。今日ニユー  
ヨークからお前に会いたいとい  
う男が来たんだよ。」

「えッ。」

「支配人はお前がいけないことに  
して追い帰したんだ。こうなれ  
ばますます危いから、お前を手  
ばなす気づかいはないよ。どの  
みちお前は逃れっこないのさ。  
だからもうくだらない夢はあき  
らめて、俺と一緒になっちゃど  
うだ。いやだと言ったってこの  
とおり、どうせ  
力づくで手こめ

にあうのだからな。」







い。いまはスーザンも必死だった。だが女の非力の悲しさに、たのむピストルはもぎとられ、草の上にねじ伏せられた。

「殺して、いっそのこと殺して！」

「ふざけるな。殺す位ならこんな手間をかけるものか。うんとおもちゃにしてやるからそう思え。」

「あゝ、だれか来て！」

「そんなセリフも言えなくしてやるからな。」

「たちまち両手を縛り上げられ、またしても悲鳴をふさぐ猿轡。スーザンは絶望の呻き声をあ

げた。するとジョージは落ちてゐる枝を拾って背といわず尻といわず、ピシピシと打ちたたいた。欲情と怒りは一つとなつて、身動きできない犠牲者の上に雨とふりそそいだ。

と、林を縫って馬蹄の響きがちかづいた。ジョージが顔色を変えて立ち上つたのと、馬上の男が姿を現わしたのと同時だった。

男は馬からとびおりると、走りよつてその場の光景をみた。

「スーザン！」

息も絶え絶えのスーザンの眼から泉のような涙が噴きだした。言葉にならぬ絶叫が猿轡つわの下からはとばした。

ジョージがピストルを拾おうとした瞬間、青年のからだだが嬰いかかった。腕力を誇る牧童もこの青年の鉄のような拳の前には敵でなかつた。乱打につぐ乱打をうけて顔面血まみれとなりついに昏倒してしまつた。

青年はおののく手でスーザンの縄をとき、猿轡つわをはずした。それから、ひしと抱きあつた。

「おおゲイリイ、ゲイリイ！」

「なぜ僕の言うことをきかなかつたんだ？」

「すまないわ。あたしがバカだったのよ。」

「もしピストルの音を聞きつけなかったら、いまごろは……。」



「おお、それからさきを言わないで、ゲイリイ……。あたしをゆるして！」

翌日、テキサスの寒村の駅を出る列車は、異様なコントラストをしめす二組の乗客で人々の注目をひいた。一組は、手錠をはめられ、色青ざめて警官に護送される四人の男女だった。いまひとつは新婚と思われる逞ましい青年と一際美しい娘とであつた。二人はほとんど口をきかず、熱情的な眼で眺めあい、ひとのみる眼も憚らず抱きあつて、幸福な接吻に酔つていたのであつた。

Suk  
June 5, 1954



岩を噛む溪流へ流そうとする



溪流へかけられた木に仰向けに縛る





# 野外縛りの記録

辻村 隆

## 松の幹の晒し



モデル・伊吹真佐子嬢

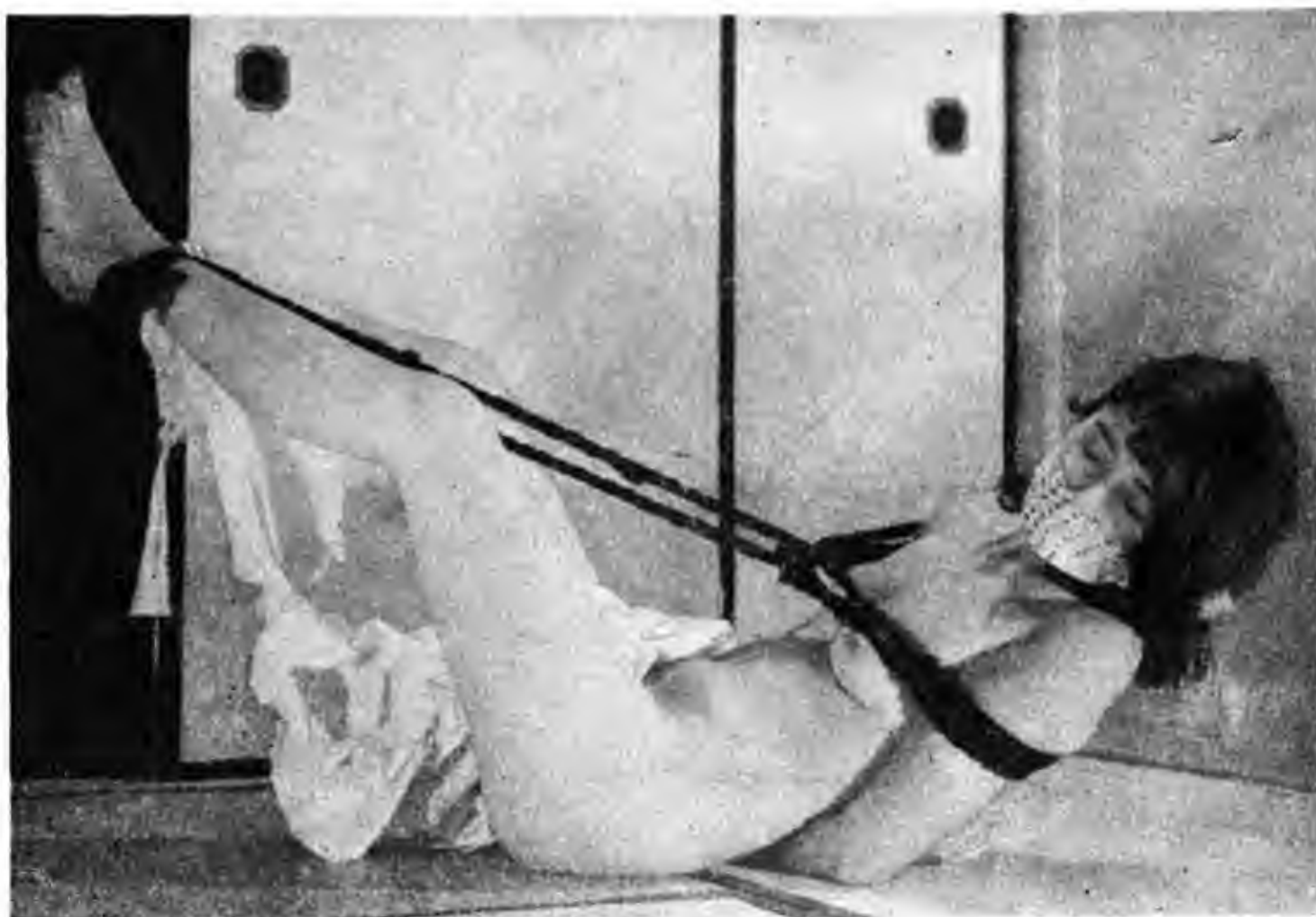


な戯い遊びに用いなな 縄をい責め 姉様、余りいじめないでネ

これは特に指示してとったポーズではありません。自然に二人がこうしたポーズをとった所に狙いを付けたワンカットです



春日ルミ嬢と伊吹真佐子嬢



こうして逆さ吊りにしたら  
どうなるでしょう？

モデル・杉 芙美嬢





## 後手に締め上げる

春日嬢が左足をかけて、紐を締め上げている。後手高手小手首縄の縛りも、特に春日嬢が自分の好みで綿密に縛り上げたもの。



子・画

新妻初秋姿 ナイロンの……桔梗と女郎花

秋立つ日の日曜日、秋草の咲き乱れる庭の樹にナイロンのレインコート  
トをまとわせた新妻を後手に縛りつける楽しさ。





# 新妻初秋姿 ナイロンの……萩と雨……

庭の泉水に秋雨の降りそぐ夕、ナイロンのレインコートにフードを目ぶかにかぶせて腰紐で後手に縛って雨にうたせる。

瀧 麗



観

念

(村田那美子嬢)



片足吊り

(坂口利子嬢)





海老しぼり

(萩千恵子嬢)



繩の  
見え  
ない  
後手  
しぼり

(中富綾子嬢)



## 嘲 弄

大の男が女に土足で頭を踏みにじられる。ちょっと考えられませんか、しかし現実には女にそうされてほしい志願者が沢山あります。誇らしげな春日嬢の顔をごらん下さい。時には途中で苦痛にたえかねて最初の誓約を破らせてくれと願う人もありますが、彼女は決してそれを許しはしません。



男子モデル…(小沼正三)…





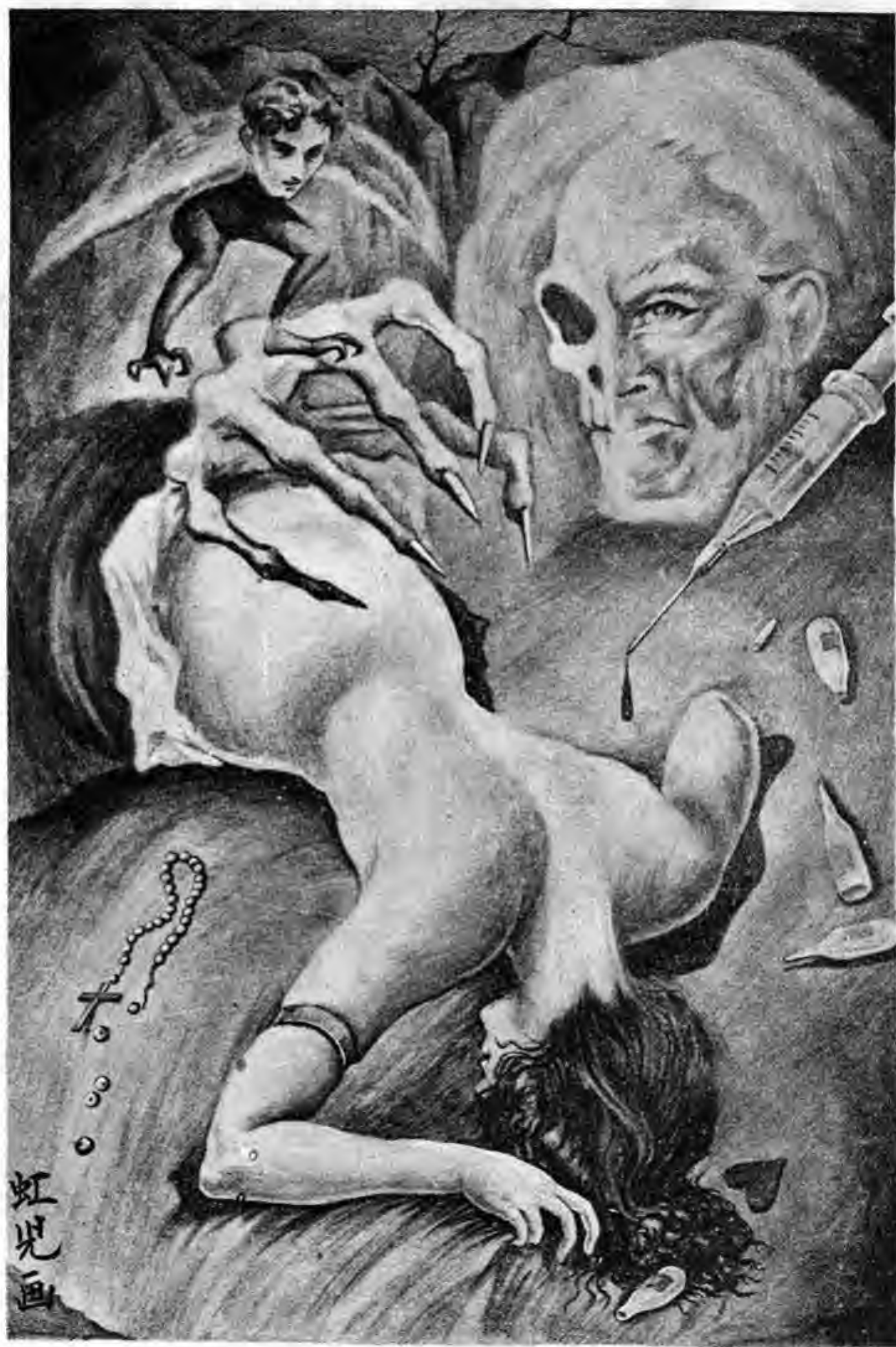
……春日ルミ嬢構成実演……

## ワン公に対するお仕置

きっと又何か失敗をしたのでしよう、後手に縛られたワン公が首の上へお尻をのせられて尻を鞭うたれています。ワン公が失敗や悪戯をしたりしない時でも、時々彼女の御機嫌の悪い時は、理由もなく、このようなお仕置を受ける時もあります。

ヒロポン禍の幻想

杉原・虹児画





文 献 紹 介

アメリカ某誌の表紙の一部から

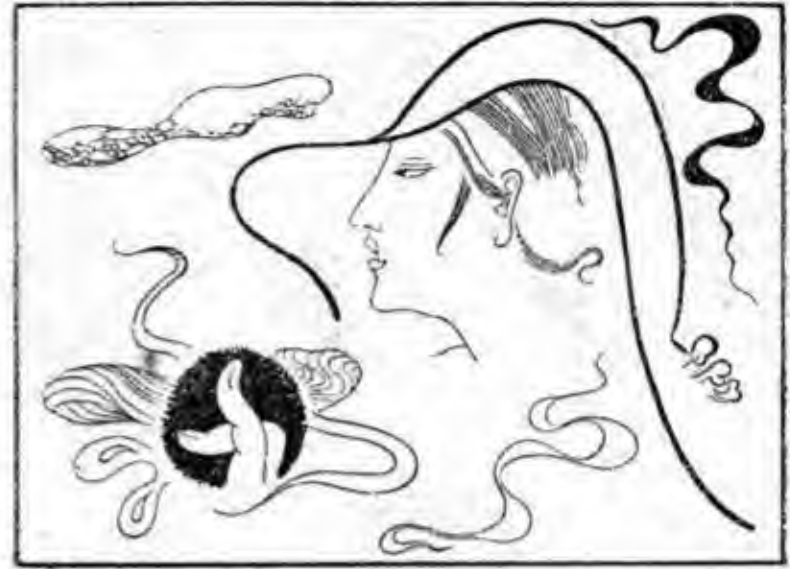


文化人の文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1954年9月号

(第八卷 第九号 通刊第七十二号)



# 私は訴える

——サディズム審判の一被告として——

吾妻

新

S君、

先日の夜は久しぶりで歓談と言えるようなひとときを持つことができて楽しかった。われわれの交際がひととおりの歳月ではなく、友情も通り一遍のものではないのに、あれだけ深く語り合えたことは最近なかった。もちろん君の根をおろしたのが検察庁という特殊な世界であり、多忙々々で悲鳴をあげている現状を知っているから僕は不服で言っているのではない。むしろ夜を徹して語りあったのをふしぎな位に思っている。ただそのときの印象から、今後はお互いがどんなに忙しくても月に一度位は会って、心の垢を洗い落したものだ。君と僕との生活環境があまりにちがっているからこそ、なおさらそういうチャンスは望ましいのである。

僕は君以外に検察庁に友人はないし、したがって君という人間を通してのみ検事諸公のイメージをつくりあげるほかないのだが、じつは僕自身、検事になったほうがよかったかもしれないのだ。笑っちゃこまるが、君の知っているMがアメリカの性格判断法で僕をテストしたとき、そういう答が出たんだよ。こいつは愉快的遊びでね一般の占いめいた性格判断とちがってずっと科学的にできている。質問は十二問ずつ一つのグループになっていて、AからFまで総計七十二問もあるが、その答えかたも五段階にわかれていて not a little (全然ない)、very little (ほんの少し)、little (少し)、moderately (中位)、much (かなり)、very much (非常に多い)と使い分けねばならない。これによって出た点数を各グループ毎に合計して比



較し、規定にしたがって組み合せたものから、十二の性格が導き出される。非常に面倒で複雑だが、なかなか面白いので会う友人ごとにテストしている。こんど君に会ったらやってやろう。辛辣な解答もあるので顔を紅くすることがある。

さて、それによると僕の性格はタイプ8で、長い解答の前半は面映ゆいから省くとして、最後の適した職業の部分だけ写してみると「かれらは株式や不動産の投機家、出版者、映画、演劇のプロデューサー、改革的または急進的な政治家、検事、批評家、宣伝業者および煽動的なタイプの小説や戯曲の作者に生れついています。」というのだそう。株式や不動産の投機家は恐れ入ったが、まんなら当たっていないこともないじゃないか。

そこで僕は考えた。君は検事として能力もあり誠意もあるのだから、やはり8のタイプに入るにそういない。つまり君と僕とは性格が同型だということになる。すると、僕が検事になり、君が急進的な政治家や煽動的な作家になることも夢ではないわけだ。

もっと露骨にいうと、僕は検事の仕事が好きなのだ。造船廠獄以來いまの世のなかでほんとうに信頼できるのは君たちだけだという気持ちさえた。物質的にはほとんど酬いられないのに、職を賭しても不正にメスを入れようとする熱情に僕は尊敬すら感ずる。かって僕は執達吏の人情にうたれて見直したことがあるが、世間の一部で鬼のようにおそれる検察庁に、僕は愛と信頼をいだいた。現代の社会で腐っていないのはここばかりだという気がする。それも単なる職業観念だけでなく、そもそも検事になる人間の性格になにか共通の正義感とでもいうようなものがあるのだろう。だから、たとえ絶対に科学的とはいえないにしても、性格判断がある種の性格を抽きだ

して、その特徴と検事という職業とを結びつけることができるのであろう。

その性格判断のタイプ8には、次のような一節がある。

「あなたがいちばん関心をもつのは、存在しているものよりも、かくあるべきもの、乃至はかくあるだろうというものです……。」

僕があたらしい社会や、未来の女性や、今後変化する服装に関心をもち、君が現在の社会悪を黙視できないでよりよい人間の状態を生みだそうと努力するのも、結局はこういう点で共通したものであるからではないだろうか。僕も君も不正や不合理に眼をつむっていられない性格である。たとえ進む道はべつで、あるいは僕が君に取り調べられるような場合が将来起きるかもしれないが——願ひ下げたいものだが——性格的、気質的には同型の人間なのだ。まずこのことを念頭においてほしい。そして、これから僕の言うことに耳を傾けてほしい。

## 鏡子ちゃん殺し

文学者と検事が酒をのむと話は文学にならずに社会問題になる。文学が閑文字で、君の仕事が生きた人生に直接ぶつかっているからである（皮肉ではない）。しかも僕は君に劣らず社会の現実に興味と関心をもっている。ビールが三本目を終るころに、談たまたまストリップ・ショウの検挙から一般性犯罪に発展して、最近の鏡子ちゃん殺しに落ちてきた。そのとき君はこう言った。

「ああいうのは君、ただのエロじゃないね。サディズムっていうのか、アブノーマルな変質者なんだね。」

「さあね。」

正直のところ僕は返事にこまって言葉を濁らせた。そのうちに君は、他の話に移った。

S君、僕が困ったのは、言うべきことがなかったからでなく、あまりすぎたからだ。またそれを語るについては、まず僕の立場を告白しなければならなかったからだ。

しかし、真実は言わなければならぬ。そしてその重大さは、僕一人の傾向がどうかというよりもずっと大きい。更にまた、君は石坂洋次郎と永井荷風の事件のときあれだけ寛大な理解を示した人間だから、きつと僕の言うことも軽蔑せずに耳を傾けてくれるだろう。そう信じて僕はこれを書き、発表する雑誌を君に送るのである。

まず話題に出た鏡子ちゃん事件からはじめたい。たしかに、あの犯罪は残虐で悪質な忌まわしいもの、幼児をもつ親達を恐怖に陥れ、すべての人に怒りの血を湧かせるものだった。僕とても全くおなじである。それだけに、その責任を何に負わせるかということに無関心ではありえないのである。

自白によると、犯人坂巻の犯罪は次のごとく行われた。

「何気なく学校の便所に入った。チラツと白いちいちゃんおしりを見た。ふうツと中へ飛び込んだ。いきなり下着に手をかけた。鏡子ちゃんがビツクリして大声を出した。あわてて首を絞めた。殺した犯した。」

鏡子という少女をあらかじめ知っていてねらったのではなく、一定の時刻に便所に現われていたのを待機したのでもなく、偶発性犯罪だったことは明瞭である。彼女は便所の戸をあけたままで用を足していた（「どなたかが、怖いから開けている」ということを新聞で拝見したけれども、閉めてやるということをお教えなければなりません

ね。」山本杉談。——「性犯罪防止は社会と家庭から。」婦人公論七月号）。それに刺戟されて飛びこみ、声を立てたから殺してしまつた。僕は犯人を弁護する意志は毛頭ないから誤解されては困るが、この経過は——対象が幼児である点を別にして——一般の偶発犯としての強姦の場合によく見られるものである。無邪気な鏡子ちゃんにはあまりに気の毒だが、人気がない場所で肉体を露出することは坂巻のみでなく一般の痴漢を強く刺戟する。そして、最初から殺意がなく、ただワイセツ行為に及ぼうとしたとき大声を出されると結果において殺人を冒すことも通常の性犯罪にきわめて起りやすい。ほとんどすべての強姦<sup>ゾラ</sup>殺人が、事情の相違こそあれ同じ条件に支配されているのである。

では、なにがサディズムであろうか？ 残忍だからであろうか？ だが残忍なのは、無邪気な少女を強姦しようとしたこと、および結果としての殺人、——強姦殺人という総合的な犯罪について言えることである。坂巻の主目的は冒すことであって、殺すことではなかった。これは、僕が後に述べるような意味におけるサディズムとは勿論、一般に用いられているサディズムの内容ともかけはなれていゝる。いちばん世論を刺戟した残忍な点は幼児を対象としたことであって、これは全くそのとおりである。だが、幼児を対象とすることはそれ自体はサディズムと関係がない。

おそらく現在行われている精神鑑定がもっと進めばハッキリするだろうが、坂巻少年が変質者（この意味についてはのちに述べる）だと言うことはできよう。そしてその可視的な原因としては二つが明らかになっている。一つは家庭の事情である。彼の家庭は父親が情婦を引き入れ、母親が他に男をつくるような乱脈な状態だった。



いま一つはヒロポン中毒である。やはり後に触れるつもりだが、これらも若い肉体と精神を蝕み、墮落させるきわめて強力な一般的条件であつて、サディズムとは無関係である。

じつを言えば鏡子ちゃん殺しは特例でなく、憂うつな話だが幼児対象のワイセツ罪は意外に多い。警視庁少年課が集計した昨廿八年一月から本年二月までの一一八件（特に悪質なもの）の報告によれば、被害者の年齢は九才が最高を示している。

〔九才——一六、十二才——二一、十七才——二〇、十才——九、廿才——七、廿一才——五、廿二才より廿九才まで——各四、他に五才から五十才までの各層三人ないし一人ずつの順となつてゐる〕

このような事実があるのに、鏡子ちゃん事件が特別にジャーナリズムで大きく扱われたのは、毎年増加してゆく少年犯罪にたいする警告の意味だと一般に言われているが、また一部は、お定事件が二・二六事件の衝撃を消すため利用されたように、汚職疑獄への国民の関心を外らすためだったとも言われている。そのことのいずれをここに問いたくないが、もし警鐘の意味だとするならば、この種の犯罪が何によつて社会的に急増しつつあるか、またその原因とみなされるものが多数あるならば、どれが最も重大であるかを分析して国民の前に明らかにしなければならぬ筈である。

だが、賢明なS君でさえ分析どころか検討もしてくれないのだから、一般の社会で主観的な主張や判決が下されるのはやむをえないかもしれない。さきにあげた「婦人公論」の座談会で、法務省保健局の平間孝三氏は、

「エロ本の表紙や口絵、技巧的な文章の刺戟で、わいせつや性犯罪

に走るものが一番多いでしよりね。」

と語っているし、東京警視庁防犯課長養老絢雄氏は朝日新聞および「婦人公論」でおなじ趣旨のことを述べている。とくに「婦人公論」七月号の「エロ的風潮を追放せよ」においては、

「その後、パリにいる私の友人がこれ（註、朝日新聞の論説）をよんだらしく、しばらくして彼から、彼地においても、最近少年犯罪がなかなか多くヒロポン式の薬もあるようだけれども、私がそこで指摘しているようなひどい出版物はまだ見当たらない、という意味の便りを受取ったことがある。」

と述べ、あたかもヒロポンより出版物が重大かのごとき印象を与えている。だが多少論理的にものを考える人間ならば、「ひどい出版物」のないフランスになぜ少年犯罪が多いのか、それでは「ひどい出版物」は犯罪にさしたる影響を与えないのかという疑問がまず起らなければならない筈である。

## 性的影響の実態

S君

僕は性犯罪の原因を、無数の条件のなかの二三とむすびつけてもいけないし、ただ機械的に羅列してもいけないのだ。卒直にいつて、いまの社会には性犯罪を誘起するような条件が充満している。現在の社会生活そのものが、みかたによれば犯罪の温床なのである。だから、観念的にあるものを擁護することも批難することもできない。ある一つの性犯罪を例にとつても、例外なく一つ以上の原因が組み合されている。そしてこれを分析してみても、他の例にそのまま適用することができない。

ただ青少年犯罪の場合は、成年の犯罪の場合よりも共通性をもっている。これは、第一に社会生活の期間が欠けているか、あってもごく短く、それだけ複雑な社会的訓練をへていないこと、第二に学校などの集団生活で接触の範囲が年齢的に狭く均一的であること、第三に精神環境も似通っていることのためである。年がわかいために知性の差よりも感性の近似値に左右され、影響を受ける種類や強さも社会人よりは単純でハッキリしている。さらに重要なのは、性的好奇心をよび起された時期と犯罪の時期が接近しているから、前者の調査から犯罪の動機を——もちろんその後の知りうるかぎりの条件を考慮に入れて——判断することが比較的にやさしい。

(男)		(女)	
大人の会話	二六・四%	友達の会話	三九・八%
子供同志の会話	二五・九%	映画	一六・五%
エロ本	一二・四%	学校	一三・七%
映画	七・九%	大人の会話	一一・五%
性的遊戯	六・三%	夫婦雑誌	一〇・一%
浴場	四・四%	動物	四・一%
便所	四・三%	修学旅行	一・九%
親の性生活	一・七%	便所	一・七%
使用人の生活	一・九%	親の性生活	〇・五%
修学旅行	一・六%	性的遊戯	〇・二%
その他	七・二%		

では、戦後の青少年が性的刺激を何から、どのように受けているかという、性科学研究所長福岡武男氏が未婚男子千五百三人およ

び紡績工場の女子五百六十九人について行った調査によれば、上のような結果になる。(福岡武男「キンゼイ報告と日本女性の性行動」)

これでわかるように、書籍雑誌から受ける影響は男が一分二分強女が一分強にすぎない。ある種の人々の空想に反して青少年の性的好奇心を刺激する大半のものは現実生活のなかに横たわっている。

この事実をもっと幼少のころにも認められるので、同氏の観察した子供の性的遊戯にしても、「お嫁さんごっこ」はもはや昔のロマノンチックな花嫁姿ではなくなり、五、六才の「羽衣」遊びは女の子がパンツ一つの裸になるし、「お医者さんごっこ」も念が入っている。さらに「接吻遊び」「パンパン遊び」が流行している。これらについて、氏はこう附記している。

「したがって、終戦後の子供達が受けている性的影響は、漠然たる好奇心からという第一項目から始まるのでなく、一足飛びに、濃度のつよい接吻や性交を見せつけられて直接興味をもつことが、少なからずあると想像される」

また思春期に達していちばん性的興奮をかんずるのはどんな場合かという、女性の統計では「恋愛映画を見ているとき」が最高で三〇・一%、次が「恋愛小説をよんでいるとき」で二四・七%、この二つだけで九項目中の半分以上を占め、母親のいない女性の場合には実に七割四分に達する。ところが「夫婦雑誌を見ているとき」は九・一%で一割にも達しない。皮肉なことに、防犯課長の憂うる「ひどい出版物」は、思春期の少女にたいして、恋愛映画や恋愛小説の足元にも寄れないほど微力なのである。

男性については、私はこの種の統計をしらない(知っていて発表



しないのではないから、あったら御教示願いたい。おそらく、女性よりもエロ本の率は高くなるであろう。だがその代りに、「ダンスをしているとき」「混合した電車で異性と触れたとき」などの現実面も女性よりずっと高くなるだろう。全体として、能動的な、現実的な場合の興奮が、観念的な文字よりずっと高くなることは容易に想像できるし、特にそれが性犯罪を冒すような青少年の場合には一層そうである。

以上は通常の男女青少年についての統計である。犯罪を冒す青少年にはさらに多くの条件が加わる。そのことごとくが現実的な面であって、飲酒、喫煙、ヒロボン、赤線、青線区域、基地風俗、パチンコ、競輪、あらゆる種類の賭、ショウ、桃色遊戯等である。

## ヒロボンと売春風俗

このなかで特に重要なものを二つだけあげたい。それはヒロボン中毒と、米軍基地を中心とする全国的な売春風俗である。

ひとは声を大にして性的犯罪の危険を唱えるけれども、性的犯罪はサギ、セフトウ、暴行、傷害、殺人等の一般犯罪のなかのひとつなのだということを忘れてはならない。青少年犯罪の戦後の特徴はそれら一切を含んでいるので、それだから重大な社会問題なのだ。また性を刺戟する多くの条件は間接的であって、人によっての影響度は千差万別である。それはいつの時代でも、どの国でもあったし、存在の理由をもっている。なぜなら、結婚という制度によってのみ安定した性生活に入れる文明社会では、それらが未婚青年にとって安全弁の役割を果たしてきたし、いまでも果しつつあるからだ。

肉体的には十分成熟していながら、経済的その他の事情ですぐ結婚

生活に入れない青年層には、性の抑圧は見逃すことのできない問題になっている。まして戦後の日本では、住宅難一つをとりあげても困難な事情が山積している。僕は終戦直後のアベック風俗についてももし政府が真剣にタイハイ化をおそれるなら、まず住宅問題を解決すべきだと新聞にかいたことがある。

ところがヒロボンはなんら未婚青年の安全弁として役立たない。その破壊的影響は、性典映画や「ひどい出版物」などところがって明白、直接、決定的である。それは人々の素質や年齢や理解力などに関係なく、確実に有害である。しかもこれは肉体と精神を亡ぼすだけでなく、経済的にも破滅させる。言いかえれば、ある犯罪とむすびつくのではなく、人間を全的に墮落させ変質化することによって、あらゆる犯罪とむすびつくのだ。

このヒロボン中毒は今日ではもう特殊の現象ではない。漁師、製パン工、炭鉱夫、土工、石工、女工、売春婦、学生(男女)、商人、一部の会社員に亘り、最近では各都市周辺の農村に浸透しはじめている。年齢的にいえば二〇―二四才、一八―二〇才が全常用者の七〇%以上を占め、現在は十五才以下の中学生に拡まりつつある。つまり、終戦後の青少年犯罪の異常な激増と、終戦後の青少年のヒロボン中毒の異常な激増とが、あざやかな平行線を描いている。これはけっして偶然ではないので、アメリカの連邦麻薬事務局の報告によればティーン・エイジャーのヘロイン常習者の増加と青少年の悪質犯罪の増加も完全に歩調を合せており、ヘロインを買う金を得るために少女は肉体を売り、少年はサギ強盗に走り、自動車強奪や殺人まで行われることを指摘している。わが国でもこの事情はすこしも変わっていない。薬屋で販売を禁じている現在ですらアンプルの

闇値わずか一本十円で手に入るのだから、だれでも簡単にヒロポンの風習に染まりやすく、ひとたび中毒すれば一日五十本から二百本まで打つようになるから、金の行き詰りからはほとんど確実に犯罪を冒すようになる。それが女子の場合に肉体を売る結果になることも明らかで、たとえば榛名女子学園に收容されている女性は十七才から十九才までの少女であるに拘らず、五〇%がヒロポン常用者である。男子の場合にはこれが恐喝、強盗その他の兇悪犯となる。しかもこの恐るべき麻薬常習者数は厚生省の推定でも全国で百万人に達するのだから、昭和廿七年度の一八七〇件の性的暴行事件（国警本部統計）のなかでヒロポンの影響がどの位高いかは疑うことができない。

注目すべきことは、ヒロポンそのものが性慾を異常に昂進させるのではないということである。性欲だけの問題ならば鎮静、発散、昇華の方法はいくらもある。だがヒロポンは人間の理性と意志の力を奪うのだ。反省も抑制もきかないから、あらゆる面で衝動的に行動するようになる。その衝動が性的な面に向けられたとき、性犯罪を冒しやすい。このように、性欲の異常ではなくて性欲のブレーキのきかない人間、ある面における欲望の歪曲ではなくて、本質的に社会生活に危険をもたらすような意志力を欠いた人間を變質者というのであって、これは性犯罪のみならず、すべての犯罪の温床である。ヒロポンはこの種の危険人物をつくりだしている。だから、青少年犯罪者にヒロポンがどれだけ高率を示しているかよりも、もっと重大なことは、百万人のヒロポン常習者のなかにどれだけ犯罪の可能性があるかということなのだ。

いまひとつは基地を中心とする全国的な売春風景だ。これの影響

はいかなるショウや映画や「ひどい出版物」よりも強烈で決定的である。なぜなら、ここには「つくりごと」や「娯楽」は存在しない。すべてが生活のなかの現実だからだ。都市と農村を通じてこれが日本の青少年を性的にどれだけスポイルしたかは想像以上である。否、正確に測ることさえできない。通常の場合でさえ、さきの統計でみたように青少年の性的刺戟の半数以上が大人と友人の会話から受けるのだから、兵士とパンパンが街上や眼につく屋内または屋外でくりひろげる濃厚な光景は、他のすべての要因を合せたよりも深刻な影響をあたえている。だがそれらの事実には「基地の子」や神西清の報告、水野浩の「日本の貞操」や五島勉の「続日本の貞操」にそれぞれ角度から採り上げられているから、ここでは書かない。

ヒロポン禍と基地を中心とする売春風俗は、青少年に及ぼす影響の広さと深さという点で他と比較にならないほど大きいから挙げたのだが、この二つは共に、国家が責任を負わなければならないのである。

ヒロポンを強制的に、権力をもって使いはじめたのは戦時中の軍部だった。軍はこれを大量に生産して、若い兵士や挺身隊員に吞ませた。吞めば一時的に快活となり、眠らずに仿けるからである。荒垣秀雄氏の証言によれば、特攻隊員や防空監視哨員にも吞ませたり注射したりした。軍需工場では若い男女の挺身隊員にも吞ませた。その莫大なストックが敗戦とともに街に流れだして、今日のようなおそるべき荒唐現象の出発点となったのである。

パンパンは敗戦のときの政府がつくった。アメリカ軍が進駐するときや、あわてて全国有数の売春業者をあつめ、三カ月間に五万人の売春婦をつくりだすことを要請した。いくらかきあつめても足



りないので、売春の名を秘して食物と職業をあたえる旨の宣伝をし純真な娘たちを誘惑して大量に墮落させた。政府は売春設備のため費用の大半を勸業銀行から出資させ、売春業者にあたえた。警察は暴力団を動員して、一般女性の誘拐まで黙認した。また戦災でかえる家をうしなつた学徒動員の娘たちを「特攻隊」と名づけて慰安所に送りこんだ。こんな政府は世界にただ一つしかない。

あわれな犠牲者たちの多くは病菌の巣となり、ほぼ二年のうちに廃人となるか、死んだ。売春は迅速に肉体を消耗するから、迅速に補給しなければならぬ。こうしてひとたびはじまった売春政策はつぎの政府にひきつがれる。今日、厚生省が赤線区域の存続に賛成し、文部省が良家の子女を保護するためやむをえないという万邦に比なき迷論を吐き、国警が取締る人手が足りないと訴えているのもそもそも国家権力が自国の女性を勧誘し、ダラクさせ、肉体をひさがせたという事実、いちど汚した手は洗いにくいという意識があるからではないかという気がする。

朝鮮の戦火がやんで、駐日アメリカ兵が激減するとともに、いわゆるパンパン恐慌がはじまった。かつての和娼が洋娼に切りかえられたのと逆に、現在ではふたたび洋娼が国内向けに切りかえられつつある。そして、その対象は青少年層の開拓なのである。

S君、

今日の青少年のダラクと犯罪の温床は、このようにして国家の力でつくられたのだ。だが、だれを責めるのか。起きてしまったものはしかたないとも言ふのだろうか。しかし、それは済んだのではなく、始まったのであり、今日の状態は明白にその発展の結果なのだ。蒔いた種がいま花を開きはじめたのだ。

こうした発生事情とその後の発展を考慮に入れば、当局は国家としての責任からも、まずこの二つの温床にメスを入れなければならぬ。これこそ、もろもろの悪をまきちらすパンドラの函だからである。だが実際にはそれはどうすることもできず、或はどうすることもせず、むしろその結果として生れた諸現象に責任をシワよせして、鼓をならして責め立てている。僕をして言わしめれば、ヒロボンと売春の根を断たずして他を取締ろうとするのは、汚職や疑獄に眼をつむってヤミ米のかつぎ屋を検挙するようなものだ。矛盾しているばかりか、効果もないのである。

## エロとグロ

以上のべたことを全部頭に入ってもらって、さて君の言葉に戻りたい。

「ああいうのは君、ただのエロじゃないね。サディズムっていうのか、アブノーマルな変質者なんだね。」

このなかで、真実に近いと思われるのは、犯人坂巻が変質者だということだけである。だが、生れ落ちてからの変質者などはめったにいないので、多くは意志が弱く被暗示性の強い素質のものが、その後の環境や社会事情によって変質的になったものなのだ。おそらく純粹に反社会的な危険な人間で絶対に隔離を要するものは、いまの癪狂院の建物でも十分すぎるほど少いだろう。僕は少年時代、八十幾人を強姦殺害した吹上佐太郎の刑死前の告白記をよんで、あまりに悲惨な生い立ちに涙をながし、「だれだってあんな環境におかれれば程度の差こそあれ吹上佐太郎になりかねないだろう」と同人雑誌に書いたことがあるが、そのとき以後、社会の改革の必要を漠

然と感じはじめたのである。今日の統計では、性にたいする特殊な関心、軽度あるいは強度の性犯罪、また一般犯罪のすべてに、両親の有無というごくありふれた条件だけでも反映していることを考えれば、さらに複雑な家庭事情、経済事情が影響していることは明らかである。しかもそれらをめぐってヒロポンや売春の刺戟があり、さらにその周囲に、政治の腐敗、社会生活の不安、道徳的な責任観念の崩壊（これについては村松梢風が「新潮」七月号で痛烈に衝いている）の大きな輪がとりまいている。いわば、今日の日本社会はすべての人間を変質化する条件をそなえているので、それを無視して箇々の「変質者」を論じたり、青少年対策を立ててみたりしてもダメなのだ。

次にサディズム、アブノーマル、変質者の昭和三題嚆だが、残念ながらこれには「落ち」がつかない。また、変質者についてはすでに語ったから省くとして、サディズム、アブノーマルという言葉と犯罪とはなんら直接の関係がない。

もしもアブノーマルという言葉をもその人間の意識や欲望にまで押しひろげると、ほとんどすべての人間がアブノーマルになる。なぜなら、すべての人間は一夫多妻、一妻多夫の本能をもっているからだ。これを否定するのは教育が否定しているのである。そして、かつて存在したこの性関係が今日否定されるのは、父権社会がノーマルなものとして一夫一婦の婚姻制度を支持したからである。これが永遠的のものか、人類の進化か、将来変化するかしないかは、ここではどうでもいい。知りたければ僕の女性論を送ってあげるから、ギロンはそれからしよう。

だから問題は、人がどんな欲望をもっているかではなく、社会的

に行為として現われた場合である。そのとき、その社会の通念として認められているものがノーマルであり、反対のものがアブノーマルになるわけだ。

サディズムも同様である。サディズムはアブノーマルと見做されている性的欲望のホンの一つにすぎないが、しかも欲望としては、無意識的にはほとんどすべての人間に、意識的には君が想像するよりもはるかに多くの人間に存在している。ただ実際の行為として抑制されているだけだ。だからこれが反社会的行為として現われた場合にはアブノーマルとして罰することはさしつかえないが、行為以前の意識にかんするかぎり批難することも罰することもできない。

たとえば、ボーヴォワールが「第二の性」であげている例、「ピザール博士に世話をうけた女患者たちは彼に（男はどれもこれも多少の悪癖をもっている）と告白した。」「……八男という男はみんな変態よ……」V「……この娼婦は遊客の九十パーセントには悪癖があり……」という記述のなかに、どれだけサディズムが混入しているにしても、社会はその「変態」を黙認し、罰しはしない。日本の場合でも、公刊書ではないが日本生活心理学会研究所の速記録「新小岩娼街に於て売笑生活体験を訊く」に赤裸々な告白があり、娼婦の大半がこの種の「変態」を経験していることがわかる。つまり、無数の人間がこの種の欲望をもっているのだ、ただそれは抑圧されるか、売笑婦のように金で自由になる女を相手に、一時的にみたしているかにすぎない。そして、売娼を政府がみとめるかぎり、それに伴うこの種の行為をやはり罰することはできないのである。

そこでS君に言いたいことは、現在の社会制度の可否はべつとして、現実の社会秩序に忠実なのは君の任務なのだから、反社会的行



為としてあらわれたものはドシドシ取り締まってさしつかえない。サディズムについて言うなら、上は戦争という名の大量人殺しから、下は女の臀部切りという悪質不良行為にいたるまで、厳罰に処してさしつかえない。だがそれがサディズムだと信じこんで、多くの人間に存在する本能の平和的なはけ口まで閉ざすことは、すくなくとも僕のような人間には困るし、社会的にいえばきわめて危険な、効果のないやりかたである。

一例をあげると、「ひどい出版物」の問題である。一般にこれはエロ、グロの読物と称せられている。このグロのなかにサディズムやマゾヒズムやその他のいわゆるアブノーマルな傾向が含まれているわけだ。僕はこれを分けて考えて頂きたい。理由はこうだ。

第一に、いわゆるエロ本は、現代の社会のなかでは、封建的なきびしい環境のもとで果した抑圧の緩和剤としての役割をもう果たしていない。性的刺激は現実生活のなかに無数にあり、それらは啓蒙的なよい点でも、挑発的な悪い面でも飽和状態に達している。たとえば裸体画はもう青年男女をおどろかせはしないし、接吻は映画や小説で慣れっこになっている。男女共学は同性愛を減少させているし、自由な交際は一面で墮落の機会ともなるが、他の一面では恋愛結婚の道を開いている。要するに、現実が変化したのである。だからわれわれは現実生活の面で、わるい面を排除し、よい面を育ててゆくことができる。こういう状態ではエロ本は存在の理由がない。正しい性の指導書はまだ公刊をゆるされない事情もあって、その点では問題が残っているが、それはエロ本とはべつである。いわゆるエロ本なるものは、今後生き延びるためにはますます刺激を強くし、局部描写にこだわり、直接の感覚に訴えるストリップ・ショウと競争

しなければならぬ。これは今日のように善悪両面で性の解放が行われつつある場合には無用であるばかりでなく、必然的に悪い面の要素を追求する外はなくなっている。

これに反して、グロと称せられるアブノーマルな読物は、ちょうど徳川時代における枕草紙のような役割を果たしているのであって、強大な抑圧のはけ口となっている。なぜなら、現実生活では禁止されておき、しかも人間の心理から除くことのできない潜在的な欲望だからである。たとえばサディズムだけを例にあげれば、国家が「やむをえない悪」として認めるような売娼も赤線区域もなく、ドイツが黙認した「男色カフェ」のごとき特殊な機関すらもない。現実面において抑圧を緩和するようなものは一切なく、またその可能性は今後ともないと言っている。サディズムが性心理に占める範囲はきわめて広汎であって、一般生活の中にさえ指摘できるほどのだが、実際にはそれは最も危険なものとされ、アブノーマルに取扱われている。現在この強大な抑圧が緩和されているのは、わずかに活字だけなのである。

## 活字や絵画はどれだけ 影響力があるか

では、活字、絵画、写真が実際にどれだけ影響力をもっているかということになると、残念ながら多くの人々は、慎重に考えるよりも誰の賛成をも得られそうな一般的な感情で片付けてしまうのだ。つまり、影響力の過度な評価である。これには輿論にたいする追従や、痛くもない肚を探られたくない心理や、漠然とした羞恥や、理解しないものにたいする嫌悪や、単純なビュリタニズムや、あら

かじめ有害だときめてしまつてその怒りから影響力が大きい筈だと逆算する心理や、さまざまなものが入れまじっているが、なんといつても根本となるのは印刷物と實際生活との距離の誤算である。ここでは青少年犯罪に関係ありとされているサディズムについてだけ述べる。

たとえばある人間が日本のものでも外国のものでも、サディズムを扱った小説をよんだとしよう。そして興奮したとしよう。それで彼が実際にサディズムを行う場合は、たぶん十万人に一人もないであらう。

なぜなら、サディズムは人間の潜在的本能であるにかかわらず、強度の社会的制約を受けて個人生活のなかにはめつたに現われないからである。それはむしろ社会的な形で屢々現われる。これも、社会的制約の性質が個人をきびしく罰し、社会現象として現われる場合には制約そのものが弱くて罰しえないからである。たとえば戦争各種の競技、斗争的なあらゆる面における競争、軍隊、警察、家父長権や父権、姑の嫁いじめ、ボーヴォワールが実例をあげて指摘している母親のサディズム・マゾヒズムの傾向、会社の職長や学校の上級生の権力、幼年時代の遊戯等。これらが他のどんな名前と呼ばれていようとも、サディズムの変形であることは明瞭である。そして、これらに吸収されたエネルギーの残りの一部が、個人生活にはけ口を求めようとしているにすぎない。

われわれが問題にしているのは、この残余のエネルギーなのである。しかもそれは極度に抑圧されているから、羞恥や嫌悪、あるいは罪悪感の扶けを借りなければノーマルな意識生活を保つことができない。大半のサディストが罪の觀念に苦しめられていることは、

かつての同性愛者と同様に事実である。戦前まではオナニズムもそうだった。抑圧の多い性の世界はつねに暗い罪障苦の世界なのだ。だから、サディズムの絵画や写真や小説をみて興奮をかんずるのは、みだされたい欲望の発散——全部ではないにしても——なのである。彼は空想の世界で行為の代償をみいだす。ちょうど恋愛小説がノーマルな性欲の部分的な代償の役をはたすように、サディズムでは他の面の制約がきびしいため、いっそうけしく発散される。これがプラスかマイナスかは、多少の性心理に理解のあるものには容易にわかるはずである。

当局は、サディズムの欲望を意識しているものの大半が空想的サディストであることを知らねばならない。伊藤晴雨氏が言っているように女を實際に縛ったり責めたりする人間はきわめて稀なのだ。それもチャンスがめつたにないことだけではなく、夫婦生活でさえ相手の意志を無視して強行するものは稀なのである。これは「意志が弱い」という問題ではなくて、強烈な社会的制約から生じた罪悪感のためである。むしろ、意志はその制約にしたがうためにつよく働いている。いかに彼等がこの斗争に悩んでいるかは、平和にサディズムを實行しているものを羨む正直な告白が立証している。たしかに、実行者は稀なのだ。またこれが実行しうるのは、犯罪行為でなく同意の上で、勢い「遊戯」の形で可能な場合だけである。なぜなら、さもないければ持続されず、したがって彼の欲望は完全に満たされないからだ。

だが性的緊張は社会的にきわめて危険な存在である。抑圧は危険を解消するかわりに増大させる。それは、火薬に火をつければただ燃えるだけだが、固い殻で包めば爆発するようなものである。あら



ゆる社会学者、心理学者、性科学者および精神分析医がそれを知っている。だとすれば、めったに満たすことのできないサディズムにとって、活字による代償行為がどれだけ安全弁の役割を果たしているかは明らかである。

## サディズムについての偏見

サディズムは残忍な暴力行為ではない。個人の性生活にあらわれる欲望は、他のすべての性的欲望とおなじように、暴力の満足をもとめているのではなく、性的満足をもとめているので、対象の満足からの「お返し」を伴わぬかぎり真の幸福を味うことはできない。ところが、サディズムについてのいちばん大きな偏見は、この平凡な事実を無視するか、あるいは理解していないところにある。

僕はその理由を、ごく大ざっぱに三つに分けて考える。第一は、社会的に転化された暴力と個人の性生活とを混同していることだ。第二は、サディズムという言葉にまつわる忌まわしい重荷だ。第三には、空想的サディズムと現実との相違だ。

この廃絶しがたい原始本能は、それが強大で危険なものであるがために、われわれが個人生活のなかで意識するよりずっと以前に、あらゆる形をとって社会的に利用されたり放出されたりしてきた。ごく一般的な暴力——腕力沙汰や、男性優位の思想と結びついた荒々しい求愛態度や、家族制度、さまざまな慣習や、権力・地位の圧力や、戦争などである。このような無数の転化は、文明が特殊の性生活に道徳的評価をあたえたがために、また社会は個人を罰することができが社会自身を罰することができないがために、いっそう自然に、無意識的に行われる。だがそのために本来の性的色彩は隠

蔽されて、性生活では「手つづき」にすぎない暴力だけがクローズアップされる。そして、人々はそれをサディズムと呼ぶのである。いわばサディズムの観念ではあるときは性行為にむすびつき、あるときは単なる暴力そのものの代名詞となっている。この無制限な混同のおかげで、サディストという言葉はその人間の性関係だけでなく、全性格を規定するおそろべき呪文と化してしまふ。つまり、絶えず他人に危害を加えかねまい忌まわしい反社会的人物の極印をうたれるのである。

しかし、サディズムは本来、性関係もしくは性生活のなかのある傾向を示す言葉なのだ。色情狂でないかぎり、性生活は人間生活の一部にすぎないのだから、サディストが通常の社会人であってすしもおかしくないわけである。むしろ彼はじぶんの性向が特殊だということをも自覚しているから、選ぶ対象は特殊であって、「間に合せ」で満足することができない。往々にして彼等が謹厳な性関係を保持するのはそのためなのだ。かれらは墮落したノーマルな人間のように異性を冒さない。原則的に言ってドン・ファンたりえない。これは道徳の問題ではなくて、自分をみたしてくる対象が少いとからきている。

「愛人に与えもしくは愛人によって与えられる苦悩または圧迫は……」とエリスが言っているように、サディズムの対象も「愛人」なのである。だから真の苦悩や圧迫が存在する筈がない。外面的なそれらは正常な場合のテクニクとおなじ意味と役割をもっている。言い換えれば、性愛テクニクの拡大またはあたらしい領域にすぎない。やはり同様に対象の歓喜と満足を前提としている。そして、やはり同様に粗野を嫌い、デリケートな情緒の興奮を楽しむのであ

って、この限界を越せば相互の感受性を破壊してしまうのである。だが人々はめったにこういうことを信じようとしなない。それというのも、サディズムという言葉の誕生そのものにサード侯爵という妖怪めいた影がさしているからだ。サード侯爵のちにシャラントンの癲狂院で死んだ典型的な変質者だが、それを助長したのはながい投獄生活のためである。獄中の抑圧は空想のなかに爆発した。彼の書いた「ジュスチヌ」や「ジュリエット」や「閨房哲学」の描写は空想の産物であって、彼が実際にやったことはずっと無味単純なものである。あえてフランス革命の時代的背景と結びつけなくても、いかなる時代にもあの程度の狂態は、地位や身分の保証された変質的な人間のなかに見出されると言うことができる。しかしその著書が実際の行為よりもずっと深刻で淫猥なものと、クラフト・エビングがその名を取って呼んだために、サディズムはグロテスクな十字架を背負わされることになった。そしてクラフト・エビング自身、*Psychopathia Sexualis* のなかで挙げていく多くの実例や論じかたにおいて、手淫とサディズムを結びつけた(症例廿四)愉快な「治療法」を述べたり(症例卅)しているのだ。

さらにいま一般に信ぜられ、そのために非難されているサディズムの残忍性や反社会性は、空想的サディストが筆にまかせて誇張した場面をつくりあげ、描写したからである。たとえば非公刊の「人面鬼」などはその一例で、どうしたら残酷な印象をあたえることができるかを目的としたような空々しい誇張にあふれ、次々と殺人を冒してゆくのだが、それはこの種の赤本にかぎらず、スピーレンに影響された最近の探偵小説などにも見られるのであって、読者は現実との距離を承知の上でよんでいるのだ。たしかに、極度にグロテ

スクなものは誤解されやすいものをますます誤解させるといふ意味で注意しなければならないにしても、それが青少年の性犯罪に結びつくと考えるのは、読書と行動との距離を全く無視していると言わなければならない。たとえば変格探偵小説と称せられるものの大半は、犯罪と性との二つで読者を刺激する。作者も作品も容易にあげることができるが、女を縛って鞭打ち、倒さに吊して最後に殺害するような強烈な情景はサラであり、それが明白に犯罪と結びついている点ではいわゆるサディズム小説よりずっと示唆的である。だが、探偵小説の場合にはそれが問題にならず、探偵作家の月例集会にはしばしば警視庁より出席して創作に役立つ資料を提供している状態である。もちろん僕はそれを非難するわけではない。ただ一方ではどんな刺激的な作品でも青少年犯罪の動機にはならないと信じているときに、他の一方では空想的サディズムの読物に変質者の責任まで背負わされることをふしぎに思うのだ。レットテルで片づける時代はもう永久に過ぎていいのではあるまいか。

サディストの名はサードから生れた。しかし、サードのごとき変質者は社会的にみればいつの時代にも存在する例外的な例である。今われわれがやむをえずその言葉を適用しているものは、すべての人間に潜在している広汎な本能がなんらかの形で性心理に現われているものを一切含むのであって、むしろ傷害などを忌む人々が圧倒的に多い。かれらは自分の道徳的信念と矛盾しない形でこの欲望を性関係のなかに生かしたいとのぞんでいる。つまり一時の衝動でなく、誘拐だの檻禁だのという狂暴な発作でなく、結婚や同棲という形で永続的な関係をもとめているのだ。しかし、適当な対象をみつめて満足できる人はごく少数である。大部分のものは成功していな



い。といってこの矛盾を反社会的なやりかたで解決しようとも、できるとも思っていない。それができるのは小説の世界だけだ。だから、かれらは書物その他による代償で抑圧の解消をはかっているのである。

戦後の青少年の性犯罪の激増は、これとは全くべつの理由をもっている。一言でいえば、敗戦後の日本の社会が生みだした全般的な墮落のなかの一現象にすぎない。ヒルシュフェルトは第一次大戦後のヨーロッパ諸国についてそれを立証した。つまり、戦争という大きな賭を失った社会は国民的のエネルギーの目標を失わざるをえないからである。この影響は日常生活ばかりでなく、文学、絵画、彫刻、音楽などの芸術にもおよんでいるし、成人たると青年たるとを問わない。ただ永い社会生活の訓練をへた大人たちにくらべて、未経験の感受性のするどい青少年にその影響が端的にあらわれるだけである。

今次大戦も同様である。「ひどい出版物」のないと称せられるフランスや戦勝国アメリカでさえ、青少年の麻薬中毒や性犯罪の激増やその兇悪化に悩んでいるのだ。まして敗戦国の日本は、七百の基地によって半植民地化され、全国的に売春風俗が野放しにされ、疑獄や汚職、ヤミ取引や責任無視によって、政治的腐敗は国民を憤激させるというよりもほとんどニヒリズムに追いこもうとしている。おなじ戦敗国でありながらドイツやポーランドとあがっていまだに経済再建の見通しがつかず、国民生活は安定していない。民主主義はゆがめられ、逆コースと再軍備の次にくるものは徴兵制度だと言われている。平和な社会生活をおびやかす点では、このなかのどれ一つをとっても重大な赤信号なのだ。しかもわれわれはすべてを背

負っている。社会生活の経験が未熟で、家族を養う義務という大きなブレーキをもたず、いちばん徴兵の危険にさらされ、年齢的、肉体的に性的飢餓におちいっている青少年が、性的な誤ちを冒したり性犯罪に走る可能性は十分すぎるほどではないか。かれらは学校から学ばないで周囲の現実から学ぶのだ。そして現実の刺激は、どんな観念的な影響よりもはるかに強いのだ。

検挙された青少年が訊問されて「ひどい出版物」をよんだからだと答える例がいくつも報告されている。これは当然予測されることで、心理的には当然だとさえ言える。だが、医者は患者の証言に耳を傾けるまえに、みずから診断しなければならぬ。さもないければ彼は鑑医者である。

あるものをよんだことと、それが今日の犯罪を生み出す原因だということとは別問題である。あわれな犯罪者は訊問されて、じぶんを悪の行為に駆り立てた責任を手近のものに探すのである。それは刑を軽くすることにならなくても、弁明となり自己満足をあたえる。

しかし、墮落の動機を「訊ねる」ことは滑稽である。彼等は社会学者でも心理学者でもないのだ。どうしてじぶんを墮落させた無数の条件をしらべ、比較し、結論をつけることができようか。それができるならば、そもそも最初から墮落もせず、犯罪を冒すこともないのである。環境や社会条件のように眼に見えぬ巨大なものは、犠牲者に意識されず理解されないからこそ、やすやすと影響することができたのである。

思慮の浅い青少年の性犯罪ばかりでなく、一般犯罪者の場合もそうである。彼らの書いた手記や告白は、犯罪の動機または犯罪者となった動機の分析としてそのまま役立つのではなく、学者が分析す

るための資料として役立つ。したがって、青少年に墮落の動機をたずねるのはコッケイだし、彼らが弁明に手近かのもものを持ちだすのは自然だが、これを頭から信じこんで、永続的且つ強烈な現実の刺戟にくらべれば問題にならぬ微弱で観念的なよみものに責任を転化するのには、コッケイでもなければ自然でもない。そこには無意識的な「真実のすりかえ」と「安易な解決」が顔を出している。

## サディズムと性犯罪の暴力

戦後の青少年犯罪が兇悪になってきたことは衆目のみとめるところだけれども、その原因が社会にあることを認めたがらない人たちは簡単にそれをサディズムと結びつけ、割り切ろうとしている。これはたださえ誤解の多いサディズムにとってまことに迷惑な話である。

強姦のはてに相手を殺傷する場合が多いことはすでにのべた。ここでは強姦そのものを考えてみよう。この犯行におよぶ心理過程は盗みが強盗に居直る場合に似ている。どちらの目的も、貞操か財物を奪うことにあるので、暴力そのものが目的ではない。ただ要求して相手が素直に応じないから、和姦が強姦に発展するのである。

盗みに強盗専門があるように、異性を誘惑する手つづきを省略していきなり脅迫、強姦に及ぶものももちろんある。だがそれも、嘆願や説得や誘惑では応じないという見込みや諦めが心理的基礎になっている。もし脅迫された女性が笑いながら進んで身体を提供しようとして申し出たとしたら、百中百までが和姦になるであろう。つまり、暴力は手段であって、肉体が目的だからだ。この意味で、かれらが用いる暴力は単純な暴力なのである。強盗が家人を縛ったり猿

ぐつわをはめたりするのも手段としての暴力であって、これをサディズムだと言うことはできない。

言いかえると、性犯罪のほとんどすべてが、通俗的な表現で言えばエロ犯罪であって、グロ犯罪ではない。暴力や残忍な行為は抵抗をくだくための手段であって、その手段の過程に性的興奮を高められることがあるにしても、動機および目的がエロにあり、過程を楽しむものでないことは、ひとたび従順になった犠牲者は情婦またはグルーブの一員とみなされて、合意のつづくかぎり暴力を受けないことでわかる。

ただ、直接行動の形をとる性犯罪や、集団暴行のように群集心理を利用するものの増えたことは事実であり、それだけ憂慮すべきことだが、それは今まで述べてきたすべての事情を総合して考えていただければわかるように、敗戦後の現実社会が生み出したニヒリスティックな特徴であって、日本だけの特例ではない。サディズムの出版物があるないにかかわりなく、戦後の諸国にみられる現象なのである。

S君、

僕の言いたいことは、ワイセツ行為の弁護でもないし、青少年犯罪の軽視でもない。それどころか、よくないものは取締るべきだし不幸な犠牲者は一日も早く救われねばならないと思っている。ただ、無智と即断はきびしく戒しめるべきだ。すくなくとも君の立場にあるなら、エリスの「性の心理」ぐらいは通読してもらいたいし、社会の現象面の背後にあるものに絶えず眼を注いでもらいたい。お手柄にあれこれと結びつけてきめつけることは、ある種の人々は喝采



するかもしれないが現実の禍根に一指も染めたことにはならない。

君は、僕がサディストだと言ったらおどろくかもしれない。だが永い間つきあっていて、僕を一度たりともアブノーマルな変質者だと思ったことがあるかどうか。もしそうだったら君は、よもや個人的な恋愛問題を僕のところを持ちこみはしなかったろう。レッテルの文字がなんと書かれていようと、僕は僕以外のなにものでもない。したがって僕がサディストであることを意外に感ずるならば、レッテルにたいする従来の概念を変えるほかはないのだ。

性行為としてのサディズムは寝室の問題である。そして、人はみなそれぞれの寝室をもっているのである。

だが、理性は理解しようとつとめても、感情は尻込みするかもしれない。たしかにサディズムという言葉は従来残虐行為のごみ捨て場の観があった。無責任な人々がすべての非行の責任をそれに投げこんで片づけてきた。だから君は言うかもしれない、「とにかくそれは野蠻なものじゃないか。」と。

よろしい、その野蠻な本能は僕の胸にもあるように、君の胸にもある。だが、猛獣は弾で撃ち殺せるが、すべての人間に潜在する本能を殺す武器はないのだ。だとすれば、これを暗い抑圧の世界に追いやって、社会的に危険な爆発薬に転化させるよりも、個人の性生活のなかで無害に発散または昇華させねばならないということがおわかりだろう。それにはまず爪を抜くのだ。非人間的な、殺伐な、他人の権利を侵害するような要素を追い出してしまふのだ。平等な男女関係やわれわれの道徳的な誇りを傷つけないで実行できる方法——それは「遊戯」の形しかない。

文明は、過去には危険であった原始的本能をつぎつぎに馴致し、

変形し、てなずけてきた。——野生動物を家畜に変えたように。もちろん、すべてが完全に成功したのではないが、全体としては大きな成功だった。また、そうする以外に方法はないのだ。今日われわれは、過去の人々と比較にならないほど性の神秘を理解している。サディズムの馴致こそは僕らに残された現代のいちばん大きい課題である。

S君、

性格判断のタイプ8はこう言っている。

「直観力によって、あなたは人間や事物を、単なる思考力よりもずっと早く見ぬいてしまいます。だが人間や事物から感動を受けることはほとんどなく、情緒がつよく支配することをゆるさないのです。」

まさに君の天職にふさわしいではないか。どうかするどい直観力で事物の本質を見抜くように。また表皮的な現象にまどわされず、感情に動かされることなく、冷静に観察されんことを。

(終)

### 告知版

「露出願望の少女の告白」を寄せられました柴崎黎子さま、原稿記載の住所へ連絡を差し上げましたが、名宛人不明で返ってきました。○二俣志津子さま、以前の住所では転居先不明で郵便が返却されてきました。お送りするものがありますので、至急新住所を御連絡下さい。○重田正和氏へ、連絡先を御通知下さい。○一柳真砂子さま、連絡場所を知らせるという御葉書が参りましたが其後一向に御便りがありませんね。○春山唯一氏へ、お手紙と原稿受取りました。

草双紙に見る女腹切 (一)

画 傀 儡 二 面 鏡

(柳亭種彦作)



川 合 伊 都 子

物思う身は春の夜もながまちや、こゝも  
難波の裏借家、小万の住家です。  
小万は五年前までは崎川と名乗って、そ  
の美貌をうたわれた遊女でしたが、深間に

なつた立田岸二郎という武士に語られて、  
心ならずも岸二郎の母三室が石山寺参詣の  
折をねらつての道で、入江家の奥女中むら  
さきと偽わり、父の大病から朋輩女中の衣

類を盗んで逃げ、同家の下郎に追われて捕  
えられ、遂に三室の同情を得て高野山へ納  
める筈の金子を貰ってしまいました。母が  
後事を岸二郎に托して去ると二人はうまく  
いったと北叟笑みましたが母の手渡しした巻  
物を見ると、三室は何も彼も承知で金をく  
れたことがわかり、岸二郎は面目なしと崎  
川を捨てゝ姿をくらましてしまいました。  
崎川はその後今日まで独身で、煙草売をや  
って生計を立てゝいたのです。

米問屋田島屋の娘お夏は手代の清十郎と  
恋仲になっていましたが、鎌倉屋五郎八が  
金に物言わせての押かけ婿に、二人は手に  
手をとって駆け落ちし、お夏は小万の家に  
かくまわれました。

小万とお夏と行燈の下で仮名草紙など見  
ているところへ、

「たばこ屋小万どのはうちかたでござんす  
か？」という男の声にお夏は急いで戸棚の  
中へ隠れます。小万が門の戸を開けると、  
男はどっかと入り込みます。

男「ついそ逢いはしませぬが、小万さん  
といつては誰知らぬ者もなにわの女だ  
て、わしも男だ、顔を立てゝ出して下せ



え

小「出せとは何を」

男「田島屋のお夏だ」

小「そんならあのお前さんが噂に聞いた五郎八さんでござんすか、百両という金だして抱いて寝ようとたのしんだ、娘はその晩ずいとか寺大方こころえいけた炭と、無性におこればおこる程、はねるものが知れませう。薄っぺらな広島菜餚焚きつけられて熱くなり、妾に煮え湯を飲ませにおいでか」

五郎八は小万がしらを切るので門口で拾ったお夏の簪や、清十郎と逢引の手紙の入っていた米さしを出して、どうでもお夏を出せと争ったが、やがて小万も五郎八も互に顔をしみじみ見合えます。

小「や、岸二郎さんじやござんせぬか」

男「そういうわりや崎川か」

鎌倉屋五郎八、実は小万がこの人ゆえに男嫌いを張り通した立岸二郎だったのです。彼は小動家の重宝小桜丸の刀を探ねるため灘波の俠客になっていたので、田島屋への押かけ婿入りもお夏の父工左エ門が近頃買入れた刀が小桜丸らしいのでそれを手

に入れたためだったのです。

小万は岸二郎に縋りつけば、男も小万を抱きしめ、戸棚に隠むお夏のことなどでんで忘れて、言葉もなく二つの身体は離れません。

ところがこゝへ清十郎がお夏に逢いにやってきました。五郎八にばかり出合い、段々話をするうちに、清十郎こそ岸二郎家出後、父兵衛が養子に迎えた充之助で、兵衛は小桜丸紛失のため切腹したことがわかります。

この経緯を聞いていた小万は、はっと顔色を変えましたが、傍に放り出されていた米さしを手にすると素早く双肌脱ぎすて、あなやという間もなく双手突きに我と我が下腹へズブリと突刺します。

二人は小万を左右から抱き、お夏も戸棚から走り出て小万にとりすがります。

「何も驚くことはない。手を下さずとも男を殺した妾——」

と小万は苦しい息をほっとついて、苦痛を忍んで語るところは——小動家の重宝小桜丸を兵衛が隣国足立判官へ持参の途中、兵衛を岸二郎の父と知らず、お家の悪人飾

間害九郎に喉かされて騙し取ったが、これを母の三室への恩返しに金に代えるため田島屋へ売ったのでした。

語り終った小万は、介錯しようという岸二郎の言葉を遮って

「介錯など勿体ない。男殺しの報いには、このひっそぎ竹で苦しむだけ苦しむのが当り前」

と血死期の苦痛を憶えて再び米さしに双手をかけてグイ／＼と挟み廻します。

岸二郎は見るに忍びず、刀を振りかぶり「親の敵、奴の小万、この世にては罪を切る、米世は母御のお言葉なれば必ず一蓮托生ぞ」

と小万の首を切り落します。

この一篇は、言うまでもなく「長町女腹切」「奴の小万」「娘扇」などの趣向や人名を取り入れたもので、作者は柳亭種彦、画は歌川国貞です。全六冊（三十丁）の合巻本。

x

x

x

x

x

x

## 女体美と特に

## その臀部について

狩 井 麗 作

美しい女性の肢体を、そのナイーブな生れたままの姿に於いて觀賞する事ほど素晴らしき事はないでしょう。それは如何なる美術品よりも秀れ、如何なる人工の美よりも深い美しさを持っています。この女体美を遂に美しいと感ずる事なく過した人々は何と不幸であり、之を隠蔽した軍国主義時代は実に文化の貧困の最たる時代だと言つて宜しいと思ひます。元来、美は人間をしてその前にひざまづかせる力を持っています。この点で女性は常

に男性に優位し、男性は本来女性の前にひざまづくように生れついていると云う仮定も成り立つのではないのでしょうか。これに対しては、いや、男性の肢体美の方が女性のそれより優れている、と反論される方もあるでしょうが、概して私自身の主観から言えば女性の美はあらゆるものに優位していると考えています。勿論これは私のフェミニズムによる、女性讚美癖が災しているとも思いますが、かつて、奇々誌上に肢体美について女性の方が

論じられていたのを記憶していますが、幾人かの男女の、男性肢体觀を聞いてみないと公平ではないと思われれます。前置きが長くなりましたが、前号に引続き私の資料によって少しく感想を述べさせて戴きたいと思ひます。

今回の資料は、すべて女性の臀部を強調して写したものです。勿論私は女性の全体的シルエットを愛すると共に、前回の如くに、眼帯とかマスク、或いは鼻腔や胸部等に対して心から強い讚美を送るものですが、取りわけ臀部については、一層強い愛著と憧憬を感じるのです。この愛情は時には、全くの崇拜となつて私をその前にひざまづかせる程の魅力を持って私に迫つて来るのです。女性の肢体美、その中でこの臀部こそは、最も根源的美の發祥地であり、隠された美の蓄積でもあります。そのなめらかな柔かさといふ。尽きる事のない肉の量感と云い、ゆるやかに、しかもずっしりとした円球の曲線と云い、すべて大らかで豊穠な郷愁を呼びさます美しさを持っています。私が異性に対するめざまめを持った少年期から現在に至る迄、この女性の臀部に憧れ、これに尽きない讚美と愛著を持ちつづけて来た過程については、又の機会に述べさせて戴きたいと思ひますが、とにかく、



私の感情生活の大きい部分を女性のヒップに対する深い愛情と理解が占めて来たと言っても過言ではないでしょう。勿論、同じような感情を、女性の乳房や脚や腹部に持っているられる人も多いと思います。夫々の性格と生い立ちの条件にもよると思いますが、とにかく私にとっての大きい影響力ははっきりしています。勿論そうだからと云って、私は常にこの臀部の前にひれ伏してばかり居るのでなく逆に所謂責めと呼ばれる方法に於て、征服し我がものとし、刺戟し美を創造するのを喜びともしています。私の内部には、明確なマゾ、サチは存在せず、その表裏一体が、私の個性なのです。私は自ら矛盾する事なく、崇拜と征服を同時に感じ行いう事が出来るのですし、その一方を欠かすと、もはや私の生活はうるおいと喜びをなくすのです。私のこのような状態について御賛同下さる方も多いのではないのでしょうか。

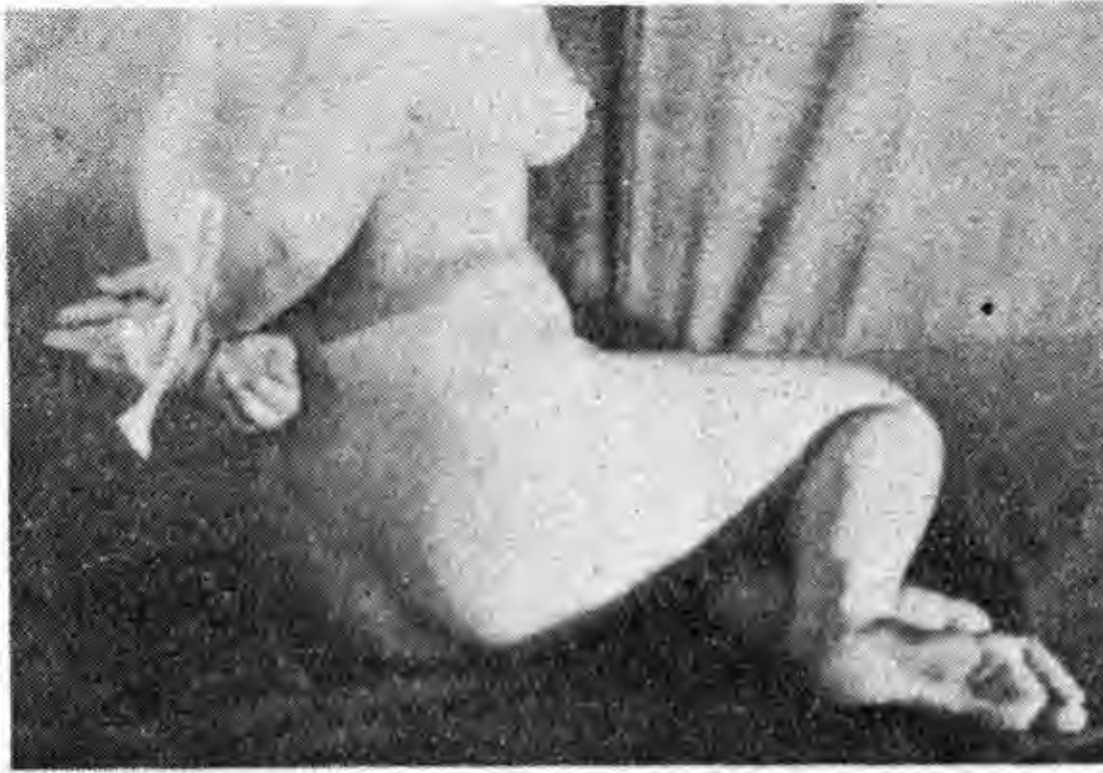
さて写真の説明に移りましょう。(A)を御覧下さい。これはカメラをぐっと近づけてとったものであり、臀部は特に大きく強調されています。何と云う大きく豊かなポリウムでしょう。ぐっとくびれた腰か



(A)

ら盛り上った円体、これをくぎって流れる大腿部の脚線、臀部を二つの半円に区切る割目はぴったりとしていて悩ましい部分を想像させます。この無垢の柔らかい純白の肌こそ得難い美しさとお思いませんか。私はウエストがぐっと細くくびれ、ヒップの大きい程強く魅せられるのです。その点、日本人より白人の方がいいのですが、最近では日本に於ても、ファッションモデル等は、外人に劣らぬ肢体を持つ者も多く出て来ていますし、コルセットの普及によってウエストをしぼる傾向になり、ヒップが強調されて来たのは嬉しい限りです。しかし残念乍ら、日本人は長年の生活の伝習により臀部の肉が下方に落ちていくのが多いのは全く魅力を欠きます。ヒップパットの必要がこの救済策として普及し初めましたが、衣服の上からの肢体の線は立派でも素裸でこれを望む私に物足りないのは当然でしょう。写真の女性は、その点ポリウムある肢体で臀部のぐっと盛り上った円体も美事なものです。しかも背中に廻された後手縛りの美しさは一層臀部の悩ましさを強めています。左脚のストッキングと、胸を縛った片方のそれは柔かいアクセントとして、この女性のデリカシーを強調しています。

写真(B)は、後手縛りだけの下半身ですが、ポリエームの点に於ても(A)と遜色はありません。下腹のふくらみを受けて大きくふくらんだヒップ、それが続く白い大腿部のすばらしさ、唯少々臀部の大きさに難点があ

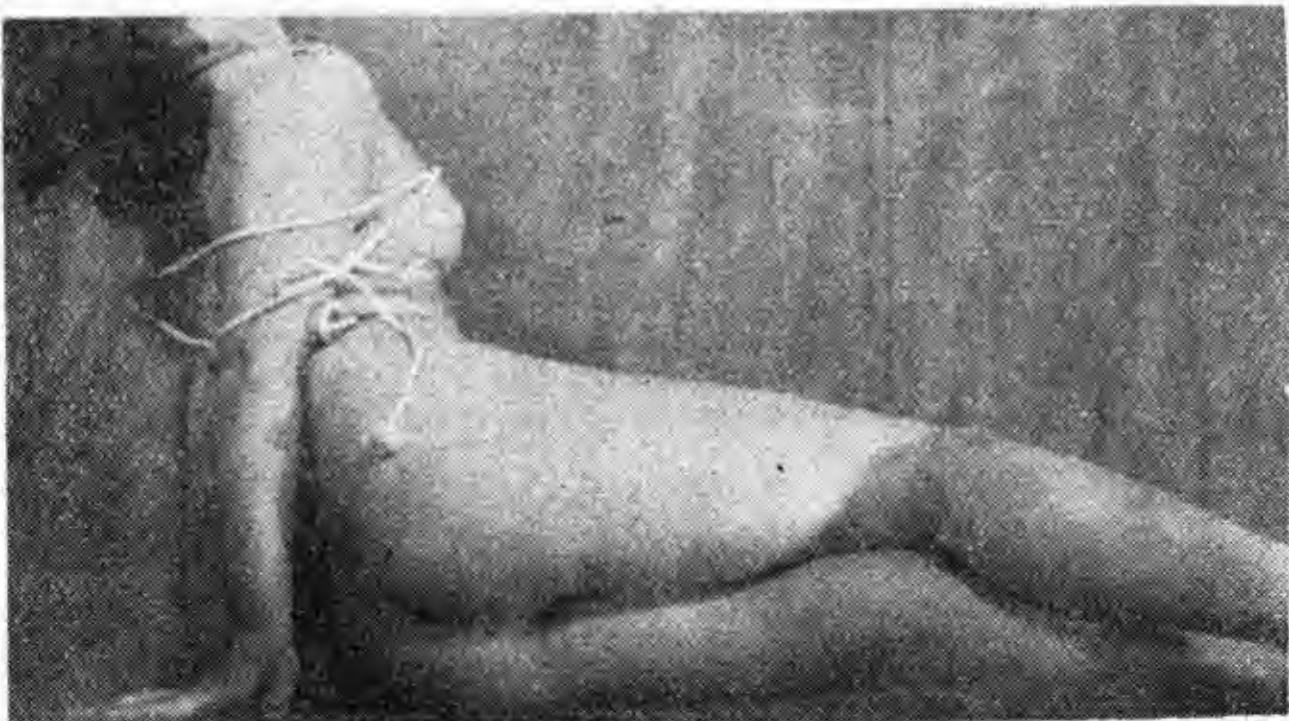


(B)

り、それが不満ですが、私は肢体の線の滑純さがこの上なく好きです。足裏と足指の表情に御注意下さい。この女性の顔の表情を、彼女の足から想像出来る人は、女体観察と責めの体験を相当に積んで居られる人です。今から責めが行われようとしているのか、既にその途中なのか。或いは、私の言葉に観念してしまったのか、解答をお寄せ下さる方はありませんか。

写真(C)に移りましょう。私の崇拜し最も望む臀部を、わざと明らかに私に見せ乍ら、挑撥し、観念しているポーズです。このふくよかでなめらかなヒップの表情を御覧下さい。ルミドグールモンの詩のように、それは美しく微笑む臀部であるのです。延び切った脚は、彼女の下半身を一層優美にしています。

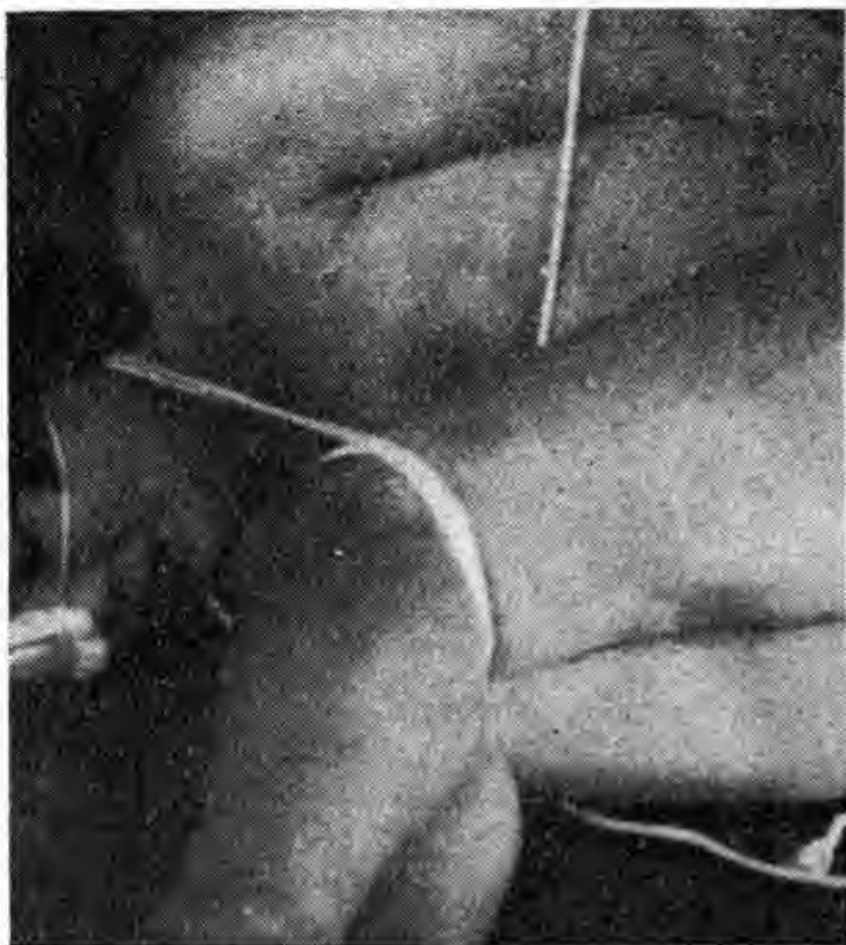
(D)を見て下さい。これは完全な悦唐のポーズです。きっちりと結ばれた下肢(両脚)と首をつなぐいましめ。後手に縛られた彼女は床の上にごろりと転がされて身動き一つする事が出来ません。おまけに、うっとおしい眼帯を取り去る事も出来ず、すっかり観念させられているのです。しかも何という剣き出しの素晴らしいヒップでし



(C)

ようか、私はこのようにすっきりと取り出された臀部の美しさに心からの讚美と崇拜を禁



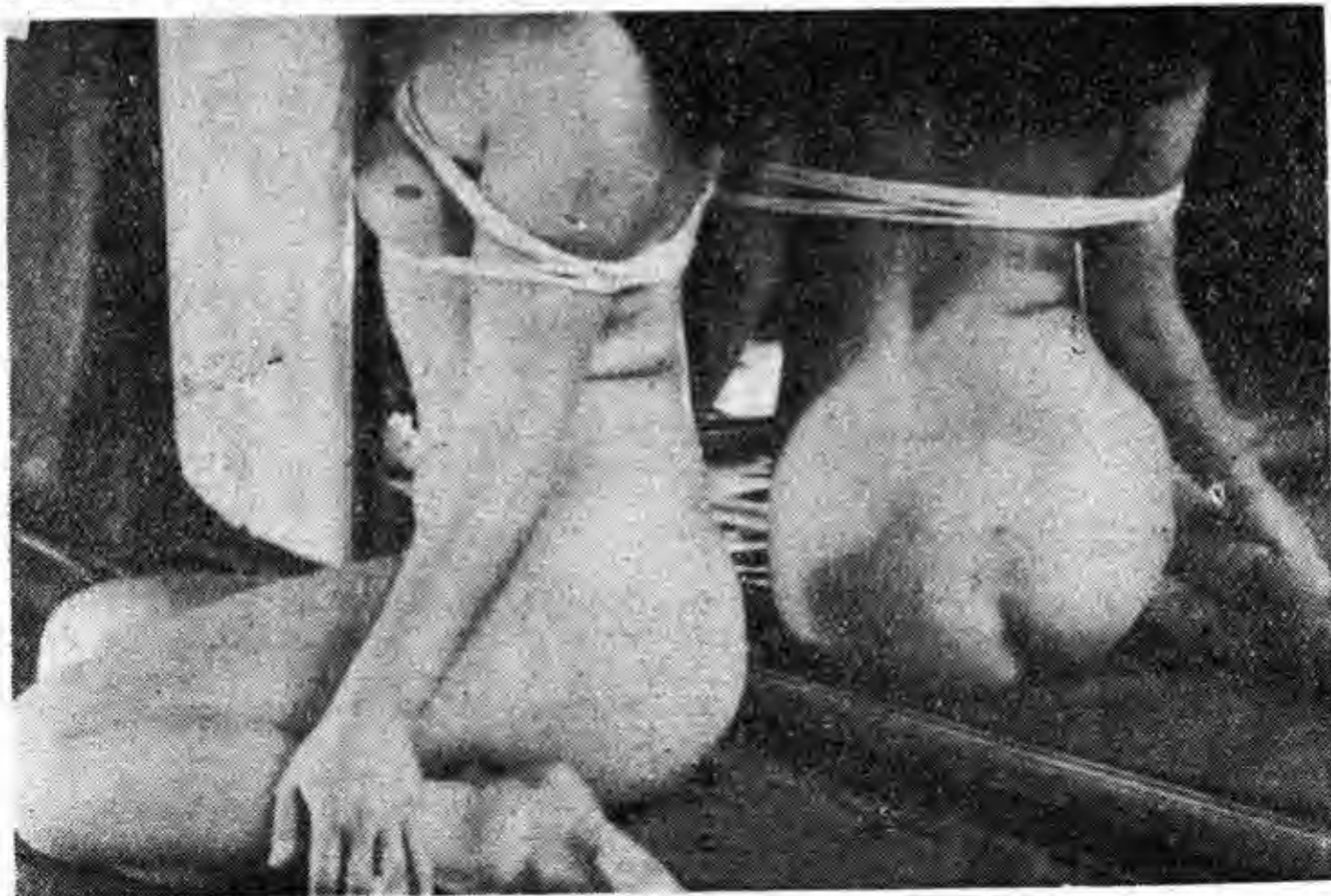


じ得ないのです。この造型の確かさと無防備の偉大さは、まさしく美の根源だと考えられます。私はいつの場合もそうですが、縛る場合には荒縄等を用いずに、専ら白い布紐を用いています。写真的構成の美を狙うと共に、私自身の好みも、KKグラビアのように種々の責め縄を用いる本格的サチズムのそれではなく、何となくロマンティックな、例えばKK七月号藤見郁氏のそれと似かよった所がある為であります。私が責めて縛るのは、女

(D)

性の隠された肢体美を私の思うままに、抜き出す為なのです。私は未知のすばらしい美を白日の下に創り出し、造物主に、この地上に於て、未だ人間が滅んでいないと云う感謝の微意を捧げるのです。このような隠された美しさは、女性の内部に無限に内在されていると思います。どなたでも、この私の美の探究に協力して戴ける方はどうか遠慮なく申出て下さい。

次に(E)の素晴らしい美を皆さんに觀賞して戴きたいと思えます。これは今回の写真中私の最も好きなものです。肢体の構図の美と共に、その臀部の表情のこの上ないデリケートさは、きっと皆様も美しいと思われるでしょう。ぐっと反らした背すじによって強調された円いヒップ、む



(E)



っちりしたふくよかなポリウムとそのニュアンス。この豊かな海のような深い内部からふくいくとして悩ましい女体の夢が、七色の虹のように匂って来るのが感じられると思います。しかも、ぐっと引き締まっている胸部の白い紐。乳房はヒップ程充分にはみのっていません。それが亦一層この女体の優美さを強

(F)

調しているようです。髪の色も肢体の美しさを引立たせています。

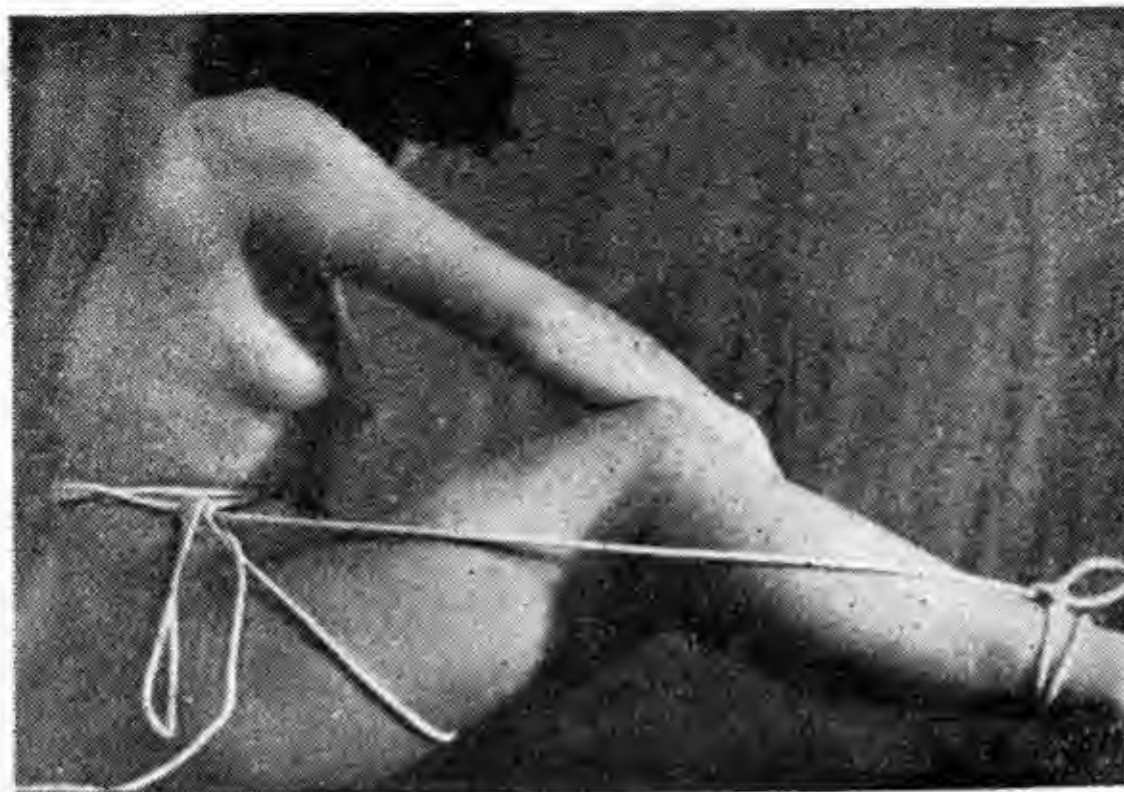
(F)に移ります。これは全く違った写真です。この虐げられたポーズは私に、かなしい迄の愛情を湧かせます。縛られた彼女はすっかりしよげきって首はうなだれ、自らの過去の罪を悔いているように見えます。この室内の暗さも、罪人の悔悟の場に最もふさわしい

ではありませんか。しかもこのような瀆罪の時に於てすらも、私は彼女の肢体の美しさに目をみはり、あきずにその清らかな美しさに魅せられているのです。静かに悲しんでいるヒップの表情、この慎ましい豊かさはどうでしょう。私は自らの手で縛しめた紐に対して悔い、早くも縄目を解いてやりたいとさえ思うのでした。

最後に(G)について。これは、前回と同じく女性の肢体の美しさを示すための写真です。一直線の白い紐によって構成された美しい肢体。これについては別に説明すべき何ものも持ち

ません。皆様の観賞に任せたいのです。ただ、しかし、女体と云うものに秘められた天来の美は、現在の文明の装飾的行きすぎによって作り出されている衣服によっては決して、その本来の美は現われず、反って隠されてしまうものだと思います。ディオール旋風等と云って極端にデフォルメされた衣服によっては、人間の知性による抽象の美は創り出せても、ナイーブで健康な女性美は反って殺されるのではないのでしょうか。その例としては、あちらのファッションモデル等、絵のように細いシルエットを保つ為に、裸体では、全くやせてしまっている人があるようです。これでは人間の肢体はファッションの流行によって畸型化されて行くようなものです。その点、衣服を脱ぎ去った自然のまゝの肉体は、今の神経的文明への批判であり、健康な人間性回復のルネッサンスとして強調されねばならないと思うのです。海外サディズム雑誌にあるような畸型化する程の文明化は、サチストを満足させるにうってつけであり、その例として、欧米の種々の服装や、装身具を紹介されていますけれど、私は、そのようなサチズムだけでは何か不健康であると考えられるのです。勿論、その持つ意義は





充分理解出来るのですが、私は健康なアブもあっていゝと考えますし、私なりの行き方を欲しています。話がそれで妙な議論になりませんが、責める事とか、縛られる事は、相互の理解によって、健康なスポーツとして楽し

(G)

む事も出来るのではないでしようか。

私は原始的な肉体の息吹きをこの上なく崇拜していますし、この肉体の美しさを様々な角度から取り出して、そこに人間のかくされた部分や肉体の感情の美しさを創造し、楽しむ事は大層いゝ事だと思っています。私の臀部遍歴も、まだ序の口なのです。私の知らない、健康なすばらしい肢体の持主が、今日も沢山居られるだろうし、世代は次々に、美しく健康な人間を生みつき、継続させて行く事と思います。これは、世界的不安な時代に、私にとって、大きい希望でもあるようです。私のささやかな女体讃美も、生きつづける事と思います。悩ましくも素晴らしい美の根源。海のように豊かで、絶えざる情熱をたゞえている女性の臀部。未知の健康な臀部を持っていらっしやる女性の方々よ、どうかこの私の前に、その、たくましく優雅な肢体をしばらくの間お貸し下さい。かくれた美を与えて、私の糧として下さい。これがこの稿での私の希望にもなりました。

(おわり)

〔註〕 写真(D)及び(F)は編集部に於て

トリミングしました。

### 〔読者通信〕

私は御誌の愛読者で毎月欠かさず読んでいますが、この頃南川和子さんの責絵がないので残念です。彼女の絵は素人くさくてうまくないですが。そこが味だと思っています。きくところによると、私と同じ様に愛読者だったときいて親しみが湧きました。是非のせて下さい。それに表情なんかまいです。気分が出ています。灸責めや逆吊りの女なんか思いますが、それだけで、ぞく／＼します。告白記ももっとのせて下さい。私は戦時中やはり南方前線へ行っていましたので外国人のやり方に憤慨した一人です。もう戦争はこりこりしたというのが私達の信念ですが、当時を想い出して感無量です。

(東京 T・K生)

貴誌の愛読者で読者通信に始めて投稿させて頂きます。毎月の発売日を楽しみに待っております。責めのアイデアにつき一言希望を申し上げます。グラビア頁に一枚位男性ヌードの緊縛写真をお願いしたいと思っています。例えば八月号の伊吹嬢による「くさり」場面等は如何ですか、バックでもいゝでしよう。又海水浴場で逮捕された青年等、夏にふさわしいポーズではないでしょうか、それからストーリーに写真をつけるのもよいと思います。こうした希望は私一人ではないと考えますが、尚、村里柴一氏の「同性愛マニアと自縛」楽しく拝読しました。同好の志を得て喜びにたえません。最後に貴誌の繁栄を心から望みます。

(名古屋 K・Y生)

きものシリーズ

デパート人形

白金紅次



一 私が東京、と云っても場末の三河島にある  
工場で旋盤工をやっていた頃、同じ工場に勤  
めていた女工の敏江と、ふとした事から親し  
くなったのはいいが、一緒になって家を持と  
うなんて大それた事は、とても経済が許さな



かった。文字通り喰うのが精一杯と云う処で、いゝ気嫌で安酒屋にでも飛び込もうものなら一週間位はバットを遠慮しなければならなかった位である。その敏江が私の何処に惚れたものか深川の縁日の宵「貴方のお神さんになつてもいゝ」と持ち掛けた。祭の帰り途下駄ばきで恋をするなんて工員の風上に置けんぞ、と同僚からひやかされたが……ともかく工場の近くの駄菓子屋の二階を借りることにした。私が二十五才で敏江が二十才の時の事である。この敏江は可哀いそうなことには第一回の東京の空襲の折、焼夷爆弾の破片で傷ついて出血多量で遂に満足の死水も摂れずに死んで了ったが、その頃は円顔で笑うと顔がぼっかりと現われ、私なりに云えば三河島小町と云い度い位だった。

世帯を持った当座は、人並に工場に居るのは昼間だけにして、夜業は恋女房のために割愛して止め、もて余ました時間は高が休んでも十日位と置いていたから六畳一間の二階でごろりと寝ころんで、この押し掛け女房の世帯振りを拝見したんだが、この敏江が僅か四五日で斯うも変わるものかと思われる位、急に水々しくなったのには驚いた、たくわんを包んだ新聞紙だの、夕刊・朝刊と夕刊の出る新

聞はやめて専ら夕刊専門の——その夕刊の広告にはふだんならまして男ならさまで気のつかない広告が載っているのを、よく炊事の傍ら手を拭き——敏江は指さして話の種にしたものである、美顔白粉がどうのこうの、天かんて本当に倒れるのか知ら、嫌だわ、あるべき処にないなんて……世の中って色々なものがあるのね……

その頃、デパートと云つても今の〇〇屋、〇〇屋とか屋だけであゝデパートかと判る時代と違つてまだ呉服店がやつと百貨店となつて、近代建築し始めた頃であつたから、街瓦の軒並みに彗星のように聳え立った有様は、確かに驚異でもありまた世の奥さん達の憧れの的でもあつたろう、もっともいくらそうだからと云つてわれ／＼工員風情がそうひま／＼出掛けられる処ではない、年何回か、また季節の終り頃に大蔵払いとか棚おろしだの、特価品見切品を山積みにして押すな／＼で混み合う頃

「よしメリヤスの格安品があるぜ、お前の欲しがっている都（腰巻）があるぜ、たまにはマークのついた奴をはめて見ろよ……」と云つたものである。

「だって……一寸寄りつけないわね、十円っ

て云えば大金よ、あなたのメリヤス位は買えるけど……」

敏江がお給金の余りであなたの猿又と、これあたしの外出行の足袋よと例の特価品を見せるのがときたま土曜日の晩めしの刻であつた。

「あたしね、今日〇〇屋の六階だったか知ら、ほら家具ばかり売っている処よ。そこにとつてもいゝ物を見たわ、何んだと思う、今よく大騒ぎしている文化住宅！ ちゃんとお玄関から便所まで出来て、屋根だけない……セツトと書いてあつたけど……六畳に洋間、奇麗な台所……ベツトが二つ、それにそうね……十坪位なお庭があつて白い柵で囲まれて……いゝわね、一ペン位はあんな処で暮して見たいわね……」

「おい／＼よせよ、そりゃ百年先の夢だよ……」

「それからね、また三階へ降りたの、呉服売場よ、とっても奇麗だったわ、今は大柄の模様が流行らしいのね、ね、あなただってたまには襟味増臭いお神さんにお召しの一枚だつて着せて見たいと思わない？ そりゃ三十円もあれば一通り間にあうわよ……」

斯うした会話を駄菓子屋の二階で風呂屋の

煙突からモク／＼出る煙を眺め乍らやっているうちは、小説や映画の題名じゃないが第二か第七天国だったかも知れない、何しろ二、三銭で焼いものが喰い切れなかった時代の事だから……。

或る日、私は工場の仕事が予想外に早く済んだので敏江の云うデパート見学を急に思いついた、六階の文化住宅はどう考えても実現する身分じゃないから敬遠して、専ら敏江の渴望する陳列場に足を運んだ。今と違って店員は制服がまだ揃っていない頃だったから、男の店員は昔の呉服屋の大番頭小番頭然とした着物で、例の特価品売場はねじり鉢巻の大童振りで品物をさばいている、あれやこれやの買いもしない反物を抱えて右往左往する人種は今も昔も一向変らない。

その売場——大抵こうした特価品や呉服売場はその階の中央に陣取ってあるのが普通で、その片隅にはきまってその頃の流行服やキノを着飾ったマネキン人形が飾られていた。中には季節々々の風景を織り込んで春なら母親に娘が摘草に、夏は螢狩りにさらりと浴衣の単帯よろしく適当に児童をあしらって客の購買欲をそよめたものである。もともとあれはマネキン人形だからいゝんで、本当の人間

が着たらさっぱりだと云って互いに慰め合う代物かも知れない。私は誘われたようにその美しく着飾ったマネキン人形に近づいて行った、そして男らしくもなく着物の柄を見るような振りをして眺めたが、この人形が活きて敏江だったとしたら、たとえ買えなくとも主人たる貫祿も果たせるんだが……まさか当人の敏江を連れて来てすっぽり置き換えるなんて事は出来そうにもない相談だ。私はふと風呂屋の玄さんの話を思い出した。たしか権三とか権次とか云う——話の中では権さん／＼と云われていたが、横町の荒物屋の露路に住む年寄りでその〇〇屋で雑役夫をやっていると聞いた事がある、早速私はその足で権さんを尋ね旁々詰所へ——地下室へ降りて見た。「そうさナア、そりや何かの話しなら判るが……一寸なあ、わしら見たいな者じゃ何んとも出来んナア、第一見付かったら大事だんべい、だけど別に何も盗んで持って行こうと云う訳じゃないんだから、いゝようなもんじゃけど……じゃ斯うしなさいよ、明日の宿直番が憩意にとる青山さんじゃから青山さんに一っぺん頼んで見るかナア、おかしな頼み事じゃあるけど……」

私は小躍りして三拝九拝して地下室を出

た。何んと汗びっしよりの体たらくである。今ならさしずめこんな怪気じみた事は新聞やラジオにすぐ猟奇ネタとして報道されるだろう、その頃は世の中がのんびりしていたからこんなおかしな頼み事も案外スラ／＼と運んだものらしい。

それにしても当人のすげ換えられる敏江をどうして説得するか問題である。「久し振りにあのデパートへ行ってみよう……」

「そう……随分あるでしょう、何を探しに？」

「何って別に買うつもりじゃなかったんだが柄にもなく、女の着物を見てさ」

「何かいゝ物でもありましたか？ どうせあたし達には縁遠い物だけど……奇麗でしょう、当分眺める丈けで沢山よ」

「お前だって一っぺん位はあんな奇麗な着物を着て見たら……とそういつかそんな事を云ったじゃないか……」

「そうか知ら……だけどお止しさないよ、それこそ百年先の夢物語」

「処がそうじゃないんだ、敏江、話はつけてあるんだ……」

私は一気におかしな頼み事の一件を話して了った。

「あら嫌やネ、そんな事……出来るか知ら、だ



って恥ずかしくって、多勢で見るんでしょ  
う？」  
敏江が承知したのは、私が終始そばにつき  
つきりであるという条件でこの前代未聞のデ  
パート人形が軌道に乗ったのである、今のデ  
パートは大抵夕方五時か六時には閉館となる  
んだが、その頃は夜間営業が九時迄で例の青



山さんと打合せて百貨店に出掛けたのが八時  
を少し廻っていた、こゝで私は敏江を何時間  
人形化させるべきかを忘れていた、丸一昼夜  
じゃ第一身体が参ってうし人形である限り  
人眼を盗んで御不浄に立ち去る訳にも行かな  
い、じっと動かずに居る事は三十分も続けた  
ら堪まらないだろう。その中で例の生理的な

排泄物は待ったなしだから、肝心かな  
めな問題を先ず解決してから取り掛る  
べきだったと後悔したが後の祭りだっ  
た。しかしあれとこれとくは持って  
いないと困まると考えたものは御厄介  
になるデパートで求める事にした。

例の地下室で時計が九時を打つまで  
待った。宿直の青山さんが十時に一回  
店内を廻るそうである、昼間の店内と  
違って誰も居ない店内はしーんと静ま  
り返っていた、私と不斷着を着た敏江  
と青山さんの三人の影法師が一つく  
昇って行く階段の壁に映って薄気味が  
悪い、二階から三階の呉服売場の反物  
の置場の角をゆっくり廻って、この間  
見た例のマネキン人形の処まで辿りつ  
いた時は心の緊張からでもあろう、ひ  
たいから汗が流れ出て息苦しかった。

「じゃ、やりますか、これは売物ですから丁  
寧に扱って下さいよ、売約済みの札のない奴  
がいゝでしょう、じゃ私は一廻り廻って来ま  
すから……」

敏江はまさかと思っていた事が眼の前に実  
現したのに驚いた為か小刻みに震えている。  
「サア、お待ち兼ねの着物だよ、どれにする

「？」

「……………」

「別に悪い事をするんじゃないから、落ちついてく、これがいいだろう」

と隅の方の人形を指さした

「ネエ、ご生だから、止めて帰えりましようよ、あたし怖くなったわ……」

「いゝから……大丈夫、じゃ俺れが手伝ってやる」

と私は一番隅で人形が三つ四つごちゃ／＼に立っている手頃の人形の処に敏江をつれて行き靴を脱いで上り、先ず人形の帯から解き初めた。

人形の大きさは略人間と云っても女の背丈けと同じであるが、堅くて弾力がなく、肩でも脱ぎしたら大変である、腰紐をとって着物を脱がせて柔いそれでいてさらりと絹触りのする派手な赤い長襦袢を肩から脱がすと、ピンクの蹴出しを締めていた。足袋を取ってのっぺりとした白い等身大のマネキン人形を陳列台の幕の中に入れてかくす迄には小一時間は掛ったろう。

「サア、お前、こゝへ立って御覧、そう堅くなっちゃ駄目だ、いゝかい、よし、それじや、全部素裸かになるんだッ、恥かしい事は

ないよ」

「今度はうんと弾力性のあるマネキン人形様だ、前と同じように着るんだよ一寸遅うね、そう／＼腰巻なんか見えやしないんだからいゝ加減でいゝよ、どうだい、奇麗な長襦袢だろう、少し薄暗くってよく判らないが物は上等だ、おっと忘れていた、いゝかい、長い間立つんだから、その前にトイレットへ行く必要があるだろう、だけど物はためしだ、これを嵌めて御覧……」

私はデパートの包み紙を解いて、月経帯とおしめカバー、それに空気枕を取り出した。恥かしがる敏江をなだめすかせて、たっぷり脱脂綿をふくらせた三角バンドを嵌めさせ、その下部にあり合せの紐で空気枕の元金を少し破いて吊り、その上を念の為オシメカバーで覆った。

「どうだい、これなら大丈夫だろう、汚しちゃうからネ、少しやって御覧、苦しいって、少し位は我慢おし」帯を締めるのは敏江が一人



でやったが、ポーズは私が外の人形と釣合いが取れて不自然でないように指先きをまげて見たり、首を直したりしてどうやら生きた人形が真夜中に出来上ったのである。私は一間下っては人形の敏江を見、二間下ってはそれが本当のマネキン人形化しているのに内心ほくそ笑んで見た。時計を見ると十一時を廻っていた。けれどもこの怪奇極まるデパート人形は何と云つても私達に取っては最初の事でもあり、用意万端整った上でやった事でもないので頗る不安であった。しかし女一人を縄一つ使うでもなく不動の姿勢で責めることは一面趣きがあつていゝようなものゝ、若し明朝にでもなつて開店時刻が来ればそのまゝで夜まで立ち通しておられるかどうかが次の問題である。

「あなた、もうかんにんして……嬉しいんだけど、これじゃ苦しくって……」



敏江はとうとうその場にぐにやぐにと坐り込んで了った。

笑い乍ら、「どうでした？」

と聞く青山さんに厚く礼を云って一番電車で家へ帰った私達夫婦は権さんにお礼の菓子箱を下げて廻ったが

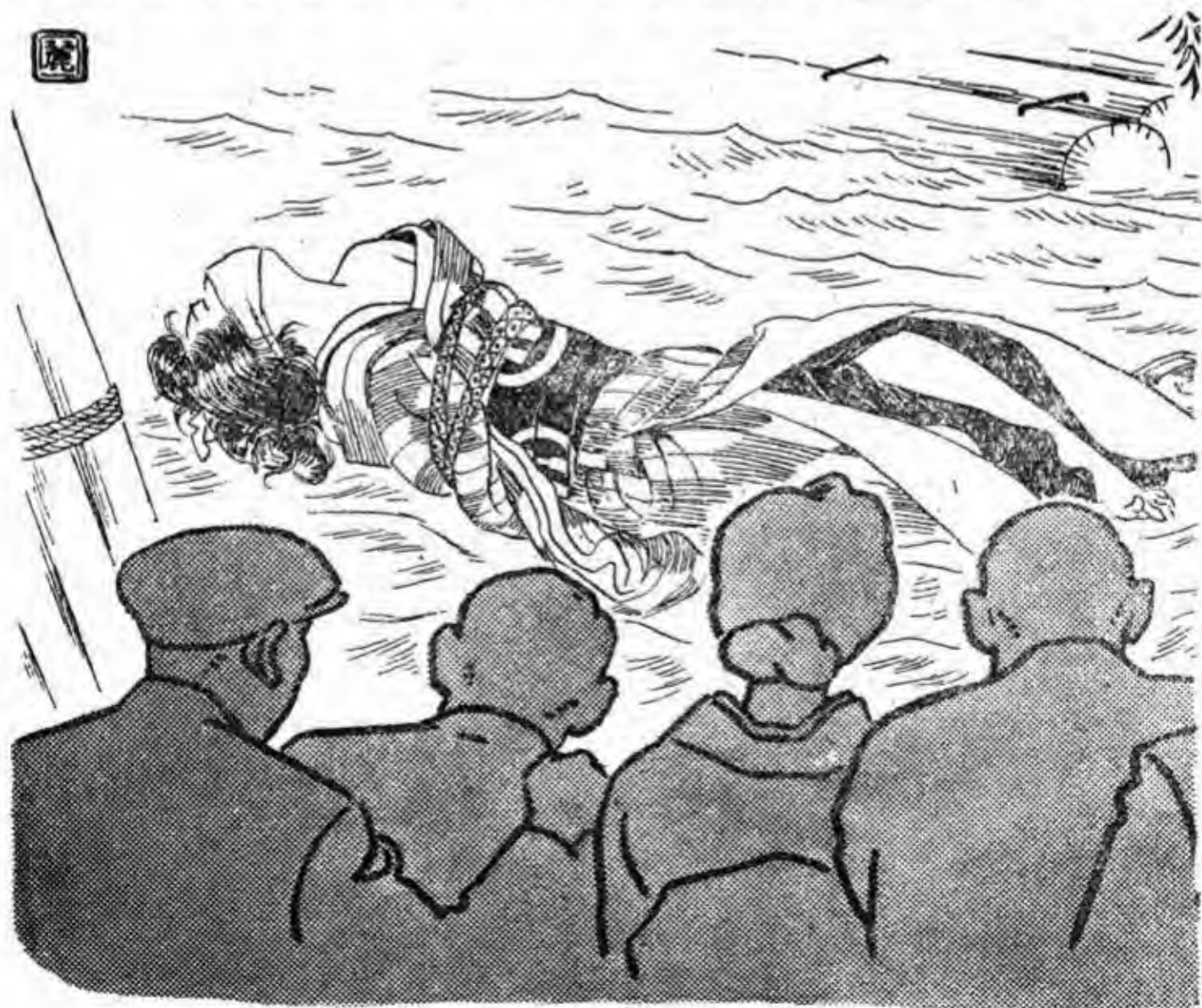
「あなたも余程物好きね……あたし、どうなるかと思っただわ、でも人形っていい物ね、いつでも、ああやって流行の物が着られるんだから……」

## 二

それから一ヶ月許り経った或る日、私は電車の中の広告に例の百貨店で或る種の催物のあることを知ったのである、何処が主催で何処が後援かそんな辺りはよく見極めなかったが、明治大正獺奇犯罪展の見出しで、鈴弁殺しだの新しい処では説教強盗だの、観る者の心をひく事件をパノラマ式に会場一杯に陳列して呼び物としていた。斯うした催物は物にも依るが百貨店では大抵七階が当てられる。そして屋上へ行く途中か又は屋上から下へ降りる時に一寸覗いて見ようかと立寄るように仕組んであるらしい。まあそんな事はどうでもよいとして私は工場の仕事の都合を見て一時間許り半ば好気心からられて見物した事は

云うまでもない。

兇器だの証拠物品なども入口近くにガラス張りに、さも貴重品かのように飾ってあるのは色々の方面の参考にはなるうが、そんな物は特別私の勉強にはならないから、ずっと素通りしたが所謂現場のパノラマがそれからずっと続いて数で云うと七ツハツ位境界に竹藪見たいな物で区切って陳列、否展示してあった。髪をふり乱して逃れんとする女を追っかけて血刀を振りかざす男―何しろ押すなぐの見物客だから説明書をよく



読むことも出来ない有様で、〃ワァー凄いや  
〃なんて感嘆する丁稚小僧の聲が騒々しく会  
場を震わす。その多くは講談や新聞で当時の  
ニュースバリウを高めたものの許りのようだっ  
たが、その中で女が娘を責め殺す場面が二つ  
あった。

何んでもその一つは深川あたりの木場が背  
景で、娘か女かが荒縄で後手に縛られた儘仰  
向けに河に浮いている風景であった。今一っ  
は山の中の鬱そうとした緑の木に囲まれた滝  
壺の中へ、これも縛られて菰包のまゝ放り込  
まれ、黒髪が浮いて見える風景で今でこそあ  
りふれたのぞき式な見世場に過ぎないだろう  
が、少々活面式になってるのが人気を呼ん  
だものらしい。今考えてもこの題名は忘れて  
思い出せないがこの二つは勿論人形で、僅か  
間口二間の奥行二間半ばかりの地面すれ／＼  
の舞台を僅かに照明で活かし凄味を与えてい  
るに過ぎない一場物である。

「敏江、あれ見たかい、〇〇屋の狐奇展、一  
寸参考になるよ」

例によって晩めしの頃をねらつて敏江の意  
向を探って見る。

「嫌よ、またお人形でしよう。あなたったら  
余っ程、あんな人形がお好きなのね、少しは

お芝居でも見たら、それよりか人形芝居って  
奴もあるわね、あたし今度人形になるんだっ  
たら動くような者になりたいわ、大仏様見た  
いに挙げ放しの観音経はご免よ」

「判ったよ、だけど、一寸小意気な女になつ  
て見ないかね、桃割れか島田でも結ってさ、  
黒えりでもかけて、お前ならいけるぜ……」

「あらまた……それ人形でしよう？」

「ウム、人形にや違いないけど、今度は楽な  
姿勢なんだ、寝てりやいゝんだ、人の顔を見  
る必要はさら／＼ないんだよ……」

「だけど殺される役なんて嫌やーね、そのお  
話し、〇〇屋の展覧会の事なの……」

「ウン、だけどどうせお芝居さ、客寄せの催  
物だから、お前がその場面に出ているかって  
誰にも判りやせんし、この間見たいに着物を  
汚しやしないかと心配することはいらん  
だ。どうだ、もう一べん俺れの願いをきいて  
呉れんか、その代り一週間、かゝあ天下を許  
す、洗濯でも何んでもするぜ……」

「お馬鹿さんね、あなたも余程あたしを玩具  
になさるたちだわ、じゃ今輪際こん度だけ一  
べん限りよ……」

私はその晩、例の権さんに話をつけに行っ  
た。実行日は催物の最終日に当てゝその前の

晩から準備する事まで定めて会期七日間の六  
日間を心待ちに待った。丁度よい事には最終  
日は百貨店の棚卸しの日で、開店は午後二時  
から五時迄で夜間営業なしでもつけの幸い。  
私はひるま今一べん会場を念入りに調べて十  
一時頃敏江を促して〇〇屋へ出掛けた。権さ  
んの知り合いに渡りをつけて七階へ昇る。

この場合折角来た序でに敏江に一通り見せ  
度ののだが、とても時間がないから諦めて例  
の深川の場とその近辺の情景をいゝ加減な説  
明で連れて廻り早速会場と裏口の事務室の間  
にある狭い係員の詰処で仕度に取りかゝった  
幸いこんな催物の処には店員一人も見当らな  
い。例によって問題の人形の着物を脱がせな  
ければならないんだが今度は一寸薄気味悪  
い、うす空色の地に紫の矢がすりの着物は勿  
論新品で古衣でもなんでもないが、そうっと  
身体を抱くとまるで死体に触るようで思わず  
どきりとする、一々感心していたら時間がど  
ん／＼経って行くから敏江をその場で女房で  
も何でもない唯の女として無雑作に片づける  
事にきめて、マネキン人形とは云わないだろ  
う、菊人形の芯見たいな代物から着物を剥ぎ  
取って敏江の身体にその儘着せた、女の髪の毛  
はいじり廻わしていたらすっぽりと頭から



ぬげた、体のいゝかつらをかぶっていたのに  
は驚いた、たゞ人形につけた着物の寸法が少  
し短いと着物の下が肌襦袢にすぐメリンス  
の赤い腰巻だけで少々お寒い、その時は女の  
浮いている河の情景が頭に浮んでいたので詳  
かに見なかったので気が付かなかったが首に  
手拭が巻きつけてあった、

私はすっかり着終った敏江の柔かい身体を  
木場の見える人形の位置に坐らせて荒縄で敏  
江の両手をどうせ三時間ばかりの見世物だか  
ら思い切って……と後手に今の高手小手に縛  
り上げて豆絞りの手拭いで猿轡をかませゴロ  
リと河の中に仰向けに寝かせた。そして見物  
席の通路の竹欄の外に立って人形と同じボー  
ズであるかどうかを確かめたが、成程流石は血  
の通った人間だけあって敏江の腰、腹、股あた  
り出るからエロティシズムは満点に近いなど  
と一かどの演出者気取りで一才他人行儀な想  
いに浸って見る。私は思い切って敏江の心持  
ち上げている両ひざの裾を乱して見た。赤い  
腰巻の間から白い脛がちよっぴり覗いて女房  
ながら悩ましい艶っぽい情景が忽ち現れた。  
私は敏江のそばにつくまうて

「痛くないかい、辛抱出来るかい。おしっこ  
は袋の中へ出しちまえよ、ちやんと汚さない

ように締めてあるからネ、じや、三時間経っ  
たら無罪放免だ」

敏江はうなずいて眼をあけて微笑んだ、こ  
れなら大丈夫と私は開店を知らすベルの音を  
合図に現場から離れてトイレットで衣づまい  
を直して知らぬ半兵衛で客になり済まし、一  
服つけて入場して来る客の中に割り込んだの  
である。

斯うした催物の見物客は二回も三回も見  
人はさまで多くはないらしい、初めて客が流  
れるように一方交通で通り過ぎて了うから昨  
日見たのと今日のとでは少し違ふなんて余程  
の物好きでない限り気が付かない、私は一べ  
ん客にもまれて出口に出るとまた元の入口に  
戻つて見て歩く。……敏江の場面は念入りに  
それでも半分は不安で眺める一方、そばでガ  
ヤ／＼喋る人の声を聴き逃すまいと片耳立て  
ゝ一尺いや一寸宛足を運んで行く、時には突  
張りながらして……。

「あら。くゝられて可哀そうね、何か知ら、  
これは……」

と云つたのは何処かの芸者らしい女で連れ  
の姐さんの肩にすがりつく、

「よく出来てるわネエ、ほん物見たい、あん  
たも、ああやって殺すんじゃない、あぶない

わ……」

これは二号さんを連れた旦那の組らしい。  
「そんなのを見るんじゃない、サア先きへ行  
きましよう……」

は子供連れの家庭組——こんな批評に混じ  
って一番しつこく動かないのが四十前後の年  
輩男の群れでその視線はきまうて敏江の乱れ  
た裾のあたりか、喰い入るように縛られた荒  
縄の胸の方へ注がれていた。私はこの間の三  
時間は今でも一生の間一番長かった刻と思っ  
ている。それにもまして縛られて仰向けに竹  
の柵でもなかったらそれこそワーツとそばへ  
来まじ兼ねない敏江のあられもない姿は駄菓  
子屋の二階でどんなに細工をこらしても出来  
る芸当じやない、その後私は権さんに頼んで  
特に当時の敏江扮する人形の衣裳と云うても  
不断外に着て出る柄でもないが呉服部から譲  
けて貰い、どうせ焼けるんならと疎開もせず  
工場の地下室へ行季に入れて放り込んでいた  
のを敏江が死んで半年目に下宿屋の独り住い  
の部屋に数々の想い出に耽けり乍ら開いて見  
たのである。若しこの世に独り夜泣きする者  
があったとしたらそれは息をしない人形でな  
くして活きた人形に購えない衣裳をかぶせ、  
時代を昔に還えして今は亡き女房を恋慕う  
何処かの男やもめの声かも知れない。

(きものシリーズ第一話終り)



# 奇 ク 随 想

須 藤 律 夫

(一)

私は何か目に見えない不思議な糸に手操られていたのかも知れない。否、今でもそんな気がしてならないのだ。二年前の冬、東京浅草の盛り場某劇場の前のK書房で、私は初めて「奇ク」の存在を知ったのだ。憑かれるようにその一冊を求めると、雑踏の地下鉄の中も意に介せず私は夢中になって読み耽った。その想い出は今も猶剪りたての花の様に新しい記憶として私の胸に甦る。私の感動と、興奮とはそれ程大きかったのである。勿論その頃から（そして今でもそうなのだが）暇さえあれば書店に、或は古本屋等に立ち寄

るのが私の日課の様なものなのだが、私はその時迄「奇ク」の存在を知らなかったけれどそれから二、三ヶ月も経つと（殊に最近では）都内の殆んど大部分の書店でその姿を見かける様になり、様々の新刊本と肩を並べている「奇ク」の姿を見る事は私にはほんとうに微笑ましい感じがする。その内容に就いては今更私が贅言を尽す迄もなく多数読者の方々が御存知の通りであるが、号を逐って内容の充実して行く事は愛玩の盆栽がすく／＼と育って行く様にも私には楽しく感じられるのだ。編集当事者の熱心さと真面目さも、さる事乍ら、同誌が常に標榜する様に「文献」と

しての価値は逐号増加して行くかの様に感じられる。殊に毎号豊富に盛られている多数の告白物は、生々しい信憑性を伴うと共に更に文献としての価値を高めるのではないだろうか。勤務の余暇、昼休みの散策時、日比谷交又点より有楽町への道すがらに、M書房、Y書房、N書房、G書房等四、五軒の本屋があるけれど、この頃ではN書房を除く外はどの書店にも「奇ク」が飾られる様になった。又私の住む私鉄沿線の各駅売店にも、そして春の或る一日、湘南方面へ出かけた私は電車を待つ間の一時、その駅の売店にも「奇ク」が堂々と飾られているのを見て嬉しくもあり、



又一寸意外な感にも打たれたのだった。

緑の丘に土筆が伸び、陽炎の燃ゆる長閑な春の日だった。気晴しに街を歩いていた私は行きつけの古本屋（探し求めた本をよく頼んで置くので）に立ち寄り、其処で偶然にも「奇ク」のバック・ナンバー（昭和二十八年六月号より九月号迄）の四冊を見かけたのである。勿論それ等のものは私も取り揃えて蔵しているのだが「奇ク」が古本屋に出た事とはとても珍らしい。よその都市では知らず、東京では誠に珍らしい事である。（一度中野区江古田の或る本屋で大分古い奇クのバック・ナンバーを見かけた事があったが、その時は急いでいたので求めず、再び行った時には既に空しかった。確か二十四年頃のことだった様な気がする。）本は循環する。学問の成果は著述によって世に伝えられ、それによって研究は更に促進され、次の成果となって又本が生れる——と言った意味では大きな循環をしている

そして私は自分の住む街にも「奇ク」の読者のいる事を知り、それが何か私の胸に心強いものを感じさせるのだった。その中の一冊をめぐっている中に、私は口絵写真の或る一頁が切り取られているのに気付いた。目次によって参照して見るとそれは女性の切腹の擬態

写真である。恐らくその写真は「奇ク」からは切り取られた様なもの、その人のアルバムに蔵せられたのではないだろうか。私はふとそう考えると何か安堵に似たものを感じずにはいられなかった。

## (二)

「奇ク」のバック・ナンバーで私には想い出す一つの事がある。それは今から四年前、私が未だ「奇ク」の存在を知らなかった頃にすら偶然にも私が「奇ク」を買って持っていた事だ。それは昭和二十七年の新年号である。勿論その頃の「奇ク」は現在のそれとは誌の形態も違っているし、殊に内容に到っては全く雲泥の相違である。先日蔵書の整理などしていた時、ふと机の下から出て来たもので、忘れもせぬ三年前の元旦、品川神社に初詣での帰途、品川遊廓内の或る本屋で求めたものだった。本の大きさは四六倍版、紙は片面ローラーがかゝって居り、女性美のグラビヤ写真が八頁、目次の中から主なものを拾って見ると――。

表紙——磯田卓司

口絵——須磨利之、喜多玲子

責の小説 拷問 片矢 薫

賭 機 二俣志津子（喜多玲子画）

閨房の木乃伊 丹羽 太郎

巷談漫譚 尻 増田 志郎

艶色昼夜帯 緑 猛比吉

好色將軍と淫蛇女優 高橋 義信

肉体を見せた女 松谷 茂

毒婦山窩のおろく 笠置 良夫

——等々、然し漫画、艶笑コント、或は懸賞詰将棋等は確かに大衆性の幅を持たせて現在とは行き方が変わっている。その頃から見れば現在の「奇ク」は少しの無駄もなく何と内容の充実した事であらう。文芸的価値は別としても、作者、編集者、読者の三つのハーモニーが成りたゝないと兎角ストーリーとしての成功は覚束ない。この点私は何時も「奇ク」編集部、雑誌ジャーナリズムとしての媚眼に敬服するものである。憶えば第二次大戦中一切のものが味気ない迄に抑圧された為かその反動としての戦後の、殊に性の解放は大きかった。そして又言論の自由が叫ばれ、各種の出版物が大きなブームの波を現出して行くのだった。そして数多い現代の風俗雑誌（最近では五指に余る同傾向の雑誌が発刊されて居り、その中でも一、二のものは凡ての形態に於て全く「奇ク」と紛らわしい位模倣性の強いものがあるが）の中でも廃刊、休刊の統

出している今日、逐号堅実さを加えて行く。奇ククの発刊は非常に心強く感じられる。奇ククが存在を知り、ひたむきな執着(愛着)を感じ読み出してから早くも二年、その中でも左の作品は何故か今でも強く印象に残されている。

鼻腔礼讃 升岡金吉(二八、一月)

白い便器の幻想 芳野眉美(二八、三月)

開花の契機 信太容子(二八、四月)

若衆武士道 戸崎平馬(二八、六月)

お隣の魅力 多山皓(二八、十二月)

散紅葉 亀岡絃七郎(二九、二月)

女体自虐図 三富浩生(〃)

二百字讃歌 真砂十四郎(二九、五月)

美しい暴君 馬族 保(二九、六月)

稀書婚姻の儀 瀬川泰子(〃)

等々、その外中康弘通氏の『切腹研究』の一連のものは何時も興味深く読んでゐるし、又貴重な文献であると思う。二十九年六月号所載、『美しい暴君』も又私には興味ある読み物の一つだった。それに文中に登場して来る『許斐』(このみーと発音するのではないだろうか、珍らしい名前である)——なる人は私も多少知っている様に思えるし、若しそうだとしたら世の中と言うものも案外広い様

で狭いのかも知れない。奇ククを知って二年近く、毎号興味深く読んで行く中にも、私はそれによって実に多種、多様の性格を持つ人々の居た事を知り、それと同事に何時も考えられる事は、その類型と職業部門との一致の事である。ギー・パルマード(GUY. Palmede)教授著(稲葉信龍訳)『性格学』の中に於ては次の様な事が例挙されている。

#### (性格的類型)

#### △性慾型▽ ↓

#### ◎同性愛的

温和、他人につくす  
服従する、積極的な女性型、触覚優位、  
デザイン、

#### (職業)

a、理髪業、美顔術師

皮膚科医、婦人科医

b、浴場の使用人、下着類業、モード。

デザイナー、

c、芸能人、歌手、舞踊家、

d、カフェーのボーイ

ホテル業、菓子製造業、料理人、

a、馭者、牧童、動物

調教師、獣医、屠殺者、手術の看護人、

#### ◎加虐性

攻撃性、力への欲求  
積極的男性型、体感

#### 及び筋肉感覚優位

外科医、齒科医、解剖学者、

b、死刑執行人、

c、森林業、樵夫、

d、石工、坑夫、靴屋彫刻師、

e、運転手、兵士、

f、力士、体操教師

マツサージ師

a、配達人、馭者、水兵、飛行家、

b、鍛冶屋、運転手、

消防夫、煙突掃除夫

花火業、パン屋、

c、牧師、尼僧、修道女、社会奉仕家、

a、市場や街の呼び

b、芸能人、喜劇役者

c、政治家(悪い意味

の)

#### ◎緊張病質

自己愛、自己中心性  
自己閉鎖、自己讃美、  
(数学、物理、哲学)

a、兵士、

b、教師、教育者、



内閉性、感覚器官  
の除去、

### ⑧ 偏執病質

自我の拡大、自己を  
誇大視する、精神的  
インフレーション、  
創造感覚的立場では  
感じ理解する、

### ⑨ 回帰病型 ⑩ 抑鬱質 (肛門)

- c、会計係、電信係、
- d、地図記録係、エツ  
チング師、
- f、夜警、燈台守、
- g、マネキン、
- a、建築業、組織者、
- b、建築学者、神話学  
者、天文学者、筆相  
学者、精神科医、心  
理学者
- c、音楽家、
- d、薬物学者、薬剤師  
心学者、
- e、裁判官、探偵、弁  
護士、スパイ発見係
- a、倉庫係、切手蒐集  
家、考古学者、公売  
人、博物館の使用人
- b、化学清掃人、画家  
衛生業 (消毒)

### ⑪ 躁病質 (口腔)

対象を味わい、かじ  
りつき、つきとめ、  
或は追払う (拒否す  
る) 味覚が優位

- c、道路掃除夫、バタ  
屋、臓物商人、皮革  
労働者、
- d、批評家、
- a、カフェー、料理店  
のボーイ、料理人、  
酒のきゝ手、
- b、吹奏楽器 (ジャズ  
の) 奏者、
- c、販売業、仲買業、
- d、言語学者、語学教  
師、
- e、口腔外科医、

※性格学的類型をその対応する病理心理学  
によって示す。然し之は通常の類型であっ  
てその主要な特徴によって早急に決定され  
たものである。

### (三)

私も何年か前、掲中 (一) の職業中、a、  
bの中から適業を選び度いと随分考えた事が

あった。殊に医師等には子供心にも仄かに敬  
愛と憧憬の念を禁じられず、家の近くの東京  
医専によく卓球等に出かけた。私の小学校四  
年の時である。卓球も好きであつたがそれよ  
りも私には白衣を纏う若き医学生姿を見る  
事が強い憧憬を感じさせたのであろう。然し  
私の環境は迎もそれを許さず様々な辛酸を経  
て (五) の分類の中、或る種の職業に落ち着  
いて仕舞つた。今考えて見ると残念でもあ  
り、必然性と言うか何か宿命的なものが感じ  
られる。私には現在の職業に、自分の性格を  
適応させる事は一寸困難の様に思われるけれ  
ど、そんな時、何時も「奇ク」は何等かの形  
で私を励して呉れるのだ。私は、「奇ク」が  
馥郁としてその文化的価値を高め、更にリフ  
アインされたものとなる事を怠ずると共に、  
私の良き伴侶たる事を確信して筆を擱き度い  
と思う。

— 完 —



## 非 小 説

性

液

(八)

## 伊 藤 晴 雨

久しく御無沙汰いたし居候、あなた様が此度中洲真砂座に御出勤の由、新聞にて承知いたし此手紙差出し申候、大月にてお別れ以来私のからだもいろ／＼に変わりまして一時新橋より伊東屋つばめと申して芸妓に出まして、只今ではさる方の御やつかいに相成りおります、母も一時は大病にて気づかわれましたが、神仏のおかげにて快方におもむき、只今では私と二人浜町の表記の処に幸福に暮し居り候間御あんしん下され度、いずれ其内御目もじいたし候、此品粗末には候えども樂屋の皆様にて御賞味被下度、あなた様も御承知のかきがら町名物の小饅頭に御座候、委しき事はお目にかゝり万々申上ぐべく御目もじの日を楽しみ居り候。

かしこ

現代の女性の手紙とは違つた書き方である処が明治の女であろう、豊吉が地方巡業から命一つを土産に東京の土を踏んだ当時中洲の真砂座の興行主任は故篠山吟葉氏（後松竹合名社大阪本社営業部長）で此人の斡旋によつて柴田善太郎の座長、山崎長之輔、若水美登里、中村秋幸等の一座に加入した時であった。細野は豊吉と盛岡で別れて志村松之助の一

座へ入った、離合集散は役者の常である。

豊吉の同性に対する感覚は旅の女へと移つて行つたのは自然であるかも知れないが、責に關する執着は益々強くなつて行くのをどうする事も出来なかつた。

入座の時は米光関月作「女相場師」の通しで此狂言の中に娘を縛って人力車に乗せて誘拐する場面がある、此娘に扮するのは久保田清という頗る美しい女形で、豊吉は此女の縛られて居る姿を見ると別れた細野の事を思い出す様になつた。

女形の中に男色を好むものと、好まざる正反對のものと二種ある事を豊吉は知らないのでは無かつた、其頃旧俳優の中で男娼類似の行爲が多く、夏の日比谷公園の空氣を乱すという噂が高かつたので警視庁の風紀係が密偵して片々端から之を捕えて本庁で取調べて見ると驚く可し、其大部分は日本一の歌舞伎座の女形で尚困つた事には其殆ど全部が技芸委員長中村歌右衛門（先代）の門弟であつたので当局でも開いた口が塞がらず、密かに歌右衛門を呼んで取締りを命じたという事と先代市川中車の門弟の百枝という年は五十以上になる中二階の女形が月給僅か四十円の身分で人形町辺に四十円の家賃（其頃では大金）に住い



贅沢な生活をして居るといふ咄しや、日本橋よし町の或る待合には男娼専門の××といふ男芸妓の居るといふ咄しを聞いたが、女形の全部が男娼であるとは云えない、

舞台では色気たっぷりな女形である新派の木下吉之助（大阪で死亡）などは楽屋へ這入ると素ッ裸で鼻唄交りに楽屋風呂へ飛び込む男性的な女形もあり、硬軟二種ある事を知らないのではないが、久保田の娘が縛られた形に魅惑を感じた豊吉は或夜、久保田が閉場してから、の帰りを男橋で待ち受けて人形町通りを執念深く口説いたが横っ面をお見舞されて手強く突っぱねられた其お尻を一座の立女形である若水美登里の所へ持ち込んだ。

若水は本名を浜の助といつて親は本所若宮町の畳屋で、幼年の頃横浜で育つたという、七、八才の頃から女のする事斗りを習い、最初は浅草公園の常盤座に出勤して水野好美の弟子となり、若水美登里といつて居た。前年、故人となつた文学博士伊原青々園氏などは此若水が扮装の儘博士の傍へ来てお酌をされると思ひ乍ら一度位寝て見たい様な気持ちになると都新聞（現東京新聞）の劇評の中に書いて居られる位美しい女形で其方では有名で「お釜の浜ちゃん」で通つて居る。

或時さるヒイキ客が総縮緬の引幕を贈つた（現在では引幕は影も形も無くなつたが其頃は緞帳幕は卑しいといつて用いなかつた、之を用い始めたのは帝国劇場が最初である）其引幕の画にはなんと大きな墨絵のお釜が描いてあつたので其幕を引く事が出来なくなつたといふ咄しが今に残つて居る。（此人の男娼的存在は奇クの読者中にも御承知の方が多からうと思う）豊吉と此若水と出来て若水の浜町の家に同棲する様になつたのは友江から手紙が届いた頃であつた。

其頃の俳優の給料は実に少なかつた。座長の柴田が八〇円、山崎長之輔が七五円、若水が六〇円であつた、事の序でを以つて當時の俳優の給料をスツバ抜けは新派の第一人者伊井蓉峰が初めて此座へ這入つて近松研究を初めた頃の給料は一座十数名を引くくゝめて一四〇円であつた（當時の出納簿によつて記す）から豊吉の給料は二五円を越えないであらう、それでも開盛座時代の一二日間五〇銭とは大分高くなつて居るのは時の流れと俳優の腕が上がつたからであつたらう。

真砂座という小劇場は座主を佐々木政次郎といつて此座から市村羽左衛門や沢村宗十郎を出して居る、当時として新しい興行政策で

モンテクリストや虚無党奇談などをやつて、松屋松翁や真山青果や小山内薫、岡田八千代などを育てた座であるが晩年、時の流れに抗し得ず麻布十番に新築した南座を松竹に売り渡してしまつたが実権者の佐々木氏の母が開場式の当日僅か二千円の為に自殺した等の悲劇もあるが、それは後の話である。

花井お梅の居たといふ家の裏手に三間斗りの小じんまりした家が若水の借りた家で、豊吉と若水は湯上りのホンノリした顔色で差向いの膳を前にして盃を取り交して居る、来月の狂言の書抜きが縁喜店に乘せられてお燈明があがつて居る、初夏の風が大川を渡つて緑日物の植木鉢の葉が微かに揺れて居るのが見える。

「梅堂さん、お前さんは女を縛るのが好きなんでつていう事を聞いたけど、縛る方は面白いかも知れないけど縛られる方はいゝ心持ちはしないね」

「馬鹿ッ、知らねえからこそ、そんな事をいうんだ、一度縛られて見たら其心持ちは一生忘れられねえもんだぜ」

「どうして縛られるとそんなにいゝの」

「どうしてといつてそんな事が口でいえるもんじやあねえやね、両手を後ろに廻して縛ら

れる、手が痛むから自然に……上  
 げる……あすこの処がギューツと締る  
 んだ、

昔しの話しをすると老人臭くなるがね、お  
 れの親爺の話しによると明治の初年迄横山町

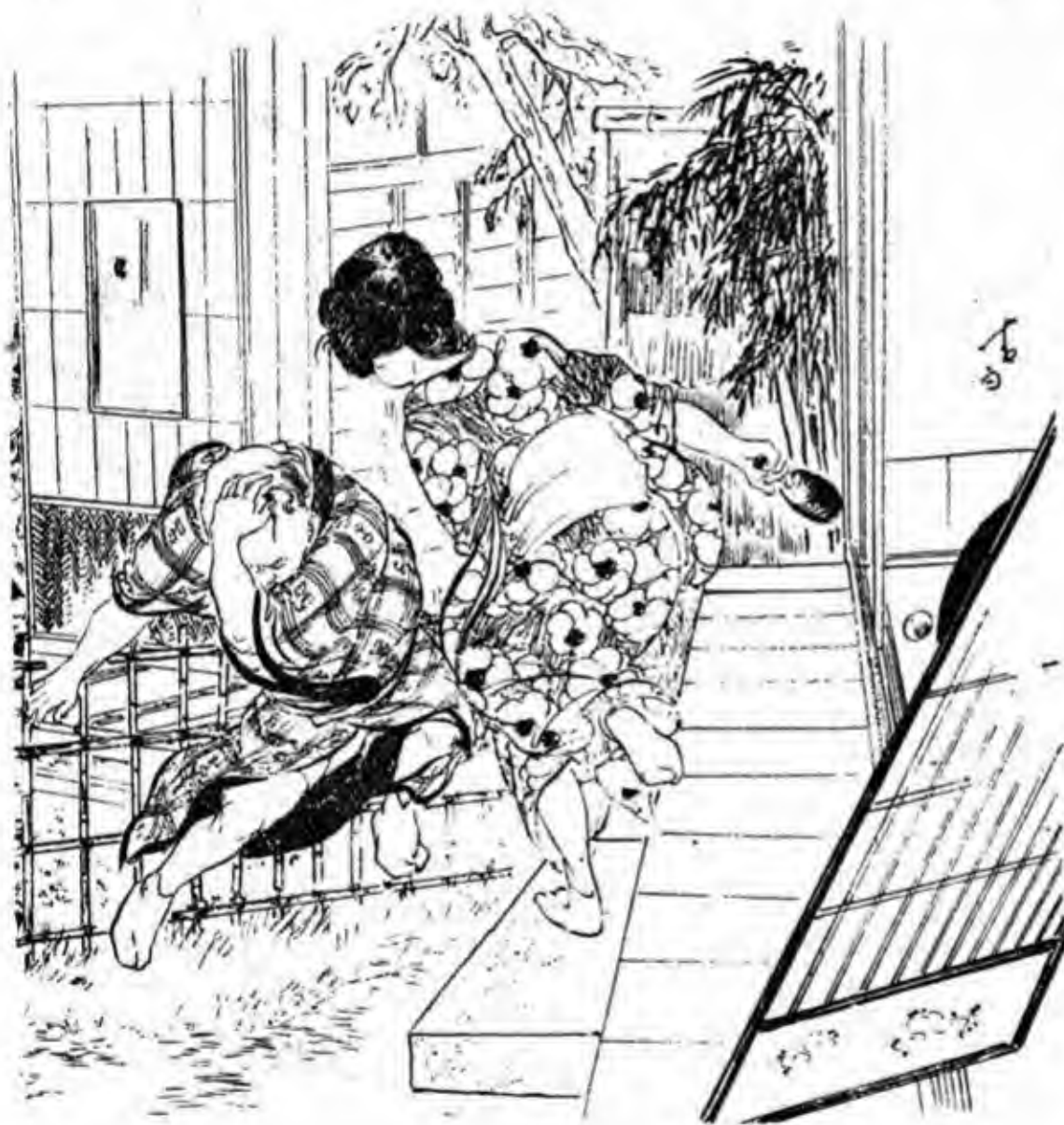
三丁目にセキレイ台というも  
 のを売って居た家があったそ  
 うだ、其セキレイ台というの  
 は……

……枕の様な蒲団でパンヤを  
 入れてあったそうで、……  
 ……工合がいゝ  
 そうだ」

「ホントかしら、そんなら今  
 からでも私しを縛ってくれな  
 い？ 顔をするわよ」

「かつらはあるかい」

「あるとも、中幕の野村三千  
 三の京都の舞妓に使ったのが  
 ソックリ持って来てあるか  
 ら、あれを冠って芸妓の衣裳  
 を着て縛られて見様かしら」  
 「ソリヤアいゝ、其間、人の  
 来ない様に格子戸に鍵をかけ  
 て置くと仕様ぜ」



やがて舞台化粧が出来上り京の友禪染の振  
 袖を着て立上った若水の姿を見て豊吉はウツ  
 トリした、真正の舞妓だってこれ程の美しさ  
 を持って居る事は無いだろうと思われた。  
 「サア縛られるわ、何で縛るの、細引なんだ

じや色気がないじやないの、その扱帯で縛っ  
 て頂戴、そして思う存分に下さいよ、あ  
 なたになら責め殺されたっていゝワ」  
 縛られた若水を転がしているくゝの所作を  
 試みて居る内に豊吉は夢中になって来た。

「アゝいゝ心持ちだ、もっと  
 ギューツと縛らなくっちゃあ  
 扱帯が解けちまいそうだワ  
 よ」

其時二人の耳に瓦落瓦落と  
 いう素敵な音が響いて来た、  
 それは隣りの中村友江の家か  
 ら起って来たのだ。

縛られて居る若水は、男の  
 顔を心配そうに見て、

「あなた一寸見て頂戴、火事  
 じゃあないか知ら」

「じゃあ一寸手をほどこう」

扱帯を解いて居ると裏手の  
 四ツ目を飛び越して八反のド  
 テラを着た中年の紳士風の男  
 が飛び込んで来た。

「アツ、先生は曾我廼家の五  
 九郎さんでしたね」

「ヤ、あんた若水さんか、エ



ライ事をしよった、一寸こゝへ隠しておくなはれ」

「どうなすったの、ア、先生の頭から血が出て居ますワ」

「無茶しよる、友江の奴、俺を徳利でなぐりよってナア、エライ目にあわせよった、ワテ逃げよりまっサ、済まんが下駄貸しとくなはれ」

「ソリヤ大変、じや表からお帰んなさい」

豊吉は自分の男物の履物を五九郎に貸してやった。挨拶もソコ／＼に五九郎は表の格子の鍵を開けて飛び出して行った。

.....

銀座の十字路の東南に近頃開店したカフェーライオンは、女給の数三〇余人、梅組、竹組、松組など所謂女給の組を作って接客させた現在の女給制度の先駆者で店内の壁画を斯界の一故老茂木習古画伯に頼んで半裸体の天人が薄い天衣を通して或る部分が見え相に思われる際どい画をシヤンデリヤの光線を浴びて眺められるというような経営方針と女給の粒通りなのが当って日夜満員の盛況を極めて居る。

「ヤ、曾我廼家が、相変らず勉強だナア、其



あたまは如何したんだ、ナニ、舞台で大道具が倒れたと、嘘をつけエ、もうこっちはチヤンとネタが拳って居るんだ」

「恐れ入りやした、流石は柳橋の先生、目と鼻の先の浜町の一件がもう先生に知れましたのんか」

「蛇の道はヘビサ、色男台なしだナア、舞台は休んだのかい」

「ヘエ」

「舞台は休んでもカフェーは休まない処が五九郎らしいね」

「仕方ござせん、惚れたが病いでござしてナ」

「時に君の張って居る君子に就いて少し話したい事があるんだがね」

と竹波先生は声を低くして

袈裟な表情で

「ヘエ、そやったらおもうおまッしやろ、あれ男だっかいな」

「横浜の役者で島田のかつらを冠って女給に変って居る事が判ったんだよ」

其頃のカフェー・ライオンに既に男色を売る女給が居た事は現代の文壇人で知って居るものもある筈で、此君子という女形は横浜の新派俳優で西原美津夫という不良少年であつた。

(未完)

「ネエ君、アノ君子を女だと思つて居た己れも馬鹿だし、君も亦職業柄にも似合わず眼が利かねえ、男だった。底を割れば身も蓋も無くなっちまうが、あの君子は実は男なんだよ」

五九郎はキョトンとして眼を見張った、ワザと驚いた大

×

×

×

×

×

×

懸賞〔告白と手記と体験〕入選

轢<sup>れき</sup>

殺<sup>さつ</sup>

願<sup>がん</sup>

望<sup>ぼう</sup>

青 葉 楨 一



私は大分以前から、轢殺に強い興味を持っています。新聞の三面を開いたとき、〃轢死〃と云う見出しがあると、その二字が他の何の字よりも先に眼に飛込んで来ます。併し

それが、婦人や子供の場合であつたりすると（何だ——）と急につまらなくなってしまう。つまり私の興味は、男性の其れも青壮年層に限定されているのです。と云うのも、私がソドミアであるからに違ひありません。申し遅れましたが、私は当時或る市立中学の教師をしていました。私の愛人は同僚のKと云う青年でしたが、彼は私が多少（もしかしたらかなり強度の）マゾ傾向のあるのと同じ位にサド傾向を持っていたようです。（此の事は後になって大変重要な意味をもって来ます）

併し普段の私達の交情は、ホモとしては至極ありふれたものでした。只ある時、こんな事がありました。もうそろそろ葉桜の季節でしたが、二人で散歩に出た帰途、私は過って川に落ちた事がありました。幸に浅い所でしたから、直ぐ這上ることが出来ました。が、全身濡鼠でワイシャツもズボンもべったりと軀にへばり着いています。私は醜態を演じた恥しさに苦笑しながらも、面白そうにシロシロと眺めるKの視線を浴びても、併し決して不愉快ではありませんでした。「サア、お脱ぎなさい。よく絞って日向に干



して置けばすぐ乾きますよ」

Kは声を弾ませて云います。

「併し、此んな処で裸になんか、なれやしないよ——」

「かまうもんですか。誰も見ちゃありませんよ。サ、僕が脱がさせて上げましょう——」  
尚も浸っている私の軀から、彼は無理矢理のように衣服を剥ぎとって猿股一枚にしてしまいました。

「サア、それも——」

「いゝよ君、これは——。それに、そんなに濡れちゃいけない」

「駄目々々——」

Kはもう容赦をしません。私はとうとう真ッ裸にされてしまいました。いくら人目が無いからと云って、何時、誰が通りかゝるか知れない道筋の事ですから、土手の叢にしゃがみ込みましたが、雑草の丈は未だ短くて、腰をすっかり隠すというわけにはいきません。それに初夏とはいえ戸外で裸になるには少し早過ぎます。その上、濡れた後ですから、暫くするとブルブル顫え出して来ました。

「寒いですか？」

楽しげに口笛を吹きながらセツセと濡れた

ものゝ仕末をしていたKは、私を振返ると一寸意地悪そうな眼付をしてそう訊くのです。

「風邪をひきそうだ。ホラ此んなに鳥肌だつてる——。君は上衣を着てるんだから貸してくれてもいいじゃないか——」

「そうですネ。じゃ、可哀想だから貸して上げますよ」

彼は、合着の薄い上衣を肩へ掛けてくれると、草の間に小さくなっている私に愉快そうに声を上げて笑いました。

それからKは、味を占めて（実は私とても同様なのですが）二人で散歩に出れば、私はきまって川や池、時には田圃へ落ちる（正確には落される）ようになりました。

閑話休題——此んな他愛も無い遊戯のお話などをするのが目的ではありませんでした。では、話を本題へ戻して——私は唯一人の愛人であるKにも、轢死趣味の事は云いませんでした。別に秘密にして置く心算はなかったのですが、キツカケがないまゝに、未だ話してはなかったのです。

前にも申しましたように、私は毎日の新聞を見るのが秘かな楽しみでした。轢死の記事を読んで妄想に耽り、果ては自分は轢殺されたと仮想し、暫くは陶醉に時の経つのも忘

れてしまいます。一度でいいから何とかして轢死現場を見たいと願っていましたが、そんな機会がそう矢鱈に転っている筈はありません。

私は幾らか絵心もありましたから、そういう場面を描いてみることもありました。其の中に、私は或る奇抜なアイディアを思いついたのです。すると、もうひとりでに胸がわくわくとして、夜中になるのを待ちかねるよう闇に紛れて自転車に乗出しました。私の住んでいた家から二軒ばかり行った町はずれを、東海道線の支線であるH線が通っています。私の目的地は其処でした。広々とした田圃の中の線路に沿った道を尚も少し行ったら、ほどよい場所で自転車を下りました。星明りに腕時計をすかして見ると、終列車の通過迄に三十分程間があります。私はすぐと裸になりにかゝりました。猿股の紐をとく指先は胸の鼓動と合せるように、ぶるぶるとふるえています。真ッ裸になると、私はスロープを這上り線路の上へ仰向けに横たわりました。ヒヤリとする鉄の冷たさに私は思わず身顫いをしました。あゝ——そのときの気持を何と云い表したらいいのでしょうか。——云いようも無く不安定で、而もゾクゾクするような

な快感——私は大きく喘ぎながら凝と全身を耳にしていきました。雨のような蛙の声——併し私はそんなものを聞いているのではありません。皮膚に密着しているレールから伝わって来る車輪の響を待っているのです。閉じた臉の裏には轢殺瞬間の私の軀や、轢死体となった姿等が、天然色映画を見るようにアリアリと浮んで来ます。——血

糊で目も鼻も判らない真赤なフットボールみたいな首。バラバラに振切れた腕や脚。真ッ二つに轢断された胴からドロドロと露出した臓腑——私は痴呆のように口も開け、咽喉の奥から歓喜の声を搾出しながら、変に弾力のある自分の腸管を、自分の手で掴んだり振ったり握ったりしているのです——。

それは長いようで案外、短い時間でした。まもなく海鳴りのような響が背中、皮膚から滲透して来てすぐにもう脊髄を震動させ始め

ました。ポーツと云う汽笛が「ようし。お前を轢き殺してやるぞ」と云っているように聞えます。ヘッドライトの眼を光らせた怪物のような機関車は次第に近く迫って来ます。単線ではあっても以前本線で使っていたC五三型の機関車は有る重量感で、すぐ頭上を通過する轟音は気の遠くなるような凄まじさで

す。私は土手の斜面にピッタリと腹這いに吸着いて遠ざかるテールランプを見送っていました。フット気が付くと腹の下草は、しっとりと夜露に濡れているのでした。私はそれが病みつきになって、三日にあげず線路へ出掛けるようになりました。或る晩のことです。何時ものように素裸になってレールに転っていた私は、誰



か人の来る気配にギョツとして頭をもち上げました。すると足許の処に開衿シャツの男が立って透かすように私を見下しているのです。私はしまったと思いました。此んな有様を見られたのでは氣遣いと思われても仕方が有りません。併し落着いて、よく見ると男は愛人のKだったのです。

「——何だ、K君じゃないか。驚かすじゃないよ」  
「驚かされたのは此方ですよ。何うしたっていうんです一体？——まさか氣が違ったんじゃないでしょうね」



「訳は今話すよ、下へおりてから——ほら、汽車が来る……」

私は興奮めのした思いで、Kを促して土手を下りると、列車の通過するのを待ってからすっかり打明けたのです。

「——併し君。僕の此処にすることが何うして判ったの？」

「イヤ偶然ですよ。今日親戚迄行って帰りが遅くなったんです。先刻、県道の処で貴方に逢ったんですよ。声をかけたが、気が付かない。何うも様子が変なんで、ソツとあとをつけて来たら此の有様でしょう。驚きましたよ、全く——」

そう云えば、さっき自転車へ乗った男に逢ったような気がします。Kは少し遅れて私の後から従いて来ると、電柱の蔭から一部始終を見ていたのです。私が全裸になって線路へ上ったときには彼も驚いたそうです。

「——貴方がレールの上に寝っ転がったのは、流石の僕も胆を潰しましたよ。思わず飛出しかけたんですが、でもね、一寸惜しくなっただけです——その瞬間、頭に浮んだ連想を悦びましたから……貴方が機殺されるところをね——その光景の鮮烈さが僕の心を完全に捕えてしまっただけです——ホラ、今も未

だこんなにドキドキしているでしょう——」

そう云って私を見たKの眸は気のせいかわしく燃えているようでした。

「ねえ、僕今、素晴らしいアイディアを思いつきましたよ！」

一寸の間をおいて、彼は突拍子もない声を上げると、誰もいないのに私の耳へ口を寄せました。その彼の着想と云うのは全く素敵でした。

「素敵だ！君、全く素晴らしいよ——！」

私は嬉しさの余りそう叫びながらKに抱きつくと思ひきり接吻してやりました。

その夜、私は容易に寝つくことが出来ませんでした。

待ちに待った翌日の夜。迎えに来てくれたKと一緒に自転車を連ねて目的地へ向いました。何時もの場所から二三十米手前で、私は一旦自転車を止めKをやりすごしてから少し速度を落して走り出しました。と行手の闇の中から突如として飛び出した怪漢がやにわに私を自転車から引摺り下します。私の試みる抵抗は何の役にも立たず、忽ちにして怪漢（Kの扮する）の為に真ッ裸に剥がれてしまいます。その中に何うかした隙を見付けて、猿股まで脱られた惨めな恰好で、土手を線路の方

へ逃げようとした私は、すぐに又捕まって今度は逃げられないように麻縄でグルグル巻きに縛られてしまいました。もう、もがこうにも手足の自由がききません。

彼は勝誇ったようにニヤリと笑うと、縛られた私の軀を荷物のように線路の上へ転がして置き、別の縄を取出して首さえ動かぬようにしっかりとレールへ固定してしまいました。私の軀はレールへ直角に横たえられ、首は列車の進行方向へ真正面に向合ったまゝ膠着したようにほんの僅かでも動くことは出来ないのです。

此うして私は生きながら機断される——それは何という素晴らしい想定でしょう。私は肌へ食込む縄目の疼きも手伝ってもう軀中がゾクゾクしてしまいました。

Kは悠くりと悦びむように私を見下していましたが、やがて屈み込むとジツと顔を凝視しました。私も愛情を罩めて彼の顔を見返しましたが、瞬間何か只ならぬものを感じたことは事実です。果して彼は意外な事を口走り始めました。

「兄さん（彼は私をそう呼んでいました）——僕は今こそ打明けるべきだと思いますから何も彼も云いますが——もう暫くすると汽

車が来る、そうしたら僕が貴方を土手の下へ蹴落す——。それで機殺遊戯はおしまいになる筈でした。ところが、処が事実はそうじゃありません。いいですか。よく聞いて下さいよ。

——僕はね、貴方が考えているよりはズット

——それはもう兄さんの想像を絶したサジストなんです。今迄は秘していましたが、もうそれが出来なくなつたんです。僕は自分のサジズムから間接的ですが人を殺した事もある男です。——併し貴方を愛する気持は今も変わりありません。いやそれだからこそ、僕は貴方を殺したいのです——！もうお解りでしょう。昨夜の僕のアイディアは貴方を此処迄誘導して来るトリックだったんです。此れで僕の計画の大半は成功しました。兄さんもマゾヒストなら僕の気持を解って下さる筈です。僕が今、何んなに有頂天だかも……あゝ！今に列車が来ます——絢爛たる殺人——華麗なる機殺——あゝ、僕は気が狂いそうだ」

Kは髪を振乱し眼をランランと光らせて舌なめずりをせんばかりです。私は暫くは只呆然としているばかりでした。彼の言葉を信ずることが出来るでしょうか。私は、二人の遊戯を一層楽しとする為の演出だと思いたかつたのです。ですから私の心を絶望が塗抹する

迄には未だ幾らかの時間を要しました。

やがて——不気味な列車の震動が微かに私の皮膚を戦慄させ始めました。私は流石に一寸不安を感じ

「K君——」

と呼びました。と、その途端Kの姿はヒョイと私の視界から消えてしまったのです。

「K君。K君——。オイ、君——」

私は慌て、彼の姿を追いましたが、首が動かないのです！

「アハハハハ——今更じたばたしたってもう駄目ですよ——アハハ、ハハハハハ——

姿は見えず闇の空間から聞えて来る彼の声は宛ら悪魔のそのようです。その中にも機関車のヘッドライトは次第に大きくなり車輪の響は嵐のように私の五体を駆け廻ります。併しKは現われません。してみると、やっぱり昨夜作った筋書は彼の手で勝手に改訂されていたのです。私の全身は総毛立ちました。無駄な努力とは知りつゝ必死となつて身をもがいてみました。真黒な機関車は火を吐きながら、私を機殺する喜びに歓声を上げて狂気のように驕進して来ます。

「あゝ、助けて——助けてくれえッ——」

私は軀中の力をふりしぼつて絶叫すると、

幼児のように大声を上げてワアワアと泣出ししました。天も地もグルグル廻り軀は大波のように揺れ何も彼も見えなくなると、脳髓を引裂くような死の恐怖に

「ギャア——ッ——！」

と断末魔の悲鳴を上げると、それきりブツンと意識が切断されてしまったのです。

× × ×

私がそのとき機殺されなかったことは、今こうして手記を綴っているのからお判りのことでしょう。併し別に奇蹟が起つたわけではありません。私が機死しなかったことも、実はKの改訂した筋書の中にあつたのです。彼は機死直前(?)の私を前にして云つた「トリック云々——」はそれ自体がトリックで、つまり彼の仕組んだ二重のトリックによって私は髪の毛の白くなるような恐怖を味わされたのでした。私が完全にKの術中に陥つたのは、彼の素晴らしい演技力と、それから私を土手下へ落す方法を最初と変えて、太めのロープを使って操作した事でした。彼が最後まで私の眼から姿を隠していた演出は成功でした。縛られた私の軀がレールに固定されたと思つたのは彼の暗示で、首さえ振曲げられぬように緊縛されてはいましたが、レールとは



## ◇告白と手記と体験◇

## 懸賞募集

## ★賞金★

優	秀	佳
作	作	作
一篇に付き	一篇に付き	一篇に付き
三千円	二千円	一千円
若干篇	若干篇	若干篇

## 規定

- 一、枚数は一篇十枚から三十枚程度まで、
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作品は最近号に発表いたします。
- 一、賞金は入賞作品発表と同時に御送りします。

## ◇告白記の募集◇

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい
- 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます
- 一、原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便百瓦まで八円にて御願ひ致します。

(編集者)

離れていたのです。ローブによる操作は、背は高くても瘦せていて十三貫と一寸しかない私に、Kは十八貫の万能選手ですからそう至難事ではありません。併し一步過れば生命にかゝわるのですからこんな危い遊戯もありません。

Kは、私が泣いたときと、疵だらけで砂や埃に塗れ縛られたまゝ失神している私の軀を

抱上げたときと、二回………だそうです。正直なところ、当座の一日二日は酷い目に遭わせられたという気が抜けませんでした。併し少し経つとその事を思い出す度にジワジワと疼くような快感を覚えるようになり、そうなると現金なもので、Kへの感謝から愛情も前よりは一段と深まっていきました。

以上は、私のマゾヒスト時代のワンカットですが、現在私は次第にサジストに移行しつつあります。マゾとサドは二つであって一つだと云う人がありますが、私の場合厳密に云うと過去に於てはマゾ七にサド三。現在は全然逆でサド七マゾ三という割合です。併し私は何処迄いってもアブノーマルという点では変わりありません。

## ゆ み お ん な (弓女)

佐 次 浩 介



## — 続・腋窩譚 —

三年程前「情婦マノン」というフランス映画が封切されて、相当に騒がれた事がある。セシル・オーブリーという、小悪魔的な女優

ってゆくラストシーンはまさに圧巻であった。現在でも、その場面のスチールを示せばあゝ情婦マノンだとすぐに答えて得る人が多い事と思う。あのラストシーンに於けるマノン

がマノン・レスコオに扮して、砂漠で狂死したマノンを、セルジュ・レジアニの男が逆さまに背負

・レスコオこそ、私の最も理想的とする「弓女」なのである。

と、申し上げたら、私が標題に「弓女」がどいいう妙な言葉を創作した意味が、理解して頂ける事と思う。

つまり、私が常に夢に見又、何とかして実現させたいと願っている女体の責め方は、ぐっと全身を反らせて、極度に筋肉を伸張させるという方法なのである。しかし、多くの責め写真は、殆んど女の足を曲げさせ、身体を丸くしている。これでは、肌に喰いこむ縄目の美は表現されるかも知れないが、私の様に出来るだけ荒々しく女の身体を引き伸ばしたいという願望を持つ者にとっては、甚だ心もとないポーズなのである。又、吊し責めにして見ても、実際には、伊藤晴雨先生の言われる如く、伸張には違いないが、所謂ぶら下がったという感じで、美的感覚とは程遠いものが出る。こう考えて見ると所詮実現性のない不自然なポーズの想定画を眺めて、吐息をつく以外に、方法はないのであろう。と、私は「情婦マノン」を見て以来、しばらくの間、その事ばかり考えていた。

実は、映画館から帰ると早速、妻をマノンに見たてゝ後さまに背負っては見たのだが、



何の事はない、妻は私の背中にくら下って苦しがるだけで、私自身はほんやりと妻の両肢を肩にかついで立っているだけにすぎないのだった。これとても、映画の画面でのみ可能ないわば「見る」には絶対の名カットかもしれないが、実行してみれば何の効果もない、という事になってしまったのである。

私はその後、妻を「弓女」としてしあげる為に、あらゆる方法を考えて見た。

まず第一に考えられるのは、上体を下に向けて倒し、足首を吊り上げる方法だが、私の場合は、「腋窩譚」を見て頂けば解る様に、あくまで妻の腋窩を大きく露出させる事が第一の条件となるので、この方法は、私にとっては極めて不満足なものとなった。しかし、アームスを讃美される方々には、絶好のポーズの様に思われる。

私が、次に思いついたのは、テーブルの上に、妻の腰をしかりと結びつけて、上体を畳に落す。この方法は、かなり成功した。腕が、丁度身体と直角に投げ出されるので、妻の腋窩は十分にさらけ出される。しかし工合の悪い事には、テーブルが低くすぎて、首から上、(或は下というべきか)が、畳の上にゴロンと転った様な型で、肩から乳房に流れる線

が完全に崩れてしまう。腹部は極度に緊張するが、胸部の美しさは失われる事になるのだった。

それに「腋窩譚」でも述べたように、私の妻は、まことに標準的な女で、唯女を責める事のみに快感を感じるのと異り、あくまでア・ブ・ブレイを楽しみたい私にとっては、根本的に満たされないものがあるのは、致し方ない事だった。そんな時、私は菅谷初枝という女を知ったのである。

## 二

彼女を知ったのは、もう梅雨も明けた六月の末であったので、初枝の腋毛は、きれいにそり落されてあった。しかし、顔を近寄せて見ると、ブツ／＼と一耗程度生えかけているのが、私を一べんで夢中にさせてしまったのである。初枝は、私の会社の事務員で、私が今知った、と書いたのは、彼女が、強度のマゾ愛好者だという事を知ったという意味で、顔は前から合わせていたし、何回となく話しかけた事もある。その彼女が、マゾヒストだと判ったといういきさつについては「奇ク」が非常に大きな役割を演じてくれたので、蛇足ながら、つけたしておきたいと思う。

昨年、偶然の機会から、私達が四人ばかり

ぶら／＼と町を歩いた時、私は、今日か昨日、出たばかりの奇ク八月号を本屋の店頭で見出し、これは早く買いたいが、同僚達の前では、と一瞬ためらいながらパラ／＼とその頁を繰っていると、他の二人は別に気にもとめず、先に行ってしまったのに、彼女だけ立ち止って

「奇譚クラブ？」

何気なくそう言いながら、私の手元をのぞき込んだのだ。私は頁を開いているのだし、他の本は積み重なって、私の開いている本の下にあるのだから、内容を一見したただけでは女でこういう事に無関心な者なら誌名など絶対に解らぬ筈であった。が、その時は私もそんなに深く考えずに、唯何となく胸をドキンとさせて

「君も読むの？」

と聞いて見た。

「うゝん」

何でもなく言い捨て、その場はそれで終ってしまったのだが、それから二日後、私は初枝のナイロンの風呂敷包の底に、奇ク八月号が入っている事を、発見してしまったのだ。もちろん彼女は、始終気を使って人に見られまいとしていたのだろうが、私の様なものに

は、前後かくしても背の文字を一見しただけで、その字体から、すぐにピンとくるのだ。私はその場で、彼女が私達の仲間である事を知った。

私は、現在の世情では止むを得ない事だろうし、又お互いにプライベートな問題なのだから、仕方もあるまいが、こうして、奇クを皆に秘して熱読しなければならぬ様な状態を心から悲しむ。一日も早く、われ／＼もフランス人の様に、個人的な問題には誰も干渉しないという様な道徳律を樹立したいものだと思う。

それはそれとして、私たちは、それから一月とたぬ間に、結婚を前提とせず、勿論肉体関係は行わないという約束のもとに、時折同僚の眼を盗んでは、旅館に同道する様な関係にすぐ進む事が出来た。彼女は、生来色の黒い女だったが、その腋窩は、常に湿っていて、乳房のその様に柔くふくらみ、それに例のそりたての腋毛の感触がザラ／＼として、私にとっては忘れ難い印象を残した。

そして、私と菅谷初枝との、アブ・ブレイは、私が妻に強制した時よりも、はるかに官能的で、強烈なものであった。私は、初枝を得て、始めて完全な「弓女」を作り上げる事

が出来た。

まず最初に発見したのは、初枝を正座させて、彼女の膝から足首―太股にかけて、柔い紐で縛り、これを固定して、丁度ダルマを倒す様に、女の上体を後方へのぞけらせる。すると自然、縛った足が浮いてくるから私がその上に腰かけて動かぬ様にしてやると、初枝の太股から腹部、胸部が、実に気持よく伸長し、それに、大腿部がふくらむのと、足首に充血を生ずるのとで、初枝自身にも非常に強い緊張感というのか苦痛が湧き起るらしい。その上、私は上体が自由なので、彼女の両腕を頭の後で交叉させて、十分に腋窩の感触を楽しむ事が出来る。こうして、両腕を開くと普段やゝたれ下り気味の走ったりするとゆら／＼ゆれる乳房が、ピンと、全くお腕を伏せた様に緊張するので、女にとって耐えられぬ程鋭い緊張感となるらしい。

こうして、私と初枝との交際は約八カ月の間続いた。

### 三

そして私は、最後に、初枝に対して、彼女を文字通りの「弓女」に完成させた時の体験を記して、貧しい告白を終わりたいと思う。

それは、もう暮近い十二月の中旬、私は、

以前から考えていた事を、今日こそ実行しようとおそろ／＼初枝に提案して見た。それは相当な苦痛を伴うブレイであったし、第一に女性側の同意と協力がなければ、絶対に不可能な事であったからである。しかし初枝は、案外た易く、いやむしろ進んで賛成してくれた。そこでいよいよ私は実行にとりかゝる事にした。と言っても、決して大袈裟なブレイではない。旅館には必ず四角い大きな机がある。それを横に立て、縄は一本も使用しない。この立てかけた角テーブルの上に、女体の弥次郎兵衛、女体の天秤をこしらえようというのだ。一寸でも重心が狂えばテーブルは倒れるだろうし、初枝の身体はそのふちですれて、傷を負うであろう。幸いテーブルの片側は足で支えられているから、私は、足の正しい方を頭にして、そちらに立つ事にした。背中の方の傷は座蒲団をあて、一応防ぐことにする。勿論、背中が下になって仰向けの形になるからだ。

さてしかしこれを実行しようとする事は容易なわざではなかった。テーブルの位置が高いので、うまく重心の位置に身を置く事が出来ない。まして飛び上る事など思いもよらないのだ。そこでしかたなく踏台を利用してど



うやらテーブルの上に身体を横たえたが、非常に不安定で、台がぐら／＼する。私は結局彼女の肩を両手で支えうまく調子をとってやる事で、どうやら姿勢も安定した。足が膝からガツクリと折れ曲るので、手も肩から下に



し、その上足を膝から曲げぬ様、伸ばさなければならぬ。それには、女性側に相当の努力を必要とする事は、私にはよく解っていた。しかし私は遂にそれを実行した。肩に添えていた手をそっと離すと、初枝に対して、そう

ガラリと垂らす。こうすると、腋窩は伸長するのと異り、ぎゅっとねじ曲って二、三本の深い縞がきざまれ、そこから乳房に向って隆起する線は、実に美術的な昂奮さと呼びおこすのだ。この腕の取り扱いについては二通りあって、一はバンザイの形のまゝ、ぐっと頭上に反らせるのと、一は気ヲツケの姿勢のまゝ、だらりと下にさげるのとである。私は最初、後者を採ったが、

する事を要求した。彼女は、ガツクリと頭を下げ、咽喉の曲線を思う様、さらけ出しながら、そろ／＼と腕を上げ、極めて注意深く、左右の掌を合わせ、静かに頭上に移動させる。それと同時に、彼女の足が、本能的に重心の調子を合わせるようにふるえながら、次第／＼に伸びて行った。

そして、遂に弓女は出来上った。それはほんの、三十秒か、二十秒程度の短い時間ではあったが、背中の丁度、臍窩から約三センチ程下った所を中心にして、足先から指の先まで、ぐう／＼と反りかえった人間弓、私は息をのんでそれを凝視した。とたんに、ぐら／＼と重心が崩れて私は初枝の身体を大急ぎで抱き止めなければならなかった。その時、一瞬にして「弓女」は、私の眼前から消え去ってしまったのだ。

菅谷初枝は、私にとっては、この時から生涯忘れられない女となった。しかし、彼女は今年の二月、平凡な、実に平凡な結婚をして、家庭の人となってしまったのである。

(おわり)

# 露出願望の少女の告白

柴 崎 黎 子

私は東京の或る女子美術大学附属の高校生です。近くのお知合いのI様に見せて頂いた奇譚クラブが、いけない事だと思い乍ら、とうとう私にこんな文を書かせてしまうことになりました。何のために？——。あゝ、たゞ日夜頭の中にいっぱいになっているいろんな妄想を多くの人々に見て頂きたいという、あさましい露出癖のために——。

でも、私には、まだ羞恥心が残って居ります。私は、自分をこうして露出しながら、まだ私自身を隠したいと念って居ます。私という存在を誰にも知って頂きたくないと思って

います。どなた様も決して決して、私に便りを下さったり、私というものを想像なさったりして下さいますな。

私は御誌を知る前から、私の奇妙な性癖（といっていいかどうか存じません。まだ実際には男の方と、おつきあひしたことはいっぺんもないのですから。）を気づいていました。が、はっきりと自分の性向がこうだ、と知ったのは御誌を読んでからです。

私はお友達のことをそれとなく聞き出してみたり、知ろうと務めました。が、誰一人、こ

んな露出癖をもった人はいないようです。

私はこんな自分をあさましいと思いつつ、心の悪魔には勝てず、いろんな冒険をして来ました。あとになって思い出しても、はずかしいことも数多くありながら、一人で夜、床に入っている時など、そうした冒険が狂おしいほど私を宇頂天にさせ、又次の冒険をあれこれと考えさせられてしまうのです。

私は小さい頃から、そんな傾向を帯びていたようです。例えば御不浄へ行くのにも、女中を呼んで、見ていてくれなきや嫌だ、といって駄々をこねたということですし、お友達とする遊びでもお医者ごっこが一番好きで、いつでも自分が患者になっておなかやお尻を提供したことを覚えています。又、誰も家族の居ない時など、往來に面したガラス窓の所へ行って、机を台にしてその上にのぼり、四つ這いになって高々ともちあげたお尻をさらしものにして楽しんだ事もありました。誰かが見ている、と思うと私はわく／＼する程胸が躍ったものです。

さすがに十四才の年に月のものが始まると露骨な行為も出来なくなり、次第にそんな性癖からも遠のいて行ったのですが、再びその悪癖が私を苦しめるようになったのは、高校



に入った年、国電の人混み  
の中での経験からでした。

ラッシュ・アワーの時の  
国電の混雑は想像外です。

足の爪先が下についている  
のがやっとな位です。背の  
大きい男の人達にはさまれ  
て、ふうふう息をついてい  
た時でした。私のお臂に男  
の人の手がびったりとくっ  
ついているのに気がつきま  
した。本能的に私は身をか  
えようとしたが、そんな  
人混みの中では身体を動  
かす事もできません。私は  
はばかりさでいっ  
ぱいになり、どうしたらい  
いのかわからなくな  
りました。そのうちに電車が揺れるた  
びに、私は胸がどきどきして来、口の中がから  
／＼にかわいてしまいました。

その男の人はやがて近くの駅で降りてしま  
いました。とうとう私ははばかりさでその  
男の人の顔を見ることができませんでした。

家へ帰ってから二、三日の間はその経験  
が忘れられません。しかもそれが、日  
がたつにつれて何だか愉しいような思い出に



なってきたのです。

私はもう一遍でもい／＼から同じような経験  
をしてみたいと思うようになり、恐いもの見  
たさ、とても云うのでしようか、郡電で通学  
する私ですのに、わざ／＼廻り道をしてラッ  
シュ・アワーの国電に乗りこんだりしまし  
た。

それから幾日か、そのいけない誘惑に負け  
て学校を休みました。そして国電の中で、実  
に沢山の経験をしたのでした。或る時は手を  
握られたり、又或る時は……を……

れたり。

そんな行為を自分乍ら、  
あさましい、いやらしいと  
思い乍ら、何度同じことを  
繰り返したことでしよう。  
そののみか、私はいつのま  
にか、今までの生ぬるい冒  
険では満足し切れなくなっ  
てしまったのです。

その頃から、昔の露出癖  
がむ／＼と頭の中に浮か  
んで来るようになり、私は  
空想の中で自分を露出して  
は……ようになりまし

た。

そして、幾度となく、私は頭の中の冒険を  
実行してみるようにすらなってしまうたので  
す。その間、ずい分はばかりさめにあつた  
り、危い事もありましたが、それでもなお、  
次第次第に深いぬかるみに入っていくてしま  
いました。この文をお読みになる方の中に  
は、あゝあの娘か、と御記憶にある方もある  
かもしれませんが。そう思うとさすがに筆もに  
ぶりますが、勇気を出して書きましよう。

最初に私が考案したのは、たゞ／＼露出へ

の願望のために、ジュミーズをとってしまいブラウスとパンティの上に直接ジャンパー・スカートを着けることでした。ブラジャーやコルセットは、以前から用いていませんでしたが、ジュミーズをとった、ということだけで、どの位私の露出癖の楽しさが増したか知れません。

が、この冒険もすぐ飽きてしまいました。いくら男の人の手が私に触れ、私を凌辱して呉れたにしても、私はもともととと、心のうちで欲求するだけで、充分な凌辱感は少しも味わえなかったのです。

ある夏の朝、私は、さんく考えあぐんだ末、とうとうパンティもとってみました。このまゝで外出したら、……私の頭の中は意外な提案に興奮か当惑か喜びかわからぬものでいっぱいになってしまいました。このまゝで外出したら、……そしてラッシュ・アワーの電車の中で見知らぬ男の人に……たら。……そうしたら……。そうしたら……。私はまるで気狂いのようにそれを考えました。そうしてとうくノー・パンティのまゝ家を出てしまいました。電車に乗る前から、もう口の中はからくで、ぼうくとわけのわからぬ興奮に身体中上気して汗ばんでいました。

その日は又、朝から特別に暑くて満員電車の中はうだるようでした。

私は一人の大学生の胸の中に、人波に押され



つゝとびこんでしまいました。その大学生は当惑したように横向きになってしまいました。私は自分の冒険に胸をおどらせつゝ、その日の楽しみを期待しました。お乳房でもお尻でも、どこでもいい、男の人に思う存分辱しめて欲しい。それがその時の気持でした。

やがて電車が動き出し、どどと倒れて来た人波に押されて、足を少し開けたまゝ私はその大学生の身体に倒れかかりました。大学生は私の乳房を直接感じてか、ぼうと心持ち耳を染めたのを覚えています。

私の背後にはYシャツ姿の紳士がびったり

私にくっついて立っていました。私のお臀はその紳士のカバンを握った手の甲にびたりとあたっていて、紳士の熱い体温が伝わって来ました。ノー・パンティ、しかもジュミーズも着けていない私の身体は、ずっと素肌に近いものを感じさせたのでしうか、いつのまにかその紳士は手の甲に力を入れてぐいしく私を押して来るのです。

やがて私は一種の陶酔にひたりはじめました。身知らぬ人が私の身体に触れてその感觸を楽しんでいる……そう思うだけで私は云いようのない恍惚感を覚えるのです。





ですがその冒険は、次の冒険をせよと私に命令しました。私は、もしその方がこのスカートをまくりあげて私の……心ゆくまで……たりしてくれたら……と連想しました。が、紳士はいつまでも手の甲が私の身体に触れているのを愉しんでいるようです。

私の冒険にビリオドが打たれたのはその年の秋でした。世田谷の親類の家へお使いに行つての帰り、夜十時頃の電車の中で事です。一人の労働者らしい男がそう混んでいなかったためか、お酒に酔って、ドアの所に立っている私の傍にやって来るなり、あっと云う間も

私はもうそのまゝでいるのが堪えられないような気がして、私はそっとスカートを少し上に引いてみました。あゝその時のよろこび、……皆様はともそんな心理はわかっでは下さらないでしょう。何ともいえぬ、恍惚とした、あきらめと期待と被虐感のこもったよろこびが私の全身を駆けめぐりました。

勿論、私はスカートを全部まくりあげる程勇氣はありませんでした。が、この日の冒険は忘れられぬものとなつて、それからは大抵ノー・パントリーで外出したり登校する癖がついてしまいました。

そうした国電を舞台とした

なく私のスカートをまくりあげてしまったのです。

乗客の視線がいっせいにむき出しの私の身体に注がれました。あゝ、その時だけは私は羞恥で死ぬほどの思いでした。

こんなことがあってから、電車を利用しての冒険はきっぱり止してしまいましたが、私の露出癖は又、私の理性に逆っているんな新しい方法を考案しては、それを私に強要するのでした。私は公衆便所に入ってわざと戸を少し開いておいて用を足したり、時々、お銭湯に行つては、タオルを手に提げたまま、男湯の方を向いて立ってみたりしました。恥かしければ恥かしい程、私の楽しみは又大きいのです。そして羞恥にまっかになり乍ら、赤くなればなる程、私は興奮し、陶醉してゆくのでした。

学校に一人の若い美しい男の先生がいらっしやいます。私達はこの先生のことをお団子さんと呼んでいます。これは先生がお団子好きな所から由来したもので、本当のお名前はK先生と云います。

去年の夏休みの時、私は四人のお友達と、このK先生と一緒に、志賀高原へキャンプに

行きました。志賀高原はすばらしい高原でした。始めの一日は木戸池でボートに乗ったり、花を探したりで大はしゃぎでしたが、二日目は雨に降られてしまい、とうとう一日中テントの中で暮さねばならなくなりました。私達はトランプやお花をしたり、お昼寝をしたりしていましたが、そのうちに私の悪い癖が出て来て、私は一人で、いろんな事を空想していました。

夜になって、皆寝てしまっても私は寝つかれません。そのうちに私の慾望は理性では押さえ切れない程募って来ます。

K先生は……と見ると、安らかに毛布にくるまって眠っていらしやる様子です。私はこの優しい先生に自分の身体を見てほしい、そして出来たら、………いたゞいたら………

どんなに素晴らしいだろう、と考えました。すると胸はどき／＼して来て、もう居ても立ってもいられぬ衝動にかられてとう／＼先生をお起してしまいました。

「先生、私、おなかが痛いんです。」

私はこう出まかせを云いました。すると先生は暗い中に半身をお起しになって、

「困ったね。こんな所で、病氣されると大変だ、何かお薬のんだ?。」

「ええ。だめなの。どうしたらいいかしら。冷えたのかもしれない。」

「どの辺が痛い?。」

「下の方なんです。」

すると先生は、「暖めてあげようか?」と仰言って、私のおなかに手をお当てになりました。私は横になって先生の手の甲をそっと押さえました。先生の手のぬくみが私の身体に伝わって来ると、私の頭はじいんとしびれたようになり、もうどうなってもいいから先生に身体を見てほしいと思います。

「先生、私、全然お通じがないんです。」

と云ってしまいました。先生もさすがに当惑なさったとみえ、

「困ったね。先生は何の用意もして来なかったし……、一寸待っておいで。」

と仰言ると懐中電灯を点けて、近くのヒュッテ迄馳けて行って、イチヂク浣腸薬を一つ手に入れていら／＼しやいました。

「自分でできるね?」と先生が仰言るので、

私は、「先生、お願い。」と云うつ伏せに寝て顔を手でお／＼してしまいました。身体中の血はまるで躍り出さんばかりに次の瞬間への期待に燃えています。露出狂のクライマックスはこの一瞬にあるのではないでしょう

か。

手の間から、電灯の光が私の下半身へ廻るのを見ました。

薬液はゆっくりゆっくり注入されました。

私はその間をこんなに長く、そして楽しく感じたことはありません。昔、浣腸ごっこや、時には自分の………をしたこともありましたが、どうしてそんなものが、この時の楽しさの比になりましょう。

私の悪魔の生活のうち、これが最も楽しいそして大きな冒険でした。今でもK先生と私とは時々お話ししたりします。その時以来先生は打ちとけて、私のことを級で一番美しいとか色白だとか云って下さいますが、さすがに再びK先生にそんな大それた冒険をしようとは思いません。が、又しても次から次へと頭に浮かんで来る冒険のかずかず……。私はいけない、いけないと思いつつ、明日も又新しい冒険を求めて生きてゆくのでしよう。自分で自分が御せない私。この少女の悲しみを知って下さる方があられるでしょうか。

(終り)



## ソドミヤ小説

美

少

年

の

秘

密

山口 幸一

こうして、又機会は去ってしまった。然し雪夫は絶えず受動的立場になって、他から強制的に余儀なく、そう云う事をさせられる状態を想像した。雪夫は心の中で色んな立場の幻想をめぐらせた。

こんな事も望ましい事だった。

雪夫は少さい時に迷子になる。

そうして曲馬団に売られてしまう。早速毎日酔を飲まされては、とんぼ返りの稽古をさせられる。黒い褌を締めさせられ、上から肉シヤツを着て短いピロードのタイツをはいて舞台に出る。そうして樽抜けをしたり、ブラソコに乗ったり、網渡りをしたりする。

終って楽屋に帰ると。パンツと肉シヤツはいたむので直ぐ脱がされ、褌一つになって馬に餌をやったりする。

雪夫はかつて曲馬団で、自分と同じ位の少年のそうした姿を見掛けた事があった。

又、こんな事も想像した。

雪夫は十四、五の時に、両手が亡くなって孤児になってしまう。親戚に相撲好きの伯父がいて、其処に預けられる。

その伯父は雪夫を見て、力士の弟子入りをさせ様とする。そして何も知らぬ間に雪夫を無理に相撲取りの親方の所へ預ける。

翌日から兄弟子は、嫌がる雪夫に固い締込

みをつけさせて、ぶつかり稽古をつける。四つん這いになって仕切りの稽古をしていると兄弟子はむちで雪夫の尻をたたく。

本場所へは、毎朝五時頃、誰も見物の居ない広い寒々とした国技館の、固い土俵の上で前相撲を取らされる。

立上るや後の褌を取られて、高々と吊り出されたり、又双差しになって両褌を引かれて櫓に振られて固い土俵に真逆様に投げられたり、又土俵際で外掛をかけられ、仰向けに土俵下にもんどり打って転落し、脳天をいやと云う程打ったりする。

こんな事を想像しては、雪夫は胸をわくわ

くさせて興奮に酔うのであった。

又、雪夫は町の大きな店の坊ちゃんであった。お祭りの時に、子供御輿を担ぐ事になり紺色のハッピを着て下に赤いメリンスの褌を締め、黄色の帯を締めて町へ飛び出して行く。ハッピの前が大きく開いて、走る度に赤褌の前垂れがヒラ／＼と翻える。

家へ帰ってから足だけ洗って、その褌姿のまま御飯を食べる。

そんな情景も想像してみた。

又、雪夫は両親を早く亡くして、田舎の漁師の叔父さんに引取られる。

其処には、雪夫より二つ許り年上の十五、六の陽焼けした、逞ましい体をした少年が居る。

その子を雪夫は兄ちゃんと呼んだ。

その子は、もう大人のように白い六尺褌をしよ／＼中締めていて、裸体になると盛り上った肩の肉や、はち切れる様に光った太股の肉が逞しかった。そうして夏になると雪夫を海へ連れて行って、小船に乗せて沖へ槽出した。勿論雪夫も兄さんと同じ白褌を締めている。沖に出ると、兄さんは雪夫を抱いて、舳からいきなり海へ投げ込んだ。

雪夫の口と鼻からは水が入って、その苦しさは堪らない。危うく溺れそうになると兄さ

んは海へ飛び込

んで、雪夫の褌

の後を引き掴む

と海面に浮び上

って船に引き上

げた。そして少

し休むと、又い

やがる雪夫を抱

えて、真逆様に

海へ投げ込ん

だ。そうして、

又水面に引き上

げる。

何回も繰り返

えされている内

に雪夫はもう疲

れて兄さんの逞

ましい身体にし

っかりと抱き締

められたまゝ動

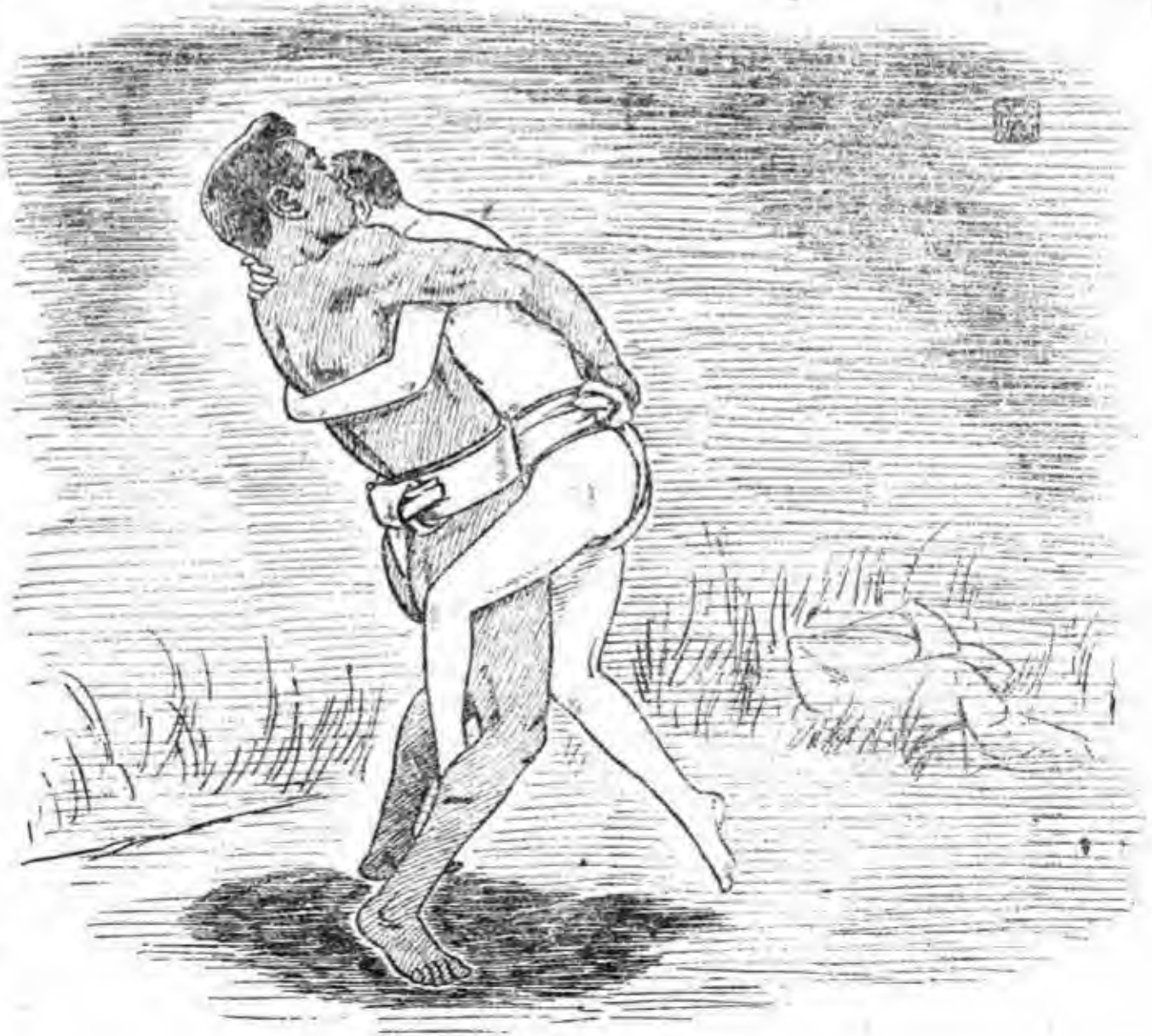
き度く無くなっ

てしまう。

毎日雪夫は、

兄さんが自分を海にさそって呉れるのを待っ

雪夫のこうした切ない幻想をよそにして浜  
或はお祭りに、相撲大会に、又は海辺の砂、





で、雪夫の対象にふさわしい美少年達は、無邪気な裸体姿を遠慮なく露出して、幸福そうに遊び戯れていた。

それは雪夫の住んでいる世界とは別の世界である様に思われた。水中で魚が何んの屈託もなしに、自由に泳ぎ廻るのを見る様であった。雪夫が何度か勇気を出して入り込もうとしても、雪夫の身体の中の耐え難い羞恥心が忽ちもたげて来ては、又雪夫だけの世界に引き戻した。所詮、陸棲動物が水中に住めないのと同様だった。

海水浴の脱衣場で、相撲大会の見物席で、お祭りの道端で、雪夫は一人溜息をつきながら、幸福な少年達を羨望していた。

雪夫はその後、小遣銭で黒いメリンスの布を七尺程買って、それを二枚に裂いて襦を二本造り時々締めていた。

然しその様な姿は他人には見せられないので、その襦を海岸の石垣に隠して置いた。

雪夫は時々一人で其処へ行き、狭い石の間に手を挿し込んで襦を取り出した。襦は湿気を含んで濡れていたが、その冷たい布を握ると雪夫は海岸の砂丘の浜茄子の林へ入り、ズボンを下して締め込むと、何喰わぬ顔をして家へ帰った。

そして翌日、学校の帰りに又其処へ寄って襦を解いて隠した。

家では風呂に入る事があるので、必ずパンツを上にはいて、素早くパンツと襦を一緒に外す様にして、母に見付からない様に工夫をした。

その内、一々取りに行くのが面倒になったので、家に持って帰り机の抽出しの下へ隠して上に本を乗せて分らない様にして置いた。又、母の居ない留守に行李の中を探し廻して、白い晒の十二尺ばかりの布を見つけ出して、それも机の抽出しに隠した。

その頃雪夫の抽出しの中には、次の様なものが隠されてあった。

白、雲齊木綿相撲用廻し、一本  
黒、モスリン七尺水泳用、三本  
白、晒六尺襦、二本  
黒、クロネコマワシ、二本  
黒、メルマン襦、二本

この内黒のメルマン襦は、下級生の美少年のものをコソソリ持って来たものである。しかも度重なる使用によって、これらの襦は大変汚れてゐた。

だから雪夫の倉庫は絶対に秘密であり、他人には見せられないものであった。

雪夫は学校から帰ると先ず抽出しをあけて見て、中に異常が無いかを確認する。

然しこの秘密の置場も、ついに母親に発見されてしまったが、母親はこれらの隠された汚れた下着を見つけて一時は驚いたが、これは単に少年らしい羞恥心から白いパンツが汚れる事を恥じて、ひそかに下に襦をしていたものと考えた。

襦そのものが、汚れた痕跡と密接な関係のある事等は、勿論知らなかった。

それにしても、どうして何時の間にこんな沢山の襦を自分で買い集めたのか、と云う事は不思議であったが、洗濯に出せないままに溜ったのだろうと解釈した。

母親は汚れた襦を丁寧に洗濯して、物干しに乾かした。

午後雪夫は学校から帰って来て、室に入って見て、あっと驚いた。

雪夫の秘密の蒐集品は綺麗に洗濯されて、アイロンをかけて、キチント畳んで置いてあるではないか。

雪夫の顔は忽ち汗潮し、羞恥心の為に死んでしまいくつなつた。

何にもかもすっかり分ってしまった。

これは雪夫にとって致命的な打撃であった

が、母親はそれ程迄に考えて居なかった。母親が室に入ってきた。

「雪夫や、汚れものは直ぐお出しなさいよ。綺麗に洗濯して、キチンとしたものを、何時もして居れば、どんなに気持ちが良いか知れないよ」

「……………」

雪夫は、只黙ってうなづくばかりだった。母には全然知られ度くなかった。それは母に全知全能で雪夫の心の中を見透かされる様な気がしたからである。

然し今度の抽出しの中の汚れ物については母は善意に解釈していた。それで雪夫が、これ以上自分の小遣をつかわない様にと、新しい白い禪を三本造って与えた。

「雪夫さん、おふん

どしは皆いたんでいるから、明日から新しいのに替えなさいね」

それから雪夫は、大っぴらに毎日白い禪をする事が公認となった。

それでもパンツを上からはく事は忘れなかった。それから、遠慮なく汚れた禪を風呂場に投げ出して置けば、翌日は竹竿に白いパ

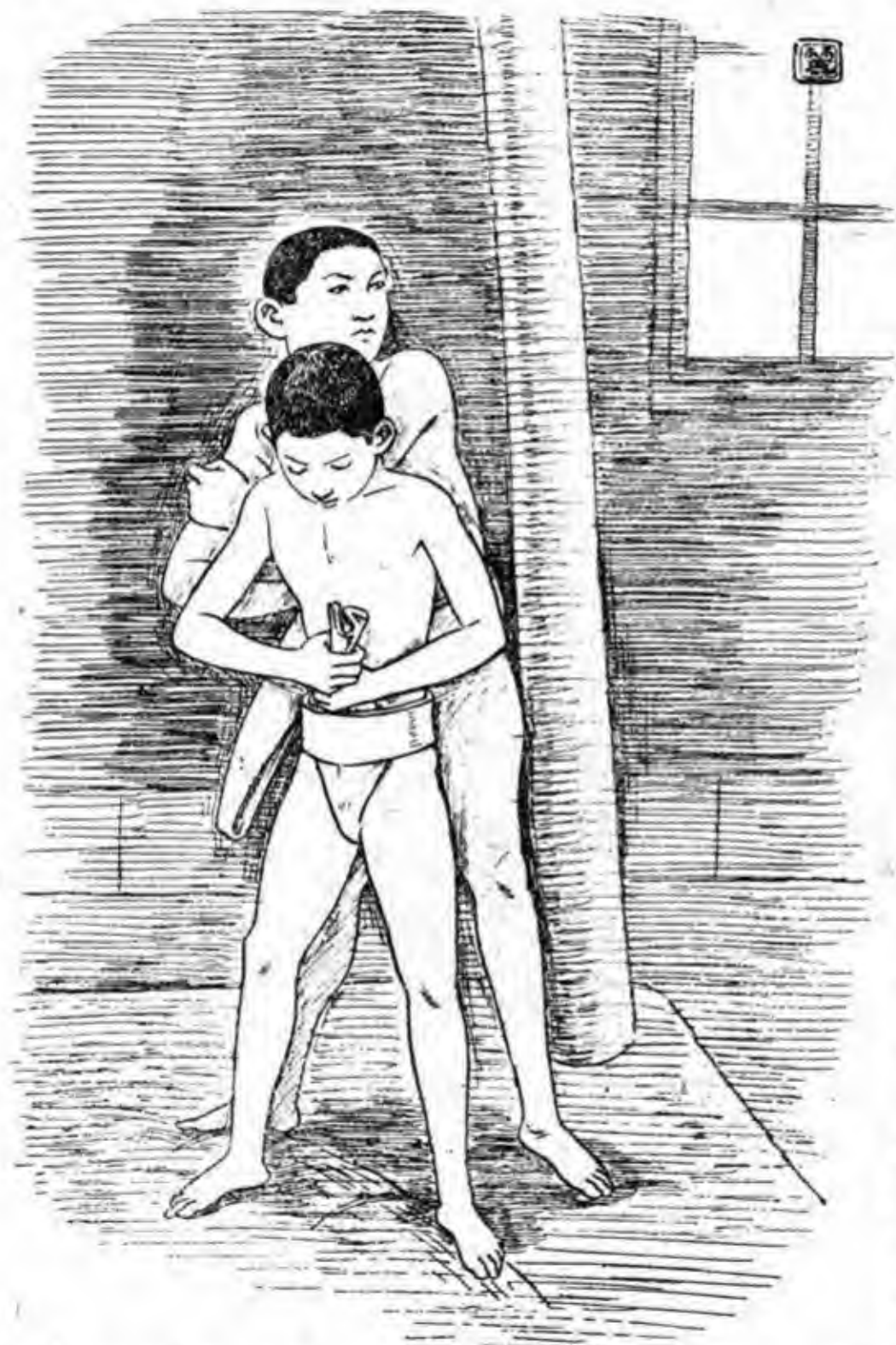
ンツと並んで、長い禪が雫を垂れてぶら下げられ、夕方にはキチンと折り畳んで雪夫の部屋に置かれてあった。

其の後、雪夫はあの固い相撲の締め込みをして、しっとりとした粘土の上に投げ転がされる時の痛いばかりの官能を思い出して、激しい衝動に駆られては、一人で夕方に家を

抜け出すのであった。

雪夫は中学二年になっていった。そうして漸く性の解決に対する懊悩とも云うべき、深い憂うつに襲われる事があった。

或る夕方、又激しい衝動にかられて、一人公園に出掛けた。ムツとする様な栗の花の香りのたゞよう森の中を過ぎて、グラウンドの陰の裏山に上って行った。其処には手頃な空地があり、粘土の





地面が丁度土俵の様に固くなっていた。

夕方なので誰一人来る事もなかった。暫らく四囲に人が居ないのを確かめると、雪夫は急いで服を脱ぐと、持って来た廻しを手際よく締め込んだ。そして跣足になって固い土の上に倒立して反対側に倒れた。又とんぼ返りや横転をやって、粘土の上に何度も身体をたきつけた。あたりは次第に夕闇が濃くなり、隅に脱いである雪夫のランニングシャツや、パンツだけが白く夕闇に浮び上っていた。

何回も転んだので、雪夫の締めている白い褌が所々粘土で汚れていた。

雪夫は裸体のまゝ木陰の草原に入って行くと、うしろの方から人の気配を感じたので振りむいた。

二十二、三才の学生服を着た青年が雪夫の裸形をみつめてにっこり微笑していた。

「角力の形を練習していたの？」

と云って、馴々しく近付いて来た。雪夫はそのまゝ横を向いて立っていた。青年は、

「僕も角力が好きで、日曜日の夕方などよく一人で学校の土俵へ行く事があるの、丁度今日もその帰りで、君の姿を見かけたものだから、さっきから君の型を見て居たんだ。僕も支度して来ているから、二人で少しやってみ

ない？」

青年は廻しを包んであるらしい風呂敷を下へ置くと、本当に服を脱ぎ始めた。そして締め込みを固く締め込んだ、逞ましい青年に手を取られて、雪夫は粘土の土俵の上に連れて行かれた。

青年は立上るなり雪夫の廻しに手をかけると、ぐっと強く雪夫の体を引きつけた。

雪夫の柔かい肌が、青年の固い腹にぐいと擦りつけられた。雪夫が堪える所を、右手を雪夫の尻の方に廻して立褌を取ると、ぐうっと引上げた。雪夫の両足が宙に浮いて両足をバタ／＼させた。

雪夫の固い廻しが股間を締めつけて、身体中がとける様な気持で一杯になった。雪夫は青年に廻しを取らせ乍ら両股を開いて、青年の腰に巻きつけた。

青年は、雪夫の身体を引きつけて置いて片手で雪夫の前袋を取ると、そこで太股を雪夫の股に入れるなり、櫓投にて軽く粘土の上へぶつけた。そして素早く飛びかゝって柔道の抑え込みの様な型にして、雪夫のゆるんだ廻しをずらした。雪夫はじっとして、青年のなすがままにさせていた。

雪夫の卒直な感じは、苦痛が三分の一、好

奇心が三分の一、快感が三分の一が、初めて経験したことに對する感じであった。

次の会う日を決めて雪夫は青年と別れた。

其の後毎月三、四回は、青年に逢った。

もし何か都合があつて行かない日等、青年は雪夫の家へ電話をかけて呼出した。

その後雪夫は、自分がされたと同じ事を、自分の様な相手を探して行おうと思った。

しかもその願いは、割合に早くかなえる事が出来た。青年と初めて会ってから数ヶ月後に、中学校の下級生で、相手にふさわしい美少年を発見した。

女の子の様に色白で、伏目勝ちなその少年は、身体つきもすらりとして、前髪をつけられ、そのまゝ昔の御小姓の様に可愛いらしかった。何んとかしてその少年に近づこうと色々考えた末、学校帰りにその子の後をこっそりつけて行って先ず家を確認した。

次の日、その子の家を訪ねた。

そして何気ない素振り、わざと知っている近所の家を探ねた。

その子は無邪気に。

「一緒に行って教えて上げよう」

と、雪夫と連れ立って、夕暮の町へ出た。その家は直ぐ分った。

雪夫は少年に微笑して別れた。少年も微笑を返した。最初の日はそれだけだった。

それから、学校の校庭で顔を会わせる時はお互いに微笑を交す様になった。

雪夫は日曜日に、少年を学校へ一人呼出して、前から考えていた角力の型を実行しようとして計画していた。

土曜日の午後、雪夫は少年に明日朝七時に校庭で、庭球をやろうと云ってきそった。

翌朝、雪夫は風呂敷に包んだ廻しを隠す様にして、テニスコートの脇の草原で待っていた。向うから少年が、白いシャツと白いズボン姿で現われた時には、胸がドキ／＼して思わずあたりを見廻した。然し、日曜の朝の校庭は、人氣が全然なく静まり返っていた。

雪夫は少年と、テニスコートにネット代用の縄を張って二、三十分打合をしたが、少年は下手で、さっぱり球が続かず面白くなかった。やがて二人は草原に寝転んで休んだ。雪夫は少年に恐る／＼話しかけた。

「君の様に身体の弱そうな者は、激しい運動で、もっと鍛えなければならぬよ」

少年は、かすかにうなずいた。

「角力とかそう云うものをやらなければいけない。君角力を本式にやった事ある？」

少年は首を横に振った。

「君、角力の型だけ教えてやるから、一寸やってみないか？」

雪夫はつとめて冷静に言った積りだが、声が少しかすれていた。

少年の目には明らかに当惑の色が浮んだが雪夫は強引に、

「誰も見ていないから、一寸やってみよう」と無理に少年を引張って、裏山に連れ込んだ。

其処は、柔道場と裏山との間にはさまれたコの字型の空地で、粘土で築いた土俵が半分こわれたまゝで残って居た。

雪夫は、光す上衣を脱ぎズボンを外すと、ズツクの廻しを取り出して締め始めた。

少年は明らかに狼狽したらしい声で、  
「ほんとに裸になってやるんですか？ この儘で良いんでしょう」

と云って、上衣だけ脱いでズボンの裾をまくり上げ、跣足になって雪夫の側へやって来たので、雪夫は押えつける様な口調で、

「廻しはあるから、君も裸になって本式にやり給え」

と云った。

少年の廻しは、巾一尺長さ十二尺のキヤン

パスで、四ツ折に畳んであるから、腰に廻わすと相当ぎ／＼しりと締まる。

嫌がる少年の腕をとらえて、無理矢理にズボンをとって、下にはいている白いパンツも脱がせた。

丸いラッキョウを二つ並べた様な尻を此方に向けてじっとして居る。

雪夫は、厚い廻しを尻から差し入れて端を前に出して、

「そこをしっかりと持って、押えている」

と云って、一端を尻の割れ目に充分喰い込ませて腰に廻し、前からぐる／＼三、四回廻して最後に一端を二つ折りにして全部の裾下を通すと、力をこめてうーんと締め上げた。少年はつま先立ちをして、土俵の柱につかまって堪えた。

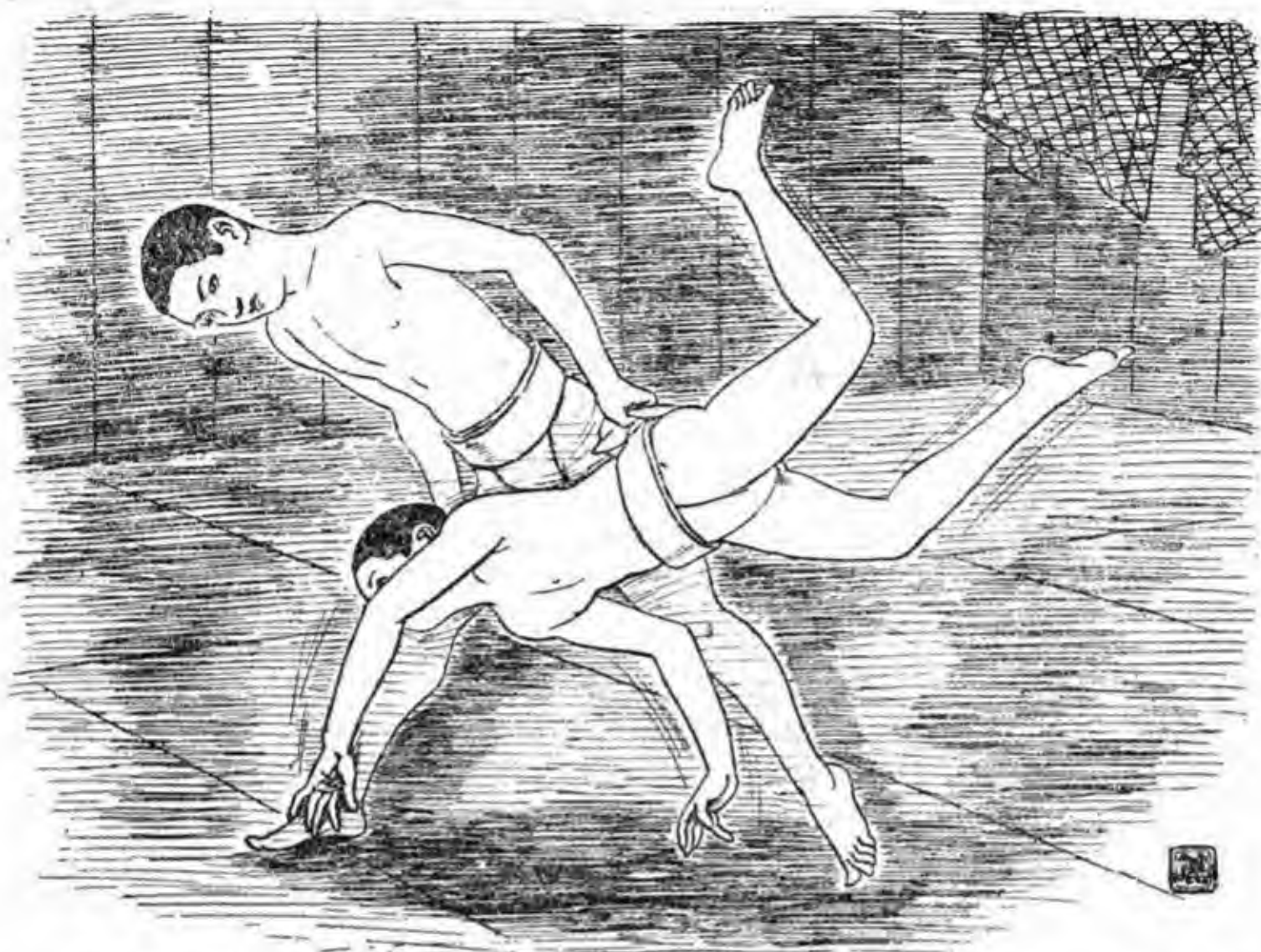
雪夫は少年を土俵に引張り上げると、直ぐ廻しを引きつけて高々と吊り出した。

少年は足をバタ／＼さしたが、両裾を引かれて居るので何うにも仕方ない。

二度目は立上ると、直ぐに後裾をぐい／＼と引いて、上手投や下手投を試みた。

少年の白い肌と白い裾は、すぐに粘土で汚れた。もう沢山と云う少年を尚も土俵へ引張り上げては、何度も散々にぶつつけたり吊





し上げたりした。

雪夫と少年は、襦姿の儘で服をかゝえて柔道場の更衣室に入った。道場脇の小さな部屋には、汗くさい柔道衣や帯がずらっと掛けてあり、昼でもうす暗い陰気な部屋だった。

少年が中へ入ると雪夫は入口を閉めた。

汗くさい臭いが畳にしみ込んでいる様だった。雪夫はいきなり少年の後襟を取ると、内股で畳の上へ転がした。

純真無邪気な少年が、一度性の神秘にふれると、娼婦の様に大胆になる事は不思議であった。

雪夫は、月に五、

六回少年を呼び出した。一方三、四回は前の青年の為に雪夫は呼出されなければならなかった。その何れの場合でも、雪夫は充分満足する事が出来た、雪夫と少年の関係は一年余り続いたが、雪夫が転校する時、名残りを惜しんで別れたきりになってしまった。

丁度七月頃の暑い頃であった。

別れに行ったら、少年は白い寝間着を着て戸外に出て来た。前のはだけた裾から白いパンツがチラ／＼と刺戟的に見える。固く手を握り合って別れて、しばらく行って振返るとまだ戸外に立っていた。

月のある晩で、あたりはボーンと明るかったが、少年の白い浴衣が浮き出た様に遠く迄見えていた。

(終)

〔伝言板〕 ○坂口潤子さんへ、貴女の希望されるような浣腸のフオートが出来ましたので局へ行かれる日、御通知下されば送ります。委細はその時に。○東京の白頭巾氏へ、貴方は編集部の能力や編集長の手腕を大分買いかぶっていられるようです、貴方の考えておられるような事を事実とすれば、大変な力量家という事になります、住所氏名を明記下されは責任ある回答をいたしましょう。



# 被 虐 哀 歡

真 金 鍛 次 郎

縛り絵や、責めの内容をちょっぴり盛った奇譚クラブを、ある下町の本屋で発見したのは何年程前だっただろうか。未だその頃は内容等も今の様に充実したものではなく、形も大きくて、二つ折りにしてポケットに入れて歩くのも困難な程でした。でも、この本を探し当てたと云う事が非常に嬉しくて、毎日他人に隠れては、繰り返しよく読んでいたものです。

其の他に色々とこの様な雑誌も求めましたが、私の求めている責絵は

わずか二三枚だったり、見るからに貧弱なものだったりして、結局奇譚クラブばかりを漁り歩く様になってしまいました。特に気に入った責め絵があると切り抜いてブックに張り付けたり切り取ったりして、何時しか机の抽出しの中は、そうしたもので一杯に成ってしまいました。他人に見られるのを防ぐ為に錠を取り付けて、外出には忘れず錠をかけ、帰って来るとコッソリと開けては、飽きずによく眺めたものです。

本屋等へ行っても奇譚クラブが置かれてあると、あたりの客や店主の顔等を窺ってから恐る／＼手に取って見る位でした。店番が若い女の子だったりすると尚の事、具合が悪くて、他の本を探す振りをして買わずに帰って来た事もあった位です。その癖其の儘、真直ぐに帰る事も出来ず、売切れて了うのではなからうかと心配し乍ら、店の前を何度も行ったり来たりしたものでした。でも今では、机上の本立に奇譚クラブを月順に並べては楽しんでいますが、其の頃は未だ自分がそんな変った趣味を持っていたと云う事を、他人に知られるのが恥しくてならなかったのです。そうした想い出は今では苦笑の種となっていますが、私がこれから申し上げたいの





は、そうした悲しい性の持主である私が、異常な性の原因となった環境や、何時かはそれが正常に戻るかも知れないと思い乍らも、益々深みへ入ってしまった懊悩の過程とを、此処にかいつまんで申し上げて見たいと思います。

然し、それは大変むずかしい事です。何から手を付けたら良いのか、どんな風に書き始めたら良いのか、私には解りません。毎号御誌を拝読させて頂いて居りますと、多くの人々が、流暢な文で告白や体験等を

発表して居られますが、そんな風に書く才能が私にあるとは思われませんし、それらの方々と比べられては問題にならないと思います。が、何卒最後迄読んで頂ければ幸いと存じます。

それは忘れもしない、昭和十七年の春でした。横須賀の海軍工廠に徴用工として召されて、池上の寄宿舎に収容された時の事です。

(御承知の方もありますが、池上は横須賀より一里位の所にあります) 寄宿舎は五部に分け、私達は第四宿舎に収容されました。約二万人程の工員が、毎朝通勤するので、通等等は浅草の観音様の様に賑やかなものでした。

其の頃は軍人が我物顔に、大道を闊歩していた頃でしたので、私達工員に対する態度は極めて傲慢、高圧的なもので、少しでも怠けたり規律に反した行動をすれば、容赦なく制裁を加えると云う有様でした。

私達は毎日の様に、そうした威圧に戦々兢兢とし乍ら、約四年の長い間、工廠に通勤していたのです。寄宿舎では毎日の様に、誰かが廊下に立たされ、風を切って唸る竹刀や、肉を打つ不気味な響や、その度に上る悲痛な悲鳴等が、部屋隅の隅に迄聞え、又誰かやら

れているなと思ひ乍らも、誰も廊下の窓から覗く勇氣等なく、部屋の戸を閉め切つて震えているのでした。

大抵は、一部屋に十人乃至十五人位でしたが、同室の一人の誰か不仕末をして私刑を

受ける時には、連帶責任として、全員が廊下に何時間も立たされた事もありました。そうした恐ろしい空気の途中で、不安な毎日を過ごしていました或る日、私も遂に、その身の毛もよだつ様な私刑を受けなければならない破

目に陥つたのです。

いつ頃の事だったか判然とした記憶がありませんが、何でも三月の雛祭りか、五月の節句か、どちらかだった事を微かに憶えています。市中から工廠へ通っている知人の家で、

あんころ餅を御馳走になりました。

「寮に帰ったらこんなのは喰えないだろうから、たくさんおがり」

と勧められるまゝに、つい喰へ過ぎてしまったのです。総てが配給の頃であり、甘いものに飢えていたので、無理のない事だったので。宿舎に帰ってから咽喉が激しくかわいたので、生水をがぶぐと飲んだのですが、それがいけなかつたのでしよう。寝てから暫く経つと胃袋がごろ／＼と鳴り出し、気分が悪くなつて仲々寝付く事が出来ません。はなはだ尾籠な話ですが、明け方に二、三回下痢がありました。

然し、下痢位では休む訳に





もゆかず、腹がへっては作業にも差支えらると思ひ、食事普通の様に済まして出かけましたが、それが益々良くなかったとみえ、途中から下腹がしる様に激しく痛み出したのです。我慢して無理に暫く歩いてゆきましたが知人の家の前迄来た時はもうどうにも我慢出来なく、這う様にして家の中に入り、藥を貰って飲み蒲団を敷いて貰って横になると幾分か楽になったので、その儘うつゝと眠ってしまいました。

粥でもつくって上げましよう云う家の人の親切を辞退して、午後になってふら／＼し乍ら寮に帰って来ました。その夜大分良かったので、皆と共に夕食を始め様としていた時、私は寮長の呼び出しを受けたのです。多少の不安が伴いましたが、訳を話せばわかって貰える位に考えて寮長室に入りました。入るなり癪高い怒声がとんで来たのです。

「飯を喰って了う迄、其処に立っておれ」

寮長、副寮長は直立不動で立っている私には何の関心もないかの様に、賑やかに笑ったり世間話に興じたりして食事を終えた後、私の方に顔だけ向けると、

「どこで遊んで来た？」

と聞くのです。私は空腹を我慢し乍ら、お

ど／＼と昨日からの様子を話しました。

「何に、食い過ぎて腹が痛いから休んだ？よくもそんな事をぬけ／＼と云えるな」

こんな風に、物事を一方的に意地悪く解釈して大声で怒鳴った挙句、今夜は少し暇だから、と言いつつ、私を隣りの空室へ引きずって行きました。その時、私には総てが解りました。不断から恐れていた竹箆や竹刀の前に、身を晒さなければならぬ悲しい破目に陥ったのです。心の中でもう駄目だと観念していましたが、これから自分の肉体に加えられる暴力の事を思うと、もう齒の根も合わぬ程の不安と恐怖のためがた／＼慄え出してくるのを止める事が出来ませんでした、部屋は粗末な板敷でした。

「お前の様な生ずる奴は、今後のみせしめの為に徹底的にヤキを入れてやる」

と言って着ているものを残らず全部剥ぎ取られ、手は後手に締めあげられ、足首も縛られて坐らせられると、竹刀と竹の笞で交るがわる前後から叩かれました。苦痛の為、俯伏せば背中や臀部を。仰向に倒れれば大腿や脛を息づく暇もない位続け様に叩かれ、挙句の果てに元の様に坐れと云うのです。少しでも愚図／＼していると情容赦なく、竹刀がとん

で来ますので、苦痛を逃れ度い一心から不由な体をくねらせて坐ろうとするのですが、叩かれた所や、手首や足首に食い込んだ縄が動く度に、きゅっと喰い込み、仲々思う様に起きる事すら出来ません。

それでも俯伏せに倒れているのですから、次の笞がとんで来ないうちに何んとか起き様と思ひ、あごで上半身を支え、両足に力を入れて縮む様にして見るのですが、上半身が重いのと足首が縛られている為、両膝が殆んど開かず、すぐ、ごろりと転ってしまいます。すると背中と云わず尻と云わず、所嫌わず竹箆や竹刀がとんで来ます。激しい一撃を受ける。と齒を食いしばって耐え様とするのですが、その痛みが消え去らぬうちに次々と叩かれるので、どうしても呻き声を出さずに居られなくなります。そしてそれが何時しか、悲鳴に変わって了うのです。声でない声とはこんなのを云うのでしょうか。

始めのうちは顔だけ二人の方に向けて、どこを叩かれるか、ぼ／＼見当をつけて、未然にこれを避け様としました。いや、避けられなものは解り切っているのですが少しでも苦痛を和らげ様として、筋肉が盛りあがる位、硬く力んで笞や竹刀を待つのです。はかない悲

しい努力です。

「起きますから坐りますから待って下さい」  
と涙声で、幾度かのけぞり乍ら哀願した事  
でしょう。

彼等は、汗にまみれて苦しんでいる私の姿  
を舐める様に笑しげに眺め乍ら面白半分に叩  
き続け、ようやく笛も静まり、呻き乍らもほ  
っと激しく息つく間もなく、頭の上で「起き  
ろ」と怒鳴る音がしました。

私は半ば夢中で起き様として、もがいたの  
ですが板の間の上を徒らに這い廻るだけでし  
た。縄尻を掴んで引き起され、無理矢理に坐  
らせられたのですが、不自由と苦痛の為、と  
もすれば倒れそうになります。全身がびっし  
りと汗で濡れ、背中を伝わる汗の玉を感じ  
乍ら、薄目を開けて二人の方を見ました。

「こいつ、様子を窺ってやがる」

と、烈しく胸を蹴られたので後様にのけぞ  
ると、後頭部を厭と云う程板の間にぶっつけ  
て、暫くは声も出ない位でした。倒れては坐  
らせられ、俯伏せば引き起され、幾度も同じ  
事を繰り返している間、何度坐らせられても  
一人で坐って居る気力がなくなり、直ぐぐっ  
たりと倒れて了うのです。それでも彼等は、  
手を休めずに責めたてるので、部屋中を泣き

叫び乍ら、転がり廻りました。

未だ其の頃は、体から流れる汗の為、板が  
ぬる／＼と濡れてもがくたびに、つる／＼滑  
るのを意識していましたが、其の内だん／＼  
と、目は焦点を失い、縛られている手足の感  
覚もなくなり、叩かれるたびに痛みが筋肉を  
通り越して、頭の真髄に響いて来る様になっ  
た頃は、只上半身をのけぞらして泣き叫ぶだ  
けでした。何を叫んでいるのか、自分でも解  
らず、この儘死んで了うのではないかと思わ  
れる程苦しいものでした。其の内気絶したの  
でしょう。何も解らなくなってしまいました。

——たゞ一日休んだ位で、こんな酷いこと  
をされる理由があるのでしょいか、いや、理  
由などよりも、己の職権を笠にサジスチック  
な本能を満たしたものとしか思われません。  
然もいつも平気で、こんな恐ろしい事をやっ  
ていたのです。三十棟あまりもあった寮には  
どの寮にも一人や二人は、こんな犠牲者が居  
ました。

それが職権を持った寮長、副寮長に決って  
いました。私の寮の副寮長などは、赤い房の  
ついた節の多い細い竹の笥を、特別に用意し  
て、これ見よがしに腰に下げている有様でし  
た。

意識が朦朧とした時間が暫く続いた様に思

われ、気がついて見ると元の処に転がされて  
いました。バケツが横に置いてあったのは、  
水でもかけられたのでしょうか、副寮長が太  
いロープを持って入って来ました。新しい恐  
怖と苦痛に戦き乍ら、又なにか始めるのかと  
思っていると、縛られた足首にロープを通し  
一方の端を天井の梁に掛けて、二人でグイ  
／＼と引張るのです。滑車でもあれば訳なく  
する／＼と上がるのでしょいうが、真四角な  
梁のためロープが仲々思う様に滑らないと  
みえて、副寮長は、私の足首を持ちあげる様  
にするのです。私は身体をねじ曲げて悲しい  
抵抗を試みましたが、次第次第に吊り上げ  
られてゆきます。尻が離れ、縛られた後手で  
必死に体重を支え様としたのですが、それも  
遂に床板から離れた時、急に強烈な痛みが足  
首を襲い、抜けて了うのかと思われた程でし  
た。自分の体重がこんなに重いとは、その時  
迄全然気がつきませんでした。

大腿部、臀部と、交互に何か怒鳴り乍ら叩  
くのです。大腿部や胸など前の方を叩かれた  
時は、顔が膝につくのかと思われる程、くの  
字に曲げ、臀部や後股などを叩かれた時は、  
真直ぐに伸ばして絶叫しました。其の度に身



体はくるくると廻り、全身から流れ出る汗が頭の方へ下って来る為、目もあけていられず程なく又気を失ってしまいました。目の前に真赤なものがバアツと拡がった様に感じて、苦しいと云うよりも夢の世界をさまよっている様な、爽快な状態が暫く続きました。私が責められる事に通常と異った楽しい世界を知り得たのは、実にこの時だったのです。

私はこの時、あゝ死んで見たいなアと思いました。この様な爽快な状態がクライマックスに到着した時が死である様に思われました。今でもそう考えています。学問的な事は解りませんが実際の死は非常に苦しいものかも知れませんが、毎日の様に幾度となくそんな錯覚に陥るのです。桃源境を追遙する様な爽快な気分は、氣絶した後、薄れた意識がだんく恢復して正常にかえる時も、同じ様に堪能する事が出来ました。

然し、意識が普通の状態に蘇った時は流石に苦しく、知ら

ぬ間に運ばれて来た自分の部屋で、原形をとめぬ迄にブク／＼と腫れあがった臀部や腿などを、ソオツと撫でて見ては、ツキン／＼と頭の中迄、響いて来る痛さに、寝返りを打つ事も出来ずに、身体全体がバラ／＼に壊されて了った様な氣持に成りました。其のうち朝が来しました。五時の点呼で総員

が廊下に並んだ時、起きる事も出来ず、床の中で呻いていました。五体は熱と痛みの為で吐気さえ伴って、如何したら良いか解らぬ程苦しかったのです。他の部屋の点呼を済ませた寮長は、私の部屋へつか／＼と入って来て私の枕辺に立つと、「神聖な点呼に何故起きないか」と言うのですが、弁解する氣力さえ



ありませんでした。神聖な点呼、神聖、真正どちらの字を書くのだろうか、次にどんな事をされるかも解らないと私は苦しい息の下で、ぼんやりとこんな事を考えていたのです。

「貴様、何故返事をせんか、生ずる奴だ」  
再びこの声が響いて来た時、私はもう捨鉢でした。

「痛くて起きられません」  
「何、痛い、触った位で痛いのか」

昨夜の叩いたり縛ったりしたのは、触った事になるのでしようか。毛布の端に手をかけてパツと剥がれた時、急に焼けつく様な激しい痛みが下半身を襲って来ました。出血したものが熱のため乾いて所々毛布にこびりついていたものとみえます。その痛みで前夜の恐ろしい有様をまざまざと思い出しました。

それで此の儘でいればまたあの様にされると思い、慌てゝ半身を起こしかけた時、苦痛に蒸れた肌の匂いと共に、其処に横たわっている二本の足が目に入りました。どうも黒く変色した打撲の痕が無数に交叉し、内出血した所が各所に出来て、足の形さえも元の形を保っているものは一本としてなく、醜く腫れ上って所々血がこびりついていました。満足な

所と云えば足の裏位のものだったでしょう。

無惨に変貌した自分の下半身を見た時、新たな不安と恐怖心とが湧いて来て、元の通りになるだろうか、この儘、癒らなかったらどうしよう。などと考えると怖ろしくなってきたのです。私は此の時程、自分が情ない無価値な者に思われた事はありません。

こんな風に書けば、相当長い時間が経った様に思われるかも知れませんが、毛布を剥がれてから次の声がとんで来る迄のほんの短い間に、これだけの事を考えたのです。

「ぐずぐずせずに立て」

と言う次の声がとんで来た時、私はもうどうにでもなれと云う自暴自棄な気になっていました。と云うよりも、どんな事にも抵抗する事が出来ないものと諦めていたと言った方が良いかも知れません。二、三度位よろよろとよろけたでしょうか、兎に角ようやく立たした時は、足が棒になった様に思われ、眩暈がして長い間立ってられない有様でした。只でさえ二度も食事を抜けば大抵はふらふらするものです。まして此の時の私が、どの程度疲労していたかを想像してみてください。服を着る事も許されず、皆が食事を済ませて出勤する迄、その儘廊下に立たされていました。

時々膝の力が抜けて倒れそうになると、廊下の窓に縋りついて頑張りました。皆が横眼で眺め乍ら前をそろそろ通って行く時も、恥しいなどと云う気持はなく、脂汗をたらたら流し乍ら辛うじて懸命に身を支えている有様でした。誰も居なくなった廊下の窓に必死で縋りついている姿は、今想い出しても多分にマゾヒスティックな感情を咬ります。

寮生の殆んどが出動して暫く経つと、二人は又私の所へやって来ました。その浅ましい私の姿を見るなり何か怒鳴っている様でしたが、疲労し切った私の耳には判然と聞きとれません。一人は両手を振って掴み、一人は竹の笥で尻を突き乍ら、無理矢理私を引きずって行くのです。総ての抵抗力を失った私はよろよろめき乍ら、引きずられて行くより外に方法がなかったのです。

再び空室に入れられて後手に縛られると、足の指がや々と床につく位に吊されたのです。が前よりは幾らか楽な様に感じました。只体重の殆んどが胸に廻された縄にかゝるので呼吸が非常に困難だった事を記憶しています。「お前のような怠け者は半殺しにしてやる。海軍は一人や二人の人間位、診断書の書き方で如何にでもなるんだ」



と言いつつ、やっとな体重を支えている私の足を、時々掻きさらうのです。其の度に身体がゆれ胸や手足が、ちぎれる様に痛みます。不自由な足をようやく元の所へ戻してやっとな爪先で支えれば、又掻きさらわれ、殆んど息づく暇もない位でした。然し幾ら払われても元の様に足を直さなければ胸が圧迫されて苦しいのです。非常な努力をしてようやく元に戻せば、こんどは左右から竹刀や細竹で甲と云わず裸と云わず、所嫌わず叩きつけられ、私は其の度に打たれた足を片方ずつ持ち上げて絶叫したのですが、其の間胸や手足の感覚は何時しかなくなり、幾ら叩かれても足は伸ばしっぱなしで、持ちあげる気力もなくなりました。目は何時しか焦点を失い、尾籠な話ですが小便は洩らすし、口から何か吐いた様でした。御誌等に、責められている女性がなまめかしい姿で苦悶をしている絵がよく出ていますが、実際にはどんな綺麗な人でも思い切った責められた時には、あんななまめかしいものではないです。それは筆舌に表わせないむごたらしいものです。

その時は、この儘殺されて了うのだ、と半ば諦めた位でした。そのうち胸が一層苦しくなり、同時に足もとが沈んで行く様な気が

しました。吊されたとみえて、ぐる／＼廻るのが焦点を失った目にも意識され、其の頃から体に食い込んだ縄の痛みが、何んとかなく快く感じられる様になりました。何かこの世の出来事ではない様なうっとりとした夢の様な心持になって、それでいて矢張りうめき続けていたのです。

其の日は続けざまに責められてから二度も意識を失い、二度目には自室に連れ戻されてからやっとな気がついた位でした。ずきん／＼と頭の中迄響いて来る痛みに、ふと気づいて見ると紫に腫れた所を、又叩かれたのか、半身はぶく／＼と血が吹き出し、腹や胸、手首

も、足首等は縄や竹刀のあとで元の皮膚の色もなく、これがもと通りになるだろうかと変り果てた姿につく／＼情なくなるのでした。然しそれにも増して私の脳裡に判然と焼きついてるものは、気絶する瞬間と意識が蘇る瞬間に感じた相当長い間味わった身も心もとろける様な恍惚感でした。激しく責められて気絶する度に、益々その度合が深まって行った事を判然と感ずる様になりました。前後を忘れる程の激しい苦痛の衝動が、官能を刺激して、得も云われぬ絶頂感に到達すると云う事に忽然と思ひ至ったのです。

(未完)

## と真のアイデアを募る 絵写

本誌に発表する口絵や(サジマゾ切腹等)や代理部の分譲写真、或はアルバム、画帳、等について、こういった構図やポーズ、又は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら何卒御遠慮なく、編集部宛御申越し下さい。貴方の考案されたアイデアによって、誌上を飾り、又は分譲品中に加えたいと思います。採用の分並に優秀なる企画に對しましては、写真又は画稿を差し上げます。詳細なる説明の外、必ず略面若しくは説明図を添えて下さるよう御願ひ致します。(企画係)

【読者通信】をお寄せ下さい。誌面の拡張に伴い読者の声を大幅に掲載したいと思ひますので従来寄せられました、切腹通信、浣腸通信、そどみや通信の外サド・マゾは勿論の事、女装マニア、レスボス、フェチジズム、身体各部の狂崇、等々について、他人には話せぬような事柄でもKKグループの間では、誰に気がねする事なく、愉快に話し合う事が出来ます

(読者係)

# 切腹研究夜話

(六)

中 康 弘 通

## ——その歴史と文学への影響——

### ——明治の小説(一)——

少しづつ忘れかけていた明治文学史のおさらいも、久しぶりに寝た間の仕事であった。古書肆の目録を見るに付けても、はて、此の小説は何んなものか、誰だったっけ、などと乏しい記憶の抽出しを開けてみるのだが、哀れ中味のカードの文字が、はや色褪せて、……一寸／＼消えている。記憶はインクより淡いに見える。

そこで今度は忘れないためにも、必要の有りそうな小説の一部を、ここに書き止め

ておきたい。諸君には余り面白くないだろうが文献道楽を、そこはお馴染み甲斐に許して頂きたい。詳しい内容は後日入手した時にでも又御紹介申上げる。

明治文学史の初期は、江戸文学の余瀾的継承期であり、合巻ものの草双紙が持て囃されている此の時代、西南戦争が落着く迄は、所謂近代文学の萌芽すら見えず、専ら戯作者気取りで毒婦もの、お家騒動もの芝居噺の焼直しなどが、流布されていた、大抵新聞小説の始まりというのが、今でいうニユースストーリー的な雑報記事の潤色

したもので、高橋於伝、夜嵐於絹なんというのが、一世を風靡したものとみえる。

前説は是くらいにして、草双紙の名高いものから、切腹を扱うものだけ年代順に書き抜いてみよう。

まず明治九年刊「春雨文庫」は松村春輔の著作、岩亀楼喜遊を描く由、但し切腹説を取っているか否かは未見に付、不明である。尚此の人の八年刊「近世桜田紀聞」は勿論のこと、「春雨日記」(十三年)「蜀魂雲井一声」(十六年)も同様維新に絡む忠臣義士烈婦貞女を描いたものというから



夫々に面白そうである。「娘水滸伝」というのもある。

十一年刊「赤松満祐梅白簾」は武田交来（交来）の作。足利將軍弑道の史実に基いて書いたものと思われる。「嘉吉記」辺りが出典であろう。

同じく交来（交来）に十三年刊「星月夜見聞実記」がある。

是は鎌倉幕府の成立から元弘の乱までを書いたものである。「吾妻鑑」「北条九代記」等が典拠であろう。三浦、畠山、和田等の豪族の滅亡が興味を魅くはずである。

同年の「冠松真土夜暴動」は泉鏡花の処女作「冠弥左衛門」の参考になったものと思う。是に就ては後に触れる。十五年の「黒白論織分博多」は黒田騒動を描くもの。以上が交来（交来）の主な著作である。

十二年二月二十三日の事



件を写したものであるという柳水亭種清「五人殲苦魔物語」は、旗本上りの主人が妾狂いに家産を傾けたため、忠義一徹の家臣が妾を始め佞人を切り、遂に主人まで斬殺、自分も自刃を遂げた話。

十四年刊の久保田彦作「荒磯割烹鯉腸」

は八代目団十郎が、大阪出演に際して義理と人情の板挟みとなり、遂に切腹した事件を脚色したもの。つい此の間、団十郎祭に歌舞伎ファンを集めたのは、此の八代目と其の後を継いだ九代目の追善だったのである。

十六年刊の二世為永春水「栗原百介伝」は丹後宮津藩士栗原百介が、孤忠苦辛の末事成らずして暮夜潜かに寺院に入り、一文字腹を切つて世を畢える物語。同年同じ題で古川魁雷も書いている。

十七年刊柳葉亭華彦「実説名画血達磨」は「細川血達磨」で名高い稗史小説、賤のおだまき」と併称される武士と小姓の恋物語である。是に就ても追て詳しく述べる。

此の他、多数の作者によって此の種の読物が書かれている。然し理在原本の入

手は困難で一々当つてみないと迂闊に筆には出来ないで、是くらいで筆を擱く。

明治も二十年代に入ると、是までの言わば実録講談調の読物とは別に、歴史小説が書かれ始める。主な作品を挙げたいのだが殆ど読んでいないので、ざっと作家名だけ挙げておくことにする。須藤南翠、饗庭篁村、山田美妙、尾崎紅葉、矢崎嵯峨の屋、幸田露伴、齊藤緑雨、村上(ちぬの浦)浪六、村井弦齋、遅塚麗水、江見水蔭、大塚仰夫子、宇田川文海、依田学海、宮崎三昧、福地桜痴、塚原波柿園、碧瑠璃園、渡辺霞亭、半井桃水、三品蘭溪、高山樗牛、小杉天外、森鷗外以上諸氏が大体明治の歴史小説界を代表していたと思う。然し筆者自身読んだものが余りにも少いので、未入手のものに就ては、極く簡単な紹介に止める。

美妙のものでは、既に紹介した「二郎経高」の他「太郎定綱」がある。北条氏に睨まれた定綱に落度が無いので、定綱の子定重が柏阪の遊女のことから延暦寺の僧徒と悶着したのを機に、定重は切腹させられるという筋だという。浪六に就ては後に述べる。

紅葉の作品で切腹を扱うものは是も先に紹介した「色ざんげ」の他「関東五郎」がある。露伴には「奇男児」是も紹介済。

緑雨には「弓矢神」がある。故主の遺姫を奉じて復讐を誓う武者が、事ならず遂に切腹して果てる物語である。

弦齋の代表作「桜の御所」は或る意味で筆者少年時代の最愛読書といえよう。私事に亘って恐れ入るが、筆者の少年時代、最も愛読した小説は、ドストエフスキーの「虐げられし人人」、ジイドの「狭き門」、そして此の「桜の御所」であつた。此の珍妙な取り合せが今日に至って尚、雑然と読み集め、雑然と書き蓄める癖を止めている由来であろうか。

所謂青春前期に入って、鏡花の「照葉狂言」を愛好するまで、筆者は「桜の御所」を忘れることは出来なかつた。美しく而も優しさと雄々しさを兼ねた小桜姫の俤は、当時の筆者の恋であつたかも知れないと思うのである。

即ち、相州三浦の豪族三浦家が、北条早雲に滅される物語で、三浦荒次郎義意と、父が北条氏に頼った故に苦しむ小桜姫との

悲恋は、二人共に美しく勇ましい丈夫丈夫の組み合せだけに筆者の感傷を唆った。

荒次郎を助けるために、彼女だけが知っている間道を早雲に教え而も荒次郎を救う途無しと知つた小桜姫は、自刃の仕度をしている荒次郎に会い、不覚をわびた上、彼の面前で咽喉を突いて果てるのである。切腹は荒次郎の父のそれがあるだけだが、明治歴史小説の代表作として、看過しがたく、こゝに書き止めた。

鷗外の「阿部一族」「興津弥五右衛門の遺書」は、知らぬ人が少いであろう。

樗牛の「滝口入道」も同様。主人公の若さは恋、出家、自刃と三つの事件を通じて淡い夢のような甘美さを伝えずにはおかない。

先日NHKで榎村治子さんが朗読して居られたが(「私の本箱」)、終末近く、はらかききりて死せるひとりの僧ありと、「かききりて」の始めの「キ」を軽く発音していたのは、耳に美しく滑らかであつたことを附記しておこう。青春の古典の一つとして、夢幻的な美文にふさわしい名朗読であつたと思うからである。



麗水には「蝦夷大王」がある。神威古潭の総て名きりむかくるが、アイヌ独立を計り事破れ、松前勢と戦つて立腹を切る、という筋だそうである。

さて、いよいよ浪六だが、今回は「奴の小万」を紹介しよう。少し長いが……

ヒロイン於雪は、浪華長堀切つての名家豪商木津屋八代の当主宗兵衛と、妻お定の間に、玲瓏珠の如き一粒種、宗兵衛が京島原の傾城薄雪大夫に迷い、遂に家に入れて今は於浦と名乗る莫連女と二人で、日夜の責折檻にお定は入水、於雪はお定の言付け通り乳母の許に身を寄せた。

さて傾いた家運を思わず、一定残る家郎を金に替えた、その金さえ於浦に盗まれて宗兵衛が初めて悔いの臍を噛んだ時、於雪は乳母の家にも居辛くて、行商の手伝い、たまたま貧に苦しむ母子に恵んだ金が仇となって、強慾の無頼漢を鎌で斬殺する羽目に陥つた。

哀れ十三才の秋、於雪牢死の張出が大阪は松屋町の牢獄に見えたのは、寛保元年九月十八日のことであつた。

四年すぎた。こゝに大阪城代松平伯耆守

が召使い万というは於雪の後身、

年は十七、うまれて柔和の美形である。

と、一夜、九つすぎて寝衣に寛ぎ小机に書読み更かす於万の部屋、障子を開けた一人、……高窗の上、白紙に載せた懐剣へ手を伸ばす於万の眼に、姿を現したは御尾従頭の美男、寛小太郎、二十一才。深夜に男が部屋に在り、と聞かれては迷惑と、於万の詰るのを、生命かけて差上げた艶書、おさげすみあるも致方なし、浅ましき小太郎と我さえ呆れ果てると述懐した小太郎は

たゞこの上は、神もつて恋でない、みだらでない、平生に召した肌着一枚が所望、せめて死出の心遣り、それを敷いてみごと腹一文字、のちのちまでも伯耆守が藩中の、陽腐った武士の手本を残しておく覚悟。と成らぬ恋の苦しみを訴えるのであつた。

於万は、それほどまでの御心としたは万の深い罪、と涙を浮かべつつ、「思召し嬉しう存じながら仔細あつて一生殿御は、」と母の戒め故の堅い決心を述べるのであつた。

時しも廊下に当って人の足音。於万は、



あわてて衣桁の衣を彼に着せかけるのであった。情けの衣の重み、小太郎の、骨も砕けむずる一瞬である。

敵とあらば眼に鬼神も無き小太郎も、於万故には身も細る苦しみ、忠義顔して君前に出るさえ恐れ多し、と、「此の腹割って宿れる悪魔を駆出さん」と決心したのである。恋故に命葉てて悔いぬ決心に付けても、「武士は最後の一念大切なりとて、十三の暁に父が教へ給ひし左腹の脇坪、臍の上通り咽喉の掻様まで、終には斯る為めと思召さず我も思はざりしに、」と悔みつつ、

「とても世の物笑ひなる今の身、敵に向うて兜を脱ぐより口惜しけれど、せめて恋の主なる其の人に逢うて一言いはんもの」と、法を侵して於万の部屋に忍んだ小太郎であつた。

然し、ひと向きに喰いもせず、於万の情理兼ねた応待。あの眼もと、懐かしくも心痛ます情の眼もとより涙流しつつ、人の聲音に衣着せかけつつ、

「さほどまで思召し下さる此の方を、たとへ手は下さずとも、可憐ら武士を殺す

罪人となし給ふか。」

此の一言に小太郎が思ひは弥増るのであった。

慕われては乙女心に、於万も小太郎が憎かるうはずはない。我ながら心乱れて甲斐なしと自嘲しつつ、立つて我が衣を取れば燻きこめた匂いの他に、もの薫る心地して、部屋隅に身を丸めて伏した男の面影が鏡も恥ずかしいまでに懐しく、つい苦しく吐息する。

その時、耳に入る婢女の噂、印籠が廊下……、さては男を引入れた……と、はッとして、於万、身の証しは今は自害して、と懐剣を購めたが、待て暫し、あわてて死なば浮名の濡衣ほすに由なし、胸の中申し立ててのち、潔白の血潮流して、清き哀れを残さん、と覚悟したのである。

老女に呼出されて、於万は事実を告げ、「ありがちな御酒の上の戯れと氣付き、きびしう御意見すれば逃げるように出行かれた。まこと寛様が万に御執心ならば必ず、それ〴〵の手続をなさるはず。また万とて御家法破り男を入れるような恐れ多いことは出来ませぬ。

たゞしは夜ふけて男に闕を踏まれたのみに成敗ならば、不運と諦めて如何様にも。」

耳朶より頬の辺り、薄紅に涙を含んだ風情、老女に短慮を堅く戒められて部屋へ下る哀れ於万ではあった。

しばし涙にくれた後、今夜を過ぎず一念それと極めしものを涙こぼるるわけなし、と我が身に云い聞かせ、自害の覚悟潔い於万のもとへ、老女より知らせは、小太郎切腹！

聞くより哀れ深く、暇願うて自害と決めたのも説諭され、今はたゞ、小太郎が後生を思うのであった。

小太郎は、於万に諫められたあと、心まします乱れ家僕に八ツ当りし、外出した。やがて夕景、機嫌よく帰るなり、奥御殿に印籠落した身の料を知り、腹一文字に掻切って果てたのである。

「あれまでに思ひ悩みし恋の点滴も得汲まず、せめては掻切つたる腹一文字の見事さを、君候への申訳け、此世の思ひ出に残して、」

と筆がわざと切腹の情景直写を避けたのは、何分優婉な哀恋の物語ゆえ、凄惨な記



述を思んだためであろう。此の配慮、読む人によって如何とも取れようが、小太郎せめてもの願いに慕う女の肌着を得て、死ぬ身の慰めとせむ望みさえ空しく、一人淋しく世を畢えた哀れは、於万が彼を憎からず思うゆえに猶、一層情趣を深めずにはおかないであろう。

此の日、小太郎が機嫌良く帰り来ったわけは、やがて次章に説かれる。

即ち、於万が例月二十五日の天満宮参拝を待ち受けた老人、お雪と呼びかけたその老人は、他ならぬ父宗兵衛、そして此のよすがを作ってくれたのは、宗兵衛を彼女の父と知って身支度の金子まで与えた藩中の青年武士。その名は寛と父から聞かされた於万は、いよく心の夫は小太郎と、決心するのであった。

任期满ちた伯耆守が江戸へ帰るに就て、暇を乞うた今は齡十九の於万へ、「其方は不忠ゆえ江戸へは連れぬ、胸に問え。」

意外な言葉に打萎れる彼女へ、伯耆守は「小太郎を殺したではないか」と、戯れ言とは互に知りながら、苦しい、切ない於万であった。

然し於万は伯耆守の情で父を引取り、小万茶屋を今宮で営む身となった。二十七日は心の夫小太郎が命日忘れず、茶屋の女あるじは優に美しい。

女一人の我ゆえに、武士道むざと棄て、惜まぬのみか、最期の際に怨恨も残さず、父を扶けし恩義も得いはず、生きての哀れ死しての哀れ、涙の胸に汲む此身の良人は外になし、たとへ現世に添はれずとも二世の宿縁竟に空しからねば、君が為に百年無塩の妻が手向をうけ給へとは小万の心づくしであった。

やがて姦婦於浦を辱かしめたことから、父は無頼の手に果て、彼女は見事仇を討ち、奴の小万と伊達に呼ばれる身となった。

二十八の秋の暮、黒髪惜しまず形を変えて正慶尼。

生れは享保十四年、死せしは享弘三年七十五年の一期や浮世に残す形見を何ぞと問へば、この女性が寢覚の思ひにも心に恥づる名を唄はれて「奴の小万」と浪六は結んでいる。

此の一篇言うなれば、純粹に「ものゝあわれ」に生きた佳人の恋を、雄勁極まりな

い筆に写した史伝と云えよう。

なまなか浮世に添遂げて不義の記録を残さんより、片輪車や恨みの風流、おもひし其人が涙の読経うくるは、死しての骨に男すたれず、

と記した条りが、正しく日本的恋愛観の真骨頂を言い尽くして妙と称えても、過言ではない。小倉百人一首、徒然草等から「ものゝあわれ」に就き詳述したいが、尚未だ引続き説述する体力を持たず、以下次回にゆずる。

### ——役者と切腹——

本誌七月号に「血染の舞台」と題して、旅役者の女座長が芝居の筋書を利用して、自身の刀で立腹を切り、自殺を遂げる小説があった。自殺の筋書は知らないが、芝居の切腹を利用して殺人を企てた筋は、岡本綺堂の半七捕物帳「勘平の死」がある。

役者に因んだ切腹の挿話を拾うと、八代目團十郎のことは既に拙稿でも触れたが、市川左團次に就ても、松居松翁「明治の演劇」に次の記載がある。

たゞ夫れ市川左團次に至っては、人間



一生の間に、多く経験し得がたい悲惨事に当らし、勇ましくも死線を突破して、その位置を確立するに至った。彼はもと名古屋の床山中村清吉の次男で、美貌の爲めに中村座の奥役なにがしの目につき二十三才の時甫めて江戸に下ったのである。後名優小団次の養子となっても、大阪訛のつよい彼の舞台癖は、江戸っ子

観劇家の賞讃を博するに難く、小団次死後は特に世間の悪罵酷評烈しくなり、家庭の事情は一層彼を苦め、彼は幾度か死を思い立ち、或時は金龍山前立腹を切らんとするまで思い定めた事があったという。是で見ると正に芝居道の人らしい決心だったと云えよう。幸に名優を挫折せしめな

かったのは河竹黙阿弥の援助であつたという。

西鶴の「本朝若風俗」にも、少年俳優が義理に詰り自刃した話があるが、切腹か何うかは不明である。

先に触れた「血染の舞台」同様舞台で切腹した話に、確か小泉八雲の「骨董」(岩波文庫にもあり)だったと思うが、次の挿話がある。詳しくは覚えていないとお断りしておく。

忠臣蔵で判官役に抜擢された役者が、幾ら工夫を凝らしても、旨く出来ないのを苦にした揚句、最後の手段を考え付いた。芝居は何処までも真似事にすぎない。若かず実際に腹を切って見せるには、と決心したのである。不評の内に迎えた千秋楽の舞台で、彼は思定めた通り本当に切腹した。迫真の演技と信じる観衆の喝采の内に幕の中で、彼は満足の息を引取った、という。

こういう話である。実話か否か、寡聞にして筆者は知らないが、何うも作り話ではないかと想像している。

「滝口入道」の高山樗牛は、その論文「戯曲に於ける悲哀の快感」に於て、大西操山



の「悲哀の快感」に就いて次の如く述べている。

少し長いが例によって引用しよう。

夫れ悲哀なる書物の吾人に快感を与ふるに要する所は種々あるべしと雖も、其悲哀が仮在のものにして實在のものに非ることは第一の要素ならん。吾れ人は其悲哀なる事実の目前に實在せざることを確信するが故に、其悲哀より快感を享くるを得る也。

小説詩歌の中に苦める少女義人を見て快感を覚ゆるは此少女義人が現在我が目前に苦むに非ずして、只我が想像中の幻影が苦み悩めるに過ぎざる事を確信すれば也。

演戲は想像の活潑なる者に過ぎずして吾人が胸中に描ける幻影の仮の實在（若し斯く言ふを得ば）を与ふるのみ。吾れ人は現に号泣の声を聞き、現に愁歎の形を見る。然れども此悲哀の間に快感を覚ゆるは之れ模倣に過ぎずして、実の人が実に号泣し、実に愁歎するに非ると知れば也。若し舞台上の判官にして真に腹を切り、真の顔世御前が真に髪を切り、真

の由良之助の無念が真に「五臓六腑に浸渡」らば、忠臣蔵四段目は徒に殺風景を呈せんのみ、なんの快感か之れあらん。要するに悲哀の快感は、只想像の場合に於てのみ起るものなることは争ふべからざるの事実なり。（略）

此の論旨は樽牛の美学的立場を闡明したものであるが、極めて含蓄に富むものと思われるのである。

（附記）本稿中の引用文に就きましては著作権法に基き御諒解を求めましたところ御快諾賜りました春陽堂並びに新潮社の御厚意を此処に誌して深謝致します。

尚、読者の方々からの御質問に対して誌上でお応えしない場合は、編集部を通じて御回答申上げて居ります。

筆者が気付かぬ文献資料や、また本誌に未入手として御紹介して居ります文献に就き御熟知の向きは、何卒御教示の程願ひ上げます。

先般二月二日付熊日紙上に報道された八代市に伝わる腹切り山伏杉本院、というのは何ういう話でしょうか。熊本方面の読者の方にお伺ひ申上げます。

（切腹通信）八月号には待望の中康先生の研究夜話を載せて戴いた上に、法谷氏の切腹曼陀羅図絵、何とすばらしい切腹の極地でしよう。切腹の凝態をやってもどうしても求め得ぬ所はこの一文と絵をもって解決している様です。

この一文には左記の如き切腹願望に関する各要素が全部織込まれています。(1)、吾れと吾が腹を自ら突き刺し切り開く。(2)、人が切腹するのを眺める。(3)、異性が腹を切り開くのに手を添える（この文中では互の腹が他の腹を切り割く）(4)、切り開いた自分の腹の中へ自ら手を突込んで腸を出す。(5)、異性に自分の腹の中から腸を取り出してもらう。古式的な切腹では(1)(2)(4)のみが満される。正座より肌を脱ぎ下腹右下脇腹に短刀を当がう所迄は実演可能の限度で、その先は本当に切る以外はトリックでも足りないが、それを満たす方法は文章と絵で画帖の要望される所以。切腹の悲願は切腹によって死ぬという真に迫った気持でなければ最高の美に到達出来ず。然る死そのもの及び、現実的な重傷は避けるという条件、これによって重大な制限を受け、人間の空想力により頭の中の宇宙で顕現するより方法がないのです。人には自制心があって切腹の為に切腹するという人はまずないが、空想の世界では可能であり奇クのとらえた特徴でありましょう（切腹生）

# Das Grausame Weib

Dr. Yohannes R. Birlinger.

## ▽△ 残虐なる女性達 △▽

— 1901 年刊行の独文絵入単行本より —

森 本 愛 造 ・ 訳

一八八一年から一八八三年までの間、スウダン (Sudan) に住んで居た或る英国婦人の手記の中に私は重要な部分を発見した。

(著者註、右の引用は次の文献による。)

M. Sadow; Die Prügelucht in der

Türkei und im Orient, Leipzig. 149 hage.

「土其古及東洋に於ける鞭打懲戒」M・サド

ウ著、ライプチツヒ版一四九頁)

「ドイツク叔父さんは大變不機嫌でした。叔父は私に、つい今し方、多勢のマーディスト土人 (Mardiste) 達が鞭打たれた末、死刑になったと話してくれました。私はその事に心から憤りを感じました。何も殺す人間に念を入れて鞭打刑を実施する必要はないではありませんか。叔父は云いました。

「いや、まだお前にはよく判って居ないのだね。死刑になった土人共が我々白人の婦女にどんな事をやったかを若しお前が知ったならきつとお前はもっと烈しい拷問にかけて苦しめても未だ足りないのだという事が判るだろうよ。」

私は反射的に不満を感じて肩をすぼめました。どうも叔父とこういう事に関して話合合わないのです。戦争から帰ってからというもの、叔父は全く別人の様になってしまいま

した。叔父は人間同志の生命の尊重や、同情心に対して全く冷淡な人間になってしまったのでした。其の日の午後、クリニエート大尉夫人が私を訪ねました。彼女は私に叔父からきいた事件の事で情報を確かめに來たのでした。彼女は私の不満をきいて微笑みながら私の頬を指で弾いて、云いました。

「この可愛い、お馬鹿さん！ あの土人共の無様な顔を一度見てごらんなさい。鞭で打って貰う事なんか、むしろ彼奴等には上等すぎるのですよ。そんな事で驚いて居るのではなく、鞭打たれた土人の女達が処罰された理由は、単にかくした筈の金の所在を明さなかつたからだ」という事を知ったら一体、貴女は何と仰言るお心算？」

私は「何という馬鹿な事を！」と思ひました。そこで、

「一体、金を彼女達が持って居たのは本当なのですか？」

ときいてみました。大尉夫人は笑いをかくそうともせず、答えるのでした。

「いゝえ、持っているかいな、そんな事が判るもんですか。でも、余り長い間下らない事で騒いで居る訳には行きませんからね。」彼女は更に言葉をついで、



「今朝、ヘンリー大佐 (Henry) が私に明朝早く、女共を革鞭で打つ刑があるから見に来ないかと誘って下さいましたわ、女共は二〇人位で一人宛、百回打つのだそうですわ、貴女も見に行きませんか？」

私は面白そうに笑って居る美しい友人に憤然として背中を向けました。

併し、この事があってから二、三日後の事でした。大尉夫人と私は刑を見に、馬に乗って市場へ行きました。全く奇妙な事に前にお話しした様ないきさつがあったにも拘らず、私は夫人と共に鞭打刑を見に行ったのです。全く此の地方では一寸した事から人の気持を逆に変えてしまう事があります。実は昨日、私の下女に私は鞭打刑を課したのでした。下女が私の最も嫌いな事、つまり嘘を吐いたからでした。私は激怒の余り、監督を呼びつけてこの大きなお尻をした頑丈なディンカ土人の女 (Dinkanege rin) を鞭で打つように命じたのでした。併し私は余りひどく打たないようにと付け加えるのを忘れませんでした。

所が監督は、ずい分徹底的に懲しめたらしく、下女は一日痛くて坐れないと云って居ました。〔此の下女の名はフェリアー (Feliah) といいました。〕

といいました。〕

市場へつくと、夫人は私を鞭を受ける筈の女共の所へ連れて行って見せてくれました。

彼女達は黒い肌の者と黄色い肌の者と二通り居ました。鞭打刑は頑丈な革紐を編んだ長い革鞭 (訳者註 Cowhide) で兵隊達によって執行されました。一鞭毎に裸の太腿に革紐が喰込みました。流石に決心して来た私にとっても、あの恐ろしい、遠くまでひびきわたる鞭の下で張切った頑丈な人間の皮膚が躍り上るのを見るのは、相当の忍耐力が必要でした。大多數の者達は百回ずつ打たれました。彼女達の皮膚から流れ出た血汐が、長椅子の下で大きな溜を作っていました。私はそれを見ると気持が悪くなって帰って来てしまったのでした。あの野蠻な見世物の観客達が——彼等の大部分は女性でした。——哀れな娘や女達の苦しみを見て楽しんでいた事は疑いのない事実でした。私はその有様をこの眼で見、この耳で聞いたのです。

(訳者註) 此の平凡で柔和な女性の心に浸入してゆく、高貴なサディズムの精神について注目せねばならない。彼女は前に書いてある通り、市場へ馬で行ったと云う。黒人達に少くとも相当の同情を寄せ、鞭打刑の血を見て

胸が悪くなって帰宅せねばならなかった彼女は帰路、馬に一鞭も当てず、馬腹を拍車で責めもしなかったであろうか。否、むしろ、彼女は自分自身の不快の故に殊更に神経質に鞭を使い、早く休息を取る為に徒らに馬腹を蹴りつけたのではなからうか。彼女は人間と畜生とをかくの如く分別する。其の時、彼女は、馬を苦痛によって支配する事と、土人の女を公開の鞭刑に処し、観覧し、楽しむ事との間と本質的に何の相違もない事を考えなかったであろうか。此処に、対応する立場即ち被虐男性の立場よりする「畜化狂」の基底が在るのである。併し、今、詳述するのは止めよう。彼女の手記をついて読んでみよう。

更に二、三日後、多勢のマーディスト土人が死刑に処せられました。

大尉夫人は私に「私は身体に悪いので、こういうもの (鞭打刑や死刑) を見るのを慎しまなければいけないとお医者様に云われるんですけれど、土人共を鞭で打つを見ると私は何とも云い様のない独特の昂奮に駆られるのですわ。」

又、私は何時か、フェリアーが不注意で彼

女の脚にぶっかった時に、彼女が昂奮して叫んだのを覚えています。彼女は下女にすかさず平手打を加えてから「お前を一度長椅子にねじ伏せて、革鞭で五〇回も可愛がってやりたいよ」と嘲ける様に叫んだのでした。それから私に向って

「貴方は大体召使を大事にしすぎるのよ、私の家では下女に笑ったりさせません。私は自分自身鞭を持って彼等を懲しめます。私のやり方はそれはそれは徹底的に、こっぴどくやってやるのです。」

私は慌てゝ答えました。

「おゝ、フェリアーも今ではずい分打たれましたわ」

「そう、それではやっと貴女にも、此処では「鞭」がなくてはならない道具だという事がお判りになったわけね」

彼女は満足そうに云ったのでした。

それから又別の或る日、ディック叔父さんの話では、兵隊達が二、三人の黒人の女を鞭打ってから殺したという事です。而も兵隊達は無情にも女達の身体に木の杭を打ち込んで殺したのでした。私は叔父に

「では、そんな野蛮な兵隊達も勿論、死刑に

なるのでしようね」

ときいてみました。叔父は以前と同じ様に笑って答えるのでした。

「何を云っているのかね。成程、人は人をそんなに厳格に裁いたり、刑に処したりする事は出事ないかも知れないが、我々の兵士達は丁度お前が学校で習った様に、わし達の祖先が受けた殉教と同じ事を此のハルニッシュ(Harunish)の街にもってきただけの事だよ。」

それに暑い気候というものは盗みや殺人の慾望を盛んにするものだから、そんな土人共は一切の不従順に対して無条件に鞭を受けなければならぬさ。」

「何ですって？ 只鞭を受けるだけですって？ それに、女の体に棒杭を打込んだりするのには不従順だけで「犯罪」ではないのですか？ 私はそんな事は、最も悪逆無道な、最も下等で最も野蛮な、途方もない殺人だと思っています。そんな事は悪魔のする事です！」

「そう怒ってはいけませんよ。併し、若し、今迄にお前がマーディスト土人共に捕って、不幸な目に合っていたら、きっと別の事を考えるだろうし、そんな事を云いはすまいね。奴等が若し捕まえた婦人達を殺さなかったとしても、奴等が白人の婦女にどんな事をするの

か知っているのかい？ 若し、お前が捕ったとしたら、奴等は先ずお前の衣服を全部剥ぎ取って、最も恥知らずな方法で鞭打った後で、代る代るお前を女として利用するのだよ。だからこそ、我々は血の復讐を叫ぶのだよ。」

「けれども、哀れな土人娘達が一体何をしようのですか？」

「この女共が一番悪いのだよ。土人共は女でも、我々の同胞を殺したのだ。勿論齒には齒をというやり方はよろしくない。英国人たる我々は文明人なのだから。支配する事を知らなければいけないのだ。土人達が受ける鞭も将来、強ち無駄にはならないだろうよ。」

(訳者註) 鞭打の効果を体験して知る事によつて)

私はやっと事の次第が判って来ました。叔父がこゝで

「大尉夫人がきつとお前にその事を話してくれるだろうよ。あの人は自分の鞭打の歴史を大変自慢にして居るのだからね。」

と云ったので、私はあの太った大尉夫人の事を思い出して、何となく心のほぐれるのを感じました。彼女は大変な鞭打愛好家です。

「叔父さん、私は今度は鞭打刑をゆっくり楽しむ事が出来ますわ、もう私は一寸も土人達



に同情を持って居ないのですから。むしろ私は罰が軽すぎてつまらないと思うかも知れません。何故って、藤や皮の鞭で二、三度引張たいでも、土人達の犯した恥行の何分の一の償いにもなりそうにないからですわ。」

(訳者註) こうして彼女は、鞭打刑が妥当な上品な趣味である事を女主人公は諒解したが未だに殺人や、其の他の復讐については彼女は賛成して居ない。

其の後、吾々の国人の残虐行為は、一日毎に、一週間毎に増えて行つたのでした。頭を割られた女の姿が見かけられ、娘の死体は明かに烈しい強姦の跡を見せていました。キツチナア卿 (Lord Kitchner) はそれ等の犯人に厳しい刑を勵行して居ると叔父は話してくれました。けれども若者達は、一度に藤杖で二五回以上打ってはならない。それ以上だと鞭に対して鈍感になって、遂にサディステイックな犯行に烈しい興味を抱く様になるのだそうです。嫌な出来事が多い事! 上流の夫人達まで、黒人やマーディスト土人共の鞭打刑に参加して居ます。其の上、自ら手を下して居るとさえ云われています。

(訳者註) 上流夫人達は何分にも、彼女自身の性慾的な鞭打愛好を同様に感じてはならな

いかの様な書き方である。

大尉夫人がやって来て、し長官夫人についての話をして下さいました。

「夫人は、良人の留守に数知れぬ鞭刑命令書に署名したり、或るスパイの死刑にも署名したのです。この思いきりのいゝ、そうして支配慾のある夫人はきつと、鞭刑の首数を自分の手で二、三倍に増やした事でしよう。私はこの大胆で勇敢な「夫人閣下」に敬意を表するのですが、併し、もっと希むなれば、女性的な仕事、つまりエプロンをかけて負傷者や病人の為にスープの一つぐらい作ってやっても、と思うのです。」大尉夫人の話は以上の要点でした。もう私はすでに黒人の男女に鞭を当てる事について相当に馴れてきています。ところで、下女のフェリアは私に平手打された仇に、私の愛している猫を毒殺してしまつたのでした。大尉夫人のすゝめで私は否応なしに彼女を捕まえて鞭で背中を可愛がってやりました。革鞭がからみつく血がにじみ、みみずばれになってくる、下女の太った腿の肉は私に烈しい感動を与えるのでした。『卑しいけどものめ』もつと、もつと鞭を呉れてやろう。『お前はもつと鞭を受けるのが相応なのよ』と私は思い乍ら鞭を振いまし



(フランス風俗画)

た。

又或る日、私がK嬢と散歩している時、私は恐ろしいものを見付けました。何人かの黒人の女共が一人の黒人の女を打ち殺しているところでした。殺された女の身体は無数の傷痕によって掩われていました。私達が早速知らせましたので女共は其の場で捕えられましたが、その中の一人は逃げ出してしまいました。けれども暫くたって、私共は其の女も再び捕えられた事を知ったのでした。取調べの結果、被害者の女は他の女達に不潔な仕事をさせたのでした。(訳者註)恐らくはクンニリングス *Cunnillings* 又は第三者へのフェラチオ *Feticcio* であろう。)

二、三日後、私達は彼女達の処刑を見にゆきました。女達は台の上へ力一杯張り伸ばされ、感じの悪い男の手で太い皮鞭が振り下されると、その下で張り切ったお尻がはね上るのが見えました。それは絶景でした。其の上一鞭毎に女共は死ぬ様な叫びを上げるのでした。

猶、女共の中の一人は鞭打刑の後で絞首刑に処せられたそうです。

ディック叔父さんの話。キッチナア卿は軍規を鉄の様に厳しくしようとしているそうです。

叔父の意見によれば、多くの嫌らしい犯罪の為にこういう事になるのだそうですが、暴行を犯した兵隊達には鞭打刑の他に自由刑と重労働とが課せられる事になったそうです。若者達にはスベイン答のお仕置よりよくきくのです。大尉夫人は「鞭」で引き締められる軍紀が大好きらしく、「兵隊達は強い鞭で教えなければいけないわ」といっています。

更に今日、フェリアーは全く怪しからぬ事を仕出かしました。何と彼女は男装して街で娘達を驚かせたのでした。今日は一つ、こっぴどく鞭で可愛がってやりましょう。二五も打ってやれば判るかしら。もう、罰なしでは何事もすましません。(私は鞭を使う事に興味を覚えて来たのですから)

英国婦人の日記の引用は、そこまでにしておこう。これは全篇、全く挫え目な言葉で書かれているので、実際に起った事よりもずいぶん輪な記載であると考えられる。にも拘らず、この記録で、最初デリケートな感情と同情心を豊かに持って居た英国の良き婦人が如何なる形で如何なる経過で、「鞭を振るう令嬢」になって行ったかについて、はっきりと認識する事が出来よう。注目すべきは鞭打刑によって胸を悪くした女性と同一の人間が間もなく一つのいたずら故に、黙って二五回も下女の尻に鞭を当てるのを喜ぶ様になったという事である。

何なる形で如何なる経過で、「鞭を振るう令嬢」になって行ったかについて、はっきりと認識する事が出来よう。注目すべきは鞭打刑によって胸を悪くした女性と同一の人間が間もなく一つのいたずら故に、黙って二五回も下女の尻に鞭を当てるのを喜ぶ様になったという事である。

こうした女性達が現実に存在する事、こうした女性達の存在を支持する社会の状態等は、一八八一—三年頃まで厳存したのであった。特別に理想的な環境さえあれば現代に至るまで猶、奴隷所有者乃至はロシアの地主の妻達と同質の性格をうけ入れ得る女性はまだまだ多いし、決して滅亡しはしないのである。

残虐行為への慾望は特に女性に於ては眠る事はあっても死ぬ事はないのである。其の発現の多寡はすべて外部の環境に由来して増減するのである。全てが許されている所では、又全てが可能である。

## ☆代理部より☆

迅速確実をモットーにしています代理部の事務処理は読者の皆様に絶大な信用を博しております。毎月新鮮なるアイデアに依る各種分譲品を追加いたしておりますので何卒多少に拘らず御用命の程お待ち致します。



## 懸賞〔告白と手記と体験〕入選

続・半公刑

赤<sup>あか</sup>札<sup>ふだ</sup>囚<sup>しゅう</sup>

篠原 咲 恵

昭和十七年も暮れ、十八年の春がめぐって参りました。戦争は益々苛烈となるばかりで帝国海軍も、一日一日と深まる痛手にのたうち廻っている頃でした。

私達赤札囚が寮舎前の朝礼広場に整列して守衛長の訓話をきかされましたのは、春とはいえ、薄い下着と赤札の囚衣一枚では耐え難い寒さを覚える朝でした。

「……………かくの如く戦局は日一日と重大の時に、一端の誤ちとは言え、法を犯し、風紀を乱した諸君の罪は決して軽視し得ないのである。しかし諸君が充分にその罪を悔い、行い

を改めて、立派な大和撫子として更生した暁には、我々は大手を振って元の職場に迎えるに吝ではないのであるが、万が一にも諸君達が作業をサボったり、規律を乱したり、又は監督者の命に従わなかったりする者があるならば、断乎として懲罰を加えるから、そのつもりで充分なる覚悟をもって、更生への道を歩んでもらいたい。今後は作業も激しく、又取締も厳しく行方積りであるが、要は諸君の敢闘精神如何に懸っているのであるから、大いに奮闘努力して一日も早く元の職場に戻る様に切に希望する。」

この様な意味の訓話で別に取り立て、記す程のことかもしれませんが、この守衛長は司法畑の出身で比較的に温厚な方で、私が罪を犯した時も、微罪として済まそうとした方でございしました。その守衛長が作業の強化をほめかしましたのは、上官の圧力もあったでしょうが、急迫した戦局は戦争遂行一本に固めて我々赤札囚の人権を無視し、サボ抑制の犠牲に供する事は当然の事であると言われても仕方がなかったのです。

この訓話の効果は忽ち現われました。社会の容認と、軍の命令を後楯に得た女看守のサ

下性が監督取締の権利を十二分に活用し始めて次々と、残虐な刑罰を生み出しては育てて行くのでした。

その訓話の有った日から私達赤札には点数制が施行されました。点数は一日十点、十日間で百点満点ですが、六十点を及第点と定め六十点以上の者には出所日数を早められ、食事が良くなったり、次の作業が軽くなったりする特典がありました。その逆に六十点に足りない者は、不足点に応じて種々の懲罰が加えられるのでした。それで私達の更生の為だと称して作られたこの制度は、全く逆に意地悪い女看守のサディズムを満足させる道具となってしまうのでした。第一回第二回の点数発表の時には、どうやら及第点を取った私も、とうとう第三回目の発表の時には落第してしまいました。十日目毎に行われる点数の発表は、私達にとってスリルなどといった生易しいものではありませんでした。発動機試験室として設計されたこの営舎は厚いコンクリートの壁で作られ、天井にはチェインブロックが吊されて太い鎖が冷たくたれて、鉄の爪が拷問道具の様に吊られていて、それがまるでいけにえの来るのを待ちうけている様です。この陰惨な室で私達は板の間に正坐し

て得点の発表を待つて居りました。やがて桎の棒と皮鞭を手にした女看守が五人、どや／＼と入って来ました。そのうちに次々と読み上げられる赤札番号と点数が私達の耳に響いてきます。皆固くひきしまった表情でその声に耳をかたむけています。

「……四十三号  
六十一号。八十二号、五十七号。五十七号、六十号。百二十七号、五十一号。……」

「はッ」として私は打ちのめされた様に頭がふらふらとしました。（あゝ足りない、九点も……一体どんなお仕置を受けるのかしら）と心の中がたちさわぎ始めました。この日までどうやらお仕置を逃れて来た私には、今までに度

々行われて来た懲罰が次々、胸に浮んできます。

「今、発表した通り、今度は点数の足りない者が七人もいます。この前より二人も多い様では今後が思いやられますので、明日からはもう少し厳しく作業を行わせるから、皆もそ



Suk



のつもりで居なさい。点数の足りなかった者には、今日は充分に精神の入れ替えをしてやるから前に出て用意なさい。」

所詮、無駄とは知りながらも一歩でも他人に隠れて少しでも風当りを避けたい気持になるのが人情です。左右を眺めてもじくしてゐる私達を女看守の怒声が追いついてた。

「早くしないか！ ぐずぐずしていると承知しないよ」

女看守の手に握られた柄のついた革鞭がバチツと床をうちました。恐怖におののきながらも逃れられぬ運命とあきらめて、私達点数の足りなかった赤札囚七人が前に出ました。

「足りない点の順に並びなさい。」

ヒステリカルな怒声に射すくめられて、私達はおず／＼言われた通りに整列しました。

此の日は、私が一番点が少なかったので一番右端に立ちました。五人の女看守にとり囲まれた私達は蛇に見入れた蛙の様におびえながら次の命令をまつのでした。

「両手を上げて、もつと真直に上げるんだよツ、もつともつと……」

両手を上げて全く無防備になった私達の腰から看守の手によって、モンペをはぎとられ

ます。冷たい風がひやりと肌至今自分の置かれてゐる哀れな立場を知らせます。私達は哀願の眼をみはりますが、それが何の役に立つでしょう。唯服従だけが私達の許された一つの道です。一人一人、次々と取り去られてそれが終ると

「さあ、皆四ツ這いになって」

言われた通り犬の様な浅間しい姿となった私達を取巻いて、彼女達独特のお説教が始まりました。

「これはお前達の為に精神を入れかえてやるのだから、これを機会に今迄の怠け根性を完全に洗い流してしまいなさい。進んで精神を入れかえるという積極的な気持が体に表れてこないと不可ないよ。手のつき方、腰の出し方、いちいち言われる前に自分で工夫して実行しないと、本当の精神は入らないよ。私達は一日も早くお前達が真人間になる様に願っている、この気持に対して感謝の気持が見えないとだめだよ。……八十二号のお尻の出し方は仲々よろしい。百二十七号、その様なことでは精神が入れ替えできない。」

言葉が終わるか終わらないうちに、私はお尻を檯の棒でぐつとつかれました。前後左右から五人の女看守に、にらまれながら私は思いき

りお尻を突き出して、まるで蛙が両足を立てた恰好でやがて振り下される鞭を待たなければなりませんでした。

「そう／＼それでいい。今の気持を忘れちゃいけないよ。」

後に居た看守の冷たい手が二、三度私のお尻をなぜ廻しました。何をされてもどんな非道い事を言われても忍従しなければなりませんでした。私達がお尻を向けている方には、同じ赤札の女囚とはいえ、五十名に近い女達が見ているのです。五人の女看守は檯の棒で床を打ち乍ら、ぐるぐる歩き廻って私達の羞恥と恐怖を楽しみながら永々とお説教を続けるのでした。口惜し涙がポタリ／＼と床にシミを作り、あちこちから鼻をすする音や喉をつまらせる声が聞えて来ました。言いたい放題の嫌がらせを腹一杯聞かせてから

「では不足点の少ない者から順に自分の番号と不足点数を言いなさい。それから今日は腎の水打ちだから覚悟おし……」

腎の水打ちとは、一体どんな事をされるか知りませんでした。左から順に来る絶え入る様な悲鳴に私は全身総毛立つ思いでした。とうとう私の番がきました。

「百二十七号……」

「聞えない！ もう一度」  
喉をつまらせて声の出ない私は二、三度い  
い直されました。

「九点もお前は足りないでどうするつもり、  
お尻の出し方は一生懸命に精神を入れかえる  
様に見えているが、とても一度に入れかえる  
事は無理だから今日は三点分だけで、後は明  
日、他の方法でやってあげるから有難く思い  
なさい。」

「ハ、はい、有難うゴザイマス」

私は声にならぬ声を喉にからませながら少  
しでも彼女達の意に逆うまいと必死に叫びま  
した。やがてお尻にひやりとした濡れ手拭が  
かけられました。続いてその上にグラ／＼と  
水がまかれ手の平で撫で附けながら、お尻に  
密着させると鞭が唸りました。「ビシリツ、  
ビシリツ」皮膚に吸いつく革鞭の痛さに悲鳴  
をあげてもがいた私は、足の重心を失ってど  
っと倒れてしまいました。

「たらしがない、早く立って」

ヒステリーの足が下腹部を下からぐっと持  
ち上げます。元の姿勢になった私のお尻から  
手拭をとると

「さあ、これから涙を流して充分に犯した罪  
を後悔しなさい。」

しびれた手足を踏まれたり、叩かれたり、  
頭や痛むお尻を棒で小突かれたりしながら私は  
罪の恐しさに涙を流し続けました。

次の日は雨が降っていました。約束通り行  
われる六点分のお仕置の恐しさにふるえてい  
る私を呼び出しに来ました。

「手を後に廻して。手数をかけるんじゃないよ。」

後に廻した手を小バンドの金具に固定する  
と麻縄を取りだしバンドに通して結ぶと縄尻  
を握って

「早くおあるき」

と背中を小突かれました。やがて引き立て  
られてきたのは被服工場の大部屋でした。押  
されるまゝに室内に入った私は、アツと驚き  
の声を挙げました。室内には四、五十台のミ  
シンが置かれ、百人に近い女工さんが忙しそ  
うに仿いて居りました。皆私と同じ位の年頃  
です。恥しい姿を見せまいと、後さがりした  
私はバンドに結ばれた麻縄の端を鞭にしてピ  
シツと肩先を打たれました。後手縄付の姿で  
私は女工さん達の間を分けて引き廻されまし  
た。その時、私は奇妙な台を発見しました。  
腰の高さが一米もある椅子の様な白木の台で  
すが、背摺は一本の柱です。私は自分の運命

を悟りました。「晒者」それが今日の私に科  
せられた刑罰だったのです。女看守は意地悪  
く、わざと女工さん達の目の前で手をとき  
「氣をつけ」の姿勢の私の体を撫で廻し身体  
検査をするのです。これは看守の義務でしょ  
う。しかし時と場合によって手心があっても  
よさそうなのです。いやがらせに服の下ま  
で手を入れたり、腹部を軽く叩いたりしま  
す。身動き一つ許されないこの様な私の身体  
検査が済むと、再びバンドに錠が下され、ガ  
チャリと金属性の冷たい音を響かせてお腹の  
前にグラリと錠がぶら下りました。

「さあ、この台の上に腰かけな」

一米もある腰掛にやっと上った私の手は、  
又後にされバンドの金具に固定されて、背摺  
の柱についていた鎖が腋の下から乳の下を通  
して、一卷されました。私は台を上る時に何  
気なく足を掛けた板が木製の足枷だという事  
に気がつきました。三十種位の間隔で二つの  
小円があいていて、そこに私の両足首を入れ  
て楔をはめると、私は完全な晒者になりました。

「皆によく見て貰いな。仲よく似合うよ」  
私は耳のつけ根が赤くなるのを意識しまし  
たが、もう仕方のないことです。





「皆さん、一寸注目。よろしいか怠けたり、品物を持出したり、命令にそむいたりするとこの様な目に会うのですよ。女だからといって許されません。この赤札が証拠です。さ、お前、この赤札を読み上げて皆に聞かせておやりなさいッ。」

眼の前に突き出された立札の文句を私は、叫ぶ様に読みあげねばなりませんでした。

「私は、廠内の品物を盗み……しました。私は

仕事をサボってばかりいました。私の様な悪い女にならないうで下さい。」

喉をつまらせ、必死によみました。私の声で室内はしんと静まりました。よみ終った時涙が膝におちて声を出して泣きくずれてしまいました。

「あら、泣いた位で許される事じゃないんだよ。サボってばかりいられちゃ、日本は戦争に勝てないんだよ、涙が無くなるまでお泣

き。」

この言葉に室内は元の空気に戻って、やがてミシンの音が響き始めると、看手は台の左に立札を置くときさささと出て行ってしまいました。

漸く泣き止んだ私は、両手を後に縛られていますのでぬれた顔をふく事も出来ません。出来なければ、出来ないほど拭い度くなり両手をもがいてみましたが、革と金具はびくともせず、わずかな自由への希望もすてなければなりませんでした。首をたれると真赤な背掛と囚人番号が悲しく眼に映ります。後前に着せられたセーラー服の羞恥が、ひし／＼と胸に迫ってまいりました。いやそれよりも恥しいのは、台に腰掛けた両足が開いたまま固定されていることです。

直視こそしませんが、チラ／＼と流し目に集まる視線が、両股を合せようとする私の努力を笑うように注がれます。隣同志のおしゃべりもきくと私への侮蔑の言葉でしよう。どんなに楽な姿勢でも永く続けられれば、やはり苦痛になります。少しでも姿勢を楽にしようと腰をひねったり、肩を廻したりしますが、それが面白いのか、どこからともなくクス／＼と笑い声がかかります。

やがて見廻りに来た看守に私は用便を訴えました。後手のまゝ台から下された私の後から二、三人の人がついてお手洗いに来ます。用を足して出て来た時、その人達が笑っていましたので私は思わず

「何が面白いのです。」

と口走っていました。完全に奴隷になっている筈の私の心のどこかに未だこんな心が残っていたのでした。狂ったように叫び続けると私の頬に平手になり、はっと赤札の精神奴隷の心をとりもどしました。

「よくもそんなふるまいが出来るわね、一寸まっとうおいで……」

手にした紙包みが荒々しく取られ、中から金属性の簪がとり出されました。

「さあ、口を大きく開けて」

「お許し下さい。もう決していたしませんから、どうぞお許し……」

「うるさいね。口をお開けといったら開けるのよ。さあ、早くお開け」

これ以上の哀願がどんな事になるのかは、私はいや、私の体はよく知っています。

「もっと大きく、そうく」

カチカチと火箸程の鉄棒が歯に当たります。簪の両端に革紐がついていて、後頭部でっし

かりと結ばれました。驚いた事に此の鉄棒は中央部が少し大きくなっていて、ここに小さいあなが開いています。そのあなにもう一本先の丸くなった釘の様な棒を差し込まれました。丁度舌の上で十字に交わるのです。

「さあ、う一度叫んでごらん。」

「おゝゝゝゝゝ」

言葉にならぬ声が私の口から流れました。

「姿勢がくずれている、もっと顔を上げて」  
櫂の棒でぐっと顔を押し上げられて、涙にぬれた奇妙にゆがんだ顔を嘲笑の視線の中へ

晒して行かねばなりませんでした。

私が晒しの刑に会ってから暫くして総務部に勤務していた三崎幸子が赤札囚となって入って来ました。番号は百五号で私と同じく百番台ですから営倉期間は未定の組です。廠内物品の盗用と言うので罪が重いのです。後に私はその三崎幸子さんをお姉様と呼ぶ様になりました。そして三崎さんはすべてを打ち開けて下さいました。機密費の横領だったので。機密費にもいろいろありますが、その中の接待費は非常に経理が乱脈だったのです。





あの暗い息詰る様な戦争の最中にも、あらゆる物資食糧は軍に徴発され、その幹部は機会ある毎に酒宴を設けており経理の乱脈に乗じて、接待費の横領は後を絶たず、お姉様も一度が二度と度重なるうちにとうとう捕ってしまったのでした。当時のお金で一万数千円を費消したお姉様は当然刑事問題として裁判にかかれれば、こんな地獄の様な営倉に来るよりずっと良かったのですが、司直の手が自分達に波及する事を恐れた幹部は、「君を前科者としたくない、罪は罪として一時営倉入になるが、我慢して早く出て来て貰いたい」と半ば温情的に丸められてしまったのでした。刑期未定の赤札は未だかつて一人として出所した者が無いと言う事実を、お姉様が知っているわけはありません。成績さえ良ければ明日にでも出られる様な幹部の言葉をそのまま信用して終ったのでした。

法律的には無罪に等しい様な赤札囚に、法律に許されない苛酷な刑罰が行われていると誰が想像するでしょう。お姉様はむしろそれを感謝の気持で此処に入ってきたのでした。年は二十六才、貴婦人的な整った顔立ち、眼に勝気な気性がよく現れています。

お姉様の入って来たのは、丁度点数発表の

夜でした。点の足りなかった赤札三、四人を珍らしく簡単に鞭打ってから、女看守の一人が空色の背広にスカート（わざと／＼スカートと書く必要はないと思われるかも知れませんが、当時の私達にはとても許されない総務部員の特権だったのです。）姿のお姉様を引立てて来ました。女看守はお姉様をとり巻いて一枚一枚脱がせて身体検査をしました。それが済むと赤札の囚衣を着せられました。

「新入りの百五号、皆可愛がってやっておくれ、何しろ総務部の女王様だから精神のいれかえも骨が折れると思うからね。……」

と皮肉を並べてから、今度はその百五号の方をむいて

「そんな変な眼でにらまないでよ、その中に立派な赤札に仕立ててやるよ。それが私達の義務だからね、あら、女王様は仲々赤札がお似合よ。鍵がなければ脱げない服の着心地はどう？」

お腹にぶら下っている錠を叩き、今ぬいだ背広を見せながら、女看守にとっても日頃から羨しく思っていた此の女王様を、入倉第一日からさん／＼な目にあわしました。そしてお姉様も立派な赤札への道を歩まされたのでした。

花も散った暖い午後のある日、私とお姉様は鎖で縛られその他三人程の赤札と一緒に台車引きの刑を受けました。この頃には私はお姉様の側にいるだけでも嬉しく、お姉様に意地悪い作業が当てられると、わざとサボったりして同じ作業へ廻される様にしていましたので、それでその日も台車という仕事をさせられたのです。この台車というのは、着陸の時に脚を破損した飛行機を運搬する丁度お祭の山車をぐっと低くした様な厳丈な重い車で屑鉄や焼けたエンジンの様な重い物を乗せて成績が悪かったり看守の機嫌を損じた赤札にひかせるのです。

「百五号、力が入っていない。」

女看守のカン高い声と同時に彼女の手が高く円を描いて、お姉様の背にピシッとあたりました。

「もっと腰に力を入れて、わき見なんてしたら承知しないよ。」

四、五人の赤札囚に二人の女看守がいて常に革のベルトをビュン／＼と、耳元で風を切りながら追いたてたのでした。赤札囚はつなを両肩に喰い込ませる様に上体を水平近くまで倒して引くのです。汗と脂にまみれながら熔接工場の前迄追いたてられて来た時、突然

お姉さまが叫びました。

「花島!! 花島大尉」

必死に叫ぶお姉様に二人の女看守が飛びかかって取押えました。密接工場の中にさっと消えた人影をお姉様はうらめしそうにじっと見つめていました。が続いて飛んで来た平手

打ちに我に返りました。

正座したまま両手を上げて、古草履を口に喰えさせられて、食事をしている私達を見ているお姉様の眼から涙が溢れました。この事できっとお姉様は大きく減点された筈です。その夜、お姉様は私に「脱走」の決意を打ち

開けて下さいました。(この項終り)

【後記】

次回は拷問に耐えかねた私の自白で、脱走したお姉様が捕われ、立派な赤札になるまでを書きつくしたいと思っています。



## 現代文芸に

## 現れた責め

村田 誠 一

今度は趣向を変えて、責めに用いる器物によって、責めのシーンの紹介を試みよう。先ず蠟燭、次がゴム管、次が鉄火箸。

蠟燭——人間燭台——燈台鬼の故事に因んで、これは田中貢太郎氏の『旋風時代』に現われているもの。この『旋風時代』は昭和

のはじめ、東京日々新聞だったかに連載され河野通勢氏の挿絵と相まって、満都の人気を集めた作品であった。



明治初年の頃の、有福な華族の内生活、慾と色にただれ切った当主と淫猥な女性群の登場からはじまり、板垣退助、三条実美、山内容堂、木戸孝允、後藤象二郎等の貴顕大官、一世の俠客政商、等が登場して織なす、明治維新の旋風時代を描いた一大長篇である。

昭和九年四月、中央公論社から、田中咄哉州氏の装幀で、全三巻、千五百頁という大冊で上梓された。(河野通勢氏装幀で全一冊のも出た。) 又一方映画化されたりして、正に洛陽の紙価を高からしめたものであった。

◇ ◇ ◇

「下郎、燈を持って、白雲亭へ案内致せ」

「は」……中略……

具慶の眼は紙燭を捧げた龍吉へ往った。その眼には憎悪があった。

「灯が暗い、下郎を縁側へあげて、頭へ蠟燭をたてろ」

龍吉の頭へ蠟燭をたてよといふのであった。何人も返事をするものがなかった。

「下郎、縁側へつくばれ」

龍吉はいなむことが出来ないもので、そのまま上へあがってしやがみながら紙燭を傍へおいた。

「多喜、龍吉の頭へ大蠟燭をたてろ、風情があって、酒がうまいぞ」

蠟燭は不時の点火にそなへるため事にはそれぞれおいてあった。白雲亭には次の室の袋戸棚の中にあった。お多喜はいはれるまゝに次の室へいって一本の蠟燭を取って来た。それは赤い百目蠟燭であった。お多喜は蠟燭を取って来たものゝ愛する男の頭へたてることはできなかった。また平気でたてるにしてもどうしてたてゝいゝかわからなかった。

木魚の音によって集まって来た侍女達の顔が縁前に見えた。お近、お若、小藤など六七人の顔であった。お八重はそれに気がついた

「皆でお酒宴のお準備をして下さい」

集まって来ていた侍女達は散らばっていった。慶子はお多喜の方を見た。

「いっそ燭台にしてはどう。とても頭の上にはのらないであらうから」具慶はそれを退けた。「燭台では風情がない。下郎の頭でないといかん。燈台鬼をこしらへるのぢや」

燈台鬼は遣唐使となって支那へ使してゐた軽の大臣が薬を飲まされ、頭へ燈械を打たれて生きながら燈台にせられてゐたといふ故事であった。太平記をよんでゐる慶子はすぐその意を知ったが、しかし、龍吉を燈台鬼にすることは、お八重の詞によって龍吉に対する興がさめてゐるものゝ、それはすこし可哀さうであつた。

うであつた。

「お坊さんならなんですが、龍吉は髪の手があるから、頭にはのらないでせうよ」

「盆をおくがよい。盆をおいてその上にたてるがよいぞ」

「それでもなんだか可哀さうではございませんか」

お多喜は御後室様がとめてくださればよいがと思つた。具慶は冷笑した。

「こんな下郎の一人や二人は、手討にしてもよい」といって、お多喜の方をみて「早く下郎の頭へ燈をつけるがよいぞ」「は、はい」

お多喜は又次の室へいって一つの盆をもつて来たが、何と思つても龍吉の頭へそれをのせることはできなかった。お多喜は当惑した。

具慶はそれに眼をとめた。

「多喜、早く盆をのせるがよいぞ」「は」お多喜はしかたなしに龍吉の傍へ往った。慶子のわざとらしい笑声が其処に聞えた。

「多喜、手品をするようぢやないの、龍吉は毛が濃いから、うまく乗せないと落ちるよ」それは其処の空気を緩和するための笑ひであらう。「は」お多喜にも其の意はわかつてゐた。お多喜は思ひきつて盆を龍吉の頭へ持って往った。

「龍吉さん、いいの」

龍吉は眼をつむってゐた。

「いいのです。のっけておくんなさい、おっ  
こちないやうに」「は」

お多喜は盆を俯向けにして龍吉の頭につ  
けたがその手は頓へてゐた。

「燈を移すがよいぞ」

具慶の声はしりごみしてゐるお多喜を鞭う  
つやうであつた。

「は、はい」「早く移すがよいぞ」

「は、」お多喜は思ひ切つて蠟燭を持ちなほ  
して龍吉の顔をのぞきこんだ。

「龍吉さん、蠟燭をたてゝもいゝこと」

無法な侮辱のかぎりをつくしたとりあつか  
ひを受けて、龍吉は火のやうになつて怒つて

ゐたが、久しい間にならされてゐる奴隷的な  
心がそれを燃えあがらせなかつた。

「なんとでもしておくんないさ」

お多喜はもう何もいへなかつた。お多喜は  
泣きたかつた。

「多喜は、なにをぐづ／＼して居るのぢや、  
其の紙燭の燈を移せばよいぞ」「は」

もう絶対絶命であつた。お多喜は手にして  
ゐる蠟燭の芯を紙燭の燈へもっていった。そ  
の手は微にふるへてゐた。燈はすぐ移つた。

お多喜はその燈を盆の上へもって行って、蠟  
をたらし、それに蠟燭の尻をくっつけて立て  
た。具慶はそれを見て嘲笑をした。

「あゝ、燈が移つたか、よい／＼、これで酒  
がうまい」涙みをおびた眼に龍吉の方をみて

「下郎、蠟燭を倒したら、そのまゝにおかん  
ぞ、御一新になつても、わしが下郎を成敗す

るぶんには、何人も何もいふものはないぞ」  
龍吉の頭の上の蠟燭は蒼白く燃えてゐた。具

慶はお多喜に気が注いだ。

「多喜、燈台鬼ができたなら、此処へこい」と  
いつてたれにいふともなしに「まだ準備はで

きんのか、燈台鬼ができたに、準備がおそい  
ではないか」

お八重がそれに応へた。

「もう、できてをると思ひますが」お八重は  
情熱のなさそうな声でいつてから次の室へ声

をかけた。「お準備ができましたか」

次の室には侍女達がもう集まつてゐた。侍  
女達はお八重の声を聞いて出て来た。広蓋に

入れた肴を持つもの、膳を持つもの、それが  
静かにすばしこく入つて来て具慶の前へおい

た。お多喜はその侍女の中へ交つた。

「それでは、一ぱいやらうか」

お八重がそれと見て、銚子を持って酌をし

た。具慶は一口飲んで龍吉の方をぢろりと見  
た。「燈台鬼の燈で飲むと、格別ぢや、うま  
い」といつて後ののこりの酒を飲んで、それ  
を慶子の方へ出した。「そちも燈台鬼の燈で  
飲むがよからう」慶子は手を出さなかつた。  
「わたしは、今晚くたびれて、いたゞきたく  
ありませんから、どうか、お兄様がおあがり  
になつて下さいまし」

「まあ一、二はいはよいであらう、今晚は燈  
に風情がある」

—以下略—

ゴム管——これは昭和二十二年終戦後間もな  
くコギト社から発行された『エロスの祭典』  
の巻頭にある。「女囚ベコの告白」の一節で  
ある。作者は、終戦後めき／＼と売出し、最  
近の風俗雑誌にその名を見出さない事はない  
位、多くの雑誌に執筆して居られる鹿火屋一  
彦氏。その著の中でも『同性愛技法に関する  
一考察』等は実に貴重な珍しいものである。

（これはベコちゃんというパン助が殺人を冒  
し入獄中の告白の一節である。中華料理店  
で拾つたカモ。四十五六の中年紳士は、松  
下といつて、ベコが子供の時分、よく家へ  
来た製菓会社の外交で、或る時映画を見せ  
てやると誘ひ出し、彼の下宿へ連れこんで



十三の花の蕾を散らした男だった。)

.....

そんなわけだから、私は、その時それと知っても、松下を憎いと思ふよりも却ってなつかしいやうな気持ちがおきた位さ。ところが一緒に寝てみると、松下がおそろしい変態なの私に殴ってくれといふのよ。話にはかういふ



う催促する。私も少し面白くなって、それから、松下の、肩、背、お臀、脚、腕と所かまはず、平手や拳固でびし／＼撲ったのよ。年令のわりに張切った彼の体は、薄く紅でもはいたやうに赤くなっちゃったわ。撲たれながら松下は、とても気持ちよささうに眼を細くして、まるで芋虫が子供に弄くられてでもある

人のある事を聞いてたけど、会ったのは初めてだから何だか気持ちが悪くて手を出さないでゐると、松下はもどかしがって私の手に自分の手を持ち添えて、無理に撲たせやうとするの。で、私も思ひ切って、松下の手を振り放し、彼の裸の背中を、平手でびしやりと撲ったのさ。「もったきつく、つゞけて.....」松下はか

やうに、蒲団の上をのたうち廻るのさ。私？ふふッ、たゞ面白いといったゞけぢやあたらないわ、何だか、かう、そくそくする気持ちが起きたことはたしかよ。人間には、誰でも惨酷を娛しむところが幾分あるのね。留置場や監獄の看守さんなんかは、きっとそれが強いんだわ。

あんまり力を入れたので、私は疲れちゃって、ごろっと転がると、松下は「おい、その位でのびちまっちゃ駄目だよ。まだ僕は充分ぢやないんだ」といって、ボストンバックの中から、聴診器のゴム管みたいなものを取り出し、それで撲ってくれと頼むのさ。「いゝわ」とうなづいて、私はむく／＼と湧いてくる快感に背中を押されて起ち上った。ゴム管を持った右手を高く上げて、力一杯、えいっと彼のお臀へふりおろした。ゴム管はべたりとお臀の皮膚に吸ひつき、食ひこむ。それを邪慳に引放して、又びしりッ。松下はうゝむとうなって、体を震はせながら、蒲団にしがみついた。びしッ、びしッ、私は服をひきつけらせながら、夢中になってなぐりつゞけたの。彼の体のそここゝにみゝずばれが出来てくると私はそれが憎らしくなって、そこをねらって

は幾度もゴム管をふりおろす  
みる／＼血が吹いてくると私  
はほっと安心するの。

私はもうぐったりして、ベ  
ットに倒れちやった。松下は  
初めてみちたりたやうな顔を  
して、私の体を引よせると、  
唇を寄せてきたの、忽ち舌と  
舌がふれあふ。喘ぎ、呻きな  
がら私の体はしびれ、溶けて  
いったの。……あゝ、話しな  
がらでも興奮する。あんたも  
大分、らしいわね。もうすぐ  
就寝の号令がかかるわ、それ  
からね。それからあんたの興  
奮を鎮めてあげるわ。

鉄火箸——鉄火箸と責めと  
は、離るべからざる関係があり、いろ／＼な  
ものに書かれているが、これは一寸異色ある  
ものと思つて採録した。これも、前出のペコ  
の告白の一節である。

……前略……中田のアパートで、碌々眠れ  
ないで夜を明かしたけれど、私は疲れるどこ  
ろか、却って彼から吹込まれた精気のために



ぱん／＼と張切って、翌る朝一先づ自分の常  
宿へ戻ってきたの。

がらつと部屋の襖を開けて、私は思はず、  
あゝ！と叫んだ。どうだらう。私のベット、  
妹の様に可愛がつてるシイ坊が、人もあらう  
に松下と、一つ蒲団のなかでかちりつきあっ  
て寝てるの。私はぐるぐるとめまひがした。

驚いて顔をあげた二人の頭の  
上へ「馬鹿野郎」とどなりつけ  
たの。「シイ坊！ 何てこと  
してるの。此奴は私の色男な  
んだよ。あんまり、なめた真  
似するない」私の見暮にびっ  
くりしたシイ坊は裸のまんま  
とびおきたの。

「ペコちゃん、ごめん、私そ  
んなことちっとも知らなかつ  
たのよ。この人が……」「何  
でもいゝよ。お前は着物でも  
きて、早く出てお行き」おど  
かされて、シイ坊は急いで洋  
服を着ると、部屋を逃げ出し  
てまったの。

「おい、あんな子供を相手に  
やくなよ。みっともない」

と松下は床の中でにや／＼してるの。……  
「馬鹿野郎！」といきなり私は、提げてた  
ハンドバックを彼の顔へ叩きつけた。

「何いってんだい。あんたのためにやいてん  
ぢやないや、シイ坊のためにやいてんだい……  
……」いひながら、私は劇しい興奮のために顎  
が、がく／＼ふるえ、口がきけなくなつて、



## 代理部月報

伊藤晴雨著

## 『美人乱舞』

戦前出版された翁の快著「美人乱舞」中現代に不向きなものを省き、これに書き卸しの原稿の外「女三十六景」の優秀作を加えた晴雨翁傑作集の定本であります。好事家のお申込みをお待ちします。

定価四百円（送料二十円）

もどかしさに、松下の脇腹のあたりをどんと蹴りあげたの。と、松下の体が裏返しにひっくりかへりながら、掛蒲団をべろっとはがして裸体がむきだされた。その背中のまだ生々しい傷跡を見ると、私の胸に、いつかの惨酷の快感がむら／＼と蘇り、燃えはじめて、その火を嫉妬と怒りが煽りたてたの。私は無我夢中で、部屋の隅にころがって太い火箸を手にとると、松下のむっくりした臂べたへ、力一杯びゅっ！と打ちおろしたの。うゝと唸って、松下が眉をしかめた顔を横にしながら「ふじちゃん、もっと、もっと……」とうわ言のやうにいふの。私のいかりが彼の悦びになる。その憎らしさに、私はかっかっか逆上せあがっちゃって、一本の鉄火箸に体中の力

が籠り、松下の肩から足先迄、びゅん／＼とめったうちうちつゞけたの。彼の体は腫れあがり、膨れあがり、真紅になった。撲ったことで、私にいかりがひろがってきた。もう松下へだけのいかりぢやないわ。いろんな憤りが、私の腕に命令してくる。松下はそのいかりの対象だけなの。私の腕には、神と悪魔が乗りうつって、こののたうちまはる赤豚を悦びの絶頂から苦痛のどん底へ、逆落しに叩きおとしてやらなければ容赦できなくなったの。私は鉄火箸を逆手に持ちかへた。そのとき私の眼尻は、きり／＼とつりあがってただらう。火箸の尖を松下の脇腹へ向けてきゅっとなぐったの、動物はぐっ／＼と唸ってびくんと跳ねた。跳ねた体を押へつけるやうに、火箸が

突く、突く、突く。松下はぎり／＼と歯を鳴らし、掌を握り締め、掌をひらき、脚を反らせ、脚を伸ばし、転げ廻り、跳ね廻るの。私の額からたら／＼と脂汗を垂らし、口を歪ませ、ぶる／＼と体をふるわせながら、この真赤な肉の塊にのしか／＼と、ひよい／＼と無茶苦茶につきまぐった。するとやうやく、彼に苦痛の表情がみえてきたの。「も、もう……やめ……て……」息も絶え／＼の彼の声を聞いたとき、私の身内をぞくぞく／＼と身震ひするやうな快感がつきあげてきた。私は、そのまゝ火箸を逆手にしたまゝ、もがき苦しむ松下の心臓目がけて、どさ／＼と蔽ひかぶさったの。……以下略……

◎切腹写真

立腹三態

手札型

三枚一組

二百円（送共）

◎新作・マゾ・フォト◎

春日ルミ嬢構成にかゝるマゾ・フォトは各種の趣向のものを撮影してあります。七月号、八月号で分譲広告した六種のフォトを購入済の方は、代理部宛御照会次第、在庫品につきお返事いたします。

—代理部—



# アブノーマル・ドリーム

(この拙文を春日ルミ嬢に捧げる)

岡田芳夫

私が、縛り絵、責め絵に興味を持ち出したのは十二、三才の頃です。当時少年講談などを耽読していたのですが、主人公である若侍が多勢の悪人達のために計られて縛られ、身動きさえ不自由な位に厳しく縛り上げられ、そして、残酷な拷問にかけられると云う様な場面を読むと、自分がそのヒロインになった様な気がして、何とも云えぬ快感を味ったものでした。

特に私の興味をそゝったのは、塚原ト伝が羽黒山中で山伏達の奸計に捕えられ、遂に吊しの極刑にされる場面で、凡ゆる雑誌、豆本

の類を探して、その場面の描写をむさぼり読んだものでした。或る本には、ト伝が全裸にされて高手小手に縛り上げられ、逆吊しにされたと書いてありましたので、自分で裸になり、幾重にも我が身に縄をまきつけて、自縛を試みた事もありました。

爾来十余年、常に縛り絵、責め絵を枕辺の友として日を送っています。従って二十六才の今日まで未だ童貞と云うのは、先ず徹底したアブ・マニアでしょう。——と云っても女に興味がないわけではありません。戦後、裸女の写真やストリップショウなどが自由に見ら

れる様になってからは、私も自然女の裸体と云うものに興味を持ち出していました。が、一昨年「奇ク」が小型になって、女の縛り写真や責め絵が多数掲載される様になってからはマゾ的性格が、サドに転換したのではないかなと思う程、女の縛られた姿に興味を持つ様になり、毎号を鶴首して待っている状態です。大体男はS七、M三と云われていますが、私は性経歴？から云って、今のところS・M相半ばしていると思っています。縛りたいと云う気持と、縛られたいと云う気持が常に交錯しています。こう云った気持が後述します



様な、連縛への憧れとなっているのかも知れません。

私は『奇ク』誌上では岡田咲子さんの作品と、滝麗子さんの作品とが最も好きなものゝ双璧です。つまり全裸であり（滝さんのは常にパンティをはいています）緊縛されそして凌辱される事、この三つ（私はこれを現代責めの三要素だと思っています）が何時も満足させられているからです。

男でも、女でも、常に全裸にされ、身動きも出来ない位厳しく縛り上げられ、拷問、凌辱を受ける事が理想なのです。

但し、凌辱といっても、二人が夫婦であるか、又は特定の場合でなければ、一定以上棒をはずした行為だけは許せません。それ以外の事なら何が行われても、いや、そこ迄行わなければアブノーマル・プレイとしての目的は達せられないのではないかと思います。私自身、若し機会があるならばそれに耐え、又そこまで女を責めたい希望を持っています。

× × × × ×

こんな希望を述べた私をルミさんが呼んで下さったのは、それから間もない六月の中頃のむし暑い日の夕方でした。

大阪南の或スタジオ——と云っても半分

旅館の様なところ——で

私は始めて縛られるモデルになったのでした。覚悟の上とは云いながら、若い女の人の前で裸になる恥しさ、全身がカッターと燃え上る様に感じました。パンツ一つになった私を突き飛ばす様にしてそこへ転がして、ルミさんは私の背に馬乗りになり、両の腕を後手に燃じ上げ細引で忽ちの中に高小手手に縛り上げられてしまいました。始めて味う縄の味、首、胸、二の腕、手首と、痛い程喰い込む縄目、これが私が永年望んでいたものでしょうか。ついうっとりとその緊縛感に酔いました。

ルミさんは七月号八月号の写真の様に、ブラジャーとパンティだけと云う服装で、壁に立ちちはだかり、犬でも引立てる様に縄を掴ん

で引き起し、あっと云う間に私の口へ靴下を押し込み猿轡をかけられました。今迄、ルミ



んの美しい脚、大腿を包んでいた靴下には、まだルミさんの体温と体臭とが感じられました。それが、それをゆっくり味う暇もなく、ルミさんの手が私のパンツの紐にかゝり、有無を云わず引下してしまったのです。覚悟は出来ていても、他人、殊に若い女性に見られる恥しさに私は首縄をとられながらも前かゝみになりました。

最初は型通り海老責め、首と足首の間を何本かの縄が往復し、次第々々に頸が自分の足の踵近くになって来ると共に、背中や肩の肉が骨から離れるのではないかと思う程でした。「どう、辛抱できる？ 大きな事云って、貴方、もう汗だくじゃないの、まだく、これからよ」

と云いながら、足の裏で私の首筋をぐいぐいと押えつけるのです。その度に今にも腰の骨が折れそうになります。そんな姿のまゝで何枚かの写真が凡ゆる角度から写されました。前以て断っておいたお陰で、顔は大部分が隠されましたので、これだけは安心出来ました。一段落つくと、今度は逆海老責め、女の方でもそうでしょうが、男の逆海老責めは又無残なものです。然し責め手にとっては実によい責め場だったのでしよう。耐えきれず

ウームとうめいて力を抜こうとすると顔を足げにされ、棒であちらこちらをつゝかれ通し「貴方は案外弱いね、本当ならもっといじめてあげるんだけど、今夜は時間もないし、それに正子さんとの連縛が目的なんだから、この位で勘弁してあげるわ、じゃ、正子さん用意して」

とルミさんが声をかけると、今まで私の責め役の手伝をしていた正子さんは、パンティ一つと云う姿になると、私と同じ様に細引で高手小手に縛られ私の前に引立てゝ来られました。そして、私のパンツが彼女の口を掩う猿轡に使われ、彼女のパンティが私の猿轡と早変わりしたのです。靴下と違って甘酸い女の体臭がつーんと鼻の奥までしみ通りました。あぐらをかゝされて引据えられた私の膝の前に正子さんは横倒しに、されたのです。

私が永い間希っていた裸で縛られた美女が今、目の前に横たわっているのです。ぼつとりと肉づいた正子さんの柔肌に縄目を心ゆくまで眺められるのです。おまけにカメラから顔をそらさなければならぬ私は、四方から照らされたライトで毛穴の一つ／＼までがはつきりと嫌でも見せられるのです。

次のポーズは背中合せ、これはともかくと

して次の抱き合せは私の望むところでした。これでもうおしまいだと思っていいたら、ルミさんはもっと残酷な縛りを強要しました。夫婦間でも余りやらないと云われる、シツクス・テイ・ナイン型です。

「さあ、連縛はこれでおしまい、今から本当の拷問よ」

とルミさんが言うが早いか、亦元の様に猿轡をされると、私は床柱のところに引立てられ、そして男の人と四人がゝりて床から二間程上に逆さに縛りつけられ、両の股は殆ど水平になる様に拡げられて左右の縄で張り合されました。丁度Yの字、いや殆どTの字型にされたのです。私を縛り終えたと今度は正子さんを引立てゝ来て、同じ床柱にやはり逆に縛りつけ、両足首を帯の柄の両端に括りつけて前へ廻し、ルミさんが床へ踏んづけるのです。ルミさんは手に鞭を持って正子さんの足を踏んづけています。

こんな馬鹿な夢があるもんですか、でもこれが私の見果てぬ夢なのです。連縛へ憧れる私のはかない夢なのです。夢の中の正子さんになって呉れる人が若し居られたら……私はとんで行き、春日ルミさんの鞭の下に身を捧げたいと思います。



# アクロバットに憧れる



王子多郎

人間がまるで、骨なしのように肢体が自由に曲って演ずるアクロバットに、私は限らない憧れを持っています。たしかに、私はごく幼い時から、そのような曲芸に強い欲求を持っていたのでしよう。私の幼い頃は、まだ半銭が使えた頃ですから、今から思えば夢のような時代でした。

其の頃、私の住んでいた下町には、多い日には一日に五人も六人もの物売や大道芸人達が長屋のはずれの四ツ角におとずれました。今から考えますとのんびりした時代で、風流とでもいいますかコツケイとでもいいますか、派手な印半纏を着た男がタライのような底の浅い器の廻りに、小旗を立て頭の上にのせ相棒の打つ太鼓に合せて身ぶり手ぶりもおかしく、関の五本松、安来節など唄って客を集めます。そして客の集るのを見計らって、片手で頭の上の小旗をぬいては、飴にさして売るなど私達、子供はそれが見たくてたまらなく何をおいても見に集ってゆくのでした。

或る時、玄関で呼声がするので何んだらうと思って出てみますと今までに見たことがない四十がらみの男が、美しく着飾った七、八才位の女の子を連れて立っています。するとその男の人は、さげているゴザを下にひろげますと、幼女はその上に坐り着物をぬぎ素はだかになって、こちらをちらっと見てニツコリ笑い乍ら体を後にそらしたと思った瞬間に、開いた両足の間から顔を出して、又ニツコリ私の方を見てほゝえむのでした。私はこのような女の児の芸人を生まれて始めて見たものですからうれしくてなりません。幼女の体は、まるでひき飴のように自由自在に動き、軽々しく立ち廻り、そり返ってその手を地につけたり、両足を右左に開いてそのまゝ坐る等、いろ／＼目新しい変った芸を、小半時間ばかり続けました。一

つの芸が終るたびに童顔をほころばせて愛嬌よくふるまい、人々の目をひきつけます。私はそれを見てよくもこんな小さな子供に、仕込んだものだと思えばかりで、茫然と立ちたまふ身動きもせず見つめていました。そのとき私の横にいた母が「もうその位でよろしいから」といって紙にくらかのお金を包んであげました。私はその時、初めて忘我の境から水を浴びせられたように現実に戻りました。と同時にその女の子が、帰ってゆくのが惜しくてなりませんでした。その女の子が帰ってしまうと、私はすぐ皆のいる前で今みたばかりの怪しげな芸当を、得意然とやっていたけ皆に見せつけました。それを見た母は、大へんに怒り家につれ帰られてさんざんに叱られ、今後こんなことをする子は家に置かないと言われて大声を出して泣いたものです。ちようどその時、私は八才でした。このような事があってから、私の頭の底には、その女の子の姿が消え去らず誰も見ていないとわかると、私はよくそのまねをしました。それは好奇心ばかりでなく段々やっているうちに自分でも驚くほど上達し、痛さの中に味う快よさが加わってとうとう押入や、ふとんの中で毎日のようにまね、今まで出来なかった事で

も案外案に出来るようになっていたので、それがとても面白くてたまらず、一日でも止めることが出来ない始末になっていました。

その頃、父の商売の都合で長年住みなれた名古屋を離れることになりました。そこで大阪の場末に引越したのです。私は子供心に変った家に住むのが嬉しいでした。その大阪に住みついて、間もなく私は母に連れられてサーカスを見に行きました。支那人の手品師が赤、黄、青の目のさめるような服を着て、顔の頬っぺたを真赤にぬり、鼻の先には墨をつけて、見物の人々をアツと言わせて見事に手品をします。その後で十才位の男の子が、皿をもって金をもらいに見物の人々の前に来ました。そして股のぞきをして見せ、再び舞台に戻ってその手品師と曲芸をして見せます。ガラंगा



ランという金属性のボンを叩くと、私は不思議な気持ちに誘われました。その音を合図に男の子は、くるりとひっくり返り、なんの苦痛



の色も見せずに起き上ります。私は胸に鼓動が高くなり、この興奮をどうすることもできませんでした。早速、家に帰り家人のいないのを見すまして、すぐ両足を開いて背をそらし、その手を下につけ頭もそれに伴って下になり、左手で左足首をつかみぐっと引き、今度は右手で右足首をつかんで、わけのわからない運動を力一杯にしますと、背骨がボキボキと体の中で不気味な音を立て、背骨が真中から二つに折れるのかと思われる程、痛くなりましたが、それでもふんばった股の間から頭を出します。だん／＼とそれにつれて息が苦しくなり充血するのがよくわかり、頭がじーんとなってきた、私はいつまでもこの苦痛が激しければ激しい程、快感の度合が加わり何度も何度もくり返すのでした。いつの日でしたか、人の気配に驚いたとたん、足がすべり両足の間から首がニョキンと出て体が二つ折になりました。その時の喜びは体の痛さなど忘れ、有頂天になって毎日の練習で自分の体が、この程柔軟になったことを知り涙があふれる程うれしかったです。それから、この時の快美感が忘れられず、体がどうにでもなれという度胸がすわり、思いきったことを次から次と移していきました。或る時、身体を

逆に二つ折りにしていると、だん／＼頭に臀部の重みを感じ丁度、自分の頭の上へお尻をのせていることになりました。伸ばしていた手をあげ、股の付根に指を掛けてぐっと締めつけた時の体全体がしびれるような快美感は、なににたとえようもありませんでした。

私がこのような一人曲芸に秘かな楽しみを味うようになった頃、次第に父の商売がうまくいかなく、暮しも日毎に燈が消えているように苦しくなっていました。そこで私もとう／＼父の知り合いの家に丁稚奉公として出されました。今までと違って主人にかくれてこのようなことが出来なくなった事は、私にとってどれほど悲しいことでしょう。来る日も来る日も本当に息がつまるようで、体全体がむずかゆくてなりません。人にかくれて便所の中で試みた事もありました。そうしたら私は、或る日、新聞で世界的アクロバットダンスという、見出しに胸がやぶれるばかりときめき、その見出しをみつめました。それは新世界の公衆座に、岡本八重子さんのアクロバットダンスが公開されたというのでした。その頃、岡本八重子さんは十二、三才。妹さんは十才位でした。その妹さんが現在、日本舞踊のある雑誌で拝見したのですが、東

京でアクロバットダンスの学校を開いているとの事で、私は尚そのアクロバットダンスの夢からさめきれずもう一度、ぜひ拝見したく思っています。そうして、許されば、助手にでもなって益々私の夢を育てていきたいのです。でもそれはむりな事です。それは私があまりにも年を老っているからです。それでせめて誌上ながら私の夢を、育て上げていきたいと願って筆をとった次第です。

## 本誌とKK通信の

バック・  
ナンバー 在庫

奇譚クラブ並にKK通信の旧号は左記の通り在庫しておりますから、未入手の方々は直接発行所宛御申込み下さい。

○本誌、昭和二十七年、十月号、十一月号、(一部送共九十円) 昭和二十八年新年号より昭和二十九年八月号迄、各月号共在庫(一部送共百円) 六冊分以上まとめて御申込みの方へは景品贈呈  
○KK通信、第十号より第二十一号迄在庫(一部送共二十円、六回分送共百円)

# 身を灼く女

松井 籟子

畔亭数久・画



小雨が軒を打ち出した。  
伊吹はなかなか帰えて来ない。  
マキはいらいらしている自分を、  
しいてなだめながら、病的に爪  
をかんでいた。

誰かの立志伝だったか、小説だったかに、ある男が性慾を我慢す  
る為、自分で自分の太腿に錐を突き刺したという話があったのを思  
い出した。

この体中が波立つようないら立たしさは、性慾なのだろうか。  
マキは坐ったまゝ着物の裾を開いて、腿を出してみた。白い腿  
は、冬瓜の切り口をふと連想させた。



マキは手の平で、その白い肌の上を撫でてみる。この上へブスツと錐を刺したら、どんなに痛いだらう。その痛さを考えると、頬の筋肉がビクツと動いた。

マキはその辺に錐があるかと探してもするように、あたりを見廻した。

殺風景な男の部屋は、煙草の匂いと、ボマードの匂いと一緒にしたような男臭い匂いがする。しかし、その男臭さの中で男を待っている、いらいらするのは性慾なのかとも思われてくる。

女は男と違って、はっきりそうだと断定出来るものがない。恋愛は美しい誤解だと言われているが、その誤解をうみやすいのは女の体のせいかもしれない。そもそも最初から、女は性慾ではない、恋愛なのだと思っている。

マキは伊吹を愛している。性慾なんかぬきにした愛情だと思っている。けれど、案外、敵は本能寺なのかもしれない。

軒を打つ雨の音がだんだん本降りになってくる。

マキが伊吹を知った晩も雨が降っていた。

伯母の家で泊るつもりでマキは勤務先の病院から外泊許可をもらっていた。ふだんは看護婦の寄宿舎にいるマキは、夜の大阪の街を歩くのは珍しいことだったのだ。

梅田シネマで映画を見て外へ出ると、雨が降り出していた。急ぎ足で阪急の方へ歩いて来たのだが、阪急を目の前に見ながら、交叉点が横切れない程の雨足になった。

曾根崎警察の屋根の下へかけこんで、夕立のような夜の驟雨を見ているより仕方がない。

その目の前へ、伊吹が傘をさしながら、とびこんできたのだ。

「伊吹さん」

マキは思わず声をかけた。

伊吹はとっさにマキと気がつかなかったらしい。彼女の顔を灯りにすかすようにして見たが

「ああ、あなたか」

とつぶやいた。

おそらくマキの名を知らないのだろうと、マキは彼がそのことに一寸当惑しているように思われて、クスンと笑った。

「こんなにこそどこへ行ったの？」

伊吹が聞いた。

「午後からお休みだったので映画を見に行ったのよ」

そんな会話のうちにも雨はやまず、軒下を求めて走りこんでくる人が多くなった。傘があっても、濡れそうな降りだった。

「濡れるの覚悟で少し行きませんか？」

伊吹が誘った。

「どこへ？」

「このさきに僕の行きつけのみやがあるのです。女の人にはむかない家だすど、此処に立って雨やどりしているよりは、まだましでしょう」

マキは「と」つ傘で、歩調を合わせて走って行った。雨は上から落ちるばかりではなく、地面からも噴き上げているみたいだった。「かどや」という軒燈の下を、店の中へとびこむと、わけもなく一緒に笑い出していた。それまで一言も口をきかなかったのだ。口をきくどころか、まるで陸の上で海水浴をしているようなあんばいで、歩調を合わせて走るのに精一杯だった。

「ひどい雨だ」

「ひどい雨ね」

同じようなことを同時に言った。そして又、わけもなく笑い合った。

マキの方はカルテに書かれている伊吹総一という名も生年月日も知っているが、伊吹の方は、スキーで捻挫した足の治療に通っていただけで、病院の看護婦さんだけ知っている。そんな浅い関係の二人が、雨に濡れただけですまなくなってしまったのだ。

## 二

今、マキは伊吹の帰えりを待ちながら、軒を打つ雨の音を聞いていると、回想はそのまゝ、布団の中できいたあの晩の雨の音に変わって行くのだった。

伊吹と雨やどりに入ったかどやという店は、降りこめられた二、三、の客が酔いのさめた顔でのれん越しに雨足を見ている他、客もなく静かだった。

「君は何という名なの？」

伊吹は言った。

「他の看護婦さんの名は知っているんだよ。丈の高い人が朝田さんで、目鏡をかけているのが早見さん、受付にいたのが林さんでしよう？　ちやんと知っている。君だけ知らないんだ」

「長谷川マキといいますの」

マキは自分だけ無視されたような気がして、何となく淋しかった。マキの方では伊吹総一と名まで覚えている。毎日何十人とくる患者の中で、姓はともかく、名まで覚えているのは関心の深さを物

語っているのだ。

来院した当時はスキーの陽焼けが残っていて、浅黒い顔をしていたが、一と月つゞけて長短波をかけにきている間に、生地は色白できめの細い女のような皮膚をしているのを知った。靴下をぬぐと、毛の黒さが反って皮膚の色を青白く見せるようで、マキはその足をいじるのが恥しいような気がするのだった。マキは多勢の患者は、ただ患部によって知っているだけで、男とも、女とも、思っていなかったが、伊吹総一だけは、男性だと思っていた。それはつまり、看護婦服の下のマキの女性が、伊吹に会った時だけ、看護婦ではなく、女性になるともいえるのだ。

それなのに、伊吹の方では、他の朋輩の名は知っているくせに、自分の名を知らないという。一寸胸のあたりにすき間風がしみこむような気がした。

しかし、その時、伊吹が言った。

「ああ、やっと君の名がわかった。マキさんか。僕はどうしても君の名をきくのが恥しくて。……いつもきこうと思ってはやめてしまったんだ。そうか、マキさんか」

そういう伊吹に、マキは急に背中が熱くほてった。

（うぬぼれてもいいんですか？）

と、心の中で伊吹に言う。それ程、伊吹の言葉の中に、マキへの好意がかくされていた。

ついにくれたビールを、マキも一口のんだ。病院のことや、スキーのことや、たあいのない話をしているうちに、雨が小降りになってきた。何となく別れて帰えるのが惜しまれる気持だった。終電車におくれる、おくれると思ひながら、そのことを言わなかったの



は、マキの心が、むしろ、おくれることを望んだからかもしれないかった。

甲東園の伯母の家へ泊るには、十一時半の神戸行に乗らないと連絡がない。病院へ帰えるのなら、おそくまで国鉄があるが、折角、外泊許可をもらったのに、病院へ帰えるのも残念だった。

帰えろうと立ち上った伊吹は、よろめいて卓に手をついた。

「大丈夫？」

マキは急いで支えた。



「大丈夫だ。君を送って行くよ」

「私ならいいの。それより、私が送って行くわ」

「どうせ同じ道だ、駅まで行こう」

伊吹はマキが病院へ帰えるものと思っているらしい。

マキは伊吹と一緒に国鉄に乗った。

駅をおりて、病院の方へ歩いて行こうとする伊吹に

「私が送って行ったら御迷惑？」

マキは聞いた。

「いや、どうせ会社の寮だからかまやしないが、僕なら大丈夫だから、君を送ろう」

「御迷惑でなかったら行かせて。私、男の人のお部屋って、見てみたいの」

「物ずきだね」

伊吹は言ったが、急に生き生きとして、

「じゃあ、僕の自慢のコーヒーを御馳走しよう」

と言いつつ、

雨は地雨に変わって、しとしとと降りつづけていた。

三

敷布団一枚に掛布団が二枚、それに毛布一枚あった。

伊吹とマキはそれを分け合って寝ること

にした。並んで寝ている耳に、ただ雨の音が聞えている他は、シーンとして、電車の音も聞えない。けれど、その静かさが、反ってマキを寝つけなくしていた。伊吹は眠ったのか、じっと天井を向いている。

しばらくして、伊吹が言った。

「マキさん、寝た？」

「いゝえ」

マキがいうと

「ねえ、変な頼みだけど、僕の手と足を縛ってくれない？」

伊吹はまだ仰向いたまゝの姿勢で言った。

「僕は君を引きとめて、不安になってきたんだ。男って仕様がね、僕の心と体が別の生きものになっていきそうなんだ。ねえ、僕の手と足を縛っておいてくれないか」

「えゝ、いゝわ」

マキはゴクンとつばをのむような気持で体をおこした。

伊吹はじっと動かない。

マキが伊吹の手を前で重ねようとすると、伊吹は寝返えりをうって、後向きになり、自分で両手を後で合わせた。

「それでは苦しいから前の方がよくはない？」

「しかし、前だと口でほどけるよ」

「大丈夫、足と一つにして結ぶから……」

伊吹は再び仰向けになると

「軽蔑する？」

と、マキに聞いた。

「うゝん」

マキは首を振って、伊吹の兵児帯で彼の手を前でしっかり縛り、そのさきを足首にまわして結んだ。

「私の友達で男の人にまじって寝泊りするような仕事をしている人があって、いつも寝る時、足を縛って寝るんだって言ってたけど、女が自分の足を縛ったって駄目ね、こうして男の人を縛っておかなければ……」

「しかし、これじや本当は役に立たないよ。ほら、こうすれば……」

と、伊吹は膝をまげると、上半身を起きあがらせた。兵児帯はゆるんで、彼が背をまげると、口が手首に届いた。

「あら、ずるいわ」

思わずマキは子供の遊びのような言い方をした。

「だって、君が大丈夫だと言ったんだよ」

「駄目、駄目よ、寝てなければ……」

マキは伊吹を押し倒したが、力が余って、自分も体ごと伊吹の上へのしかゝるように倒れてしまった。男の髪がマキの顔をくすぐった。唇がほんのわずかふれ合った。

「いけない子」

マキは伊吹にとり、自分にとりつかないようにつぶやくと、体を起した。

「さあ、本当に縛ってあげる。おとなしくしなければ駄目よ」

マキはいったん伊吹の足と手の兵児帯をといた。とたんに、伊吹の手がマキの肩に廻されて、マキは引きこまれるように伊吹の胸に体をよせた。

「いけないわ、いけないわ」

マキの声を伊吹の口が吸いとった。



「駄目、本当に駄目よ、そんな……」

マキは伊吹の手をのがれようとした。本当は唇を合わせることはそれ程不安ではなかった。ただ、そのあとにくるものが恐ろしかったのだ。

「もう一度だけ」

伊吹が言った。

「じゃあ、もう一度手を縛ってから……」

「接吻以上のことはしない。ねえ、いゝだろう？」

「でも、縛ってからでなければいゝや」

マキは不安なのだ。どうしても処女を守らなければいけないと思いいこんでいるような娘ではなかった。伊吹が好きなのだから、伊吹のされるまゝになることは厭ではなく、むしろ喜びなのだ。だからこそ不安なのだ。嫌な相手なら、おそろく処女を死守出来るだろう。マキはそうした娘だった。伊吹が好きだからこそ不安なのだ。自分の全てをさげたら、溺れそうな気がするのだ。だから接吻だけにとどめておきたい。

「さあ、手を後に廻しなさい」

マキは伊吹の手を後手に縛り、足まで縛ってしまつと、自分から、伊吹の唇に唇を近づけた。

急に安心したように、マキは大胆に彼の体を自分から抱くようにして、伊吹の頬にも、胸にも接吻の雨をふらした。看護婦という職業柄、伊吹の体の変化もよく解った。しかし、今は彼を束縛しているから大丈夫だ。

マキは伊吹の指を一本一本口にふくんで吸ってみた。軽く嚙んでもみた。まるで男を知っている女の様に。

伊吹は縛られたまゝで、とうとう一晩あかしてしまつたのだった

#### 四

マキは伊吹の体をあます所なく見たが、知ることにはならないかもしれない。本当に伊吹と深い関係を持ったのは、それからしばらくたってからだつた。

いっそ最初の夜、伊吹が暴力によつてでもマキの処女を奪っていったら、反つてマキは伊吹から心を離れたかもしれない。

最初の夜ばかりか、マキはよく寄宿をぬけ出して、不意に伊吹の部屋をおとすれた。泊らなくても、誰も入ってこない一室に、男と女が顔を合わせていれば、マキの処女を奪う位、わけのないことだったろう。

それなのに伊吹は、いつも

「あぶない、あぶない」

と、冗談めかして言つては、マキに手足を縛らせた。坐つていれば坐つたまゝに、両手を前で結んで、あくらをかいている両足に紐を結びつけたりした。

「僕はマキさんを好きだから、マキさんを自分のものにしたいよ。けれど僕には妻を養う能力がないんだ。だけどマキさんと一つ部屋にいれば、どうしても、愛しているということを体中でのいわせてみたくなるのは当然だろう。こうして縛られていれば、安心して君に会っていられるもの」

伊吹はそんなことを言った。

「でもつらいでしょう？」

マキは一時間でも二時間でも、手足を縛られていたら、どんなに

痛く、苦しいだろうと思った。

それに、伊吹が言うように、マキを愛しているなら、好きな女の前に、縄をかけられて坐っているという屈辱感はずらいだろうと思われるのだが、

「僕はね、とてもエゴイストなんだ。それに僕の月給と云ったら一万円そこそこだし……。君を僕のものにして苦しむより、こうして君に会っていられる方がいゝと思う」

と、伊吹は言うのだった。

マキはいつも伊吹を縛ったまま、接吻し、帰る時には、足の縄をといて、伊吹が口で、手の結び目をとけるようにして、そのまゝ出て来てしまう。いや、マキが出て来てしまうのではなく、伊吹がそうしてくれというのだ。マキが帰える時に、マキの手でちやんとといていったら、いきなり抱きよせないものでもない。自分の口で紐をとく時間が残されている方がマキを処女のまゝでそっとしておく可能性が大きいわけになるらしい。

しかし、マキははじめから伊吹に惹かれていたのだ。それが、一つ部屋で伊吹を縛り、接吻をくりかえしているうちに、マキの体の中でめらめらと焰が燃えてくるのをどうしようもなかった。

ある晩、マキは外泊の許可を得て寄宿舎を出た。外泊したら、あくる日、泊った家で外泊証明書を書いてもらえばいいので、それは伯母の姓の三文判さえ用意してあれば、誰に書いてもらってもすむことだったのだ。日曜日は休みでも、看護婦は交替で病院へ当直しなければならなかったし、外泊出来る日は月のうち、一日か二日だった。だから一応、外泊するには書類なり手続きなりをする寄宿舎の規律はあっても、抜け道は大目に見られていた。

その晩マキは外泊するのだということを、わざと伊吹に言わな

った、おそくまで伊吹の部屋にいて、彼の寢床をしいてやり、その上へ、いつものように彼の手足を縛って伊吹を寝かせると、彼の体を愛撫して、もし、伊吹の手が自由だったら、一匹の獣のように、彼女に襲いかゝらなければならぬようにした。そして、彼女は伊吹の足の縄をほどくと、いったん帰えるふりをして、外へ出て行ったのだ。

わざと煙草屋まで行って、ピースを一箇買った。そして、一本ぬき出すと、煙草屋でマッチを借りて火をつけた。

（私は今日、私から私の処女を破るんだ）

そう思うと、煙草の味がほろ苦かった。

（いゝえ、私は私の処女を破るんじゃないわ。伊吹さんを私のものにするのよ。男の貞操を破ってやるんだわ）

マキはそう思い直して、昂然と、煙草の煙を夜空にふいた。

伊吹の部屋へ帰えると、彼は手の縄をやっととき終えて、寢床の上に坐っていた。

「今日はあんまりおそいから、此処へ泊めてもらおうわ」

マキは言った。

「僕はもう手や足が痛いから、今日はかんべんしてくれよ」

伊吹は言った。

「そのまゝでおやすみになればいいわ」

「だって僕、自信ないよ」

「私のこと好きじゃないの？」

「好きだから困るって、前から言っているじゃないか」



「好きならいいの。私も伊吹さん好きよ」

マキは自分から伊吹の胸に身をなげかけた。

## 五

それから一年。

伊吹の方からマキに誘いかけることは決してなかった。

（いいの私が伊吹さん好きなんだから……。伊吹さんが愛してくれなくてもくれなくても、私は彼なしでは生きられないのだから……）

マキはよく、そう自分で自分に言った。

休みの日に郊外へ行こうと誘っても、伊吹は金がないという。

「僕はこうなるのが苦しいから自制していたんだ。それなのに君が……」

二た言目にはそう言った。

「いゝわ。私が出すから……」

マキとても、沢山の月給をとっているわけでもない。洋服もいるし、靴下もいる。遊ぶほどの余裕はないのだった。

けれどその中を無理して伊吹と映画を見に行ったり、御飯を食べたりした。一枚でもよけいに欲しいくらいの着物さえ、売り払ったこともある。

伊吹はマキを看護婦はしていても、金持の娘だと思っているみたいに、マキが金の苦労をしても平気でいた。

そのうち、マキが病院からぬけ出してたずねてきても、部屋にいないことが多くなってきた。

今日もマキは夕方から待っているのだ。土曜日だから、伊吹の会社は昼までで終わっている筈だった。

卓の上にはマキの用意した夕飯がおかれてある。まだ季節に早い胡瓜やトマトを買う時、マキはその値段に一寸躊躇したが、外食ばかりしている伊吹に、せめて新鮮な野菜を食べさせたいと思って買って来たのだ。

（今頃まで、何処で何をしているのだろう）

と思うと、マキは妙に胸がどきどきしてきた。伊吹に新しい恋人が出来たのではないのかと思うのだ。

（嫉妬……）

そうかもしれない。しかし伊吹が他の恋人を抱いている姿を想像するのは嫉妬ではなくて、性慾なのではないだろうか。伊吹によって目覚めさせられたマキの中の女が、むくむくと手足をのばして、あばれ出している。

軒を打つ雨の音を聞いていると、マキは雨の中へ走り出したいような気がしてくるのだった。女がヒステリーになるのは、こうしたいら立ちが積み重なるからかもしれない。深い男の愛情に包まれている女は、ヒステリーなどというものは知らないのですごさだろう。男の愛が薄くなると、女がいら立ち、そして、男はよけい女から離れ、女のヒステリーはよけい昂じるといのが、世の中の慣習のようなものなのだろうか。

（私は絶対ヒステリーなんかおこさない）

マキは心の中で叫んだ。

もし此の苛立ちが性慾なら、太腿に錐を刺す方法もあるだろうし、もっと自然にそれを解消させてくる方法もあるかもしれない。

マキは御便所へ立って行った。

しかし、便所の安ペンキの匂いと、汚物の匂いの中で、自分で自

分を満足させるのはあまりにみじめだった。

部屋へ戻ると、伊吹が帰っていた。

「おそかったのね」

マキは出来るだけおだやかに言った。

伊吹は答えない。

「御飯食べて来たの？」

「あ」

伊吹は短く答えた。

「そう。折角、御馳走こしらえておいたのに……」

マキは卓の上をうらめし気に見た。

「私、御飯食べないで待っていたのよ」

伊吹はだまっている。そうかい、済まなかったなとマキは言ってもらいたいと思ったが、その気持が伊吹に通じたのか、彼はマキの望んだものを逆の立場から言い出した。

「僕は君とこんな関係になるまで、何処でめしを食おうが、何時に帰えろうが自由だった。どうして君は僕を束縛するんだ。」

「べつに、束縛なんかしやしないわ」

「してるじやないか。勝手に夕飯の用意をして、僕がそれを食べないということ、ふくれた面をしたり、泣き顔をしたりするじやないか。僕はこんな風な束縛より、肉体的な束縛の方がどんなにいいか。僕は肉体的な関係をもつたらず女房きどりになるから厭なんだ。それが解っていたからこそ、僕は君に手足を縛ってもらっていたのだ。ねえ、マキ。僕と別れてくれよ。僕に昔の自由をあたえてくれよ」

「あなたはいつだって自由じやないの。べつに私は女房じやないん

だし、金銭的な負担をかけているわけでもないし……」

「けれど、君は金銭的負担をかけていないということを、僕に無形の重荷に背負せてくるじやないか。さもないければ、すぐにその言葉が出てくるはずはないよ」

「じゃあ、私、どうすればいいの。こんなにあなたを愛しているのに……」

「別れよう」

「別れるのは厭！」

「この部屋は僕の部屋じやなくなってしまったんだよ。といって、僕はよそへ引越す金もない。この部屋は僕の部屋であって、君の部屋になってしまったんだ。今日みたいな気持のいい夕方に、雨に濡れた御堂筋を歩いて、心斎橋からネオンの色を見ると、何かしら失ったものが心の中にかえって来るような気がするんだ。此の部屋へ一步入ると、とたんにめちやめちやになってしまう。お願いだから、僕をひとりにしてくれないか」

「この雨の中を、寄宿へ帰えれというの？」

「僕は空気のような女が欲しいんだ。けれど、君はどこまでも君だよ。空気じやないよ」

「だって、私、今日此処で泊るつもりで来たのに、帰えれなんて、あんまりだわ。此の部屋は空気だけじやないわ。机もあるし、おふとんもあるし、本もあるわ」

「おしやべりする机なんてみたことないね」

「私、今日はどうしても帰えられない。そんなに邪魔なら、部屋の隅で置物のようにじっとしているわ」

「君にそんなこと出来ないよ」



「出来るか出来ないかやってみる」  
マキは坐禅をするように、押入の前に坐って、じっと目をつぶった。一年の間の出来ごとが映画のスクリーンのように頭をかすめて通る。自分は伊吹を愛した。けれど伊吹は自分を愛してくれなかったのだ。そう思うと、心臓がしめつけられるような気がした。

(愛されたい……伊吹に愛されたい！)

マキはそう思う。

しかし、目をあけると、伊吹はマキに背を向けて、知らん顔で本を読んでいる。

(ああ、何故、私から離れようというの？ 気に入らなかったら殴ってくれてもいい。別れるなんてあんまりだ。もっと私を束縛してくれてもいい。私は自由なんて欲しくない。伊吹の愛情に縛られるなら、一日部屋の中から一步も出られないように監禁されたってかまやしない。それ程愛してくれるのなら……。あゝ、私は愛されたい、息苦しい程に愛さ



れたい……)

マキは思った。伊吹の無関心が淋しかった。

「ねえ」

マキは彼に呼びかけた。

伊吹は振向きもしない。

「ねえ」

もう一度よぶと

「うるさいな」

と、伊吹は言った。

「やっぱりしやべるじやないか。置物のようにはしてられやしないよ」

「口がきけるからしやべるんだわ。

私の口に猿ぐつわをはめておいてよ」

「そんなことされるより、帰えれば

いゝじやないか」

「いやなの。今日は帰えらない」

「強情っぱり」

伊吹は怒ったように言った。

マキは彼が怒っていても、知らん顔されているよりはましだと思っただ。もっと怒らせてやろうと思いついた。

「ねえ」

マキはわざと、伊吹の後から両手で彼の肩を抱いた。

「僕を静かにさせてくれよ。本も読めなくさせたいのか。いつまでも僕をこんな会社で一万円そこそこの給料をとるだけで終らしてしまいたいのか」

「そうよ、私が愛していればいゝじゃないの」

「そんなの愛情とはいえないよ」

「いゝわよ、私、あなたの勉強の邪魔してやる！」

マキは手をのばしてスーツと本をとった。その本が伊吹の愛情をうけているように頬にさわったのだ。

「何するんだ」

伊吹は怒って、マキの手をねじった。

「痛い！」

マキは悲鳴をあげた。

「放せ、本を放せ。無理したら本が破けるから放せ」

「厭！ 破けてもいい！」

「こいつ！」

伊吹の手がマキの頬にとんだ。頭といわず、顔といわず伊吹はマキを殴りつけた。

「痛い！ 痛いわ！」

マキは泣き声をあげながら、伊吹が自分にかまってくれていることに不思議な安心を感じていた。

「放さないで、ひどいめに合わせるよ」

「いゝわよ、誰が放すものですか」

「よし」

伊吹は煙草に火をつけると、本をつかんでいるマキの指におしつけた。

「熱ッッ！」

マキが歯をくいしばってこらえると、又、次の指へ火をつける。それでもマキが放さないと、両手でマキの指を逆に押し下げた。

「ああッ！」

と、思わずマキは本を放してしまった。

それでもまだマキは伊吹に武者ぶりついていった。

伊吹がマキの手を後手に縛りあげ、足と一つに蝦のようにしてしまふまで、マキは抵抗をやめなかった。

その争いの醜さを、伊吹はたまらなく思ったらしい。蝦のようにしたマキの体を、顔をゆがめながら、こずきまわした。

「こんな風になりたくなかったんだ。男と女のこんな姿は、俺は厭なんだ。それなのに、ばか、ばか！」

と、伊吹は、「ばか」という言葉を自分自身に向かって言うように叫びながら、マキを滅茶滅茶に打ちすえた。打っていた手が痛くなると、ズボンのベルトをはずして、それをビシッ、ビシッと振りおろした。

伊吹は泣くように罵りつけた。

その下で、マキはビクッ、ビクッと虫のように体を動かしながら、

「あゝッ！ あゝッ！」

と、叫びつづけた。

そして、それはまるで

「もっと、もっと打って！」



と言っているように、マキは伊吹に打たれていることが快かった。打たれている間だけ、憎悪であっても何であっても、伊吹の心がマキに向いていることに満足しているのかもしれない。

トタン屋根を打つ雨の音は漸く激しく、この地獄図絵をあたりの世界から隔絶してしまふのだった。  
(おわり)

# て 責めの 実験 女 装 し

岸 本 青 柳

黒潮洗う岸边にも、オレンジ響る暖国紀州  
を表徴する五十五万五千石の、虎伏山城は徳  
川御三家の親藩として、葵の金紋の威力を三  
百五十有余年間も永らく誇っていたものだ。

だが、去る昭和二十年七月九日夜の開闢以来  
始めて蒙った大空襲の為に、この国宝和歌山  
城は勿論、市街の繁華街と言わず、都心地と  
を問わず何れも灰燼に帰し、ローマの廢墟そ

の儘の惨憺たる一望千里の焼け野原と変貌し  
た、がその後九ヶ年を経た今日では、学校、  
道路、橋梁、住宅、公園等々と着々復旧され  
て、新生都市を造成するに至った。唯一つこ  
の大空襲にも逢わず、旧態を保存している紀  
州御浜御殿のみは、港の入江に臨んで、屋敷  
も屋形も池も芝生も、鬱蒼と繁る樹木も皆、  
昔時その儘の美しい姿を誇っている。

此処の御浜御殿には、昔からいろ／＼の猥  
奇的な怪談があり、それを劇にも演ぜられた  
こともあった。「紅葉狩」の一場面もそれで  
ある。この劇の筋を、詳述すれば長くなるの  
で省略するが、このお屋敷を預っている或る  
淳朴な老夫婦があった。この夫婦の間に美し  
い姉と弟とがあり、何れも相当な教養があり  
附近の人々からも非常に親しまれていた。姉  
は須磨子と呼び、年頃になって京都の郊外へ  
お嫁に行き、三人の子供を生み今でも相当の  
生活を営んで居る。弟も亦大阪の近郊で学校  
の教員を務め、夫婦の間に女ばかり二人の子

供があつて、一家四人が団欒の家庭を作っている、と、こゝまでは普通一般の人々とは何等の変る所がないのである。

ところがこの教員は姉の美貌と同じく好男子ではあるが、一風変わった趣味の持ち主である。勿論それを知る者は広い世の中で誰一人としていない、が、私はこの教員とは竹馬の友であり、性質もよく合うので今でも交際を続けている。或る日、この教員の変った性癖の真相なるものを語り聞かされ、また写真や絵画を見せられて、始めてその真実なことを承認したのであった。その内容を詳しく話せば長くなるので、たゞ要点だけを話して何かの参考になれば結構だと思っている。

教員の名は祖父の名を継いで梅十郎と呼んでいるが、友達は今まで「梅ちゃん」の通称で呼んでいる。この梅ちゃんは二十四、五才位から、女装して縛られることを無上の愉快として、常にその実験を怠らないで、今日では本ものの、いや女子も及ばぬほどの女装振りを発揮している。

女装して縛られるという動機の一つとしては、彼は或る田舎の芝居を観た時、当時流行の壮士芝居で、お家騒動に出て来た悪い執事が、奇麗な令嬢を裏庭の泉水の松の樹に縛り

付けて、責め折檻をした美しい場面を観てから、毎晩妻の静江さんをモデルにして、人々の寝静まった頃、室内や庭園でこれを実験した。奥さんの柔かな白魚の様な両手を、情け容赦もなく後手に高手小手に細縄で幾重にもつり上げ、棒切れで所嫌わず打ち続ける。遂には黒髪も乱れ、長繻絆や緋の腰巻もまくれて、肌もあらわに、顔面蒼白となり、口元も曲んで、ハラ／＼涙を流しながら苦痛を訴える。こんな事を毎晩繰り返している中に、始めの頃は妻の静江さんも、余りの苦痛に無断で逃げ出そうとした事も幾度もあったが、責め折檻が度重なると、苦痛が快楽に変わって、もっと強く縛ってほしい、もっと強く叩いてほしいと強要する様になって来た。

そればかりではなく、夫の梅ちゃんに自身の普段着や袂の長い訪問着を着せたり、長繻絆を着せたりして、梅ちゃんを高手小手に縛



って責め折檻してみたいという気持が起きてきた。梅ちゃんも亦、妻の着物を着て縛られて、責め折檻されることに、天にも地にも居られない程の楽しみを覚えて来た。

そのうちに子供も生れたし、妻をモデルにするよりも、自分が女装して縛られる実験を



するといった方向へ熱心になったのである。  
梅ちゃんは、妻の静江さんの、荒い碁盤縞の長い袖の黒襟の付いた袴の着物に、赤い長縞縞、緋の蹴出しを着て、縹子の帯、紅白の扱帯、淡赤の帯締めなど用い、御叮嚀に顔に白粉を塗り、新蝶々に結ったカヅラを冠って完全に女装してから、大黒柱に長い細縄を結



び付け、これを自分の手を後に廻して、幾重にも身体に巻き付けて、雪姫や浦里よろしくの姿態で、自縄自縛を実験して独り歓楽境に入るのである。或る時は庭園の檜の樹から太い縄を吊して、梯子を踏台にして両手を後手に縛り、縹子の帯の間を通して、身体に別の細縄で幾重にも縛って置いて、踏台から離れ

て自分の身体を吊り下げ、両足をバタバタさせる、といった恰も番町皿屋敷のお菊を実地に体験しては、武陵桃源の境に入ることも屢々である。偶には両足、両手を堅く縛って逆吊りをすることもある。また、吊り下げた身体を、奥さんに責めて貰って快楽に耽ることもあるが、妻を逆吊りにしたことは未だ一回もなかった。

斯うした女装して縛られた実験をするかたわら、暇さえあれば、縛られた女の絵を画いたり、髪結弟子や和裁縫の弟子をモデルに使って、縛られた女の写真を撮影したりして、愉快な日々を送っているが、裸体には全然興味がなく、種々の和服のみを用いて、美貌の婦女を縛ったり、自分も、女装して縛られる実験と研究、古今の刑罰資料蒐集には、これまで相当の費用を入れたと言う事だ。

(終)

【註】挿入の写真二葉は筆者より送って来られた四枚の中の二枚で、何れも女装して縛られている所を撮影したものだそうです。次回には更に新しい写真の紹介を約しておられます。

## あるマゾヒストの手帖から

沼

正

三

## 第六十三 奥様の反吐

手帖第八項で私は、私の祖父が政府高官M—後の伯爵——家の御抱え車夫だった頃、奥様のお気に入りとなり、臨月のお出まし先で奥様お伴の小間使をさしおいて、下の始末をする御用を仰せつかった、という話を書いたが、その時、祖父のことは更に取上げると予告しておいた。ここでその約を果そうと思う。

老年の祖父が手酌まじりの一杯機嫌で自慢話したところによると、彼が奥様のお気に入りとなったのには、それ相応な理由があった。ある日奥様がS家を訪問された。出がけに、欠かすわけに行かぬ儀礼だから無理に起きたけど気分が悪いなど家族と話すのが耳に入ったし、御顔の色も悪いので、彼は出来るだけソロソロと走った。無事到着して、奥様と小間使とを奥に送り込むと、彼は玄関先の植込に蹲んで待機した。普通門番小屋などで雑談しているものだが、さすが、いとお帰りとなっても慌てぬよう、ずっと玄関脇で待たせるのが車夫に対するM家の躰けであった。

可成り時間の経った頃、祖父は急に「小吉！」と自分の名を呼ばれるのを聞いた。玄関を覗くと、驚いたことには、奥様が真青な顔で式台の上に片膝をつき、その横にはドロツとした一かたまりの汚物が、たった今嘔き出されたばかりとおぼしく、異臭を放ちながら次第に四方に拡がろうとしているところだった。彼女は立上りながら、その反吐の方を顎でしゃくって、「これ」と一言いった。まだ喋るのが苦しそうだったが、「これをすぐ始末しておくれ」という命令であることは明らかだった。

「ヘイ」と答えた瞬間、祖父の頭に反射的に浮んだことがあった。それは彼の小さい時、親から聞かされた話だったという。祖父は藤堂藩の下人の息子だったのだが、

昔藤堂藩主が参勤交替で千代田城に登城した時のこと、食当りか何かで気分が悪くなり、長廊下を退出して来て、従士の平伏して待っている前迄来ると、急に嘔吐してしまった。後からは人が歩いてくる。切羽詰った瞬間、藩士の一人が「御免」と一言、身を乗出し袖をひるがえしてその反吐を覆ったまゝ平伏したが、忽ち身を退いたと見れば、嘔吐された物はもう影もなかった。お蔭で



藩主は何の粗相もなかったものの、きまりの悪い思いをせずにすんだ。あとで高祿を増加してこの忠義な藩士の適切な処置に答えたという。(以上は又聞きであるので詳しい正確な話を知らぬ。藤堂藩は伊勢であるが三重県の人でチャンとした云い伝えなり文献なりを御存じの方はないだろうか。)

これは「主人の恥辱を救うという至上命令の前には家来個人の生理的嫌悪感などは物の数ではない」ということを通して、忠義の如何に大切であるかを教訓しようとする逸話であって、昔の人はこうして物心つかぬ頃から忠義とか孝行とかを頭に浸み込まされたのだ。(私は小学校の時、敵に囚えられた親の命を救うために、人間の血をコップに一杯呑み干した六ツ七ツのアメリカ娘の話を、修身の時間に孝行の例話として聞いたのを思い出す)三ツ子の魂百迄という。殊に祖父のように一生人の奴僕として生活していた者にはこういう忠義教育は百パーセントの実効性を持っていた。とにかく彼は、奥様から、反吐の処理を命ぜられた瞬間この幼時聞かされた話を思い出した。封建的忠義教育は見事に結実したわけだ。

それに、偶然その時には玄関番の部屋にも人がいなかった。奥様のお伴して来た小間使の姿も見えなかった。奥様の嘔吐を知っているのは祖父一人で、彼が迅速に秘密裡に処置すれば、それは誰にも知られずに済むことが明らかだった。奥様もそれを望んで彼に迅速秘密の処置を命じたのだと思えた。それが彼の心理に作用して、益々あの藤堂藩士の英雄的行為を強く想起させた。



事態は急迫していた。雑巾なんか取りに門番小屋までいく余裕はなく、又それでは事を暴露する。愚図々々していれば奥から人が来る。未然にそれを救うのは彼が子供の時から聞いていたその方法がある丈だった。

こう書けば長々しいが、祖父自身には省察も迷いもなかったらしい。咄嗟の判断で右の結論に達した彼は「ヘイ」と答えた次の瞬間には、式台の上に這ってドロドロした汚物に口をつけ、ズルズルと吸り出した。

と、立上って傍に立っていた奥様が、又「ゲーツ」と嘔いた。今

度は少しだったが。祖父が慌ててそちらに飛びついて口をつけると奥様は、そのまゝスタスタと奥へ戻っていった。それを彼女の白い足袋の動きで知りながら、彼は全部吸り尽し、あとをお仕着せの袖で拭いた。よく拭き込んである式台は、もう何の痕跡も止めなかった。玄関を彼が出る頃、S家の玄関番の書生が戻って来たので、彼は天佑だったと喜び、自分のしたことに満足を感じた。

間もなく奥様は御帰宅になったが、その帰途も、それから後も、このことについて、一言も仰言らなかった。彼はかの藩士が高祿の加増を得たように自分の待遇が改善されるとは思っていなかった、すべてを秘密にするために、奥様は彼のことを殿様へ（これが家人のM氏に対する呼称だった）に賞めるわけにはいかないのだから。——然し、少くとも内々で「あの時は御苦労だったね、おかげで恥をかかずに済んで助かったよ」というねぎらいの言葉や、御褒美を賜わる位のことには期待していたが、何のこともなかった。

然し、奥様は決してあのことを忘れているのではないことが分かって来た。というのは、お出ましの時には特に「小吉」とお名指しになる時が多く、他のお抱え車夫から「小吉は奥様のお気に入りだ」と認められるに至ったからだ。奥様の態度も変って来て、彼を何となく親しく感じておられるように思えた。祖父は物質的には何の酬われるところもなかったが、精神的には、奥様のごひいきを自他共に許し得るに至ったことで、充分の満足を感じることができた。

× × ×  
以上が祖父の語ったところである。

あり得べき誤解に対して先手を打っておくが、祖父はこの奥様に對して、（少くとも意識的には）ちっとでも惚れていたわけではな

い。私の祖父は主筋の人に対してそんな不遜な氣持を懷くような人ではなかった。献身的な愛情は持っていたろうが、性的ではなかった。又、平生から汚物に興味をもっていたのでは決していない（私の祖父だから、というので彼もコブログニストだったろうと解されては迷惑する）。老後の生活においてもむしろ潔癖な方であった。だから、祖父の行動は、決して私のような性的異常心理に基くものではなく、全くあの藤堂藩士の逸話に誘導されての忠義一途からの行動だった（と少くとも私は信じている）。

祖父は戦前に死んでいるので、コブログニストになってからの私は、この話をもっと詳しく聞いておかなかったことを残念に思っているが、聞いた限りのことを幾度か反芻したり、別途調べたりする中に、湧いて来た疑問を、読者諸君の参考のために、ここで書いておこう。

それは祖父が奥様の心理を全然感違ひしてたのではないかということである。

奥様の嘔吐したのは悪阻<sup>つわり</sup>じゃなかったろうかと祖父は云っていた。彼女はS家の座敷で急に嘔氣を催おしたが、小間使に知らせるため声を出してさえ嘔きそうなので、口を閉じたまま、屋敷を出た。所が便所に行くつもりが始めての他家で案内が分らず、氣もせいであるので、間違つて玄関の方に出てしまい、捜し直す余裕もなく、いっそ外に出て、と思つて式台下りた途端嘔いてしまった。そこで玄関先にいる筈の祖父を呼んだ。祖父が処置してる間に何喰わぬ顔で座敷に戻った。奥のみんなは便所にいったと思ひ込んでいたので少しも疑わなかった。——これが祖父の推測で、誰に確かめたわけでもないだろうが、恐らく當っているだろう。問題は彼女の心理で



ある。

確かに他家の玄関を汚して大変な失態をしたとは思っただろう。

S家の人を呼ばず、一番手近な所にいたとはいえ、自分の召使を呼んで始末させようとしたのも、できるだけ事を内密にしたいという気持があったとはいえるだろう。然し「これ」といって顎で祖父に指図した時、果して次の瞬間に彼のとった行動を予期していただろうか。否であるう。

嘔吐するため思わず蹲んだ時の姿勢から立上りながら命令したというのだから、彼女は彼がすぐ雑巾でも取りに走り出すのを見ればそのまゝ奥に戻るつもりでいたのではなからうか。——ところが、祖父はいきなりその場に這って吸り出した。意外さにあきれて、戻るのが忘れて突立ったまゝ見てる中に、あまりの汚ならしさに又胸が悪くなって、又嘔いた。そしてたまらなくなつて奥へ姿を消した。……というのが真相ではなからうかと私は考えている。二度目の嘔吐などはこう見た方が理解できるような気がする。

祖父は自分の行為の正当さを自負し、奥様は当然彼を徳としたに違いない、と思ひ込んでいた。然し右のように考えると事態は異ってくる。内密にしたいとはいっても、嘔吐は生理現象である。仕方のないことだ。それを祖父のようなやり方で処置せねばならぬ必然性は彼女には考えられなかったかも知れない。自分の足許で自分の反吐を吸る車夫を見下した彼女の心中は果してどんなだったか。

古い紳士録で調べるとM夫人の父君は有名な県令で、明治二十年には子爵にたつていた人である。子爵令嬢であり高官の夫人である女性が、果して祖父の必理を理解したかどうか。対等の人格は同階級の人間にしか認めないのが封建的な貴族の常である。まして車夫な

んかは彼女の目には馬の代りとしか写ってなかっただろう。祖父の処置の必然性が理解できぬまゝ、黙って見ていた彼女の心理はそういう差別観を前提としてしか考えられない。対等な人格者がそんなことをしたら、彼女はきつと止めたろう、そして彼が氣も狂つてないのにそんな行為に出たわけを知ったら、きつとあの藩主のように感謝したに違いない。所が彼女は黙って見ていた。汚物が見る見る掃除されてしまふのは、彼女の失態がこの男以外の誰にも分らずに済むことで都合のよいことに相違なかった。だから黙ってさせておいた。然し彼女は、その行為に払われた彼の人格における自己犠牲には想到し得なかった。何か器物で掃除させるつもりで命令なのに、この男はそれを皆吸ってしまふ。何という汚らしいことをするのだらう、これが人間のすることだらうか。それは嫌悪感だけをもたらし二度目の嘔吐となった。その彼女に何の感謝があったらうか。踵を返して座敷に戻る彼女の心中では、車夫の「小吉」が一層賤しく、一層軽蔑すべき、正に畜生同様の奴としか考えられなかったのではなからうか。

彼女が結局彼に何の感謝の意を示さなかったのは当然である。期待した祖父の方がどうかしていたのである。だから彼が精神的報酬だとして喜んだ奥様の「ごひいき」というのも別の解釈を要求される。

彼女は結局祖父を使い易く思つたのだらう。どうせ馬同然に思っている車夫共だが、だからといって、その前でどこまでも氣が許せるわけではない。その中で祖父には特別の氣易さが感ぜられたらう。「小吉はあんなことまで平氣でした」という記憶は、「彼に対しては何の遠慮も要らない」という安心感を与えたのであるまいか。それが、彼女のお気に入りとなり、専属見たいな状態になり、第八項

のような仕事まで彼がするようになった最大の原因ではあるまいか。新らしく来た召使は使い難いが気心が知れるにつれて使い易くなる。これは別に主人が召使に対して親切になったというものではないが、少しでも主人の用をしたい、親しく仕えたいという気持の召使には嬉しく思えるかも知れない。丁度この新来の召使に対する主人の変化のようなものが、祖父に対する奥様の態度に現れたのを祖父は嬉しく思い、彼女が感謝の念からそう変ったのだと錯覚してしまったのであろう。

祖父の話はそういう様にも理解できると私は考える。だが、そのいずれにせよ、その場面における祖父の姿は私には羨ましい限りである。紳士録ではM夫人は明治三十二年生でこの時は二十台である。明治二十二年に生れた長女は有名な美人として知られたし、そのお方の娘即ちこの奥様の孫娘も現に日本有数の美貌の貴婦人といわれているから、彼女も当然臘たけた美人だったに違いない。そんな美しい若奥様の足許に這って彼女の身体から出たものを豚のように貪り啜る男、その姿を想像するだけでも私の血は湧くし、その男が私の祖父なのだと考えるといつても（こう書きながらも）恍惚状態に運ばれてしまう。——祖父の主人思いからの行動を性的快感のために利用していると知ったら、地下の祖父はさぞ怒ることであろうが。

## 第六十四 淨穢不二の修行

もう一つ反吐を食った話。出典は失念したが、山岡鉄舟の逸話である。鉄舟は幕末三舟の一人で、江戸城明渡の時交渉に先行した立役者だし、御一新後は明治天皇の侍従となったので有名だが、剣客

としても当時の一流だったし、又深く禅を学び修養が出来て、乱世に処して一生一人の人も斬らなかつたといわれる。劍禪一如の高士であった。

さてこの山岡鉄舟が、剣道の門弟と二人で船に乗ったことがあった。門弟は船に弱くて、酔って嘔吐してしまった。所が鉄舟は嘔き出された汚物の上に顔を寄せて、いきなり口をつけ、忽ち食べてしまった。門弟が驚いて、

「先生、汚いじゃありませんか」

というと、鉄舟は平気な顔で、

「ナニ、淨穢不二の修行をしたまでじゃ」

といって済ましていたそうである。

淨穢不二とは面白いことばである。禪門の思想であろう。門松は冥途の旅の一里塚、なんて皮肉な見方をする人から見れば、万物の靈長と威張ってるが人間なんてくそ袋である。美人といっても皮一重だ。物の本質に徹すれば、表面上の綺麗汚ないは差別に値いしない。鯉の刺身を食って池に吐き出せば生きた鯉になったという一休禪師は、逆に人の吐き出したものでも御馳走として口に入れることが出来たかも知れない。淨穢不二。——祖父の前項の行為なども、忠義の一念、主人への献身的愛情から、おのずから淨穢不二の境地に達したもので、匹夫と雖も誠心あれば、達人のように禪の活機に参じうることを示すものといえよう、丁度春琴への献身的愛情から自ら針をとって己が目を潰した佐助の行為を義山和尚が達人の所為に庶幾しと賞めたというように。

俺だって……というコブロ派の読者があるだろう。だが待ち給え。諸君に名乗らせる迄もなく、私だって、そういえば淨穢不二で



ある。人の口にせぬものを平気で口にしている。……

尤も、私や諸君のは正しい淨穢不二とはいえない。それは限られている、ある特定の人に結びついてのみそれを口にすることを敢てするのであり、その心理過程を見れば特定の人との結び付きによつて、穢を淨に転化させているのである。M夫人は若い美しい貴婦人であつたから、私は祖父の口にしたものゝ羨むが、祖父自身はM夫人が醜い老婆でも（又M氏でも）、要するに彼の主人に対しては、あの行為に出たであらう。穢はそのまゝで不二の境地に揚棄されているのである。所が私は老婆や男のなど考えた丈でも胸糞が悪くなってしまうのだ。これではほんとの淨穢不二とはいえない。

正しい意味ではそういえないかも知れぬが、現象的にはとにかく私達コブログニストが、淨穢不二の境地に達した人と同じようなことをやるのは事実である。情痴に徹することが人に強さを与えるというのもこのことであらう。

殊にコブログ趣味のないマゾヒストの諸君に対して私はこの修行をおすすめしたい。この修行を重ねることによつてたとえある特定の女性の魅力の附着する物質に限られるにせよ、諸君が淨穢不二の境地に到達しうらなれば、諸君の彼女に対する奉仕範囲と快楽は倍加するに至るであらう。是非この修行をし給え。同好の士の一人でも多からんことを私は切望する。

さて鉄舟の逸話に戻る。私がこの話のある独乙人の医者に話して聞かせたら、彼は言下に

「その男は嗜好異常だ」

と断言し、私は鉄舟に悪いような気がして、鈴木大拙の禪の著書などあげて、差別即無差別、淨穢不二ということを説いたが、いっ

かな取合わぬ。物の本質を見よ、という、

「本質は成程澱粉と蛋白質と脂肪であらう。半ば消化せられていれば、吸収も良好であらう。然し、だから食餌として適するとはいえない。他人の唾液や胃液を口にすることは、考えるだけでも嫌悪すべきである。彼は門弟に何か弱点を握られているので、阿諛したのでないか。もしそうでなかったとすれば、自分は彼が嗜好の点のみならず、精神的にも常態になかったと主張する」などと、この豪傑侍従を狂人扱いにして、見当違いなことをいい出したので、それ以上説明するのをあきらめたことがある。阿諛云は、独逸語の *Speichellecker*（他人の唾を舐める男）に阿諛者の意味があるからだろう。

ところがずっと後になって、子母沢寛の大作「新編勝海舟」を読んだら、鉄舟は並外れて食慾と消化力の強い大ぐらいたったことが小説ながら考証のゆきとどいたユーモラスな筆致で描写してある。日本人の標準からすれば、たしかに「食欲異常」といってよい程度だったようである。そこでこの独逸人の意見をもう一度思い出した。食欲異常から嗜好異常にまでなることは必ずしも稀なことではない。そして嗜好異常は他人に白状し難いものだから、禪の淨穢不二の修行などと勿体ぶつた理由をつけたのではないか、とも疑えぬことはないのである。禪という超合理主義を解せぬ合理主義者の独乙医師が、嗜好異常としか考えなかったことも無理はない。

だが、まあまあ鉄舟の言葉を額面通り受取った方が無難であらう。そして淨穢不二の境地を目指して、猛修行する方が、第一ずっとロマンチックだ。

## 第六十五 返事その二

奴隷よ！ 私宛ての返事が着いた。私は犬見たいな性質の奴隷を相手にしてゐるつもりだったけど、返事を見て、私のその前提が正しかったことが分り、そいつが多分私の気に入りになるだろうという気がして来た。というのは、それを読むと、その畜生は、身を汚すことを何とも思わぬ普通の奴隷の性質の外に、命令されたことを仕遂げる犬の本能をも兼ね具えていることが分るからだ。けれども私はこの奴隷をもっと仕込んでから使いたい。自分が命令されたことはどんな恥かしいことでも躊躇なく成し遂げるように、又私や他の人達が、痰壺としては勿論だが、その他の色々な身体排泄物のための容器としても利用できるよう、その屍体の消化力を高めておくように、又その犬の舌をなめらかならしめて、どんな舐めの勤務



をいかほど継続しても楽々と為しうるように、これらの点で充分仕込まれた奴隷が欲しいものだね。

私の天性にかなった今迄の経験からいえることだが、右のような点に熟練を具えていることが私の快感を一番強く刺戟するし、これに堪能な奴隷、私が好みの程度にまで馴れ上げてやった奴隷は、私にそれ相当の快楽を与えてくれる。調教訓練のために鞭を使うことは私は今迄なるべく控え目にして来た、というのは私は別に、とても鋭利な、これを使えば痛い目を見させること間違いないの道具をもっており、それが鞭の使用を全く無用にするばかりでなく、奴隷に及ぼす効験を益々高め、益々精妙ならしめるからだ。これを使うのが一番私の性に合う様だね。私はこれでもって、根は弱いんだが生来頑固な性分の畜生どもを、一匹宛馴らしつけて、無気力に従順にしてしまふ、だからその後私は一匹宛にして使うばかりでなく、もし対を使うやり方で私の異常性欲を満足させるのが面白いと思えば、二匹一緒にしても使うし、時には慰みのため趣向を変えて、女奴隷と組合せ、雄雌一対にして使うこともあるよ。

犬の性もつ奴隷よ、お前を一層畜生らしくするため、私の「変態美」から進じる黄金を銕かしたような美酒をお前に恵んでやることは、私にとっては奴隷への施物としてより外の意味はない。ところがお前達犬共は、一ツ滴しでも味ったが最後、本気になってそれを欲しがり、クンクンないておねだりをするものなのだ……(略)……

その次に、お前達は×××を喰べたがるね、私はお前達見たいな変態的な畜生のことはよく心得ているのだよ。だが次いで私はお前をば徹底的に畜生化して人間らしい所の残らぬようにしてしまふ。そして、お前がある行為をすることに旺盛な欲情を感じるように仕



向けてしまう、その行為というのは、私がふだんとてもサディスティックに思っており、高等な変態の境地からいっても私に淫蕩な思いを味わせるようなものだよ………(略)………

——女主人——

× × ×  
コプロラグニア関係の記事が続いたあとにこんな手紙がふさわしいであろう、これはフォレルの「性の問題」(十三版)から訳した。版によってはこれは載っていない。英訳本も流布したが、やはりこの手紙は出ていない。こういうコプロラグニスト向きのものは、一般人に不快感を与えるという理由から、学術書でも敬遠され易く、全然省略されるときか、出てもラテン語に直されるときかすることが多い、その意味では、ここに紹介したものは、多少の省略はあるが可成り極どい表現を生かした珍しいもので、同好の諸君には喜ばれると信じる。

然し相当問題点を含むので、以下多少の解説を試みよう。

第一段で、この手紙は職業的女主人がマゾヒストに宛てたものなることが分る。この手紙の前にも文通があり、男から彼女宛に奴隷の奉仕を申出たのであろう。彼女はそれを受容れるが、そればかりではない。「もっと仕込みたい」と言明する。仕込み方は三段に分けて、第一は奴隷勤務、第二は便器勤務、第三は犬勤務(舐め勤務)である。

第一の奴隷勤務で「どんな恥かしいことでも」と訳した箇所は、直訳では、恥知らずの(schamlos)命令となる。別に破廉恥な悪事をさせるというのではなく、命令者が奴隷に対して女としての恥らを感じないことを意味する。入浴や上廁の際に自分の手を使わず

奴隷の手を使って用を足したりすることを指すのである。

第二は痰壺、尿瓶、虎子といった排泄物の容器たれとの要求だ。

ここでは彼の胃だけが存在価値を認められる。彼は器物として取扱われ、生命体として持つ自発性は全く無視されるから、屍体と表現されてる。原語の Kadaver には絶対服従の意味がある。消化力と訳した aufnahmefähig は受容力とも訳せる。要するに胃の中にどんなものが入って来ても辟易しないで受容れる能力を養っておけというのだ。この消化器の訓練ということは、コプロ実践派にとってには実に重要なことなのだが、これを説く文献は実に少い。前項の淨穢不二の修行は、マゾヒストの立場からの精神的な問題解決であるが、これを女主人の立場から、唯物的に把握すれば、即ちこの消化器訓練ということになるだろう。「私や他の人達が」という一句に注意されたい。彼女は彼を自分の便器にするばかりではない。客人が「お手洗を拝借」といえば、「どうぞこれをお使い下さい」と彼を提供する。その彼女以外の人のものであるが故に、口腔に入れられた×××が咽喉を通らなかつたり、胃に一旦収まってから吐瀉してしまつたりするようでは「充分仕込まれた」奴隷とはいえないというわけなのだ。

第三は舐め勤務だ。特にクニリングスを指すと見てよい。この分野では男の肉体中舌だけが存在意義を持つ。舌の敏捷さと持久力を増大するための訓練が要求される。

ここで一寸注意を喚起しておきたいのは、第二と第三との順序である。私達の常識ではクニリングスは殆んどノーマルに近く、コプロラグニアは極端なアブノーマル現象と考えられるから、順序をつけるとすれば、第三より第二が後に来そうなるものである。然るにこ

こゝで舐め勤務の方が重視されているのは何故だろうか——これは筆者が女性だからだと思われる。つまり、便器の使用は単なる日常排泄行為の一端、快感といつても筋の緊張が弛緩することによって生ずるものに止まるが、舐め勤務を受けることは彼女にとって性的快感を意味するから、この方を高く評価したのだろう。女が与え、男が受ける「便器勤務」と男が与え、女が受ける「舐め勤務」とに對する価値付けが、かように男女において反對になることは無視できぬところである。

次の第二段は難解だ。こゝで鞭の代りに使用すると述べている銳利な道具とは何なのか、私には良く分らない。分つてゐる人があれば教えて欲しい。私の想像では、鞭と共に西洋でマゾヒストの調教に愛用される「搾胸衣訓練」(corset-discipline)ではないかと思う。

(これについては別項で書く)

「對にして使う」というのは、こゝでは主として舐め勤務における二重使用を指す。……と同時に舌による刺戟を加えさせるのである。これはよく西洋の春本にある趣向だが、公開の誌面故この位にしておく。

こゝで「對にして」といった關係から、以下の文ではお前達と複数で呼び掛けているのに注意されたい。通常のマゾヒズム關係は女主人一人と奴隷一人である。然し奴隷は複數化し得る。そして奴隷の數が増える丈、一人一人の使用価値は相對的に減少するわけだ。この女主人は今迄にも沢山の男を犬に仕込んだから、そんな奴の一匹として、この相手を扱っているのである。

第三段は私のいわゆる「神の酒」のことである。変態美、というの

象と見て発想した表現であらう。「私にふつては施物として云々」は、先に書いたように、美酒を恵むという行為が、彼女にとっては単なる排泄行為で、それ自体性的快感がないということをもつたものである。「お前達共は……」という所では、彼女が今迄いかに多くのこの種マゾヒストを取扱つて来たかが、行間にうかがわれよう。

第四段で、×××とした所は原文でも伏字になっているが、勿論Notである。喰べるはfressenという特に獸類の摂餌を意味する単語が用いてある。

第四段の後半が何を意味するかも知難解である。既に×××を喰べるといふ、最下等状態まで墮している男を「更に徹底的に畜生化する」といふ。一体何だろう。

鍵は先ずサディスティックな行為ということ。これは彼女の方から何かを男に加え、彼がそれを受ける立場にあることを示す。つまり容器勤務における奴隷の行為でなければならぬ。もう一つの鍵はその行為が彼女に淫蕩の喜びを与える底のものであること。これは逆に、この行為が舐め勤務においてなされることを意味しているようだ。結局男が舐めつつ女から何か与えられるということになる。

そこで私の答えは月経時におけるクニリングスである。Mona-Lisaを吸わせるのである。畜生は人間よりも血を舐めることを喜ぶ。だから「その行為に旺盛な慾情を感じさせる」ことが「徹底的畜生化」であり、「人間的な所の残らぬようにする」総仕上げとして考えられるのも理解できる。——私はこう解している。然し、正直この点には、あまり自信がない。もっと良い解釈があるだろうか。省略部分は適当に想像で補われたい。





負けずに頑張ります。

実はこの数ヶ月、相当頑強な敵にぶつかったわけですが、この程やっとこの大敵を全滅させました。この作戦では私の中隊がおとりとなった為、私の中隊からは相当の壮烈な戦死者を出しました。殊に中隊長を含めた三名の立派な最期は私もその場に居合せましたので、少しでも詳しく報告して、銃後の皆様と戦地とを直結出来たらと望む次第です。

作戦に関する事は種々差支えがあつて詳しく申上げられませんが、おとりとなった私の中隊は孤立して〇〇〇に籠城した恰好になりました。敵は三重四重に我々を取囲み、毎日毎夜猛攻を加えて来ましたが、小數乍ら我が中隊はびくともしませんでした。殊に七日目の早朝から昼頃迄に涉つては、その攻撃ぶりは最も熾烈を極め、遂に中隊長は擲弾筒の炸裂で両足に重傷を受けてしまいました。

予定では、その夜十二時を期して、我が中隊は全力を挙げて敵中突破を決行し、友軍の奇襲と相俟って、大敵の一大殲滅戦を展開する事になって居ましたので、我々は病室に於て中隊長と種々打合せを致して居りました。すると突然、中隊長は上半身を半ば起して、「第一小隊長は中隊長代理として当中隊を指

揮する事、本夜の攻撃に於ける中隊の成功を祈る。私は負傷の身、この大事な戦いに参加出来ないのが残念だ。私のかね／＼申していた『中隊長が倒れたら、その上を乗越えて進まねばならぬ』時が来た。私は、武人の嗜みとしてこゝにて腹を切る。皆は部下達に伝えて大いに士気を鼓舞して呉れよ」

と言われました。その顔は、すが／＼しく微笑さえ浮べて、門出を見送る父親の顔のようにも見えました。我々は「例え私達が、中隊長を肩に背負つてでも、共々敵中突破をしたい」旨申上げたが、中隊長は、「そんな生やさしい事では、今夜の戦いは成功おぼつかないぞ。未練はさっぱりと振り捨てゝたゞ成功せんが為めの士気のみが大切じや」

とはっきり言われたので、皆は黙ってしまいました。その時、その病室には他に二名の重傷者が居ましたが、む／＼と起きあがると「中隊長殿の仰せられる事は御尤もであります。就いては我々二名、特に願があるのですが、どうか、中隊長殿のあとを追つて腹を切らせて下さい」

かくして三名の切腹が行われる事となり、その準備が整えられました。中隊長の遺品並に遺髪は、第一小隊長にあずけられ、介錯に

は剣道の達人と言われるY曹長が当る事となりました。

床の上に毛布が布かれ、その上に、中隊長を真中にして、向つて右側にM軍曹、左側にK上等兵が並んで端座しました。中隊長は両足首が切断されている為、正坐する事が出来ず、尻に外套を敷いて高くし、あぐらをかいていられました。M軍曹は両眼共やられて、鼻から上は繃帯でぐる／＼巻きです。にじんでいる血がとても痛々しい。K上等兵は右股のつけ根から切断されている為、一人で坐る事が出来ないの、後から衛生兵に支えてもらっています。

やがて別れの盃が交わされてから、中隊長はゆ／＼と上衣のボタンを外してゆかれました。上衣を脱いで右に置き、上半身を肌脱ぎになると、今度はズボンのバンドをゆるめて押し下げ、下腹部を充分押し出しました。最初、中隊長は御自分の軍刀を使用される積りだったらしいですが、切先に刃こぼれが相当あったので、Y曹長が肌身離さず持つていた短刀が用いられる事になりました。

中隊長は、短刀を取寄せ乍ら「では皆に頼んだぞ、しっかりやつて呉れ」と言われて立会の部下を見廻しました。それから静に短刀



の鞘を抜いて、暫く刃先から刃元迄眺めておられましたが、Y曹長の方へ向って、「よく切れそうだな」と言っている。こりされまいた。手拭を取寄せると、短刀の刃元の所をぐるぐると巻いて、その上から逆手に握りまいた。切先は約四寸許り、無気味な程の鋭さを見せて、中隊長の腹の前で静止しています。

中隊長は左手を臍の下に置いて、一、二度掌で下腹を押してから左右にかかるくすりまいた。それから二、三度揉んで、今度は左脇下腹にビタリとあてがいました。短刀を握った右手が、つと左脇腹の方へ廻されて、切先が左手の人差指と中指の間を滑り込んで腹に押付けられました。左手を腹から離すと拇指と人差指と中指で切先三寸位の所をつまみ、右手に少し力をいれました。左脇腹に切先が当てがわれた部分が凹んで、微かに、ブツツという音がしました。更に左手と右手で、同時に調和をとりつゝ刀身の方角に沿って力を加えられました。腹の凹みが大きいので、實際どれ位突き刺さっているのかは、その時わかりませんでした。

刀を押している力を一まずゆるめて、左手を刀身から離し、今度は左下腹部に当てがってズボンを下へ押し下げました、力をゆるめ

たので凹みがなくなり、切先が約五分程、突き刺さっているのがよくわかりました。

やがて今度は下腹に力を入れると下唇をぐつとかみしめ、右手を腹に引きつけました。ブスツという空虚な音がして、皆がハッとした時、一度グツと凹んだ腹が、押し込まれた短刀をその儘にして、再び元の位置にもどっていました。かくして切先三寸ばかりは左脇腹に吸い込まれたのです。その時はまだ血の色も見えず、丁度お餅に刀を突き刺している

## (切腹通信)

男性切腹マニアの  
諸兄姉へ

児島生

須藤様、大島様、村松様、福岡Y S様、兵庫「悩める男」と称される方、東京SH様、浜松KM様清水Y様へ、また「自虐淫楽」の三富様、「若衆武士道」の戸崎様その他「男の切腹」に興味を持たれる諸兄姉へ

小生は新年号に「悩ましき切腹悲願」を書いた児島です。一口に切腹マニアと申しますがその内には幾つかのグループがあり、試みに大別してみますと、

A、自己または同性の切腹に憧れる女性

B、女性の切腹に興味をもつ男性  
C、自己または同性の切腹に憧れる男性

D、男性の切腹に興味をもつ女性の四つに尽きると思います。この内Dのグループは小生が頭の中であれ（ハイボシス）として考えたものですが、必ず存在すると思いますし、そろそろ本誌などに

登場してよいタイプではないでしょうか。

小生自身は勿論Cのグループに属するわけですが、常々残念に思っているのは、女腹切の方は、川合様、賤機様、愛川様、岸田様、瀬川様、等多くの方々が文章その他誌上に存分活躍され異彩を放っているのに、男性軍の方は甚だ振わないことです。一つ私達も負けずに告白・手記・小説・通信・絵など続々投稿し、少くも女腹切と同量のスペースを確保しようではありませんが。小生も先日の手記ではついに筆が滑り、瀬川さんから手きびしい批判を戴きました。が、実は自分で原稿を読直した時にこれは書きすぎたかと思つた位で、この様な御批判は予期していたものです。他日弁明の筆をとり、あわせて男性切腹心理の相違について考えてみたいと思います。小生の理想の割腹の形は、諸肌脱いでヘソの下を充分に顕わし、下腹部を一文子または十文字に深く長く掻切ってはらわたを大量に露出したものですが、諸兄のは如何ですか。例によってお恥しい切腹絵を描いてみましたから御笑覧御批評下されば幸いです。

ような工合でした。暫らくその儘で、突き刺した自分の腹を見つめていられた中隊長は、目を離して、前の床の一点を見つめ乍ら、右手に力を入れて、刀を右の方へ徐々に引き廻し始めました。

豊満な下腹が右の方に皺がよると同時に、刀は右の方へ次第に下腹を切り割り始めました。一寸程も切った時、ブーツと切口に盛り上って、紅の血が急にたら／＼と下腹をつたって、左手に流れました。そこで一度刀を止めて、尚も、暫く床の一点を見つめていましたが、吸呼をこらして顔の右の方を苦しそうにしかめると、右手に力を入れて、ぐ／＼と一気に、臍の下一寸位の所を通して右の脇腹迄切り割きました。シリ／＼という腹を切り裂く鈍い音が、その間に聞えました、それと同時に、腹を半分以上切り裂いた頃から急にピュ／＼とかかなりの血がポンプの様に切口から飛び散りました、右脇腹で刀を止めた中隊長は、始めて「フーッ」と大きく吐息をつかれました。切口からは、ジュウ／＼と血が音を立て、ふき出して来ましたが、見ると前方二尺位の所迄血が飛び散って居り中隊長の顔はすっかり血の気が引いてしまっています。すう／＼と刀を引き抜きましたが、

腹の中から現われた部分にはベツトリとした血糊とも脂肪ともわからぬものがついて居り微かに湯気のようなものが立つ様にみられました。

今度は、切先を臍上に当てがおうとした時、突然下腹がグル／＼と波打って、一文字に切った所が上下にバクツと開きました。瞬間、中隊長の顔は苦しさ、眼が閉じられ、息をこらして下腹に力が入りました、その為丁度吐気をもよおした時の様に、ゴボリと一波打った下腹から、横一文字の裂け目



(児島輝彦氏の描いた切腹画)

最後に、私達はアブノルマルとすは言っても全く他に迷惑や悪影響を及ぼす性質のものではないし、アブマニアの内でも切腹マニアは高貴な部類に属するものですから少しも劣等感など抱く必要はありません。(たゞ切腹や衆道が極く普通の事であった昔にくらべて、現代ではどうしても異常なものに見られその為一般世間には固く秘密にしなければならぬのが残念で

「此の外にも男性の切腹に興味を有するという通信が相当数来ておりますが、漸次掲載してゆく事にいたします。」

係

安言多謝



の上下に現われている血にぬれた白い脂肪層の間を通過して、腸の一部がモク／＼と出て来ました。

再び大きく眼を見開いた中隊長は、恐らく最後と思われる力を振りしぼって、グサッと臍上に刀を突き刺し、右肩を心持上げ加減にして刀を下へ押し下げて行きました、この時Y曹長が刀を振りかぶりましたが、中隊長は左手で「暫く」と合図し乍ら、下腹迄充分に押し下げて刀を急いで抜き取り、右へ置いてから首をさし延べました。

大刀一閃空を流れてから、ゴトンと首が前に落ちました、と同時に胴が前にどうっと倒れました。落ちた首は右耳を下にして、目は空所のかたをにらんでいる様でした。胴、首にはモク／＼と血が湧き上がったかとおもうと、その盛り上がった血がドドドドと下に流れました、あとから／＼ドク／＼と血が流れ出してゆきます。一同は、フーッと吐息をついて互に顔を見合わせました、これが中隊長の壮烈極まりない最期だったのです。

私達は、他の二人が次々に自分の腹を切り開いて最期を遂げるのも見届けました。何れも、中隊長に劣らず壮烈でしたが、殊にK二等兵は衛生兵に支えられ乍ら、腹を深く一文

字に切ってから、腸をつかみ出しました。刀を左脇腹で抜き取ると右へ置き、右手で臍のあたりを押えて、左手の拇指と人差し指を上にした状態で、臍下の切口を上下に押分け、ぐ／＼と左手を手首迄自分の腹の中につみ込んでしまいました、そして一寸左肩を上げて上体を右に倒した恰好で、左手に力を入れ乍ら腹の中でまさぐっていましたが、その手で腸をつかんでずる／＼と引き出して来ましたが、顔は引きつって苦痛にゆがみ、右目をきつく閉じていました。引出した腸を、片方しかない左膝の上に投げ出してから、再び短刀をとり、血まみれの左手を左膝頭の左横につかえて、右手で心臓をぐさり突き刺しました。介添していた衛生兵は、彼の身体をそっとなに倒しました。手先が空をつかんで間もなく動かなくなりました。

私達は暫く、たゞぼんやりと、今は動かぬ三人の遺体を眺めて居りましたが、急に皆、はっと我れにかえりました。既に日は暮れて次の行動の準備に移らねばならなかったのです。

三人の壮烈な戦死は部下達に伝えられ、我々は今は亡き中隊長の期待に違わず、中隊の任務を遺憾なくやり遂げました。

作戦はまんまと成功して、あの敵を袋のねずみとなし得たのであります。

他に書き度い事は限りなくありますが、次の機会に譲ります。皆様、随分と御大事に。

さようなら

河合を真中にして、左右と後から彼にもたれかゝって読み終ると、各々「フーッ」と嘆息した。河合の前で立っていた谷口は「すごいだろう」と云って、手紙を受け取ると、再び脱衣棚の自分の上衣の内ポケットに、大事そうにしてしまった。

八坂は、首をブル／＼と左右に振ってから、唇をとがらし、わからないという表情である。藤本はほんのりと顔を赤く上気させていた。その時、始業のベルが大きく鳴りひびいたので、皆は夫々道具を持って道場に整列した。

#### 【伝言板】

長谷川洋さん、羽村京子さんから貴方宛のお便りがきています。児島輝彦氏へ、読者某氏から男子切腹写真十葉が編集部へ来ているのでお見せしましょう。連絡先御指示乞う。



## 嫉妬の擽り責め

角 皓 子

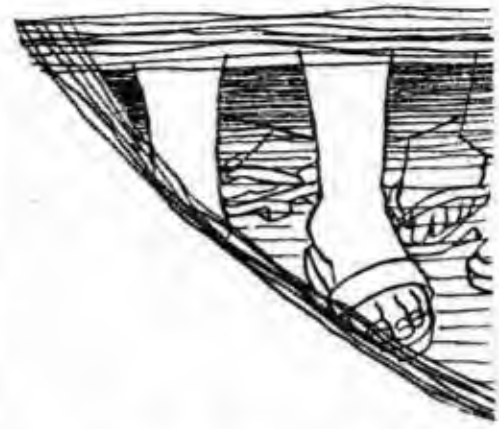
人間には大小の差こそあれ、誰にでも秘密はあるものですが、今日は私の心から愛読しているこの『奇譚クラブ』の誌上をお借りして、私の体験といいますが、一つの告白を皆様にお話し度いと思ひ拙筆をも省りみず、ペンを取ってみました。聊かなりとも皆様方の御気に召せば、大変幸せでございます。

初夏の蒸し暑い梅雨の前ふれのような日、夕食を済ますとまだ八時だというのに、その日はもう何をするのも面倒臭くて、私は無造作に洋服を脱ぎ、下着も脱ぎ捨てると、スタンドの灯を消して寢床に入ったのですが、容易に寝つかれなく暑い晩でした。

私はこの二年程前から裸で寝るくせがついていました。勿論、ズロースも何も穿かないのです。こうして真裸で寝ると、とても健康に良いのだそうです。そりゃ始めのうちは何だか恥しくてなりませんでしたが、馴れてしまふともう何でもなくなり、今では却ってこの方が、気持よく感じられるのです。

先日、来朝された映画俳優のあのマリリンモンローも、健康のため必ず裸で寝るとのこと、このことは私を本当に有頂天にさせ、深い喜びを与えてくれるのでした。





マリリン・モンローの人氣もあのお尻ふりのせいばかりではなく、こうして培れた素晴らしい肉体にあるように思えるのでした。

布団の下にはアコーディオン・ブリーツのスカートが寝押しされていました。このスカートのことを思い出すと、一層気がたかぶって私は尚更寝むれなくなるのでした。

その日は学校が引けると、久し振りにお姉様に誘われて映画を見に行ったのでした。お姉様も私も、こゝ暫く映画を見ていませんでした。そんな隙もなかったのですが、実際はお小使いの不足が、大きな理由だったのでした。

お姉様も私も共にU洋裁学校の研究科生でしたが、お姉様は私より二つ年上の陽気な心のやさしい人でした。津田幸子。これがお姉様の名前ですが、私は名前を呼ばずに、いつもお姉様、お姉様と呼んでいました。

切符を買って中へ入ると、もうムーツと噓

返るような人いきれです。丁度土曜日でしたので、中は物凄く混んでいて人の頭ばかりが眼につき、スクリーンなど全然見えません。私とお姉様は人中に割り込んでそれでもどうにか見える場所を見付けました。

「駄目だよ。そんなに割り込んで来たって」突然うしろの方で男の太い声がしました。私は身がすくんだようになって小さくなっていました。

それから暫く過った時でした。誰かの手が柔かく手に触れたと思うと私の手を握るのです。人混みの中なので私は何かの弾みだろうと思い、そっと手はずし何事もなかったような振りをしてスクリーンを見詰めています。すると今度は私のお尻のあたりを撫でられているように感じたのです。しかし私はそのままにしていました。しかしその手は止むどころか、一層強く撫で廻してくるのです。私には何かボーとしたようになると、もう映画どころではありませんでした。

その瞬間スカートの上から手が廻ると、私は後から誰かに確かりと抱きかゝえられていました。しかもおしつける様にして

「あーッ」

私は、もう少しで声を立てるところでした

が、やっこのことで吞込みました。私はもうたまらなくなって、やっとお姉様の背中をこづく、と、連れ立って休憩室へ出ました。

「どうしたのよ一体。まだ入ったばかりじゃないの——ほんとに、どうかしたの?」

「ご免なさい。だって……」

私は只そう云うともじもじしていました。

「トイレ?」

「ううん。そうじゃないの……」

「どうしたのよ一体。気分でも悪いの? どうしたのよ。ほんとに……。あゝ分かった。

誰かに変な事されたんでしよう。え……そうでしょう。」

お姉様はそう云うと、あたりを憚らず声を立てて笑うのです。幸い側には誰もいませんでした。

「だってエ……手を握ったり、お尻を撫でたり、とっても厭らしいことをするんですもの。」

「馬鹿ね。そんなことなんでもないじゃないの。誰だって、そんな経験はあるものよ。」

そう云いながら、お姉様は私の膝をくるりと廻すと、後向きにさせました。

「あら! いやだッ。」

お姉様は頓狂な声をあげると、素早くハン

カチを出して、私のスカートを拭き始めました。私が聴いても、お姉様は何も云ってはいけません。

「う、うん、唾きが付いていたのよ——。」

言葉を濁して只笑うだけでしたが、私はその言葉の意味を、はっきりと理解していました。

暗い部屋の寝床の中で、私はそうした光景を、はっきりと思い出していたのです。

お姉様は、けろりとして何でもなかったような顔をしていましたが、お姉様もそんな経験があったのでしょうか？ そんな漠然としたことが頭の中で浮んでは消え、消えては浮んだりしました。

「あゝあ……。」

私は闇の中で、寝ごとのように歎息に似た声を洩らしながら、やがてうとうとしましたが、次に眼がさめた時は眸中の肌がひどく汗ばんでいるのでした。

二

翌日、朝食をすませて、通学の支度をしていると、お姉様がやって来ました。

「なんだ。誰かと思ったら、お姉様か。」

「あたしで、お生憎さま。」

お姉様はとぼけて、ペロツと舌を出しまし

「う、うん、唾きが付いていたのよ——。」



言葉を濁して只笑うだけでした。

た。

「それより、あたし忙しいのよ。これから郷里に帰らなくっちゃ。〃急用ありすぐ帰れ〃と電報がさっき来たのよ——。」

「あら、そう……それじゃ、帰るの。」

「だから一週間ばかり休まなくっちゃ。缺席届出しといて頂戴よ。はい、これッ。」

お姉様はそう云うと、ハンドバックの中から一通の封筒を取り出し私の前に置きました。

「それより、きのうよく寝むれて？ 気にな



って寝むれなかったんでしよう。」

「……知らない。」

私は上気してほてる頬を、はっきりと感じながらも、さりげなく装おうとしました。

「嘘を云ってもだめ、臉が腫れぼったいわよ——お莫迦さんね。どれ？」

お姉様が私のスカートを引張り、拡げて見ますと、スカートの真中から、点々として目立たない位の白さで染しみになっている跡がありました。

「これなら、分らないわ。でも厭いやアね。あんないたずらをするなんて……」

お姉様は哀愁を込めたような口調で云いました。

私はあれから家に帰ると、すぐに一生懸命染しみにならないように、拭いたのです。

お姉様も私と同じアコーディオンブリーツのスカートを穿いて、ナイロンのブラウスを着ていました。肌が透けて見えるので、如何にもすがすがしい感じがします。こんな服装が男の人達の欲情をかりたてるのでしようか？ 私達二人はいつも同じ恰好をしていました。ですから知らない人が見たら、双児のように見えるかもしれません。洋服も靴もカバンも無理をしてでも、同じものをそろえるの

です。

「津田さんと角さんはSぶってるわ——。」

だから学校では私達二人のことをSと云うようになつていたので。

またレスボスともいいました。私は始めはレスボスという言葉の意味が分らなくて、辞書を引いて見ました。

Lesbian love——女性間の同性愛——。私はこれを見て顔を赧はにかみました。

しかし同性愛と云っても、私達二人は、およそ他愛のないもので、一方はお姉様に甘え一方は私を妹のようにかばいあうだけのものだったのです。大抵お姉様がマンになっていました。いつだったか雨のひどく降った日、お姉様は私の家に宿り、二人で一つの蒲団に寝たり、接吻したりしたことがありました。またその以前に私が便秘べんぴして困っている時、お姉様は楽になるからと云って、嫌やがる私のズロースを無理矢理に脱がせて、浣腸せんじょうしたことがありました。私は火の出る程恥はにかしいでしたけれど、便秘べんぴして困っている時だったので我慢してやってもらったのです。これは今まで私達二人だけの秘密でした。

これ程に仲良しの二人ですので、一日たりとも別々に離れることは、私にとっては本当

に辛いことです。出来ることなら、私もお姉様に一緒に付いて行きたいのです。

「ねえ、お姉様。早く帰ってきて頂戴ね。」

「そうだといいいんだけど……。」

お姉様は淋しそうにつぶやきました。

「きつと、早くすむわよ。でないと私淋しい。」

私はお姉様をはげますように云い乍らも、甘えるようなポーズを作って見せました。私とお姉様との間には、眼に見えない心と心で通じる何ものかがあるのです。世間には疎くとも、情の上では、異性にもおとらぬ敏感さで、何物かをはっきりと意識する二人なのです。私達はいつの間にかどちらからともなくはげしく抱擁うようしていました。

永い間の別離を惜むかのように、二人の躰は抱き合ったまま暫くは離れることが出来ませんでした。と、そのとき時計のうつ音に驚き、私たちは外へ出ると、駅へ急ぎました。

「行ってらっしゃい。気をつけてね。」

私は新妻のような気持で声をかけるのでした。

「あら……お互いさまにね——。」

「——？」

そのお姉様の言葉に、二人は声を立てて笑

い、入って来た電車に別々に乗ると、逆の方  
向へと別れていくのでした。

## 三

今迄一人で学校へ行ったことは一度もなく  
いつもお姉様と私とは、必ず一緒に門をくぐ  
るのでしたが、今日は珍しく一人だったので  
みんな逢う毎に振返って見るのです。

「今日はお珍しいのね。お一人？」

「ええ……。」

私は軽く受け流すように答えると、微笑を  
つくって会釈をしました。何かみんなの視線  
が、私一人に注がれているようで恥しいでし  
た。私一人で来たことが、それ程、彼女たち  
に好奇心を与えるのでしょうか？ そういう  
視線が、私には煩らわしくて、とてもいやで  
たまりませんでした。

もう最後の授業も終わろうとしています。や  
がて終業のベルが鳴り響くと、あちこちの部  
屋から賑やかな声が、堰を切ったように流れ  
てわいてきました。いそいそと帰り支度を始  
める人、おしゃべりを始める人、映画行の相  
談や批評をしている人など、みな様々です。

私はふとお姉様に頼まれていた、缺席届の  
ことを思い出しました。今まで何をボンヤリ  
していたのでしょうか。こんな大事なことを

今まで忘れていたなんて、私は今日はよっぽ  
どどうかしている。そう思うと、一人で心の  
中で苦笑するのでした。

早速、下へ降り廊下を廻って、別棟の教務  
室へ届を持って行き、工具室の前を通って部  
屋に帰ろうとした時でした。

クラスの中でも意地悪で通っている、嫌わ  
れ者の宮下節子さんがスーツと私に近寄って  
来ました。

「津田さん、今日お見えにならないけれど、  
どうかなさったの？」

「ええ、ちよつと、急用が出来たとかで、郷  
里に帰りましたわ。」

私はありのままにそう云いました。

「じゃ——お淋しいわね。お一人で。」

「ええ。」

「どう、私たちとお遊びにならないこと。た  
まにはいいでしょう。それとも私達じゃおい  
や——。お姉様とでなくっちゃ……。」

「嫌やだなんて、そんなことありませんわ。」  
明らかに言外に針を含んだ言葉です。

「S! S!」

その時、誰かが横から私語ひそかごとのようにそう云  
うと、みんなが一度に声を揃えて、カン高い  
声で笑いました。そこには、いつの間に集っ

たのか、七、八人の人が私をとりまいてい  
るのです。私は思わず真顔になると、恥しさに  
下を向いてしまいました。

「あたしも、Sになりたい。」

そう云うなり、誰かが私に抱きついてきま  
した。

私は不意をつかれて、よろよろとよろめき  
ましたので、それでまたみんなが、どっと笑  
った、と同時に。それを機に、みんなが一  
度に猫のように飛びかかると、私の肘を胴上  
げするようにして、工具室に運び込み鍵を締  
めてしまったのです。

「あッ、何をするの。いや、いやッ。離して  
離して……。」

女の力とは云え、七、八人ではかかられては  
私一人の力ではどうすることも出来ません。  
みんな女豹のように素ばしこいのです。

津田さんという姉さん格が、珍しくも缺席  
したとあってみれば、それでなくても普段か  
ら機会さえあればいじめてやろうと、虎視眈  
々としてその日を狙っていた彼女たちにとっ  
ては、今こそ私一人だけを、自分たちの思う  
通りに私刑出来る、絶好のチャンスなのでし  
た。従って鬼の首でも取ったような喜びよう  
です。彼女たちの嫉妬は、はげしいでした。





Shin.

私刑は示し合せた計画だったのです。

私は床の上に圧えつけられながらも、一生懸命に逃れようとして、軀をもがいてみました。

「しっかり、口を圧えてなきや駄目よ——。」

誰かが私の軀の上に股がりましたので、私は全身に力を込めて両手、両脚を蹴あげようとしたが無駄でした。アコーデイオンブリーツのスカートやスリッパはそれはずみに曲線を描いて、胸まで捲れあがり、ナイロンのブラウ

スの胸ははだけ、私の肌や下着は無慙にも剥き出しになっていました。靴下もずり下っていました。

そして私は確りと床に圧えつけられたまま腋の下、乳房、下腹、内股、足の裏など、力一杯擦ぐられるのでした。それが一カ所ならとも角、ところきらわずに擦ぐられるのですからたまったものではありません。堪え難いあの痺れるようなぞくぞくとしてくる気持ち——。

「もっと強く、擦ぐってもらいたいんだってさ。」

「う、う……。」

止めてくれと云おうとしても、口を圧えられていたので、どうすることも出来ません。

私は擦りに就いて、今までに耳にもし、折々は雑誌などで見かけたこともありますので幾らかの智識は持っていました。それが女にとってどんなに残酷な責めであるか、ひどい時には気絶したり、放尿したりすること等を記憶していました。ふと、私はもしこんな不始末でもしたらと思うと、気が遠くなるようでした。

彼女たちはキヤツ、キヤツという嬌声をあげながら、尚もしこく私の軀を擦り、責め

たてます。もうみんなひどく昂奮してしました。私はその強烈な刺戟に酔いながらも、牀を海老のように曲げたり、退け反らしたりして一層身悶えるのでした。

「こうしてもらいたいんだってさ——。」

その時、誰かが力一杯にパンティを引張ったので、パンティのゴム紐がブツツと切れてパンティがずり下りました。

「まあー凄いい。Sの……だわ!。」

それでまたみんなが、どっと笑います。

私は真珠のような玉の汗をかきながら、も

うぐったりとなっていました。そうして半ば観念したように、眼を閉じ抵抗する事も忘れていました。するとその時、

「さあ——もうみんな、お止め——。」

と宮下さんが、満足したような声でいいました。

その声にびたっと、みんなの手が私の牀から離れると、私の牀は一人床の上に、だらしなく、まるで毀れたお人形のように横たわっていました。

うすれた初夏の陽が、うっすらと部屋に差

し込んでいるのを見ると、私は何かうら悲しさを感じるのでした。

いつの間に彼女達は出ていったのか、もう部屋の中には私の他に誰も居なく、嵐のあとの静けさです。

私はその淋しい原因を自分で探ぐるすべを知らないのです。それにしても何と強烈な嫉妬の擲り責めであったことでしょう。

私は暫くの間、放心したようになって、そのままじっと、そこに横たわっているのでした。

——おわり——

# 現代マゾヒズム芸術時評

—映画並に出版物に見るマゾヒズム—

原 忠 正

(一) 仏映画

「ボルジア家の毒薬」

マルティヌ・キヤロル主演

色彩 テクニコロール方式

フランスに於て、セックス・アッピール

を以って有名なマルティヌ・キヤロルの主演映画、テクニコロール方式による天然色は、一部、人為的に色彩を強調する所があ



って、印象的である。内容は、伊太利の豪族、ボルジア家の娘、ルクレチアにまつわるお伽話風の活劇である。——ルクレチアボルジア *Lucrecia Borgia* はフランス風を書く *Lucrece Borgia* リュクレエス・ボルジアとなり、この映画では勿論後者を用いているが、有名な原名によって書いておく。ルクレチアの話は、今までに色々な作品となっているが、一番有名なのはオペラ「ルクレチア・ボルジア」(一八二二年)作曲ガエタノ・ドニツェツティ *Gaetano Donizetti*——一七九七年—一八四八年)であろう。ドニツェツティは、ヴェルディ (*Giuseppe Verdi*) 近代伊太利歌劇の創造者、ワグナーと共に肩を並べる最大の作曲家の一人、其の名は当時伊太利を占領中であつた仏軍に対する反抗のスローガンとして叫ばれた。これは、余談になるが *VERDI* という名を分析すると *Viva l'Emanuele Rè d'Italia!* 即ち伊太利皇帝エマヌエレ万歳! のイニシアルとなるのである。勿論偶然の一致であるが、この為め彼の作品「ロンバルディアの人々」(*I Lombardi*) は弾圧を受けている。——と対

比的な伊太利の大作作曲家、ヴェルディの改革的な行き方に対して、在来の伊太利風正歌劇 (*Opera Seria*) の完成者と見られていゝる人である。筆者は、ドニツェツティが非常に好きなので、我国に於て、当分の間上演される気配もない「ルクレチア・ボルジア」の筋の一部でもと思つて、この映画を見に行ったわけである。付言しておくが、このドニツェツティの作品の中、フランス語で原台詞を書かれたオペラ・ブッフア (*喜歌劇=Opera Buffa*) 「聯隊の娘」 (*La Fille au Régiment=La Fuglia al Régimento*) は些かマゾヒスト向きの作品であるので、別の項で書く心算である。余談が長くなつてしまつたが、映画「リュクレエス・ボルジア」はフィレンツエ (フィローレンス) に全盛を誇つたメディチ家の様な諸侯の一人である。古来、伊太利では、ボルジア家の豪奢な繁栄は、その策謀飽くなき、血に染つた歴史によつて、メディチ家と共に悪名高いのである。因に、伊太利人は、メディチの当主ロレンツォ・デ・イメディチ (*Lorenzo di Medici*) を指してロレンツォアッチオ (*Lorenzaccio*) しまり

「ロレンツォの奴め」という言葉を使う程である。映画は多情の女ルクレチアが、カルナヴァルの夜、男を求めて覆面の姿で街をさまよう処で始まる。ふとあつた男——それは、兄の為に、政略結婚を強いられて顔も見ずに嫌つていた相手、アラゴン公であつたが、双方共、お互いの本名を知らぬ為め、野合に終る。翌日、花嫁の顔をみたときから、アラゴン公の心は名も知らぬ男としての自分に身を委せた女としてのルクレチアに対する疑いと嫉妬の心が芽生える良人の余りの冷たさに、遂にルクレチアは今迄の男の事を語る。第一の夫も第二の夫も、次々と兄の手で殺される。そうしてルクレチアは、他の王国の王達を、ボルジア家に屈伏させる為の手段として、次々と結婚を強いられる。公は、話をきいてからは或る程度は氣を許すが、やがて、アラゴン公はボルジア家にとって、無価値になる。強大を誇つたナポリ公国を併呑する事を、ルクレチアの兄が考え始めたからである。散々の苦勞の末に、アラゴン公も亦、ルクレチアの必死の努力にも拘らず暗殺される何回目かの良人の葬儀で、始めて、心から

の涙を流すルクレチア、曾って、盛大な婚儀の行われた教会で、淋しい葬儀が行われている。古風なコラールの中に、カメラは教会の窓から外へ出て、街の風景を静かに写し出す。やがて、立像の間を縫って、墓の門が現れる。カメラが近付いてみると、それは、血に染った様なボルシア家の墓所の門、鉄の扉に刻れた紋章である。こゝでこの映画は終るが、クリスチアン・ジャックの手法は、フィナーレに於て、烈しい感動を呼びさます。

さて、では、どこが、マゾヒスティックなのか。実に素晴らしい場面が相当長時間に渉っている。ルクレチアの兄は、アラゴン公とルクレチアの結婚を祝って、催しをやる。第一の催しは、焚火の上で囚人に一本橋を渡らせ、お互いに、落とし合いをさせるのである。勿論、焚火の中に落ちたら、焼け死ぬことは判り切っている。この催しの間、ルクレチアは、嬉しそうに、大声で、笑っている。丁度私達が、犬と猫の喧嘩をみる様に。所が、アラゴン公が怒るので、ルクレチアと兄は、狩に誘う。これは、全く、驚くべき、狩である。狩られるのは囚

人であって、ルクレチアは、丁度、獣を狩る時と同じ様に、狩の衣服をつけ、騎馬で獲物を追うのである。追われる囚人は、何と、以前、ルクレチアが情交を持った彼女の馬丁パウロである。命乞いする馬丁を岩の上へ追いつめて、彼女は叫ぶ「あの男を黙らせて」と。兄の手から飛んでゆく槍に刺されて、馬丁は死ぬ。勿論、マゾヒストとしては、殺すよりも、生け捕りにして、彼女が獲物をどう扱うかが興味あるのであろうが、この映画では、そうお跳え向きになっていない。併し、かつての愛人を獣として、死物狂いで走って逃げるのを、馬を急がせて追う女の姿は、慄然とした興奮を感じさせる。古代ローマ人の残忍は、一世に有名であるが、中世ローマの支配者の妹ルクレチアにも亦、こうした「人狩り」に興味を持つ、素質があった事は甚だ興味ある事実である。是非共、一度御覧下さる様に。東京では、五月廿五日より、ピカデリーで封切(ロード・ショウ)上映中、これは七月第三週頃、一番館に上映される筈です。

次に、人狩りについて、一寸付記しておきたい。英国では、毎年十一月から十二月に狐狩りが行われるが、之は、犬を用いて狐を追い出す狩で、英国の貴族達が男も女も参加する。殊に女は、男と同じように、馬に乗って、長い犬鞭(Hunting-Whip)を振り回して犬共を追い立てるので、すこぶるマゾヒスト向きである。所が、濠洲で、狐の代りに、狐と全く同じ様に、土民を狩る遊戯があったと云われている。これが人狩り(Man Hunt)である。ルクレチア・ボルシアのは古めかしいが、濠洲のは、最近に層する。(美しさを競う狩用の衣服で馬を馳って、人を狩る女達、マゾヒストの諸氏の中で、若し興味のある方は、調べてみてほしいと思います。私も、確実な資料がないのです。但し、こうした催しが存在した事はたしかです。又、ロシアでも之に似た行事があったらしいと伝えられています。博学の読者にして、若し、御研究の方は、小生浅学にして、御教示を得たいと思います。

以後簡単に紹介のみにします。



## (二) 米映画「哀愁の湖」

ジーン・ティアーニ演

野性を持ち、乗馬を好む女を描いて、甚だ、サディスティックな場面が多いので付記しておきます。

## (三) 米映画「吹き荒ぶ風」

主演 バーバラ・スタインウィック  
アンソニー・クイーン

動物虐使とも思われる疾馳の場面あり。

## (四) 米映画「カナダ平原」

女による男の鞭打場面が印象的であった

## (五) 米映画「女群西部へ」

男かと紛う女達、女達の格闘、そういったものを見たい方は、是非共、御覧になる事をおすすめする。

## (六) 米映画「腰抜け二挺拳銃」

ジェーン・ラッセルの男性的な服装役柄を御注意。

## (七) 米映画「腰抜け二挺拳銃の息子」

(六)と同じ。

## (八) 米映画「彼女は二挺拳銃」

主演 アン・バクスター

男勝りの女をアン・バクスターが、比較的的印象的に演じている。

## (九) 米映画「フランス航路」

ジェーン・ラッセルが、西部娘を演じて小牛を捕えて遊ぶ場面、若し、小牛と男を入れ替えるだけの想像力のある人なら、ずい分楽しめる場面。

## (十) 米映画「平原の狼」

珍らしく、ヴァージニア・メイヨオが、男勝りの西部娘を演じています。面白い場面が多いと思いました。

## (十一) 出版物 沼氏の手帖と重複する

をさけるために、題名のみ御紹介。

## (1) 香山 滋「ソロモンの桃」

## (2) 橘 外男「妖花ユウゼニ

カ」

## (3) 石川 淳「鷹」の内「皇后」

## (4) 橘 外男「妖花イレネ」

## (5) ツルゲネフ「春の水」

## (6) 柴田錬三郎「イエスの褒」

## 【訂正】

前回、「妖花アラウネ」の項中、「七つの大罪」の「嫉妬の罪」の主演女優は、クネフではなかったため、訂正します。「罪ある女」と題名、題材共、酷似しているため、間違えてしまいました。猶、この旨御指摘の投書者に対し重ねてお詫びと御礼申し上げます。

原 忠 正

## KK 特別会員募集

本誌並にKK通信の購読者を以って組織しております特別会員は、漸増の一途を辿り、その連絡紙として逐号発展して参りましたKK通信も、第二十一号を迎えました。今後更に内容の充実と新しい企画による飛躍を企図しておりますので、未入会の方々は是非お申込み下さるよう御待ちいたします。申込用紙は御申越次第急送申し上げます。入会金は不要、但し、KK通信の購読者を以て有資格とします。会費は半年分送共僅か百円です。奮て御申込み下さい。

懸賞〔告白と手記と体験〕入選

ナルキツソスのほゝえみ  
雄花の微笑

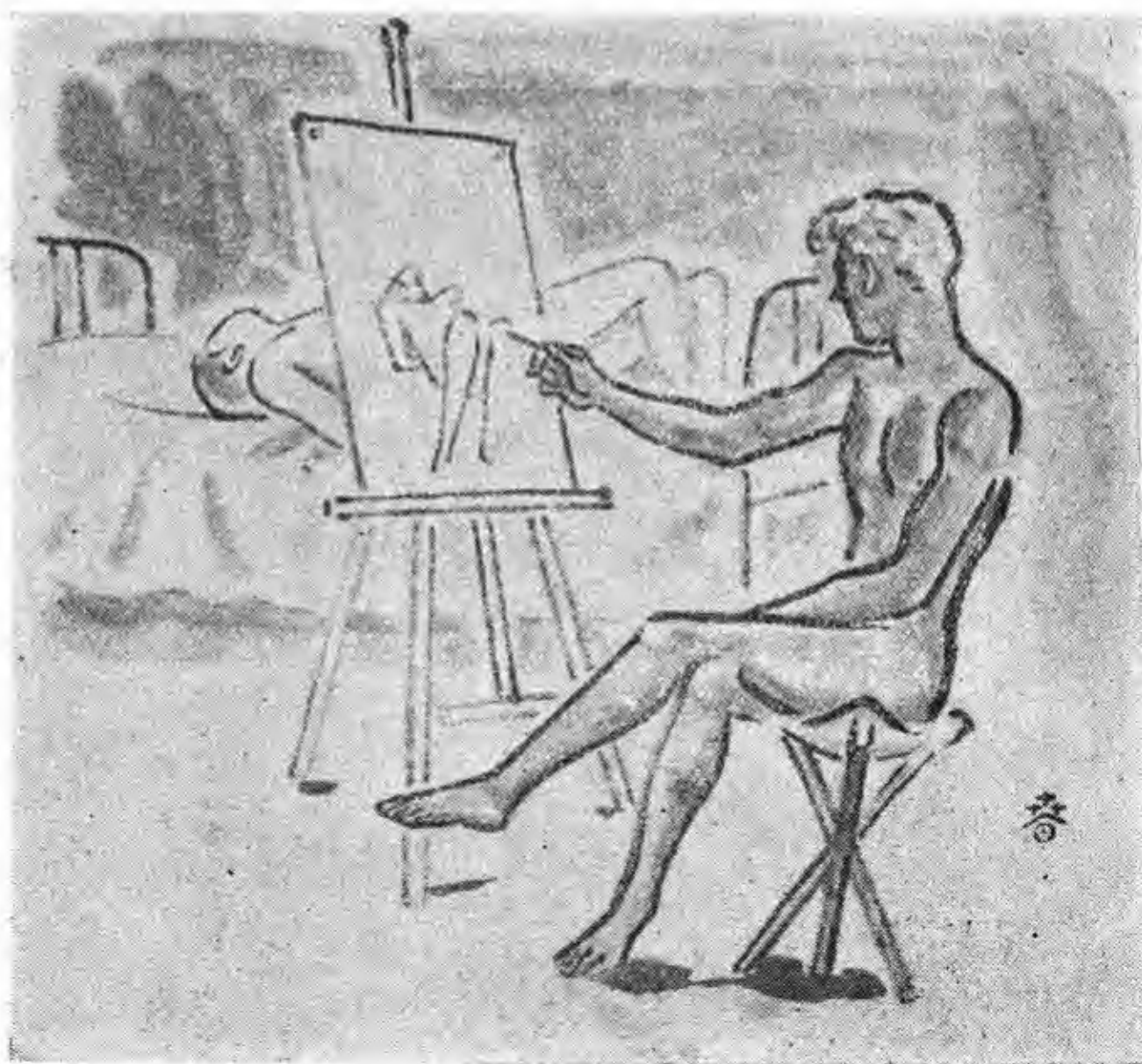
（我 困 わ れ 記）

幹 蘭 次 郎

ビエールに、故毛利氏に  
そして知性あるソドミヤ諸氏に  
この一編を捧ぐ――

――そしてこの時に、タドウツイオ少年が  
ほゝえんでみせたのだ。……それは水に  
映った自分の姿の方へ屈み込むナルキツ

ソスの微笑であった。……なまめいて物  
珍らし気な、かすかに苦痛の色を浮べた  
うっとりとした、人の心をまどろせる微





笑であつた。——「お前はそんな風に笑つてはならぬのだ。いいかね。誰にだってそんな風にほゝえみかけてはならぬのだよ」

トーマス・マン「ヴェニスに死す」より

××××

××××

いたゞまれなくなつて僕は本を閉じた。他目の無いアパートの一室を幸いに、溢れ出る泪ものごわず、頬を伝つて流れるに任せていた。このマンの小説を読んで、初めて罪の意識を感じた様な気がしたのだ。と同時に、初めて心から亡き毛利氏の墓前にぬかずきたい様な気にもなつたのである。

美少年タドウツイオのためには死も厭わなかつた老作家アッシエンバッハは、毛利氏の内面そのものであつたろう。しかし罪の意識と云つても、タドウツイオ少年が直接にアッシエンバッハを殺したのではない様に、毛利氏も又僕が意識して死に至らしめたのではないのだ。アッシエンバッハのそれと同じ様に、毛利氏に於ても彼自身の激しい情熱に依りて、自害し命を断つたと云つても過言ではあるまい。

毛利氏の激しい情熱。僕はそれを知らぬで

はなかつた。そうだ、初めてあの人の店に訪れた時から、僕は氏の一人一倍情熱的な眼差しに気付いていたのだ。

氏との交際のきつかけは、丁度今から三年ばかり前、母に伴なわれて大阪ミナミの繁華街の一角にある氏経営のテイラー・ショップを訪れた事から始まる。

高校二年にもなればそう／＼首吊の服ばかり着せてはいられないと云うお洒落な母は、十年ばかり前に亡くなつた父と大学時代親友だつたと云う毛利氏の店へ、わざ／＼堺から僕を引っ張つていったのである。その母の心には最近めっきり若い頃の父に似て来たと云われる僕を女手一人で此処まで育て上げた父の一粒種を、毛利氏に見て貰い度いと云う氣持も多分に含まれていたらしい。父が亡なつて以来母は兎も角として、僕は一度も氏と逢つていなかったのだ。少々氣おくれがしないでもなかつたが、氏は相も変らぬ愛想の良さで僕達二人を迎えて呉れた。それ所か、氏は学友時代の父と見まがう僕の全てに驚嘆し、遂には未だ何も知らなかつた僕を掌中の珠と丸め込んでしまつたのである。

僕もいつの間にか毛利氏に多大な好感を抱いていた。氏のブリティッシュ・セントルマ

ン・タイプに僕は無意識に亡父の面影を求めていたのかもしれない。しかしその反面、氏との交遊(この言葉は妥当ではないかもしれぬ)が深まれば深まる程、学友時代の父と氏を想い浮べて、断腸の思いをした事もあつた。だが、そう云つた妄想も、何年か欠除していた父性愛的な慕情にいつしか追いやられて薄雲の様に消えて行つた。

そして間もなく、僕は毛利氏の嫡男義尚君の家庭教師を勤めると云う名目で、T町にある、氏の自宅から程遠くないアパートの一室へ、幹家から離れて移つたのである。その方が通学にも便利だし、氏の監督の下にあれば女親と老人のみの家よりいゝだろうと、母は喜んで承諾した。そして一切の費用を毛利氏が受け持つて呉れると云う条件を、とんでもないと律義な母は断つたが、氏の云い出した一歩も譲らない強硬な態度にやがて折れて恐縮し乍らこの申し入れを受けたのである。嘘も方便と識る年令に達していた僕は氣を遣う母に対して

「そりやあ、僕がその代りに義尚さん等の面倒を見なくちやならんだもの」

と云つて当然な風を装つていたが、自分では体のいゝ男妾として囲われることを百も承

知だった。

週に三回、僕は厭々乍ら毛利氏二世の勉強を見てやった。その空いた日を選んで、毛利氏はこっそり立ち寄った。しかし決して泊ると云うことはしなかった。そんな所に氏の謹厳的なタイプが表れていた。氏の奥さんは母よりも少し若く美貌であったが、氏の性格や生活態度を十数年の結婚生活で全て見抜いているらしく、氏と僕の交渉を察知し乍ら、何一つ苦情不平を洩さないで氏と共に僕の世話を焼いて呉れ、家族の一員同様に取扱いて呉れた。

時々、氏は無理な（厭な）要求もしたが、その他は割合に淡泊で、優しく労ってくれるのが常だった。しかし、かの激しい情熱家の抱擁、そして接吻はデスデモウナを熱愛のあまり圧死させてしまったオセローのそれにも増して強く、

「あゝ……愛してる！ 好きだ！ 蘭丸、僕の蘭丸、何故君の全てはこんなにも僕をチャームするんだろう」

と喘ぎつゝ僕の耳元で囁く時、僕は締め殺されはしないだろうかと云う不安に、マゾヒズム的な快楽を覚えるのだった。僕は氏に昼は蘭次郎、夜は蘭丸と呼ばれた。

そんな生活が約一年余りも続いた或る秋の日、僕は毛利氏にことわりなくビエール・曾我と堅い愛の契り（？）を結んでしまった。

その日の夕方、天王寺美術館で秋の合同展を観ての帰途、ぶら／＼一人歩きの所在なさに茶臼山の方へ足を向けると、橋のたもとで何事かあったらしく、十数人の人ばかりが見えた。靴磨きの道具を小脇にかかえてかけて行く物見高い浮浪児の一人を攜えて何があるのかと尋ねてみた。

「GIとあんちゃんの喧嘩やて」そう云って再び駆け出した浮浪児の後を追って、つまりないやシ馬心理にかられるまゝ人ごみを分けて覗いてみた。

相当酔っているらしく仰向けになり目を閉じたまゝ、殆んど無抵抗なブロンド髪的青年を抑えつけて、二人の兄ちゃん風な男が容赦なくその顔へ鉄拳を喰わせている所だった。この辺は、恐いと云う概念が皆の頭にあるのか、誰一人としてそれを割って出ようとするものがなかった。しばらくたってから兄ちゃん風な二人は、無抵抗な相手に張台が無くなったのか、夫々のラバ・ソールで青年の身体を蹴って立ち去った。人々は案外簡単に終ってしまったのに対し、がっかりした様な面持

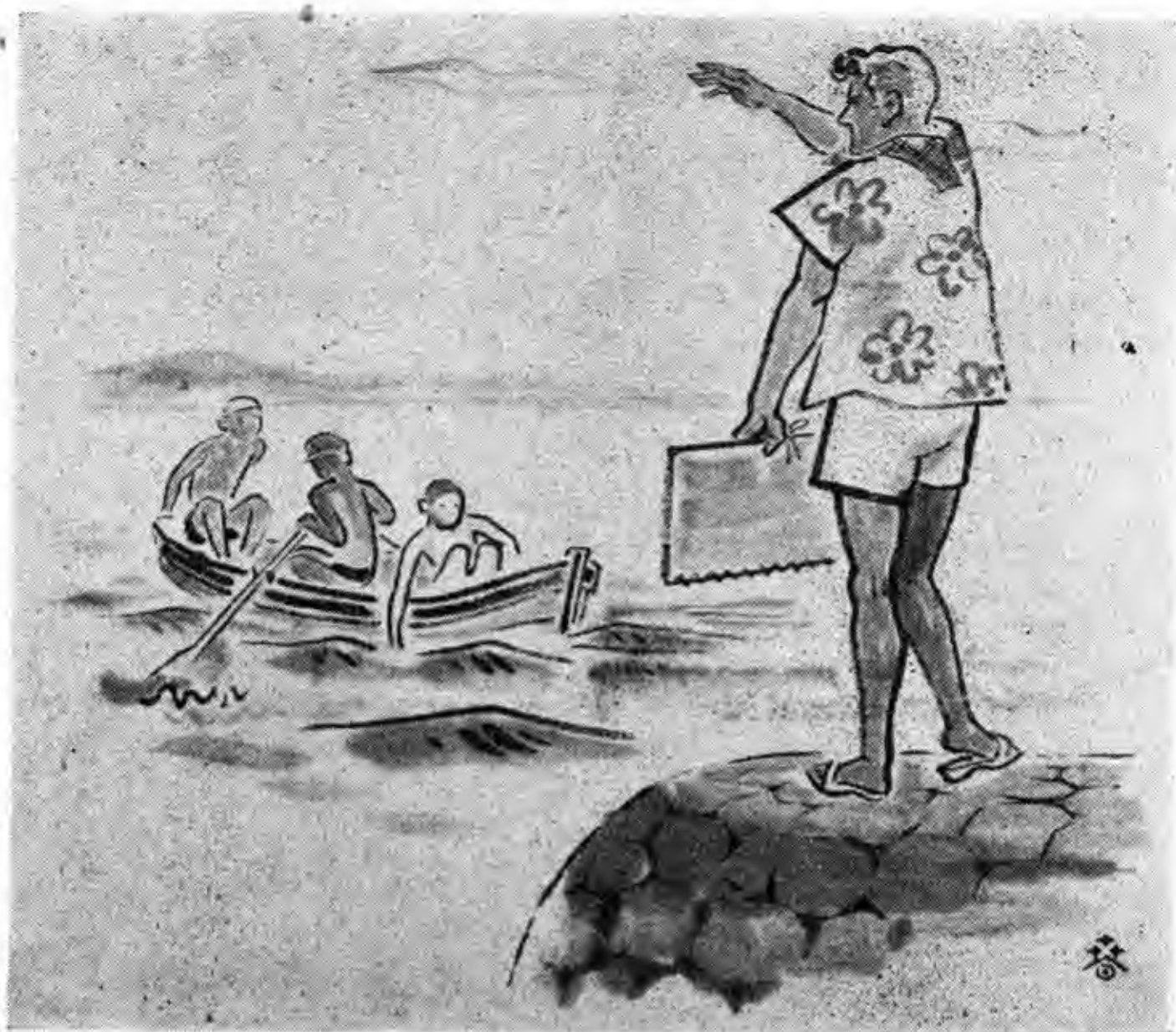
ちで三々五々散って行った。僕も其の場を離れようとしたが、何となく倒れたまゝの青年を置き去りにし難く感じて、もう一度よくその青年の顔を覗き込んで見て驚いた。

あ、あの入だ！ 僕は思わず声を発する所だった。外人を見れば直ぐG・Iだと思ふ浮浪児にそう見誤まれたのも無理はない。それはあの人――、前年の夏（毛利氏のアパートへ移って間もなく）堺の大浜海水浴場で知り合った、ビエール・曾我と云う日仏混血青年に他ならなかった。学友達と水泳パンツに着換え、てポート遊びに興じ、突堤を廻って港内に入ろうとした時、防波堤の上からしきりに呼ぶ者があった。何だろうと舟を近寄せてみると、白いバスケットのボロ・シャツに青いスカーフと云う、一見キザな身装りをした異国青年がスケッチ・ブックを持って立っており、流暢な日本語で「僕達の海辺スタイルをスケッチさせて欲しいと云うのだった。僕を除いた他の学友二人は絵等にてんで関心を持っていなかったのでもデルなんやだよ」とすげなく断わってポートを出してしまった。僕もこんな所では、とモデルを断わったけれど、ポートには同乗せずに防波堤に残って青年のブックを見せてもらっていた。と云うより僕



は彼のブロンドの髪と、茶色い瞳、小麦色に

三國ヶ丘町で、僕の実家がある上之芝と同じ



焦した肌等に見

とれていたと云った方が正しかったかもしれない。さん／＼と降りしきる強烈な真夏の陽光を浴びて、それ等は美しい色彩の調和を見せていた。僕は遊び

堺市内にある事がわかった。しかしその事を毛利氏に話すと氏は「混血児と云ってもフランスで育った人間なのだからフランス人と同じだ。やはり異民族は仲々気が解り難く、安心して交際は出来ない。私は止した方がいゝと思うね。こちらの住所は知らせていないだろう。うん、それならいゝ」そう云ってビエールの走り書をライターで点火し、みる／＼僅かな灰燼に変えてしまった。

倦きた学友達が呼びに来る迄、とりとめもない話を交していた別れ際にビエールはブックの端をさいてコンテの太い字で自分の名と住所を書き、パンツの間へはさんだ。それに依るとビエールの下宿先は

それっきり忘れていたビエールが、今、眼の前に唇から血を滲ませ、服を泥んこに汚して倒れている。矢も楯も堪らなくなり僕はかけ寄ってビエールを抱き起した。「曾我さん曾我さん！」と何度も呼んだが一向に僕であることと云うことに気付かないので、詮方なくひきずる様にして音楽堂裏の通り迄出、坂を登って来た空車を拾った。アパートへ着く迄にビエールはやっと僕を想い出した様だった。「済まない。済まない」と云って僕の膝の上へ崩れたまゝ眠ってしまった。

部屋には一人寝のベットしか無いのでどうしようかと迷っていると、不意に「シングルだって、くっついておれば落ちないさ」とビエール。酔っていても仲々はっきりしている



など苦笑を禁じ得ないで突っ立っていると「何が可笑しいの？ お先きに失礼するよ」

と云って彼はくるく踊る様な身振りですっかり脱衣してベットへもぐり込んでしまった。さし出した僕のバジャマも要らないと云って、彼は特別に裾の長いカッター一枚になつていた。彼のすゝめで僕も同じ様にして彼の横へもぐり込んだ。彼は酒をあおってあんな事態をひき起した顛末——秋の美術展に応募した作品のモチーフが某外国画家のそれと

偶然類似していた点から模倣と見られ、弁解の余地もなく落選したこと。そして皮肉な運命の悪戯に噴激し、それを抑え紛らすために強いジンを飲み不快な酔心地のまゝぶら／＼歩いてゐる所へ、一寸した事から喧嘩を売られたこと等——を可笑しそうに話した。自嘲でもなんでもなく、本当に可笑しそうで又楽しそうだった。そして終に「僕ね、落選したのはミキの為だと思ふんだ。何故って僕があんなに描きたがっていた少年の裸像をミキは描かせて呉れなかったんだもの。あれを描いてりやこんな目に遭わなかったさ」と云うなり「畜生！ だのに、何故、こんなに愉しんだらう！」と叫んで僕の上に馬乗りになり首を締めにかかった。驚いてのけぞった僕の顔を「おゝ、素晴らしい！」と云って両手で支え、所構わず接吻した。いやあれは接吻じやない。顔中を舐めまわし、噛りまわしたと云った方が適切だったろう。

その翌朝、昨日の奮闘の残蹟である頬の汚点を指し「此奴が消えた頃又来るよ。その時はモデルを頼むぜ」と云い残してピエールは帰って行った。が、それから三日目の日曜日に、早くも彼は僕の部屋の扉をノックしたのである。勿論、顔の汚点もすっかり消え



ていないで未だうっすらと残っていた。「ゴメシネ、待ち切れなかったんだもの」と照れて謝まるビエールを、僕は責める所か喜んで招き入れたのである。彼は本腰を据えるらしく、画架や素描紙まで持って来ていた。

いくらモデルだからと云っても彼の視線が僕の全身を限なく走りめぐるのがかと思うと柄にもなく羞恥心が湧き、躊躇していた。ビエールは何もかも解るのだろうか、デッサンの準備を整えると自分から先に手早く全裸になつてしまった。そしてつか／＼と歩み寄ると僕の身体から一糸残らずはぎとってしまつた。あまりの事に僕は身体を隠そうと身悶えすると、彼は無言でさっさと僕の両足をネクタイで縛ってしまった。「そのまゝで……」と彼は僕に、そのまゝのポーズを要求した。

「もつとぐんと身をそらせて頭を後へ落し……」彼の望み通り僕の全身を後へ倒しながらあまりにも美しい彼の裸像を真の当りに見て目くらむ思いだった。それは丁度ミケランジェロが刻んだと云うダビデの像を想わせる。下半身に較べてやや上半身が大きいといわれているダビデの像より、我身最負か遙かにビエールの方が均衡のとれた身体の様に思えた。しかしダビデとビエールの最大の相似は、

あの全身から浸み出る悲劇的な、崇高なまでに悲劇的な雰囲気である。そして幽かに憂愁を帯びた大きなビエールの瞳は、ギリシャ神話のナルシスに源流を留め、ミケランジェロが愛した数々の青年達——ダビデ、ジュリアン、システイン礼拝堂の青年達、はたまたワイルドを獄屋にまで繋がせた美少年の群を経て、彼に受け継がれているかの様な輝きをさえ持っている。

「ソドミヤって、総体にかくことが好きだね。いや何に於てもさ。ミキは小説をかくのが好きだったろう。僕は絵だ。此の間来日したPって云うバレイリーナは観客心理の裏をかくのがとても上手いんだって。僕が十四、五の頃、巴里中追っかけまわされた男はね、人の寝首をかくのが大好きだったんだ」

ビエールはそんな冗談を云い乍ら根気よく僕の身体をデッサンした。時間的な小憩を二人は仔犬の様にふざけ合つて過した。そして一日の仕事が終ると久しく逢わなかった恋人同志の様にひしと抱き合うのだった。

その頃、僕の部屋へ来る毛利氏の回数は次第に減少して来ていた。少し身体の調子が芳しくないらしい。若い時に一度思ったことのある胸部疾患が再発したのかもしれないと、

過日氏自身が洩していた。そのことは僕とビエールの間を急速に深める一大要因ともなった。ビエールは間断なく僕の部屋を訪れた。本町にあるH美術商社へ此処から通うことさえあった。

高校を出た年、僕の大学受験は不首尾に終つた。毛利氏やビエールの罪とは云いたくないが、彼等との関係が深まるにつれて僕の成績はそれに比例し、漸次低下して行つたのは否めない事実である。そして止むなく来春の受験を志ざして僕は一年間浪人生活をした。ビエールは既に毛利氏とのことを熟知していたので、僕の不規則な浪人生活を見て「これこそお困り者の生活だ」等と冷やかしたりした。僕は毛利氏に対する良心の咨め等全然感じない程、ビエールとの生活に耽溺していたのだった。ビエールの巧妙な立ち廻りに永い間毛利氏は僕達の事を感じし得なかった。だけど……不幸と云うものはほんの些細な事から始まり、そして雪塊の様に転々としてはその嵩を増して行くものである。

ああ、あの日一日が無かつたら！ 全世界のカレンダーからあの日が抹殺されていたなら！ いやあれば僕自らが掘った墓穴であった。僕さえあんな悪戯を思い付きはしなかつたら！

(続く)

## 私という女

初めて読者の皆さまへ



## 春日ルミ

編集部の方から、是非何か書いてくれとお勧めを受けましたが、もと／＼文章なんか

書くのに馴れていませんしそれに原稿の書き方も知らないからとお断りし続けてまいりました。

そのうち、七月号に私の写真が載ってから、読者の皆さまからのお便りもボツ／＼拝見しているうちに、自分の生い立ちでも簡単に書いてみようかな、という気持が起きてきました。

「貴女は他の方と違って、自分から進んで協力して下さっているのだから」とおだてられて、とにかく便箋に鉛筆書きでもいい、というお約束で書くことにしました。

私は自分自身でも驚く位、早熟だったので。家は大阪市内の中心地であって、通っていた小学校も殆ど勤め人が大きな商人の子供ばかりで、風紀が悪いというような所ではありませんでした。色街なんかで育つと早熟になるといわれますが、私の父は、半官半民の会社に勤めていましたし、母は、近所の娘さんを集めて洋裁を片手間に教えたりしていました。だから環境はよかったのです。

私が早熟だったのは、今から思えば先天的なものだと思いますが、そのきっかけになったのは、やはり年上の娘さんからでした。別に家計に困るというような家庭ではありませんでした。子供といっても私一人ですし、好きな道なので、母も片手間に洋裁教授なんかをやり出したのだと思います。

たしか、私が小学校六年生の春でした。学校から帰ってくると丁度、母は買い物にでも出かけたのか留守で、十六、七になる娘さんが二人ミシンの前に腰かけながら、顔を寄せて小さな声で話し合っていました。何か、ひそ／＼と秘密らしいそぶりに、子供心にも私は障子のかげから、聞き耳を立てました。

「こゝんところをこうすると、とても……のよ」



そんな話声が聞えました。それから、暫くの間、私は息をのんで、二人の会話を細大洩らさず聞いてしまったのです。

その夜から、私は妖しい秘め事の魅力にとりつかれてしまったのです。性のなんたるかを解しない年頃ですから、只、本能の赴くままに、自制心というようなかからもありませんでした。翌年の春、女学校一年に上ってすぐ初潮がありました。

女学校の一年生になったばかりで異性の友達がほしくて仕方がなかったといえ、皆さんも驚かれるでしょう。若し、現在の様に男女共学であつたら、私の性向もこのように曲められはしなかったでしょうが、その頃は次第に戦争は激しくなつて来て、学校も学業より勤労奉仕の時間が多量位でした。私達も軍隊で使う、晒のお褌を縫わされた事を覚えております。そんな時代ですから、異性のお友達なんか作るといふ事は、とんでもない事でした。

然し、私の異性に対する憧憬執著は激しいものがありました。満たされない慾望はお恥しい次第ですが、益々秘め事の方へ向けられてゆくのでした。そうした夜毎の耽溺は、終戦後、私が初めて異性のお友達を得てから

も十分な満足を得られない原因になつたのだと、今になって思い返えされます。

それから、お断りしておきますが、雑誌の口絵には春日ルミ嬢と編集部で書かれていますが、嬢という字が若し、ヴァーシンを意味するのなら、あの字は私にとって当てはまらないと思うのです。戸籍上は確かに、私は夫という名の人を持っています。全然、無垢というわけではありませんので一言述べさせて頂きます。

て頂きます。

ろくに勉強も出来ない苦しい戦争中の生活が終つて、日本が戦争に負けると、春がきて花がぱつと咲いたように自由が訪れました。物資が不足で苦しい生活でしたが、当時十七才だった私にも、初めて恋人が出来ました。相手の人は、私より四つ年上の古着店の店員でした。その頃は今と違って、古着の商売が非常に盛んで、彼も自分で田舎へ行商に行つ



たりして、相当金廻りがいいようでした。

彼は、自分の店の近所の中華料理店で銀メシ付の料理を御馳走してくれたり、私に似合った出物のワンピースがあったからと、その頃流行し出したハイキングに、その服を着せて連れて行ってくれたりしました。

大人しくて親切な彼に、私は心の底から信頼して、この人のためにならと思うようになったのは自然の成りゆきでした。然し、十二年からすでに性に目醒め数年の偏歴を体験した私にとって、若し、それが中年の酸いも甘いもかみわけに相手ならともかく、二十才そこ／＼の男性が、満足を与えられる筈はありませんでした。砂を噛むような味気ない生活は、私をして更に、その悪癖に耽溺させるようになっていました。誰にも訴えることの出来ないイラ／＼した気持。それは自然、彼に対して辛く当ってゆきました。私が冷たくすればする程、益々、下手に出てやさしくしてくる彼。優しい彼を精神的に愛していながら肉体的には愛し得ないじれったさ。いつしか、私は彼に対して暴君的な態度に出るようになっていました。恋人同志というよりも「女王様と僕」という間柄が、いつしか二人の間に出来てしまいました。これには、男女同権

## 歡義先生 性愛相談欄開設

歡義先生のお仕事が繁忙な為と誌面の都合がつかなかったという二つの理由で長らく中絶しておりましたが、皆さまの強い要望により性愛相談欄を次号誌上より再び開設いたします故、左記要項により、奮て御相談下さい。

一、解答者、病的な苦悩を有する人達の友として、日常多くの特異例に接して、臨床的な豊富な経験を有せらるる、歡義先生、

一、相談文は出来るだけ詳細にデータを記入の上、読者係宛御送り下さい。質問者の秘密は厳守し、絶対他へ洩すような事はありません。

一、相談文及解答は漸次本誌上に掲載いたします。用紙はどんなものでも結構です。都合悪き時は住所氏名を明記されなくとも構いません。

という、その頃はやりの思想も多分に影響していたのでしよう。平常は淑やかな女でありたい気持が、一度、性の不満が爆発すると我儘な暴君になる矛盾。私はこの矛盾に、只わけもなく、ひとり泣いたものでした。

然し、その頃はサディズムという言葉も、マゾヒズムという言葉も知りませんでした。只、何となしに、大人しい異性に無理ばかり言って困らせてやる事に、ほのかな楽しさを覚えるようになってきたのです。

現在でも、まだ治りきっておらない私の不感症的な生活は、この時の異様な生活の時から始まったのかもしれませんが、肉体的にもさん／＼私から苛めつけられた彼はそのうち、古着商売も新しい衣料品の出廻り

はからずも、奇譚クラブ四月号を手にとつて、べら／＼と頁をめくって、「これでいいの？」という、あの男の人の手首をぐっとハイルで踏みつけた写真を見て、自分の身内にあるものが燃え上ってくるような衝動を覚えたのです。私は今年二十四才、普通の男性には余り興味はありません。そういう男性を手相なら、私はむしろ自分一人の方が楽しいのです。読者通信で結ばれた奇巧の誌面をかりてとりとめない、文章を書いてしまいました。又機会がありましたら、もっと詳しいお話をさせて頂きたいと思ひます。



# サジズムの女性

才 昭 吾

私は七月号で「あるマゾ男の告白」という題で、あられもない自分の生い立ちや告白を書き綴りました。その時にも書きましたように、私は現在××税務署の小使をしております。本日はその署に勤めている或る女性の事について述べてみたいと思います。

只今、私が勤めている税務署には三人の女性がいますが、その中の一人に私の理想とする女性がいて、いつも私はその女性を見るにつけ、色々な空想にふけてみるのです。体重は十四貫もあろうと思われるほど、がっちりした身体つきで、身長は五尺一寸位、眼鏡

をかけていて一見インテリらしい容貌、すこしやぶにらみで適齢期に達した彼女にはこの事が気になるらしく、一週間ほど休暇を取って手術を受けに行ったそうですが、いまだに十分治っていません。今年丁度、二十七才、晩春の悲哀を身を感じているらしく、時折うかぬ顔をしているのが見うけられます。

私はマゾ男としての鋭いカンで、この女性がサジズムの傾向を持っていることを見抜いています。男性を尻の下に置いて、暴君的な振舞いによって自己を慰める女性だと思っています。魚屋の娘さんなので常に血に対する

感覚がにぶく庖丁を握って魚類を料理してゆく父母の血潮をうけついでいるためか、残忍な行為でも平気とする習慣を身につけているのじやないかと、私は私なりの希望的観測をしています。

先ず第一に、私がこの女性に心をひかれたのは肉体の白さ、皮膚の美しさで、ある時、こんな言葉を彼女の赤い唇から聞かされたことがありました。

「Aさん（直税係員）がこんなことを云うのよ、あんたの肌は白くて艶があつてとても美しいって……そうかしら？」

彼女は幾分か頬を染めて、妖しく湿んだような媚のある眸で私をにらむのです。女ながらも職員である彼女は、小使の私を気やすく思つてこんな見えすいたことを云つたのでしようか。私はこの言葉がなんだか私に対する挑戦の意味のように思えて、更に一層、この女性に対する好奇心と不可解な魅力を持つようになり、やがて彼女に対して愛慕の焔が燃えたぎるのを、どうする事も出来なくなりました。本当は私にとっては、顔の美しさなんかより皮膚の美しさと、ひきしまったきびしい顔つきが好きで、彼女の怒った時の表情がたまらなく私には感ずるものでした。

或る朝、署長室を掃除している、彼女が第一番に出勤してきました。彼女は佐藤和通美<sup>かずみ</sup>という名前でしたが、同僚の人達は「和通ちゃん」といつもう呼んでいました。それが不思議なことに、私が「和通ちゃん」と呼ぶとむきになって怒るのです。

「和通ちゃんなんていいないでよ、私は和通ちゃんと呼ばれるのがきらいだから、今度から云わないようにしてよ」

その時の彼女の表情はとて真剣で、周囲に誰

がいようと、大きな声で聞えよがしに言うものですから、こちらが赤面してしまう位でした。こんな事情があることを予期していながら私は思わず「和通ちゃんお早よう」と言っ

てしまいました。出勤前のことゝて署長室には誰も居りませんでした。

「才さん、又いうのね、これで三度目よ。あれだけ和通ちゃんと呼んではいけないといっているのに——あんた、私をおちよくっているの」

たゞならぬ女の緊張した顔は、たちまち私の胸に鼓動を覚えさせました。今にも彼女の白い腕が私の頬に飛んできそうです。彼女は



胸をそらしながら、二三步私にせまって来ると、いきなり私の胸元を取って力まかせに安楽椅子におし倒しました。そして白い両手で私の咽喉をしめ始めるのです。

「苦しいの——」

「ウム」

彼女の顔が私の目の中にはいりました。赤い唇がゆがんで、お白粉の香がフンと鼻をつき彼女の体重が、私の身体においかぶさってきます。

「こんどから言わない？」

「ウン」

「こんど言ったら、それ

こそ承知しないわよ」

「ウン」

玄関の方で署員が出勤してきたらしく、足音に混って話声が聞えてきました。

「かんにんしてあげるわ」

彼女は手をゆるめると、私の頬を強くつね



りました。その瞬間、暴風雨が去った後のなごやかな態度に変わったと思うと、微笑さえ頼にたたえながら

「かんにんしてね、痛かった？」

「ちっとも」

「ホホ……」

彼女は声を出して笑うと、何にもなかったように、しらじらしくよそおいながら、部屋を出て行ってしまいました。それから五、六日は、私の頭の中はその事ばかりで、夢うつゝで過しましたが彼女は、私に対して一向に変わった様子も見せず、今迄と同じ態度です。

ある土曜日の午後、熊沢式姓名学者がきて署員を集めて、姓名学について講義したことがあります。その後、希望者のみ有料姓名判断にうつりました。姓名判断は二、三百円から改名に到っては、五、六百円の鑑定料を取るそうです。その折、佐藤和通美も鑑定してもらったので、私は面白半分に個室から出てくるのを待ちうけてたずねて見ました。すると彼女は少し顔を赤く染めながら

「私、結婚したら皆んな男の人をとり殺してしまうと言うの、名前が強すぎるって——」

「どんな名前がよいと言うの？」

「柳子って——」

「なんだか芸者のような名前ですね」

私は日頃にならない親しげな言葉を交しながらふと彼女が時々、三味線をひいたり、小唄をうたったりするのを思い出しながら、やっぱり彼女は勝負で、男の人を尻の下にしく女だと思いました。

「佐藤さん、この頃、文芸の方はどう？ ちよいちよい小説でも書いてるの。」

「フン、書かないわ。一生に一度は書いて見ようと思っているの、そのかわり私が書いたらとても素晴らしい小説が出来るわよ。」

「そうですか、第二の吉屋信子か林芙美子というところですね。」

こんな時、きまって彼女はむきになって怒るので、いつも若い職員達から、和通ちゃん早くお嫁に行けよ。早く行かないと後がつかえるよ等と言われ、その度に耳元まで真赤にしながら更に怒り続けるのです。

とにかく、彼女が婚期におくれていると言ふことは、職員の間でも疑問としており、いろ／＼な噂が交されました。が私にはこの彼女の態度や、なめらかな皮膚の白さ、はりきった胸、臀部の曲線美に心を奪われるばかりで彼女がお嫁にゆかず、ずっと此処に勤めていてほしいと願うのでした。それで人のいな

い時を見はからっては、彼女に近づいてゆくのでした。

「佐藤さん、タバコ吸わない？」

「フフ……」

彼女は無難作に煙草をとると

「火をつけてよ。」

と、それが如何にも当然のように、顎をしやくるのでした。私がマツチをつけてやると、さもおいしそうに煙草の煙を天井にふかすのです。その態度がいかに女主人公の気どりで、ある時には蓮葉な芸者や女給のように振舞い

「才さん、あんた私に煙草吸わせておいて、人に私が煙草を吸うなどと言うんでしょ？」

「馬鹿なそんなこと、誰が言うのですか？」

「なんでも言うくせに、言ったらこれよ。」

と彼女は、こぶしを固めて、私の頭を軽く叩きました。こんな時、私は彼女が街の不良少女で、可憐な少女達を制裁する情景が思い浮んできます。自分でもこうした気持ちに誘われるのが不思議でなりません、はらってもはらっても次々と様々な情景が描き出されてくるのです。

そして、署内にかれこれ七、八年勤めていて二十四、五になる女の小使がいます。この

女の人は大変やさしい言葉使いをします。時折、柄に似合ぬ言葉を使うのでふき出すことさえあります。「おかわいらしいお嬢さんで

す。」とか「ありがとうございます」という言葉にも、例の「おありがとうございます。」等とことごとくおの字をつけて話すのです。



この人の両親は某劇場のチンドン屋でしたが年老いてからその商売が出来なくなり、この署に小使として雇われて来たのだそうです。母親は少したりない方で皆から馬鹿にされていたそうですが、両親とももうこの世の人でなく、身よりのなくなつたその娘を今でもこうして署でやとっているのです。名前を花子といいますが、皆「花ちゃん、花ちゃん」と呼んでいます。この人は大へんな憶病者で、ちよつとでも雷がなると、耳をふさいで部屋の隅にへたばり込むという変り者。その花ち

やんを佐藤和通美は大変に可愛がり、いつも「花ちゃん、花ちゃん」と恋人か妹のように甘ったるい言葉を使うので、私はよく嫉妬に似た気持が湧いてくるのです。それほど和通美という女が私に対する時の態度や言葉使いとは全く正反対で、およそ別人のようにさえ思われます。特に私のいる前では甘ったるい呼方をするので、一層私は気がいら／＼するのです。なんだかこの女は自分にあてつけているようにも思われますし、精神的にも私を苦しめてやろうと思っているのか、目に見えた技巧で女小使に接します。私はこうした行為を見るにつけ、聞くにつけ心を乱します。これが世に言う嫉妬というのかも知れません。

或る日、私は彼女に

「佐藤さんをモデルに、なにか小説を書いてみようと思っているのですが——怒りませんか。」

私はこんな事を言うと、きっと彼女は怒ると思っていました。が、案外平気な顔で

「そう、書きたかったら書いてみたらいいわ私の心理状態を解する人は一人もないのよ、あんたにその私の心がわかるものですか。」とにかく、書いてみることにきめましたか



ら、後で怒らないように願います。」

「私はこう見えても随分、嫉妬深いのよ。」

「美人心夜叉とは、佐藤さんのことですね」

「フフ……」

彼女はあごをつき出して嫌味を二、三いつてから炊事場を出ていきました。

その夜、私は宿番が当たっていましたので、自分の仕事を早くかたづけてから、新聞を読んだり雑誌を見たりしている所へ、徴収係長のH氏が入って来て、「今夜、夜業をするからすまないが、佐藤さんの所に行って金庫の鍵を借りてきてくれ」と頼まれました。

彼女の処へ使いに行くというので、私の心はなんとなく、はしやいだ気持でした。この日は、彼女も残業していて、管理係に席を置いていた為、鍵を持って帰ったのでした。

彼女の家は署から二、三丁行った町はずれで、最近、父を亡くしてから母と二人きりの佗しい暮らしをしていました。勿論、それ以後魚屋はやめていました。もう九時に近く、あたりはすっかり静かで、小じんまりした平家のカーテンを引いた窓の灯がほの明るく、道端に光をなげていました。このなまめかしい夜景に私はしばらく、立ち止っていました。H氏からの頼まれた事が、頭にしきりに動きま

すので思いきって、表戸をあけました。すると私の予期していた彼女が現れず、母親が出てきて風呂に行っていますので」と言いつて鍵を渡してくれました。帰りかけようとして玄関先を見ますと、狎が飼ってありました。何年も同じ署で働いていますが、彼女の口からちよつとも知らせてない事でした。又犬もめったに外に出してもらえないと見えて、革の首輪と銀色に光る鎖でつながれていました。私はこの有様を見てからというものは、自分を彼女の飼犬になぞらえて、夜毎にいろ／＼な連想をして一人で胸を燃し続けました。

そして、とう／＼彼女の秘密がこの犬に依つて証明されたのは、かなりの月日が過ぎてからでした。私は彼女から書物を借りていましたので、ある夜、返しに行きました。借り受ける時に少しでもよごしたら承知しないわよと、きつく言い含められていましたので、私は新聞紙のカバーをきかせて注意に注意を重ねて読んだ本なのです。その夜は、母親は、食堂を経営している兄の所へ、手伝いに行つたから帰らないというのです。それで私も、幾分か心に落ちつきが出来て、いろ／＼と雑談しました。その夜の彼女の服装は、黒のス

カートに桃色と白の毛糸のセーターを着ていて、丁度、ふつくらとふくれた胸のあたりが虎の皮のようにしまになっていました。

突然、彼女は何を思ったのか急に真顔になり、幾分か動揺の色を見せながら、「才さん、あんたちよつと変っているんじゃないの」

ずばりと彼女の口よりとゞめをさゝれた私は、言葉が出ず羞恥心で顔のほてるのを感じました。

「そうなんです。おわかりになりますか」

彼女は、私が否定するだろうと思つていたらしく、少し物足りない顔をして

「あなたの態度とか、言葉使いが女性的よ。それに読んでいる書物がみな少し変っているわよ。私、とうに知っていたのよ、私の奴隷にしてあげようか。ホホ……、どう今夜私に忠誠を誓いなさいよ。」

彼女は平然とした顔つきで言葉を続け、半ば私を見くびっているようです。

「どうしたらいいのですか。」

「あら、知らないの。あのチンのようにおとなしく服従すればいいのよ。あのチンはとて忠誠よ、私のいう通りになるの。でも、時折はいうことを聞かないから折檻するのよ、

# ら見た

## 種々相

編集部編

遠く北海道や九州の果ばかりでなく、沖縄あたりまで含めた全国各地の愛読者の方々から毎日、夥しい数に挙る読者通信、代理部に對する注文状に添えた御意見、或は、自ら撮影された写真、セルフタイマーで撮った自像や、責めのアイデア、マゾのアイデア等を頂きその整理に忙殺されています。

今日は、そういった通信の中、編集部に届けられたものを中心に、アブの種々相について思ったまゝ記してみたいと思います。通信

の一部は本誌の読者通信欄或は、KK通信の会友通信欄に掲載していますが、誌上に公開を許されなかったものや、又、誌面の都合で掲載されなかったものゝ中で、参考になるようなものを漸次挙げてみましょう。

「私のように特別に変わった性癖の持主の書いて貰えないと思います。雑誌に発表するのではないは別として、とにかく私の告白を読んでみて下さい。」

あれを見てごらん」

彼女は立って庭の片隅の柱に縛ってある犬を、座敷につれてくると前足をふんばるようになっているのをズル／＼と鎖をたぐりよせました。犬は両足を麻ひもで縛られ、その目は彼女に哀願しているようでした。

「どう、素敵でしょう。私の意志にそむいた時のおしおきよ。」

犬は口を開いて舌を出しながら、大きな吐息をもらしています。私は恐怖に満ちた犬の大きな眸を見ながら、お世辞ともなく言いました。

「ふるえていますよ」

「そうかも知れない、私が怒るととても凄

んだからね。あんたも犬のかわりになってみてはどう？」

「どうするのです。」

「あんたの首に首輪をはめて、思う存分虐めてみたいのよ。そして、あんたの目が恐怖にみちて哀願する顔が見たいの、どういゝでしょう。今夜はゆっくりしていきなさいよ。」

彼女は机のひき出しを開けると、黒い兵児帯をとり出して、坐っている私の首にぐる／＼と巻いてしまいました。

「これでいゝのよ」

襟首の所で結び目を作ると、帯の余りをぐっと上に強く引きあげます。

「どう、とてもいゝ氣持でしょう。マゾの男

にはこれ以上のおくりものはないのよ。そしてあんたを陶醉させてあげるわね。」

彼女の声が、リズムのように聞えてきて、私は日頃の思いがやっとなかない、とても言葉でいゝつくせない氣持に誘われましたが、ほんの瞬間の出来事にすぎませんでした。

このことは、私と彼女の二人きりの秘密となりましたが相変らず署内における彼女の私に対する態度は、今迄と少しも変わりなく小使をしている私を見くびっているようです。でも私は尚、一瞬の陶醉でもいゝから彼女の手によってその境をあるいてみたいと願っています。

(終)





## 読者通信か

## アブの

という書き出しは、誰にも話すことの出来ない心の中の鬱積を単純に洩らした一読者の投書ですが、発表を前提としないで書いた編集部宛の手紙の中には、案外変わった面白いものがあります。面白いといえ、書いて来られた方々に失礼に当るようですが、中には、これは決して誌上に発表しないで下さい。と固く断り書きしたものが 있습니다。こんな通信の中には、是非発表したいなアと残念に思うようなものもあります。一般的にいつて、女性縛りマニアといえますが、若い女性を縛ってみたいという男性の方の便りが、数において一番多いようです。或は、女性に縛って貰いたい、苛めて貰いたい、凌辱されたいという男性、所謂、マゾと云われる方からの数は数に於いては、前者に劣りますが、なかなか熱心な方が多いようです。相手が女性でなく、男性を求める人も少なくありません。熱心といえ、ゾドミアの方々も悲壮な熱の入れ方です。切腹マニアの方々も、他に、こういったものを取扱った誌がないだけに、相当数のグループがあります。切腹マニアに関連して、臍部に対する狂崇を持たれる方々もあるようです。男性で、若い女性の豊満な腹部、中で

も臍部に執着を持っておられる方が、或る程度あるのは、うなずけますが名古屋市の或る女性の方(住所、氏名は明記してあります)から、臍部を中心に被虐願望を有する珍しい方の通信がありました。文章がたどたどしくそれに、文中公開を差支える個所が多くて、保留してあったものです。紹介しますと

——私はお恥しい事です、二十四才(数え年)ですが、養父は私を犬ネコの如く(カシ)して外へ出るにも、つけまとい(しかし)養父は五十六才で私の母は、私の赤ンボ一の時、つれて、この家へ嫁入りましたが、五年後、となりの十才も年下の工員と逃げました。養父は其の時、九ツの私と二人きりの生活が始まりました。父はなぜか私のお腹をさすり、特にへそを愛撫し、毎日へそに——中略——(十五、六才になる迄、養父から臍部に対するいろいろな加虐行為をされる事や、養父が近所の女の子を集めて、腹部を出さして、擦っても笑わぬ者には、葉子をやるという、へそを弄んだりした事を書いている。)今思うと変態でした。十九才になって、父は私の腹にデキモノが出来たといつて、へそにみそをつけ、おきゅうをすえたり、くず拾い

のとめさんという馬鹿の男をつれて来て、この人は神の力により、デキモノは、すぐなおると云って、一時間も父の目の前で——中略——（こゝで、父ととめさんの二人に、無理矢理に加虐される描写あり）けれど私にも二十才の時、春が来、世話をする人があり、大曾根ののみ屋へ通い勤めました。父はいつも夜十時には近所をうるついで、私と共に帰りました。私のお客の中で今年二十五才のオートバイ屋の店員と恋をし、或る時、父が一週間ばかり病氣になってネタ折、二人はカンケイしました。私はこの青年と深くちぎりました。父は只今、二十四才の時、ニンシン五カ月です。けれど父とはカンケイをしていません。只おへそをなぶられるだけでした。私の大きくなった腹をすぐ見つけ——中略——（義父に男の事を追究されて苛められる事になる）——そうにいやがると、初めて手足をしぼり、セッコーに火をつけて腹をチクチクやいて、ローソクのローをおへそにたらす仕末です。きつと子を流すのではないでしょうか。私は今逃げたらころされます。こんな人がいることでしょうか。只今、家にいますが、父は青年といっしょにさしてやるが、時々とまりに

くること、と云います。父はインボ・テントです。今思えば——中略——（ヤケドのあとからウミが出るようになった事を書いている）父は私の腹がなぶれないので、ストリップへ行ったりして、じつとへそを見るのだそうです。私も小さい時から、へそなぶりされたためか、最近、苦い男のへそを見ると電氣にうたれたように、こうふんします。——中略——父のシワクチャのへそを見るのもいやです。私は出べそです。男のへそはやはり大きくへこんでいた方がいいようです。私のへそは、十才まですくく出べそでボラのへそボラのへそといって、父がなでまわしました。十八、九才より多少へこんでウズを巻いて、でもウズの中のへそが可愛いらしく飛び出て、何ですか土人のへそのようで、夏になるとへそが見られるのが楽しみです。——中略——（最後は、この投稿者がへそを弄られる事についての関心を、近所の馬鹿のとめさん、との色々具体的事件を挙げて説明して、おへそは本当にいいものですと結んでいます。義父というのは、インボ・テントで異性の臍いじめについて異常な執着を持っている男である。そして、この投稿者も自然、臍部

に対する被虐趣味を持つようになったものと思われる。文章といい、内容といい勿論、発表という事を前提としては書かれていない。それだけに赤裸々に書いているので、資料としても価値があると思う。）

次に浣腸マニアからのもので、これは本誌に浣腸願望として、山田芳枝さんのものが載ったことがあるが、女性からのものも案外多い。

こゝに掲げる男性からのものでは、あらゆる部分を細かく描いた割合上手な絵が二枚同封されていた。

——私は、大阪市内の某製薬会社に勤めているものです。ふとした機会から浣腸に対して、異常な執着を抱くようになり、日夜悩んでおります。貴誌三月号で森野さんの「高圧浣腸」を拝見してから、私も自分の体験を綴って人知れぬ懊悩を訴えて見ようという気になりました。生来の筆不手の事とて、文章は極めてたどたどしく読み辛いと思いますが御一読下されば、幸甚に存じます。

今から五年程前、私が商業高等学校を卒業して、現在の会社に勤めるようになってから一年余り、経った頃の事です。私は偶然、会



社の女事務員の方が医務室で、浣腸されていてるところを見てしまったのです。私は丁度その時、医務室の隣りの物置部屋に居合せ、はめ板のすき間から、その光景の一部始終を目撃しました。

浣腸された女子事務員は、私より五つ六つ年上でしたが、奇麗な人で男子社員の中には彼女に関心を持っている人が、可成りあったようです。実は私自身、彼女に少からず心を惹かれていましたが、彼女はちびの年下のしかも学歴の大した事もない私など、眼中にあらう筈もなく、所詮、私風情の足もとへ寄れる筈もない高嶺の花だったのです。その彼女が事もあろうに浣腸される所をみたのですから、私の受けたショックがどんなものであったかは、御想像がつくと思います。しかもその浣腸の仕方が又奇抜でした。その場には、医師と看護婦、(どちらも会社の雇員です)の外に、会社のお偉方が五人も立会って、それらの面前で、彼女は浣腸されていました。純白のブロースが診察台の裾に脱ぎ捨てられていたのが、印象に残っています。——中略

(こゝで、彼女が浣腸されている場面の描写をして、投稿者のその時の気持ちもかいて

いる。いさゝか公衆便所の落書きめいた赤裸々さである) 彼女は身動きもせず、大人しくなされるがまゝにしていきましたが、その美しい潤いのある眼は、じっと閉じ、口を心持ち開き、肩で息をしているのが、いかにも切なげで、その時の彼女の顔が今でも眼の前にちらつき浮んできます。花恥しいうら若い女性の身にとって、どんなに羞しい事だったろうと思われまふ。——中略——(こゝで排泄途の医師や看護婦、或は参観人? 達の動作等について述べている。勿論、公開を許されぬ範囲迄、描写している。) 彼女は液の注入が終った時から、便意を催したらしく、苦しげにばあ／＼息をあえがせていましたが、医者は中々用便を許さない。その中に彼女は、ひい／＼泣声を上げて苦しみました。それでも医者は平気な顔で時々、時計を見ながら時間を計っていました。その時間は五分でしたか十分でしたか、とに角可成り長い間のように思います。やがて時間が来たらしく、やっと医者が何か合図をしました。「これで彼女は解放されるのだらう、それにしても、これからどうして便所へ行って大便をするだらう。あの調子では途中で、もらすのではないかし

ら」等と気を廻しながら見ていると、どうでしょう。彼女はその部屋で大便をさせられることになっていたのでした。診察台の下からビカビカ光る便器が取出され、室の真中に据えられました。——中略——(無理矢理に排泄される光景を、嗜虐的に書いています) 以上のような次第で、私は偶然にもとてもない乱暴な医療を見たのですが、恐らくこのような事は、もう一生経験できない事と思います。彼女は間もなく、結婚を理由に退社し、その時の医者は桃色事件を起してやめました。其の後、医務室は移転し、そのあとは物置になりました。同封の絵は、当時の記憶を辿って私が書いたもので顔は、彼女の感じに似ていますが、云々。——(同封されている絵二枚は、浣腸の有様や浣腸の場面にいた医師、看護婦、参観人等の様子を細く割合、不自然さがなく美しく描けている。浣腸の空想くさい所は少々あるが、空想は空想としても、こういった投稿があるという事は、若い女性の浣腸の場面を目撃したいという願望の単的なあらわれであると思う)

次に、ソドミア連からのもので、女学生同士のラブ・レターのような情緒纏綿たるもの

がある。女形が本当の女性より色っぽいのと  
同じで、女性の文章より、更になまめかし  
い。編集部の連中は、こういった文章にも悩  
まされているという事を、同情して頂きたい。

——夢見る様な切れ長の瞳は、青春を謳歌  
する輝きに満ち、まるみを帯びた高い鼻、そ  
してつゝましく閉じた形のよい唇は、情熱を  
たたえてぬれている。その上、浅黒い皮膚の  
色までが、それらをひきしめて効果をみせて  
憎らしい程の調和美を具現するのだ。

今、ペンを走らせている僕の鼻先に美しい  
微笑をたゝえて、じっと一点を見つめている  
彼の写真が、額の中から何か話しかけるよう  
に……「何という美しさだろう」とつくづく  
感嘆しながら、うっとり見とれては、思わ  
ず洩らすやうせない溜息に、ペンの運びも意  
図的にならない。「世寿緒」（貴方は今も  
こう呼びかけることを許してくれるネ）今  
頃、貴方は通い馴れた西銀座のあのオフィス  
で夢中になって記帖に、計算に忙殺されてい  
る事だろうね。以前僕に愛の囁きをこめたレ  
ターを書いたであろう。その同じ机で……  
貴方の机上には、今もあのインクスタンドが  
あるかしら、ほら、以前、お贈りした水色の

あれ、僕の好きな色なので選んだら貴方もと  
ても気に入ってくれたのだったね。（総べて  
を受け入れてくれる様で水色は、僕もとても  
好きなの）と、それを聞いて、何か偶然と云  
いきれない宿命のつながりを感じて、感泣し  
たものだったけど。それ以来、水色のものは  
手当たり次第あつめようとした僕、ホラねこの  
部屋を見ても分るでしょう。先ずこのテーブ  
ルクロス、窓のカーテンでしょう。其処に置  
いてある電気スタンドだって水色一色だし、  
壁の額縁は勿論、目ざまし時計、カビンと放  
えきれないくらい、それに櫛やヘヤーブラシ  
まで……。

柄にもない感傷と軽蔑されるかも知れない  
けど、僕はそれでもいいの。澄みきった秋空  
を思わせて、自然美の精を集めた様な、この  
色を見つめていると、たかぶった感情はいつ  
しかやわらぎ、ほのぼのとした雰囲気、す  
さみきった身も心もあたためてくれる。——下  
略——

（これは、読者通信で結ばれた東京と大阪の  
二青年の間に、交された手紙の一節で、大阪  
の青年が編集部へ礼に來た時、持ってきたノ  
ートの中のものである。これから、まだ喋々

喋々の場面や、これこそ編集部へ報告するの  
だと、二人が熱海のホテルで一室であかし  
た夜のことなど、こまごまと書いていくが公  
開をばかれるのではぶいておく。こゝへ引  
用しただけでも自己の身の辺の物品にまで、氣  
をくばり心を届かせる女性的な青年の心情が  
よくあらわれている。）

次に女装して虐められたい男性のマゾヒス  
トからのお便りを紹介しよう。

——御多用中、突然この様な事を申し上げま  
して誠に失礼とは存じますが、何卒御寛大な  
る御理解を賜りまして、お聞き届けの程伏し  
て御願い申し上げます。実は小生は、貴誌の最  
初からの読者でありまして、毎号を楽しみに  
愛読させて頂いて居ります。小生は現在、三  
十九才で妻子と三人生活で××業（明記し  
てあるが特に秘す）を営んで居ります。小生  
は最初、責める方のサド的な行為を好み居り  
ましたが、昨今は責められたい念願で、毎日  
苦しい夜を過しております。先妻（死亡）と  
は長くこの楽しみを味っておりますが現妻  
は、斯様なことに理解なくたゞ貴誌に依り、  
慰めております次第です。三月号、四月号に  
は小生の胸は心強く打たれました。特に四月



号の「マゾヒスチックな境地について語る読者座談会」を読まして頂いた時は、力強く感じ、斯かる人と一度、ゆっくり語りあいたいと存じます。自分の被縛写真を一度、自身でみたいと存じます。男性ヌード被縛モデルになられた方も少くないと存じますが、何でもしようか、御試験的に小生を緊縛して頂き写真をとって頂きましたら。小生はヌードでも結構ですが、なるべくなら衣類を少々身につけた方が好きです。女性の被縛でも長襦袢姿でガンジガラメに縛ったのが好きで希望とします。小生が毎夜一人で、空想して居りますが、自分が女装して緊縛され、種々な拷問にかけられることです。男性が女装して緊縛された写真は未発表かと存じますので、小生を利用下さいまして、昔の拷問場面集を発表下されば亦一風変わったものが出来て、読者の中で喜ばれる方もあるかと思えます。四月号の舞台写真の様な姿で、もっと縛りを厳重に、例えば荒縄で胸の方にグル／＼巻にして吊し責めにした場面、この場合、猿ぐつわも必要です。如何なるポーズでも小生辛抱します。

(女装したいという男性の希望も案外ある。

重田正和氏の「女装への憧れ」はそれらを代表したようなものだが、マゾ傾向の男性にはそういう因子があるようだ。)

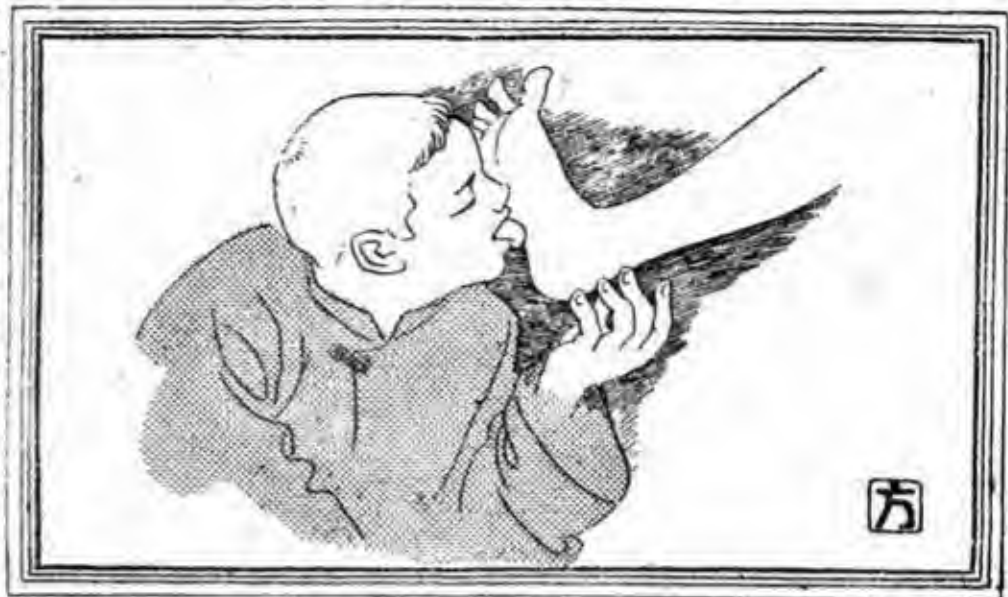
最後に切腹について述べよう。中康弘通氏の「研究物」を中心にした切腹マニア・グループの方々からの熱心な便り、殊に、川合伊都子さんの御自分の切腹写真を拝見したときは、門外漢の者でさえ、切腹する女性の写真に妖しい執着を抱くようになった位である。職掌柄、切腹に関心を持たれる方は、医師とか看護婦のような職業の方に多いように思うが、これはあて推量かもしれない。次に、医師の方の通信を一つ。

——前略——川合伊都子氏は、純女腹切のナンバーワン、是非毎号御願ひしたいものです。天井から短刀を釣る話は、私も実際に実行(但し、折りたたみ式のナイフを好んで用いた)したなつかしい思い出があるので自分一人でない事を嬉しく思いました。今から十数年前、二十過ぎた童貞男の性の苦しみでした。天井から落ちて腹に何度か立てたり、たみの境目から、刀尖を少しのぞかせて、その上にころがって、或は伏せたままのしかかって、腹に突刺さる痛さと共に Ejaculation

があり、それが Ejaculation と知らずに身体のしびれるような歓喜を不思議がっていたのでした。たしか一、二年してその後、医学部に行ってから、ふと Hand Oranie を覚え、たのでした。よこみちに入りましたが、世の中には上には上、下には下があるものですが、奇クを知って以来、私の人生観は新しい解放を受けたような感じです。昨年の五月だったか、あの日は、ある意味で重要な人生の一転機でした。——下略——

(切腹マニアの方の共通点は、切腹の姿態では、刃先や臍部が拳や腕等でかくれないことである。須藤律夫氏なんかもうそうだが、臍部に身体各部の狂崇や、又写真のモデル志望の変った通信等があるが、次の機会にゆずるところにする。若い女性の方で、自分の赤裸々な告白を読んでくれと歯に衣を着せない露骨な文を書いてきて、それを是非誌上に載せてくれとせがむ人も時折ある。次回は変った投稿をせいぜい取りまとめ御紹介しよう。

(福原記)



—満洲敗戦の体験—

車 中 汚 辱

九 鬼 麻 里

「あんなに恥しい目に会ったことはない。それこそ寿命が十年もちぢまったわ。」

と梨江夫人は、いつもの明朗さに似合わずこんな冒頭で語り始めるのです。この告白は梨江夫人、自らが進めて行くのが本当なのですが、文章など綴った事もないと謙遜され、

私も貴女も一心同体だ、とおっしゃいますので、私が書くことに致しました。

「主人には内緒よ。」

と念を押されますので、勿論此処にあげました山里梨江と云う名前も仮名である事は止むを得ません。

この梨江夫人が、私に近づき結びつけられた動機と云えば、同じ引揚者であるといったことよりも、彼女の勝れた美貌、いや、更にその肉体の何とも云えない豊満さにあったと申しあげておきましょう。その夫人に反して私などはお話にならぬ位の貧弱さで、銭湯へ行くのも恥しい位です。梨江夫人は女学生の頃、テニスの選手をしていたと自慢されるだけに、その豊かな肉体と共に性格も非常に明朗でこの告白を語り終ってからも、明るく笑って居られる様な方なのです。

その夫人が内地に帰ってから十日程は毎晩、うなされたと言われるのですから、まあ余程恐しかったものと思います。

その恐しい記憶を御誌に告白させて頂く事は、むしろ梨江夫人の方が乗気で、そうした折の自分の姿を、客観的に眺めてみたいと云われるのです。それで主観的になり勝ちな自身の告白を出来るだけ客観的に観察する為に、きつと梨江夫人が自分で書かず、この私に札を廻したのだとも思います。

回想の場所は満洲の公守嶺。その当時、梨江夫人も私も二十才前後の娘盛りでした。終戦後の暴動がやや治っていましたが、まだ日本人は誰も戸外に出ない頃、彼女が近所の男



の人達の勧めで新京にお酒を売りに行くことを私に相談にきました。そして、その帰りに思いもよらない奇禍にあったのです。その人達に同行した事が偶然にも、私も、その奇禍の渦中の人たらしめたわけですので、筆が自然、私の行動が中心になってゆくのを許して頂きたいと思います。

私の家は街の目抜き通りでかなり大きな、人に知られた洋品店を営んでいたのでした。が、あの思い出すのさえ、ぞっとする終戦の声と共に、店は暴民の手に依って見る影もなく掠奪され、やっこのことで、以前貸家にしていた小さな家に入りましたものの、収入の道をなくした私達の日常生活は、明日の日さえ心もとなくいつ内地に帰れるかの見通すら困難だったので、私達は来る日も来る日も泣きの涙で送らねばならなかったのです。

或る日、隣家のTさんから聞いたのだといつて、梨江さんが私にそつと耳うちして教えてくれました。それは支那酒を新京迄運べばよい値で売れるということでした。私は、何だか恥しくてためらっていましたが、二、三日してから又、親切に勧めて下さいますので、梨江さんも一緒ならと、私もその男の人達に混って行商に行く決心を致しました。支

那服を整えるのは、惣意な満人もいましたので安易に手に入りました。

支那服といえども私には、梨江夫人を想い出します。臍脂の支那服にピッタリ身

を包んだ夫人のスタイルの素晴しさ

―道で出会う人達

は、皆ふりかえっ

て見る程でした。

その支那服といえ

ば上等の絹のでは

なく、下層階級の

着用している淡い

紺の木綿の上衣と

ズボンで、その

上、小さいのを無

理して着ています

のでしゃがむと、

ピリ／＼服がほこ

ろびるほど身体に

びっちりしている

のでしたが、それ

だけ随分魅力的だ

ったのです。

話が前後になり



ましたが、その支那酒を一人が三斗ほど持つて汽車で運ぶのです。女の身にとって、それはなか／＼の重労働ですが、人に負ける事が嫌いなタチなので私も三斗もって皆と一緒に

新京迄出ました。その日は、予期以上に成功し、その甘い味を知った私達は、翌朝も行く約束をしました。今思い出しますとその二日目に行く事を約束した事は私にとって悪魔に魅せられたといってもいいのでした。その翌朝、私達は再び新京へ行って無事売り捌く事に成功して、驚喜の胸を秘めながら車中の人となったのでしたが、その一行中の一人に、満人が話しかけてきました。運の悪い事にその人は満語に巧みではなかったのです。私達が日本人であるという事がわかってしまったのです。先ず最初は同行の男達が散々、なぐられたり蹴られたりしました。私は人の頭の間からチラッとTさんが殴ぐられながら鼻血を出したのを見ましたが、それからすぐ満人達が私自身に襲い掛って来ましたのでどうなったか、全然わかりません。あかだだけの労働者達に、あッという間につかまって随分抵抗はしましたが、数人の人に抱きかかえられるとか弱い女の身ではどうしようもありませんでした。いつか、ズボンもむしり取られて、お尻を高々と持ち上げられて胴上げの形で大声で口々にわめき乍ら、私の身体を頭上に差し上げて弄ぶのです。私は憤怒と羞恥で顔を燃やし、必死になって逃げようとする

のですが、かえってそれは彼等に乱暴をする口実を与えるようなものでした。一層彼等の興をそよる形になり、他の列車からも続々と集って来て見物される始末なのです。

「俺の方にも日本人の娘を見せろ。」

といった奪いあいの有様になってしまいました。暴れ廻る私の手は後に括しあげられ、一人の満人につつかれながら「観々、観々」と云って、通路を端から端迄歩かされるのです。彼等より優越人種だといった気持の未だ抜け切っていない私にとって、どれだけ口惜しかった事でしよう。屈辱感の身内に湧きだしておりましたので、抵抗できるだけは致しました。どうにもならず、彼等を愛しませるだけ楽しませる結果となってしまいました。お尻を撫ぜ、叩き、私の悲鳴を聞く度に、大声で笑うのです。車内を一巡した上で、床の上にじかに坐らされているTさん達の所に連れて行かれ

「どうだ、お前達もみたいか。目の正月をしる」

と云いながら又も、Tさん達の眼前でその無様な恰好を見せるので、私は急に涙が流れ始めました。日頃から彼達の間では女王様の様にふるまって君臨していた私で、その人達

は私に思いをかけ、結婚を望んでいる男の人達も少くありません。そうした男の人達の眼前で、しかもあられもない姿で晒者にされている私の屈辱感、死に値する事をお察しして頂けると存じます。Tさん達、五、六人の人達は皆顔をそむけていますが、やはり好奇心が強く傍くのかチラ／＼横目を使って見るのが、私にはよくわかっていました。

「貴方達、目をつぶって頂戴。同胞が侮辱されているのよ。私にはがまん出来ません。」と強く叫んだのです。それは本当に夢中の叫び声でした。

その時、列車は徐々に動き出したので、私ははっとした気持に誘われました。Tさん達は、さすがに、私の叫びに目をかたく閉じていました。

「目をつぶった者は窓から放り出す」

と矢庭に前の一人が横面をなぐられて、無理矢理抱え上げられ窓から半分程身体をつき出されて悲鳴を上げています。私は再びTさん達の真中に後手に縛られたまま座らせられました。下半身の乱れも直すことが出来ない私は、まな板に載せられた鯉のように、徒労なものがきが続けていました。いや満人の人達ばかりでなくTさん達も、私のこの姿に限り



ない愉悦とサジステイックな喜びを覚えたにちがいない。そのうちに満人達は口々に、わけのわからない言葉で私にからかうのです。そうしてTさん達に「女の足をなめろ、なめないと窓から放り出すぞ」と囁すのです。始めはTさん達もためらっていましたが、人々の声はげしくなるばかりで、窓から放り出されるのが恐しくなつて、とうとうその暴力に従わねばなりませんでした。

奇妙なナマ温い感触が、私の足の裏を撫でるとき私はこの悲しい境遇にありながら、何とも云えない不思議な快美な感覚が非道い屈辱感と共に身内を電流の様に貫くのを覚えました。これは本当に不思議な感覚で、一瞬、周囲のどめよきを忘れた位強烈なものでした。

その時、私を支えていた満人は、私の異様な呻きとそりかえりの姿を見ると興味を覚え



たらしく尚も「舐めろ」と、強要するのでした。私はその度にたどたどしい満語で歎願しましたが聞き入れてくれず、Tさんが何か早口で必死になって、云いあらそっていましたが「生意気な」とばかり蹴り倒されました。その間に私は、服をはぎとられ腰掛けの

脇置きにお尻を突き出した異様な恰好で、腰をいやという程打たれ、頬は横向けに座席に押えつけられて動けなくなりました。夢中で叫びお尻をくねらせるのが面白いと見えて、平手でうち叩かれるのです。その苦しさ、口惜しさったらありませんでした。

突然その時、大声でどなっていた私の周囲の満人が、静まったと思うと、手とり足とりにしてズボンを脱されている他の女性を人の隙間から見ました。白い肌が眼にとまりますと、私は思わず息がとまる様な衝動を覚え立ち上りかけて、

押し倒されたのですが、尚も延び上り満人の群れの間から白い豊かなお尻に眸をすえるのでした。本来なら顔をそむけて眼をつぶるべき同胞の凌辱の姿なのに、私は震える眼でそれを見つめたのです。いうまでもなく梨江さんでした。日頃から秘かな想いをもって

いる美貌の女性のあらわな姿を、私はその時に自分の眼ではっきりと見たのです。

彼女もやはり私と同様に満人たちのむくつけき手によって、思いのまゝにならざるを得ませんでした。「止して、止して。」と絶叫していますが、満人達に取り囲まれてしまっているのでしょうか。出来ません。梨江さんの身体は私なんかと違って、同性の私が見てもぞっとする程美しいのでしたから尚更、異性の人達が見れば貴重な弄び物だったに違いありません。彼女が最初に申しました「寿命がちぢむ恐しさ」というのはこれからなのです。

走る列車の窓を開いたと思うと「お前達三人はたくさん楽しいことをしたのだから。今度は刑罰だ。」といって私もTさんも梨江さんも下半身ぬぎ取られたまゝ、先ず多勢で両

脚を抱え上げられると窓外に突き出され、次はもがく私の身体を折り曲げて、Tさんと同じ様に押し出して、ガラス戸の上にお尻をきっちり下され網棚と腰掛に固定された形になってしまったのです。（これはあちらの大きな列車ですから、この様なことが出来るのでしょうか。）列車は非常なスピードで走っているのです。手はつかむ所がなく、徒らに宙にもがくのみで、外壁に足の裏を密着させているのですが、身体は前に屈み勝ちでいつレールに転落するかもしれないと思うと、身も心もちぢみ上り生きた心地もありませんでした。車内では、この哀れな私達を嘲笑して眺めていることは、知覚の上でかすかに感じますが、心は唯々転落しないでくれという念で一杯なのでした。今こうして思い浮べるとよく助かったものだと思議な氣持が致しま

す。Tさんも蒼い顔で絶叫していましたが、たえず私の顔をみつめていました。それからただ恐怖の為に氣が遠くなるばかりで、他の事は全く忘れ果てた人間となってしまう、氣がついた時私達は泥まみれの床の上に寝かされていました。運よくこの様な危険な有様を見てたまりかねた通過中の中共の兵隊さんが救ってくれたのです。

以上が私の告白でございますが、この様に死に直面して内地に帰ることのできた喜びは一生忘れることは出来ません。

その後、下関市へ引揚げた私はTさんと結婚しました。梨江さんもその後を追う様にして、電気のエンジニアだという山里さんと結婚され琴瑟相和す夫婦愛で、私の家から程遠からぬマーケットに間借していられます。今でも、時折、その時の話をしては怖しかった時の事を思い出すのです。

（終）

## 責め撮影行

# 野外縛りの記録

辻村

隆



本誌六月号に発表した、「緊縛の構成と責めのアイデア」については、諸者諸彦から種々懇切な指導や助言を頂き誠に有難く思っている。中でも文中、私が野外撮影の困難さをなげいた一項については、自分の別荘を提供するから、撮影に米ではどうかという篤志家や、又自家用車を貸してあげるから、人里離れた山中で撮影してはどうか、といった熱心



な愛読者の方々の御申出を受けたりして、全く感激してしまった。

そんなわけが、今回、愛読者某氏の御好意に甘えて、自家用車を借用しての本年初の野外縛り写真の撮影を実施する機会を得る事になった。本年は梅雨が早く来るといので、湿っぽい空気が日が続いたが、入梅前の晴れ間を選んだ一日、難波駅前に差し廻して貰っ

た車に乗り込んだ一行四人は、一路、目的地の生駒連山の一翼、磐船獅子窟寺へ向った。

本日、特別に会社の方を休んで来て貰った伊吹真佐子嬢を真中に挟んで、歩く所がないからと無理に引っぱってきた肥満体の箕田編集長、今日こそ縦横無尽に腕をふるおうと張り切っている塚本カメラマン、それに私は主として、構成と緊縛の係を担当。

車窓から吹き込む新緑の生暖かい空気を全身に受けて、車は大阪平野を東へ快走する。約一時間ばかり担々たるアスファルトの道路を揺られると、生駒の山脈がその肌をあらわに見せて頭の上にのしかるように迫ってくる。道がようやく悪くなって次第に坂道にかかる。いつの間にか大阪の市街が目の下に見え大阪城が霞の中に頭を出してうかんでいる。裏山へ入り込んでやゝ暫くパウンドの激しい石ころ道を徐行。箕田編集長の指示で、車を溪流に沿ったがけ下に止める。

雲が多くて、陽がさしたり薄陽になったりする。一同、上衣を脱いで車の中に放り込み、軽装となって、道路より山道に入り、堰堤を越して約百米程、溪流に沿って上流へ廻ると、滝の音を聞く。うばめがしに覆れた岩蔭に荷物を置いて、第一の溜りときめて準備に

かかる。塚本カメラマンは愛用のローライ・オートマツトを三脚上に据え、調子を見ている。

私は、モデル嬢に準備を命じておいて、ライカを肩にした箕田編集長と一緒に、恰好の撮影場所はないものかと物色する。河岸に六尺位の高さに、水平に出た松の枝を見つけたので、この枝を利用して吊りを行ってはどうかと提案したが、吊りはモデルを疲労させて、あとの撮影に差支えるというので、この趣好は最後に時間があつたら、行う

ことにきめ、最初は、モデル嬢の身体や縄を濡らさないで行う、岩を背景に簡単な縛りのポーズ、次は滝壺や、溪流に浸らしてのポーズ、最後は樹木を利用した縛りという具合に一応のプランを樹てる。

その間に、モデル嬢の準備が終って、ケープ姿で出てくる。本日は特に雑誌に公開するという事を考慮して一番下には、バタフライをつけ、その上に花模様ズロースを着し、ケープを羽織ることにしたのだ。素足に草履をはかせて河原に出る。両側を挟むように山



肌に囲れた一筋の溪流が白く岩を噛み、たゞ滝の落ちる音だけが、しじまを破る。河原の中央にある人間をすっぽりと隠す大きな碑のような岩に、磔のように後手に縛って正面、横面から撮る。折悪く、雲が頭の上を掩って薄陽さえささない。これではハイライトがつかないというので、デイライト・フラッシュ二発を使う。

次には、平な岩の上へ後手に縛って、仰向けに寝かせ、岩が頭の方へ傾いているので落ちないように、両足首を揃えて縛り、岸の灌

木に括りつける。モデル嬢は、従順に次々と指定するポーズを嫌がらずにとってくれるが、余りにも場所が広いので目うつりがして、これこそという場所がきまらない。仰向けに岩の上に寝たポーズなんか、余りいい狙いとはいえないかったようだ。

箕田編集長は、もうそこは早く切りあげて滝壺の方へと盛んに勧める。然し、縄を一度濡らしてしまうと、扱いにくくなるのと、モデルが疲労するので砂の上で手枷と足枷の二ポーズをとる。アツプで直接、女体の美しさをキャッチしようというのだ。金属製の枷は、準備してきた鎖のついた厳丈なやつだ。折柄、薄陽がさしてきたので、白日の下、伊吹嬢のボリウムのある肉体の豊満さをよく掴む事が出来た。ズロースやバタフライは、こういったポーズをとる時はわざとらしく感じられるので、シャツターを切る直前にはずしてしまふ。平凡なポーズだったが又、それだけに素直な美しい絵になった。時間を考えて、こゝは簡単に切り上げる。



こゝで再び、バタフライをつけて、河岸に横たわった木に仰向けに縛る。依然として薄陽がさしているの、木の葉が、白い肌に縞模様の美しい斑を描く。其の場で後手のまゝ、可憐な表情、全身のこなし、特に足先に注意して、アツプとロングを数枚狙う。ポーズを変える度に、こゝのところ縛り役も中々楽でなく、カメラも足場が悪いので移動する度に、相当時間を喰う。予定があるので気ばかりあせるが、既にこゝへ来てから一時間以上は経つたろう。

私は、ポーズをとつたモデル嬢にケープを着せかけて待っている。カメラの合図でケープをとる。OKというところで縄を解いてケープを着せる。箕田編集長は、ライカで撮影中場面を連続で撮っているらしい。時々、木の間から指示を与えてくる。

「そこは、それ位でいいから、早く滝の方へ行ったらどうだ」

と声がかかる。時々、足首迄、水に浸してみるが時季がまだ早く、それに山水なので、肌をきるように冷たい。

「どうも、少し冷たいようですね」

とモデルと私が躊躇していると、箕田編集長が下りてきて、

「ナイロンを巻いてみたら、どうだ」

というが、ナイロンを巻いたって冷たい事には変りないだろう。後手に締め上げて、滝壺へ歩ませ、足首だけ水に入れてみる。とても全身を浸すなんて辛抱出来そうにない冷たさだ。先ず手初めに滝壺の水際へ、後手のまゝ、寝ころばせる。砂は角がある大粒なもので、肌に喰い込んで痛いらしい。近よるとレンズに、滝のしぶきがかかるというので、カメラはずっと後退する。傍に介添えに立つ私のところ迄、岩

に当たった水滴が雨のように落ちてくる。カメラアングルが中々にきまらず、右へ行ったり、左へ行ったりして、いる中に、モデル嬢は、水際にじっと横になつたまゝ、顔を上げてゐる。顔を下げると、水中に没してしま

うのだ。その眼は、まだかゝと訴えている。もう全身濡れねずみだ。シヤツターをきったのか、箕田編集長が、全裸にせよと命じてくる。河原にいる者はいいが、滝の下にいる者こそ災難である。全身に水しぶきを浴びながら、肌にぐっ喰い込んだ縄目を解く。濡れていて中々解けない。やっこの事で縄を解くと、ヌードにして後手に縛り上げる。

「早くして呉れ」

と怒鳴つて、ポーズをつける。



「寒いかな？」

と尋ねると

「いや、辛抱するわ」と答えるが、その声も冷たさにふるえている。角度を変えて、二枚撮った後で後手に縛ったまま、バタフライをつけて、陽に暖った大きな岩にうつ伏せにさしてやる。そのポーズがいいというので、一、二枚撮る。休む間もなく、滝を背中にして、水の中に立てという注文である。浅い所を選んで正面に立ったままポーズをつける。私のシャツはじっとりしめり、まくり上げたズボンも水に濡らす。もう少しの辛抱と、水の中の石に腰掛けさせる。流石に綺麗な水なので、足の指の先まではっきり見える。滝壺の中へ全身を浸してという注文があったが、さすがにこれはモデル嬢に気の毒で要求出来なかった。

こゝで休憩、全身を拭いて、ケープをまとう。次は溪流に縛ったまま投げ込んだところを撮るという予定だったので、私は冷えたビールを一本さげて場所を物色に行く。その間モデル嬢にはオレンジ・ジュースとサイダー私達には、水で冷やしたビールが一本宛。このビールの冷え具合では水の冷たさもさぞかしと思われる。

この時になって初めてブトに噛まれている事を発見する。足や手の露出したところに数ヶ所、かゆくならない、やはり裸になっているので、モデル嬢が一番被害が多い。他の二人は余り噛まれていない。

次は、バタフ

ライにブラジャーをつけた上から、ナイロン布をかぶせて、荷物のように、嚴重にタテ、ヨコ十文字に縛る。ナイロンは、岩で怪我をしないためである。岩を噛む溪流が白い泡を立てる中へ仰向けに投げ込む。身体が流されそうで、不安定と岩に挟まれて痛いので早くしてほしいと訴える。カメラは、岩の上から盛んに狙いをつける。私は、カメラからOKのかゝる度にポーズを変えてゆく。冷たくないか、痛くないか、私の方は、モデルの身近



かにいるので気が気でないが、こうなると、カメラの方は落着いたもので、中々OKと云わない。数枚撮影の上やっと解放。慌てゝモデル嬢を抱え上げようとして、持ち上げたので私は右足を滑らせて、岩の肌ですりむく。メンソレを貰ってぬったが、足が濡れているので中々血が止まらない。歩く度に岩肌を赤く染めるので又、こゝで再び休憩。撮る方も、撮られる方も、いさゝか疲労したので、一同、荷物の置場所迄、ひきあげて



岩の上に、仰向けになって休む。元氣回復したところで、いよいよ最後の立樹利用の縛りに移るために、樹間を歩いて滝の上へ出る。遙か山麓に通る白い道が、ちら／＼と木の間を洩れて見える。陽はすっかり雲にかくれ



幹に、後手に巻きつけて、ぐる／＼縛り、同じポーズで、ズロース、バタフライ、全裸と三通り撮影。ポーズに変化をつけるため、更に、足首にも縄をかけて、引き揚げ完全に宙にうかす。伊吹嬢は、中々頑張って、もっ

ときつく縛っても辛抱出来るから、手加減しなくてもいいという。然し、足場が悪いので、縛り方の方が疲れて仕方がない。

約十ポーズばかり、ロウアングルから狙いをつける。黒々とした古木の松の幹に、真白な女体が縛りつけられたコントラストは全く素晴らしい。然し、その時は、そんな美しさを鑑賞する暇もなく、十四貫近い女体を抱き下して、次のポーズに移る。

谷を越して向う側の山もバツクに入れた雄大な構想のを、というので場所を物色する。腰の高さの灌木が密生していて、カメラを邪

魔することが夥しい。光線状態は益々悪くなる。やむを得ず、カメラの道筋の灌木をへし折り、松の木とバツクに向う側の山々を入れて、二枚ものにする。伊吹嬢は背丈といふ、体重といふ堂々たるものだから、自然の雰囲気にも圧倒されず、理想に近い緊縛写真を捉える事が出来たのは嬉しかった。

最後は愈々、懸案の松の枝を利用した逆さ吊りだ。なんとかして一枚でも成功したいものだ、と、綿ロープ二本を投げて枝にからませる。体重十八貫の私がぶら下っても大丈夫だということを確かしてから、愈々吊りにかゝろうとした頃、一面、頭上にかゝっていた黒雲から、ボツリ／＼と小粒の雨が落ちてきた。これを最後に終了しようと、考えていたが、カメラを濡らすことも困るし放射能の雨に濡れると更に恐ろしいので、ほう／＼の体で、荷物をまとめて下山。折柄、白い幕を立てたように降りしきる雨の中を、車は大阪へさして走った。車中でビールとジュースに咽喉をうるおしながら。

◆お願い◆ 十月号は特大号にて定価値上げの為、十月号にて前金切の直接購読者の方へは、封筒に(次号にて前金切)の判を押してありますから、継続金の御払込みを願います。

戯画

「どうしよう」

畔亭 数久

文並画

右の図は「地獄変」など、共によく見かける仏画を畔亭流にアレンジしたものです。  
「居ても立っても居られん言うたかて……居るよりしよがない。」とは大阪落語の鬼才初代春団治の名句ですが、こゝに挙げたのは単なる縛りや責めでなく、どうにもし様のない焦燥を感じさせ、手出しをせずに自動的に困惑させる意地のわるい責め絵です。  
動けそうで動けない、おまけにじっとしても居られない。不動の金縛り、どうしよう。



SUK.





# 感情教育

(十一)

吾妻

新

## 別離

およそ何がコッケイだと言って、結城章三郎が郵便局長になったというニュースほどコッケイなものはない。はじめ私たち友人は信用しなかった。やがて事実だということがわかると腹をかかえて笑ってしまった。次に、「一カ月つづくかどうか賭けようじゃないか」と言うものが出てきた。

だが、章三郎がおよそ不似合な職業につくには、それだけの理由があったのである。出版社を飛び出した和製ゴーガンはたちまち行きづまった。昭和十九年にはいると出版社の強制的な統合や合併がはじまり、用紙の割当はますます窮屈となって、章三郎の書きたいようなものは出版の可能性がなかった。文学報国会にも入らない文学者は能力のない人間であって、もちろん新聞や雑誌が相手にする筈はない。窮余の一策、かれは郵便局という特殊な世界にとびこんだのである。

終戦後はアメリカ式制度にかわって一切月給制度になってしまったが、当時の特定局（三等局）は半官半民のメエ的存在であって、局長の手当はタッタ三十円なのに実収入は五百円にも八百円にもなった。その種明しをすると、ひとつは七人格とか十人格とかいう局の等級にしたがって七人分、十人分の月給がまとめて局長に通信局から支給される。その総収入で局長はいくらの月給で幾人使おうとかまわない。極端に言うとうと、妻と娘に手伝わせるだけでもいい。要するに郵便事務に支障さえ来さなければいいのだから、請負制度みたいなものである。もう一つは、ハガキ、切手、収入印紙の売上の歩合収入がある。章三郎の引受けたときはすでに敗戦色濃厚で、ハガキや切手まで二等局から数量を割当てられたから、一人にハガキを二枚以上売らないようなことをやって歩合も知れたものだったが、印紙だけは無制限で手数料の率も高かった。だから彼みたい

に、保険会社の課長をやっている友人を幾人も持っているものは、毎月買う莫大な収入印紙を全部じぶんの局に注文させて、その歩合



収入だけでノンビリ暮せることになる。しかも郵便局長には徴用の心配もない（それまでの戦争には赤紙すら来なかった）。

昭和十九年十二月、彼は生れてはじめて官庁の辞令を受け、京橋のE郵便局長になった。彼の肚では、郵便事務はなんにもわからないうのだから一切局長代理の男にまかせ、自宅で好きな本をよんだり書いたりするつもりだった。こういう不在地主めいた局長はそれまでザラにあったので、省令で内職は許されないのに大半のものが公然と事業をやったりしている。章三郎は金儲けしようとは思夢にも思わない。局の成績なんかどうなっていたいい。ただ自由に生活できさえすればいいのだ。ところが、苛烈なる戦時下にこんな不屈きな了見をもっていて天の許したまうはずがない。たちまち神風が吹き起り、彼の思惑は次々とアテがはずれることになった。

まず第一に、彼が局長に就任したとたんに、秋田県の親戚に縁故疎開させておいた子供が病気になる。由紀が東京を去らねばならなくなった。第二に、おなじくトタンに、銀行、官庁および郵便局には防空責任者が必ず住んでいなければならなくなった。郵便局の事務員は局長代理の青年ひとりだけをのぞいて他は全部親がかりのわかい娘である。まさか泊ってくれとたのむわけにはいかない。青年も損な役廻りをよろこんで引受けるほど物好きではなかったから、即座に拒否した。勢い局長たる結城章三郎は自宅をひきはらって、この荒涼たる局舎に移らなければならなかった。

はじめて局舎に移転した夜を、彼はいまだに記憶している。マツチ一本で火がつきそうな古びた二階家だった。黒いカーテンを引いて鍵をかけ、がらんとした局舎の中央に立って、黄色いかぼそい電球がたちまちあたりの風景を映しだした。傷だらけの机と疲れた

椅子、つめたい鉄の窓口の柵、書類戸棚、帳簿の列、モスラー四号金庫、――まさに格子のある牢獄だ。鉄と紙と木。生きているものは一つもない。なぜじぶんはここに、こうしているのだろうか？

上野駅の雑踏が眼にうかんだ。十時廿分発の青森行にのるために、由紀は章三郎と正午のサイレンを耳にしたがら家を出た。しかも、改札口が幽むほどの行列が、暗幕を張ったガラスの巨大な屋根の下でひしめいていた。発車前十時間である。章三郎が人浪をかきわけて改札口に近づいてみると、すでにブラットホームには百人以上の人間が同量の荷物とともに座りこんでいた。

「あの連中はどうしても構内に入ってるんだ？」と、章三郎は駅員をつかまえてなじった。

「乗りおくれたんですよ」

「乗りおくれた？　じゃあ、なぜ外に出さないんだ？　一度出てもらったらいいだろう。さもないければ、どんなに早く来て行列をつくたって何にもならんじやないか」

「だれが引っぱり出せるんです？　やれると思ったら、あんたがやってみるがいい」

章三郎は歯がみして戻ってきた。由紀は不安な眼で彼をみつめた。「ねえ、乗れるかしら？」

「一日待っていてもダメらしい」

「でも、真理が心配なのよ」

「……………」

無限の時間がすぎた。夜になった。無限の時間がながれた。興奮と人いきれでドームのように高い天井は唸っていた。子供が呼んでいる。妻はどうしても乗らなければならない……………」

突然、灯が消えた。あたりは暗黒になった。裂くようなアナウンスがサイレンの浪にのって聞えてきた。

「空襲——、空襲警報——」

「待避」

「みなさん、すぐ待避してください。地下に退避してください」

しんとしたのは一瞬だった。無気味などよめきがひろい一隅から起り、嵐のように場内にひろがった。人間の海が動きはじめた。だが散るためではなかった。前へ前へと動き、押しのけ、揉みあい、闇のなかを改札口に突進した。

「出ちやいかん。危険だっ！ 待避！ 待避！」

だが十時間の拷問は現実で、危険は仮定なのだ。闇と、サイレンと、女の悲鳴とは、集団を獣めいたものに化した。章三郎もそのひとりだった。

「離れるな。しつかりと腰に抱きついて、ついてくるんだ」  
「こわい！」



由紀は夢中で夫にしがみつき、ひきずられた。どこが改札口かも見当がつかなかった。柵の上に立ち上っていた駅員の黒い影はいつのまにか浪に吞まれてしまつて、検札もなにもなかった。靴の響きでブラットホームだということがわかった。仄白い空に列車の屋根がみえる。由紀は息が切れた。すると彼は彼女の胴に手をまわし、荒々しくひきよせて走った。

警報が解除になつても汽車はまだ出なかった。鈴なりの入口で揉み合いが果てしなくつづいていたからだ。辛うじて乗ったものは、「早く出せ！」と叫び声を上げていたが、車掌も駅員も姿をみせなかった。章三郎と由紀は便所の戸の前に押しつぶされそうにして立っていた。向い合つた姿勢なので、頬と頬とが触れるばかりだった。だれも見ているものはない。思い切つて彼は頬をすりよせた。別れねばならぬ。じぶんだけは下りねばならぬ。それがふしぎなのだ。なぜこのまま行つてしまわないのか。なぜ、郵便局長の辞令などを受けてしまったのか。

盛岡まで十八時間。それからまた花輪線に乗り換えねばならぬ。昼から立ち通しなのだ。由紀のからだは保つだろうか。

彼は首をねじまげて、幸福な座席の人々をながめた。すると、三人掛の席のなかに海軍の制服をきた将校が二人ずつ膝をひらいて向い合っているのをみとめた。

彼はわけのわからない衝動にかられた。

「由紀、こっちへ来い。そこに席がある！」

大声だったので一齊に視線が上った。彼は力まかせに肩で押し分け、その席のちかくに出た。

「帝国海軍の将校さんだ。なんとか席を分けていただけ」





「いいのよ、あなた！」

「バカ、これから一昼夜も立っていられると思うか」

将校たちは由紀をじっとみつめた。やがて一人が立ち上ると、網棚から四角い箱をおろし、座席と座席の間においた。それから「どうぞ」と低い声で言って、じぶんは箱に腰をおろした。

「すみません、感謝します」

章三郎は羞恥をおぼえた。由紀の頬はもっと紅かった。

ベルが鳴りだした。章三郎ははじめて我にかえった。この車内から下りる人間がいるとだれが想像しているだろう？ 彼は思いきって「失礼します！」と言いなから将校の肩をまたぎ、窓枠に手をかけた。ホームに飛びおりと、それを見た一人の男がたちまち駆け寄って、もぐりこもうとした。

「こら！」と青年将校がどなった。

「一人出たんだから一人入れて下さいよ。お願いします」

「だめだ。ここはもう満員だ」

章三郎は無慈悲にその男を押しつけ、窓枠にしがみついた。由紀は腰を浮かせている。大きな眼が燃えている。章三郎は何を言っているかわからなかった。乗ることと、席を取ることと、貴重な時間は全部なくなってしまったのだ。一度も抱き合わず、接吻もせず、このまま永遠に別れてしまうのではあるまいか。——ベルはとくにやんでいた。ホームに落ちた窓の灯がこりだした。どこかで歓声があがった。無意識に彼は横に歩いていった。「あなた、気をつけて！」と由紀がさげんだ。彼は小走りになった。それから走った。だが口唇が震えてなにひとつ言えなかった。

……章三郎は階段をかけあがった。安普請の建物は鼠のよう

なきしみ声をたてた。火の気のない八畳の部屋。ガラス窓越しに密集した黒い屋根瓦と、凍りついた冬の夜空がみえる。逆光線がその上に殺気立った男の顔を写している。まぎれもないじぶんの顔だ。彼はじっとそれを見詰めつづけた。低い声で紀由、とつぶやいた。

「由紀」

「由紀」

呼びかけているうちに、骨をかむような孤独と、絶望と、悔恨とがこみあげてきた。

爆弾や焼夷弾がいつ降ってくるかわからないこの戦時下、なまじ生活の安定などを求めたのはサル智慧だった。不安定な生活には慣れてきたじぶんだ。愛するものが一緒にいることこそ、いまの時代に絶対必要だったのだ。身動きのできない汽車に乗りこんだのはひとつの啓示だった。それを俺は裏切った。いま彼女は秋田の山の中にいる。そのイメージを四六時中追いかけながら、この怒りの沙漠、都会の片隅で、俺は苛まれていく。おそらくこの建物の焼けなにかぎり、二度と会えまい、二度と……。

「由紀！」

彼は絶叫して、拳をかためて窓をたたいた。ガラスは砕けて、くらしい道路に散っていった。

## いまひとつの別離

就任三日で、章三郎は郵便局をやめようと決心した。

京橋管内郵便局隣組長Fのところへいって、まずそれとなく方法をたずねてみた。だが、それは簡単ではなかった。郵便は国家の重要機構だから、会社員が勝手に辞職するようなわけにはいかない。

局長が病氣だろうとなんだだろうと、個人的理由で局を閉ざすことはゆるされない。もちろん疎開も、移転もできない。やめるには、後任局長をきめて、それを推薦し、資格審査が通って辞令が出てからでなければならない。

章三郎はその日から、友人知人の誰彼かまわず電話をかけた。

「おい、郵便局長にならないか。無報酬でゆずってやるよ」

「なんだって？」

みんな呆れて、本当にしない。

ある友人はわざわざ訪ねてきて、かれを戒しめた。

「バカもいかげんにしろよ。なんのために面倒な手つづきを踏んで成ったんだ？ 失敬だが、君の今までの生活ではいちばん安定してるじゃないか。僕の会社の印紙も全部君のところへ廻してやる。な、すこしは落ちついて人並みの生活をするものだ。いったい、幾つになったと思ってるんだ？」

「そんなことを言ってるんじゃないんだ。とにかくこの生活が我慢できないんだよ」

「それが君のわるい病氣なのさ。一生懸命種をまいて刈り取ったためしがない。こんど局をやめたら、もう可能性はないぞ」

「君みたいな坊ちゃん課長とはちがうよ。とにかく、だれか適当な成り手はないか？」

「品物を売るようにあまり言い触らすと、逓信局からお目玉を食うぜ。まあ一杯やろう。このウイスキーは……」

アルコールは彼の病氣を半日鎮めた。が、夜がくると、もうどうにもならなかった。

ある友人は彼の病源をつきとめて、きわめて実際的な忠告をして



くれた。

「戦時下の東京でなくなったのは物質だけだ。人間ばかりはうようよしているよ。思いきって冒險<sup>アドベンチャー</sup>してみちゃどうだ。離れている奥さんにはわるいが、君みたいに神経衰弱のようになったんじゃ身体が保たないよ」

「僕は代用品はきらいなんだ」

わかい娘の大半は重要産業や挺身隊に吸収されていたが、郵便局の要員だけは確保されていた。「格子ある牢獄」の娘たちは「局長さんと呼ぶよりも、なんだか先生って呼びたいわ」などと言って彼になつた。章三郎は彼女たちに他局より高い給料を払い、配給の砂糖を全部はきだして汁粉をこしらえてやったり、乏しい木炭で足あぶりを与えたりした。戦時下に青春を擦りつぶしてゆく女が哀れでたまらなかつたのだ。だが、彼にはみだらな冗談ひとつ言えなかつた。

由紀でなければならなかつた。彼の特異な性向を知り、みとめ、愛してくれるのは彼女よりほかにない。

その苦痛はしだいに激しくなり、ときには狂暴な発作に駆られることがあつた。近くの桜橋に爆弾が落ちて、古びた局舎が大波のように揺れ、局員が青くなって床にひれ伏したとき、彼は舟にでも乗ったつもりでタバコをふかしていた。もっと近くに落ちてこの牢獄を吹飛ばしてくれればいい！

オナニズムを一二回やってみたが、なんら快感が湧かなかつた。

ヤミで酒を買い、土瓶に入れ、お茶にみせかけて湯呑で飲みながら事務をとった。夜になると隣組長が戸外に全員召集してハツパをかける。それも、ただ整列させて番号を叫ばせるだけである。章三郎

はこのやりきれない精神主義に腹を立てた。

「局長宛の極秘文書が毎日のように廻ってくるんだが、局員のまえて開くわけにいかない。それで、夜研究することになっているんです。すまないが私は欠席させてもらいますよ」

そして、二階の八畳に暗幕を張りめぐらし、ほとんど脱いだことのない国民服のままでコタツにもぐりこみながら、せっせと妻や子供に手紙をかいた。

二カ月と幾日かが流れた。昭和二十年三月九日夜、章三郎は友人の家でこの戦争の見通しについて話しこんでいた。Mはドイツ文学者で社会主義者なのだが、ある新興軍需会社の社長がそれを知っていて月給を払い、遊ばせておいてくれた。そして時々Mに、この戦局はどうなるか、ドイツはいつまで抵抗できるかを訊ねるのだそうだ。世にもふしぎな物語はそのころからあつたのである。

夜は更けて、とくに交通機関はなくなつていた。

「これから帰れやしないぜ」

「なあに。ぶらぶら歩いてかえる。朝までには着くだろう」

そのとき、警報が鳴った。これが東京大空襲の皮切りとなつた。

章三郎とMは防空壕にも入らず、すさまじい夜景に眺め入った。高射砲と高角砲の弾道が流星のように憤き上げるなかを、翼の下面を真紅に照らしたされたB29が悠々と突っこんでくる。炎々と夜空を焦がす焰の外廓をめがけて「モロトフのパン籠」がはじけ飛ぶと、その一帯がまた火の海になる。

「悪魔だな、悪魔の美しさだ」と、Mは呻いた。

「方角は江東方面だぜ。君の局は大丈夫か？」

とっさに章三郎は、E局が京橋のはずれで、永代橋をへだてて深

川だということに気づいた。そうだ、もしかしたら……

「すごい大火だ。一晩で本所深川は全滅になるかもしれないよ」とMはまた言った。「みたまえ、対空射撃ばかりで、飛行機はろくに舞上っておらんじやないか。この調子で一週間つづけたら、東京は野原になる」

二人は顔を見合わせた。

「永いことないな。……それだけに、注意しろよ」

「うん」

章三郎が局にたどりついたのは翌朝の十時ごろだった。見渡すかぎりの焼野原に残っているのは金庫の残骸ばかりだった。至るところからまだ煙が立ちのぼり、二つ折れの電柱は燃えつづいていた。そのなかを亡霊のような人たちがうろつき歩いている。

局舎は跡片もなかった。彼がその地点をさがし当てるまえに、局員の女の子がとびついてきた。

「局長さん、無事でよかったわ。でも、とうとう焼けちゃったんです！」

そう言って、おいおい哭きだした。

「よく来てくれたね、君ひとりか？」

彼女はうなずいた。

「ねえ、どうしたらいいんですか」

「僕はさっそく報告に行かなくちゃならないが、君は？」

「なんでもお手伝いします」

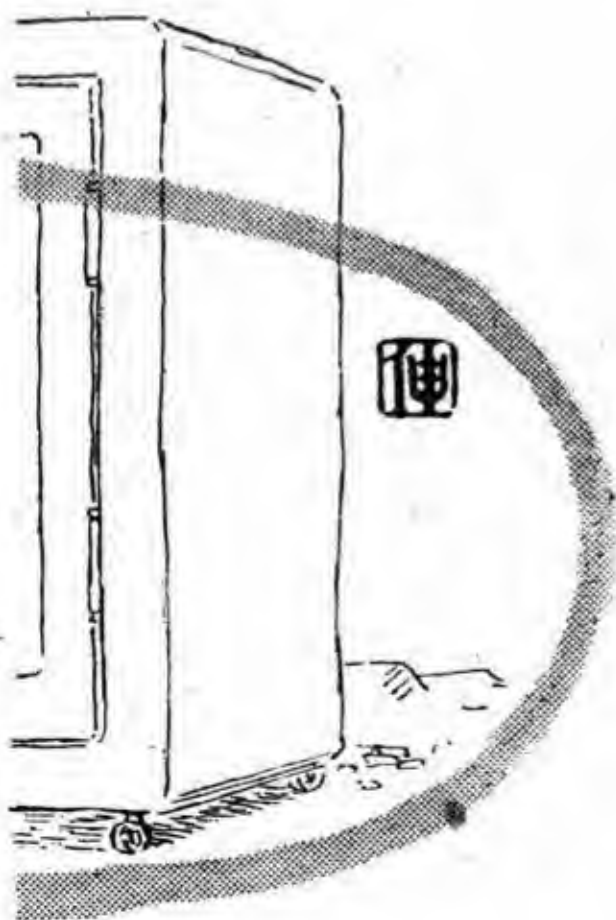
猪股慶子の家は貧しかった。防空服装のズボンは補修布で尻当てをつけた男ものの古だった。四十円もらえばという希望に、彼は六十円ずつ払いつづけてきたのである。

「よし、手伝ってくれ」

彼はこの可憐な娘を見棄てたくなかった。彼の私有財産であるハガキや切手や印紙は全部焼けてしまったが、偶然前の日に金庫に入れておいた隣組の貯金通帳だけは助かった。アメリカの特許をもつこの金庫は、皮肉にもアメリカの焼夷弾に耐えたのである。章三郎と慶子はあちこちの防空壕をたずねて、生き残った人たちにそれを配った。次に、ハガキを大量に仕入れて、三日間、往来に立って戦災者に売った。ハガキはもう貴重品で、E郵便局と貼紙した立札のまえに人々は長蛇の列をつくった。

四散してしまった局員のなかで、慶子だけが毎日、まるで明日にでも局舎が建つかのように、焼跡に通ってきた。しかたなく章三郎も友人の家からそこに足を運ぶのだが、もうする仕事はないのだ。

「郵便局はつぶれたよ。もう君ともお別れだ。さ、これが最後の月給！」





彼は封筒に十円札を八枚入れてわたした。が、彼女はしよんぼり立ったまま動こうとしない。

「君のお母さんも郷里に疎開するそうじやないか。君ひとり東京に残ったってしょうがない。一緒にゆくんだろう？」

「それがダメなんです」

「どうして？」

「私だけは都市防衛員として残されるの。もう一カ月まえだったら自由に田舎にゆけたんですけど」

残忍な政府は大空襲の打撃ですべての市民が東京を見棄てることをおそれ、青春の男女に立去ることを禁じたのである。あらゆる鉄道の駅は彼女に切符を売ることを拒絶した。

「よし、君を出してやろう」

「どうして？」

「局舎は焼けたが、僕はまだ郵便局長だ。君に、長野県小諸町の郵便局へ要務出張を命ずる！」

軍需会社につとめている女の子はヤミ物資のおこぼれにあずかったが、郵便局員にはそんな利益は一つもない。その不遇に酬いる道はタツタ一つある。

郵便局長の判を押した書類があれば、いつでも自由に汽車の切符が買えるのだ。その特権は軍と同列で、割当枚数に関係なく、重要な通信事務に必要とみとめられて即座に発行してくれる。

章三郎が職権を濫用し、郵便局長の地位に感謝したのはこのときだけだった。彼は自分と慶子のために一通ずつ証明書をかいた。



「さあ、これでお母さんもよろこぶだろう。日附は君の発つときのために空けておいたよ。永い間ご苦労さんだった。じゃあ、元気でね」

猪股慶子はほろほろ涙を流して、章三郎の肩にもたれかかった。白い指が上衣の襟をいじっている。

「さあ！」

「局長さん」

「うん、わかった。さ、元気でさよならしよう」「いやです！」

支えている彼の腕がかすかに震えた。黄昏の原には残骸のあとをうろつく人影が遠くに見えるばかりである。彼は不安になってきた。激しい日夜の活動で辛うじて忘れていたものが、沸々と胸にこみ上げてくる。いけない、しっかりしなければいけない！

「猪股君」と、かすれた声を出した。

「僕もこれで東京を去るんだよ。女房と子供が待っているんだから」

「知っています、そんなこと」

「さよなら、気をつけてね」

突きはなしたつもりの手がまた絡みついた。阿呆のようにその指を離すことができなかった。彼は右手で彼女の戦斗帽をずらし、ぐいと顔をひきよせた。一度閉じた口唇を、ひたむきな熱情が開こうとして震えている。章三郎はこの少女の一瞬にうたれた。眼を閉じてキスした。

章三郎はその後に襲ってくるものをよく知っており、辛うじて抑えつけた。だが純真なこの娘は男の欲情を知らない。接吻と抱擁が精一杯の限界なのだろう。だから、それでよかったのだ。

このたった一つの肉体的接触が、ちがった意味で彼の忍耐の最後の一片まで吹きとばしてしまった。通信局の事前の承諾もえずに、彼はその夜の青森行の列車に乗っていた。ぎっしり詰まった車内には親切な海軍将校もなく、章三郎は通路に立ちつづけなければならなかったが、心はとくに由紀のところに飛んでいた。もう何事が

起ろうと、どんな誘惑があるうと、離れて暮らすことは断じてないであろう……。

彼はまちがっていた。そのとき、桃色の召集令状が本郷区役所のデスクをはなれて、彼のあとを追いつめはじめたのである。

## エピソード

ここまで書いてきたとき、私は結城章三郎の訪問をうけた。一カ月ばかり会わなかったが、彼は無愛想で、不気嫌にみえた。机の上の原稿に眼をとめると、疑わしうにじろじろ眺めていた揚句、とうとう我慢ができなくなって声をかけた。

「いまなにを書いてるんだ？」

「これかい？ ああ、いつもの奴さ」と、私はつとめて不気嫌を損ねないように答えた。

「ホラ、例の『感情教育』だよ」

「どれ、見せてみたまえ」

返事も待たずに手を延ばしてひったくると、だまってよみはじめた。

よむにしたがって、彼の表情は変化した。眉をよせたり口唇を曲げたりするのだが、私は知らんふりをしてタバコをふかしていた。

章三郎は原稿を投げ返し、じぶんもタバコを取り出した。

「どうだい？」

「くだらんよ」

「それはまだ途中だからさ。これから描写がはじまるんだ」

彼はぐるっと膝をまわして、私の顔をみつめた。

「いったい、なにが面白いつもりで、牛のヨダレみたいに際限もな



くつづけるんだろうね。大方の読者はアクビして、えらい迷惑をしているよ」

「そうでもないらしいよ。そりゃあ、戦前の生活は、物価や世の中の雰囲気から言っても、いまのわかい人達にはピンとこないところがあったろうさ。いわば序の口で手間取ってしまったって、構成のバランスを失った点だけは後悔している。だから、これからは終戦までを一瀉千里に片ずけて、終戦後から現在までの……」

「おいおい、いい加減にしないか。僕はもう我慢がならない。今度かぎりでもう打ち切りたまえ。さもないと承知しないよ」

「未完成でいいのはシューベルトの交響楽だけだってさ。たとえ僕の書くものが愚劣でも、締めくくりはつける必要がある」

「いつ、つけるんだ？」

「あと、五六回だね」

「やめてもらおう」と、彼はどなった。「今日は僕の日記も持ってゆく。僕のものだから、いやとは言わせないぜ」

私は彼が立ち上って、本棚の前をうろつくのを見送った。前にもこんなことが一度あったが、こんな高圧的な態度をみせたことがなかった。今日はよっぽど、どうかしている。

「結城、落ちついたまえ」と私はしずかに言った。「そうケンカ腰にならなくても日記は返すよ。話によったら打ち切ってもいい。だが、今日にかぎってムキになるのは、なにか理由があるのだろう。それを言ってみたまえ」

彼はじろりと私を睨んだ。それから不服そうに元の席に戻った。

「君になにも報告する義務はないんだが、じつは最近、僕の女性論が本になるんだ」

「うん、それでジークル博士になりすまそうというわけだな」

「ハイドは君が勝手に作りだしたんだよ。僕という人間はべつに分裂してやしない。とくに弁証法的統一に達してるよ」

「それならいいじゃないか」と私は笑った。

「君は女性論でテーゼをかく。僕は『感情教育』でアンチ・テーゼをかく。そこで君と奥さんがシン・テーゼをかなでるんだ」

「冗談はよせ。理由はそれだけじゃない」

「へえ、なんだい？」

「あの小説の第一回がのったとき、これは君のことだろうと当てた友人がすでにいるんだ」

「それは初耳だね」

「正直のところ、僕はどきりとした。KKという雑誌がいかによまれているかというおどろきを含めてね。だが、それは信頼のおける人間だし、まあまあと思っていた。ところが回が重なるにつれて最近、予想外の方面で噂が立ちはじめているんだ。場所だの事件だのどうだっていいものを、君がへんに忠実に書いたおかげでね。そんな必要がどこにあるんだい？」

私は返事にこまった。そういえばそうだ。こんなところに私の悪しきリアリズムが災いしたのかもしれない。

「しかし、由紀さんは公開状まで書いて、掲載するのを承諾したよ」

「それは、まんまと君の誘惑にひっかかったんだよ」と、章三郎はいまいましたに呟いた。「あんなものをかいて、いまになって由紀は後悔しているらしい。あれ以後は毎月KKが気になって、開いてみずにはいられないそうさ。そして、なんだか年じゆう君に縛られたり苛められたりしている錯覚におそわれるとき」

「そこで君は嫉妬している！」

私はすかさず口を入れた。彼はさつと顔色を変えたが、言葉だけは慎重だった。

「とにかく、執筆停止を命ずる」

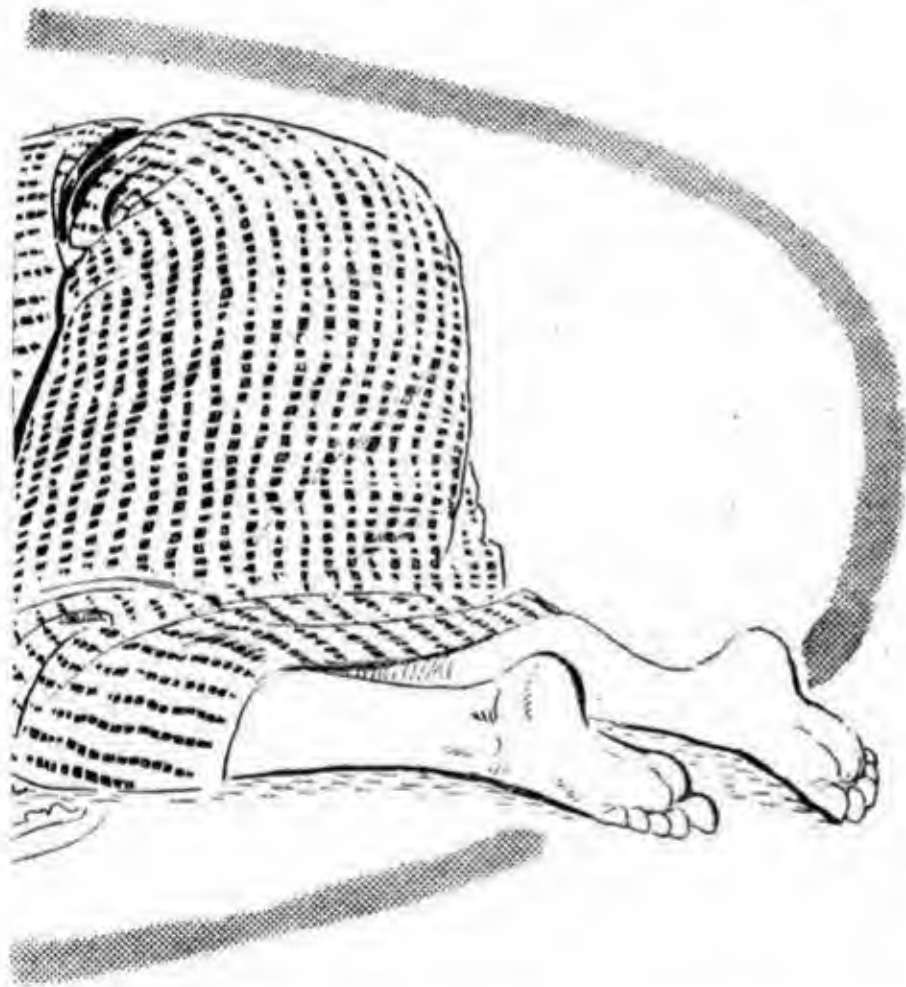
「わかったよ。……だが、あらためて念を押すがね、君は日記にウソを書かないね」

「もちろんだ」

「だとすれば、僕の今までの文章もウソじゃない。君は真実がそんなに怖いのか？」

「くだらん書生論はやめたまえ」

「いやさ、僕がそもそもあんなものを書き出したのはなにも君の私生活を曝こうというんじゃないんだよ、へんにうぬぼれちゃ困る。ただ最初にかいたように、僕はサディズムと愛情とが矛盾しない例証として、君たち夫婦のケースを取り上げたただけなんだ。例証であるかぎり仮空じや意味をなさないからね。その点では君たちはまことに都合のいいモルモットだったわけだ。だが、こいつは君にとっても、むしろプラスになったんじゃないのかね？ たえば、『感情教育』からモデルが君だということを察した人たちは、いきなり



君の正体を発見したときよりもずっと君を理解しているにそういない。君のおそれるのは誤解なのだから、それさえ防げたらいいじゃないか。もう、そろそろ仮面を脱いでもいいころだぜ」

「仮面だと？」

章三郎は奇妙な笑いを浮べてじっと私を見ていたが、だまって立ち上ると再び本棚の前にまっすぐ歩いていった。そして私が新聞紙に包んでかくしておいた日記を苦もなく探し出し、小脇にかかえて縁側に出た。

私はちよっとうろたえた。

「おい、どうするんだ？」

「持ってかえるのさ」

「まあ、待てよ」

「帰るまえにひとこと言っておくがね」と、彼はふりかえった。「僕は当分ここへ来ないから、君もしばらく僕の家へくることを遠慮してもらいたい。まして、由紀がひとりであるようなときにはね」

「なんのことだか、僕にはわからない」

「君は僕ら夫婦を、まことに都合のいいモルモットだと言ったね。だが君の場合はそうじゃないと言うのかい？ ……君は由紀と同年の妻をもっている。しかも君自身、やはり奥さ



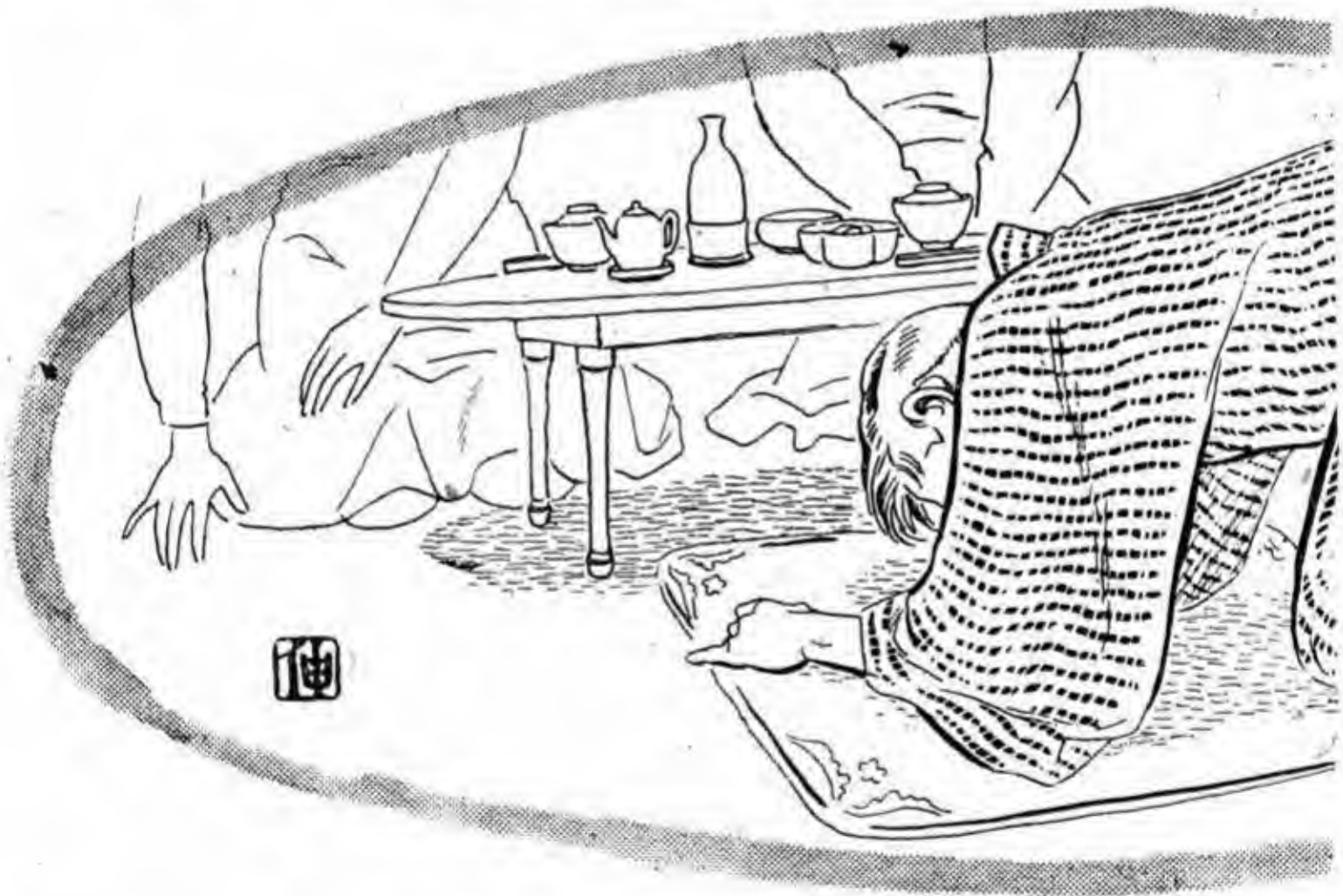
んを愛しながら、縛ったり猿轡をはめたりしてきたじゃないか。なぜ君たち自身を例証とせず、僕や由紀を苦しめるのだ？」

「……………」

「君の主張の正しさを立証したければ、じぶんの体験を吐露したらいいい。それがいちばん確かだからね。小説だと逃げるつもりかしれないが、それなら完全なフィクションをかけばいい。事実にとだわる必要はないのだ。しかし君は小説だという仮面の下に、僕たちのことを洗いざらい書き立てた。君の良心がどんなに身勝手なものか、考えてみたまえ。ジェンナーは愛児に種痘の実験を行ったし、フアブルは毒蜘蛛にじぶんの指をかませているよ。どうやら科学者の熱情は文学者よりも純粹のようだな」

「……………」

「それなのにさ、いつだったか、僕の家へきて、古川裕子さんの勇氣に学べ、だなんて、大した口をきいたものだ。それは僕から君に言う言葉



だぜ、主張だけはじぶんのものにして、その例証の材料に僕たち夫婦をハダカにしてみせる。すこし虫がよすぎると思わないか？」

「……………」

「君と僕、由紀と君の奥さんとはおなじような道があるいたのだから、書きつづけたかったらあとは自分たちをモルモットにすればいい。一人称に改めれば苦もなくつながるんだよ。『感情教育』のモデルは君だ、君と君の女房だ。わかったか、卑怯者！」

×

私も腹が立った。

すぐにもおどりかかって、彼に一撃を加えてやりたかった。だが、できなかつた。決斗でよもや章三郎ごときに負けるとは思わない。ただ、胸の奥ふかく痛みをかんずるからである。私は茫然として机に頬肘をつき、彼の姿が消えるのを見送った。

彼の怒るのもむりはない。しかしそれは私の怒りでもあることを彼は知らないのだろうか。噂は彼ばかり

ではなく、ビキニの灰のように私の上にもふりかかりつつある。私にはそれが振り払えない。彼等は正面切って私にきめつけるのではなく、遠廻しに、あるものは薄笑いをうかべながら仄めかすのだから。彼等の大半はそれでも半信半疑で、私のかいたものは一種の願望から出たつくりごとではあるまいかと思っている。そのとき、私の気持はぐらつくのである。私もまた笑いにまぎらせ、相手を推測のなかに置き去りにしてしまふ。多くは酒の席だから、私の頬の色がかすかに染まったところで、アルコールの責任となるであろう。

これはいったいどういうことか。私は友人や周囲の人たちの非難や軽蔑をおそれない。そういう人たちには直接にくわしく説明もできるし、私というものを観察してもらえるからだ。しかし、私がおそれるのは、彼等の眼のなかに背後の社会をよみとるためである。オスカー・ワイルドを入獄させたのは英国の法律だが、彼をうちのめしたのは法律ではなくてその背後に横たわる社会の道德的烙印だった。「あいつは赤だ」と言われるのとおなじやりきれなさがある。ここに。漠として捕えがたく、それだけ弁明も反駁もゆるさない偏見。じぶんの立場が正しいか正しくないかを語るひまもなく、立場を示す呪わしい言葉がそのまま判決となつてゐる事実。サディズムについて私がなにをしゃべろうと、それは悲しいブーメランとなつて舞い戻り、私のからだを打ち砕くのである。「おまえの言いたいことはよくわかった。だが、とにかくおまえはサディストだね——それで社会的評価は十分なのだ。」

「なにを考えているの？」

いつのまにか、白い腕が首にかかつていた。ふりむくと、妻のユキが微笑をうかべて立っていた。

「うん、ちょっと、小説の筋をね」

「どんなの？」

「島崎藤村の『破戒』みたいなものさ」

「『破戒』なら女学校時代によんだことがあるけど、もう忘れちゃったわ……。それより、ごはんにしましょうよ」

「ああ」

茶の間にはいると、明るい灯が食卓にながれ、徳利が一本のっている。その向い側には、結婚したときのユキとおなじ年になった娘が、待ち切れないといった表情で響きのいい声を立てた。

「さ、最初の一杯だけお酌したげるから、早く座ってちょうだい。あたし、おなかペコペコなのよ」

「まあ待て。いま小説の話をしてるんだ」

「そんなのあとでいいから、……いやだなあ、お父さまったら！」だが私はかまわず、押入の襖を背にして突っ立った。そして、あつけにとられてゐる妻と娘にむかつて深く、深く、最敬礼した。それから両手をついて四つん這いになった。

「私はサディストです、畜生です……」

涙がはらはら滴りおちた。

(完)

愛読者の皆さまの熱狂的な支持を受けました「感情教育」は、こゝにオ十一回を以て完結いたしました。引續いて次号からは吾妻新先生の「夜光島」を連載いたします。何卒御期待下さい。





## 【読者通信】

(投稿歓迎)

(読者通信について) 本誌に取り上げました読者通信の内容につき、それがそのまま編集部意向のように誤解される方も往々あるようですが、読者通信は読者の皆様から御投稿下さったものの中から選び出して掲載しているのではありません。編集者の意図は加っておりません。今後は努めて編集部意図なりお答えなりを附記したいと思ひます。(編集部読者係)

○ 八月号に至って本誌口絵を益々充実し、編集部諸氏の面目躍如たるものがありますが、この機にあつて一マゾヒストとして、口絵に対する意見なり希望なりを述べさせて頂きたいと考えます。編集

部諸氏の努力によって最近、女性サジストたる春日ルミ嬢の出現を見ましたが、この事は我々にとつて本誌発売日を今迄の数十倍もの関心を持って鶴首させる事となりました。殊に、八月号の春日ルミ嬢と伊吹真佐子嬢とによる、アクティヴとパッシヴの美しいポーズ(口絵10・11頁)のすばらしさは今迄の作品中最高のもので、それには(1)、細引の太さが手頃であつて、太すぎもせず細すぎもせず二の腕に、又胸に深く喰ひ入つた状態がひし／＼と感じられる事。(2)、縛られて引き据えられ、又転がされた伊吹嬢及び、猿轡を力一杯引きしほり、又髪を毛を捻りあげた春日嬢の夫々観念した表情、残酷な表情が絵面一杯にあふれている事。(3)、伊吹嬢が腰の物一部を除いて完全に裸にひきまかれてゐるのに対して、春日嬢がブラジャー、パンティをしっかりとまとい足にもハイヒールを付けてゐる事(この事は征服者と服従者との差を確実に現している)等があげられます。しかしそこにもやはり不満があるのです。即ち我々の唯一の心からの願ひは「被縛者が伊吹嬢ではなくて男性だったらなあ」という事にあります。美しいしか

し残酷な春日嬢の足下に、後手に肉もさけよとばかりに喰ひ込んだ縄目をかけられ、しめあげられた猿轡の為に声も立てられずにたゞ苦しうにうごめいてゐる男の姿。かくの如き写真の出現するのを待つてゐるのです、今か今かと。それでは16・19頁にわたつて掲載されている「マゾヒスト・フォト」はどうか、と編集部諸氏はおっしゃるかも知れません。成程あのフォトも女性サジストと男性マゾヒストを扱つたものです。そしてあれに共鳴される方も多数あるでしょう。しかし我々にとつて、元来力にかけては女よりはるかに強い男が、手足に何の束縛もなく自由なまゝの姿で翻弄されてゐるあの種のプレイは、いやらしさが先立つばかりで何の好感も起りません。以上、いさゝか卒直過ぎたきらいはありますが、一応我々の考えを述べさせていたゞきましたので、編集部諸氏にこの様な希望を持った人間も読者の中に居るといふ事を知つていたゞきたく書いたものです。出来れば一枚でもお取上げ下さる様お願い致します。

(中谷冷一)

「マゾ・フォトに対する貴下の御意見は大変参考になりました。何

分、初めての試みでもあり、最もオーソドックス的なものに狙いをつけたわけでありますが、今後は漸次広い範囲に及ぼしてゆきたい氣持です。

箕田

○ 拝啓、編集部の皆様盛夏間近き折からます／＼御健勝の事と存じます。二十五日御誌発刊と同時に入手致し、深夜まで読みつゞけました。小生の腋窩譚拙作にもかゝらず御掲載下さいまして有難うございました、厚く御礼申あげます。潜越ながら、愛読者通信として八月号の迷評及感想を述べさせていただきます。主観的には、伊吹真佐子嬢の「くさり」これは小生にとつて絶対のもので、腋窩譚後半に述べましたアイデアをそのまま実現していただゞきましたことは、唯々感激の他ありません。この一葉の写真が、小生にとりましては数千金に価するものでありました。その他グラビアでは、晴雨画伯御寄贈のものは多少古典的なうらみはありますが、唯、変化のみねらつたアクロバティックな超近代? 的な写真より、その真迫感に於て抜群、モデルの眼の色が違ひます。絵では滝麗子氏の新妻シリーズ、更に続けていたゞきた

いと思います。本文後尾の古川裕子さんの筆力にも敬服致します。出来ればお便り差上げたいたのですが……。唯、こゝで一寸気になりはじめました事は、春日ルミ嬢、実に貴重なモデルを少し乱用の気味です。これは瞬間的なものでなく、長期にわたってその精髓を發表していただきたいと思ひますので、チト天邪鬼な申し方ですが、得難いモデルであればこそ出来るだけそのスペースをセーブされるべきかと存じます。真意、御理解いたゞける事と思ひます。最後に御誌が類似誌がとかく陥り易いズボラなやり方を排し、常に良心的に労力を無視して読者の納得のゆくまで御説明、御解答下さる事は当然と言えはそれまでですが、世評に言われる如き、エログロのみを売れば事足りるという他誌と異り、我々に深い信頼感を与えてくれます。奇クは、我々の心の中に在るという近親感と共に、決して奇クが通り一べんの雑誌ではないという証拠であります。例えば、小生の拙文、腋窩譚中に腋窩に対する偏執を描いた記事はないか、あつても少しだろうという極めて無責任な放言に対し、直に編集部註として、その記事の有無を御回

答下さった如き——、大衆は賢く敏感です。こうした小さな事が積重なって、御誌の隆々たる発展となつたのだと思ひます。(但、二十七年九月号品切れの由、残念です)更に気づかれぬ事ですが、奇クの背の色が毎月異なるのも、細い御心使いの表れとして感謝しております。書棚を美しく彩り一見して何月号か、又その内容など解るのは実に有難いことです。

(佐次浩介)

「編集の態度につき、お賞めの言葉で痛みいたします。いつも至らざるを憂いております。八月号では「フェチシストの悲願」に返答しなかつた事を沼氏から指摘され、恐縮しています。笑田」

投稿致しました拙文が佳作に入選。既に奇クを三号に亘って御贈り戴き、誠に感謝に堪えません。確実に入手致しながら御礼が遅れて申し訳なく存じております。それにしても、今更ながら貴誌の誠実な経営を賞せざるを得ず、二二五頁に在る編集部通信の通り、奇クの隆盛は心から慶賀に堪えません。東京都の書店では、つい四、五ヶ月前の盛況はどこへやら、奇クを模した類似誌は枕を並べて討

死、独り奇クのみが光を放っています。旧号を揃えるにも奇クだけは容易でなく、受験に際して手放してしまつた、二十六、七年頃のものが残念でなりません。二十日に青山の書店で二十七年の七月号を見つけ、漸く二十七年の四月号以降が揃いました。書棚を調べてみましたら、二十六年の十月号と二十七年の三月号がありました。此の頃のものにも一、二作は気に入った作品がありますので、機会ある毎に探しに出かけます。十月号の「織姫の悲哀」や「妖魔の最期」「戦国責絵巻」などは今も面白く読み返しています。早速「変態艶書」等を耽読しておりました。処、二十一日に八月号が配達され二重の喜びでした。作品ではいつもながら松井さんの「蒼朽ちて」が強く印象に残りました。「美しい五月に」を読んで思った事です。五月に「を」は日本中の広い階層の人々から読まれていきます。作品の内容は殆んどが夫婦生活を基調に書かれています。同性愛の告白にしろ、殆んどが一方に家庭生活を持っています。つまり大人の生活です。僕はおとなしそうな女学生が、そつと奇クを読んでいる

のを見たことがあります。新宿でも神田でも赤坂でも、勿論、この年令の女性は大人の世界を覗きたい一方、自分自身に根ざした生活をも求めているのです。端的に申し上げるならば、セクシャル・イデオロギースを全然連想させることのない、加虐、被虐の調和を求めているのです。奇クに載つた作品も数多い中にはこの要求を満たすものも多かったのですが、男S女Mの状態での要求に合したものは殆んどありませんでした。「淫火」や、「私の求めた男」の初期のは余りにも幼なすぎますし、飛田良二氏の作品は、現実離れの嫌いがあります。確かに若い男女のブレーが純粹にブレーで終り得ないかも知れませんが、僕は目下、今年高校を卒業した女性と純粹なブレーを楽しんでおります。甚だ勝手なお願ひですが、男S、女Mの状態で、若い女性の心理的变化の過程を解剖した作品を時々扱って戴いて、参考に致したいと思ひます。予告によりますと、十月号が素晴らしく企画されているらしいので、今から楽しみにしています。その頃には僕達のブレーも、少々強度の「お仕置」を採用できると思ひますし、そうなれば思い



切つて〃告白〃に投稿してみたい  
と思います。(近藤 一)

御書房益々御隆盛の事御慶び申  
し上げます。私奇譚クラブの愛読  
者ですが、古の武士道華やかなり  
し時代がつくつく懐しく感ぜられ  
て、特に切腹に関する記事には残  
らず目を通しております。それも  
壮年男子をとり扱った場合をより  
好みます。女性の切腹には何だか  
物足りなく、いかにも創作ものら  
しく感じられもう一つびんと来な  
いものがあります。多くの人々の  
作を見るに、腹を切るに際して刃  
を深く突立て腸まで露出する様に  
書いてありますが、あれは正式の  
切腹作法としては突立て過ぎて、  
せいゝ五分位で腹膜に達せず切  
るのがよいと、和田氏の「切腹」  
という本に出ていた様に記憶致し  
ます。切腹は、それ自身で死に達  
するといふよりも、最後は頸部を  
突く、即ち頸動脈を切つて死ぬと  
いうので、まあ死に到るには形式  
的なものではないのでしょうか。  
又、赤穂浪士の本懐とけての切腹  
でも、実際左下腹に突立てゝ右ま  
で引き廻したものは四、五人で、  
後は左下腹に突立てるや否や介錯  
人が首を打った様に書いてありま

した。特に腸まで出す場合は、う  
らみの為とか特別な事情の為の切  
腹の場合のみでしょう。二・二六  
事件で、牧野氏を殺し損じた河野  
大尉は、切腹後頸動脈を突き損じ  
十六時間も生きていたではありませんか、故に五分位の深さを横に  
五、六寸位引き廻したつて、絶対  
にといつていゝ程死ぬものではな  
いでしょう。腹膜までゝしたら大  
した血管もありませんもの。又、  
刀は切先五分程残し紙で巻き包み  
コヨリで四ヶ所結ぶとしてありま  
す。小生、自然と切腹に興味を持  
つてより調べてみましたところを  
記しました。八月号の「切腹曼陀

羅図絵」の小姓の切腹図、真に迫  
るものあり、今後あの様なものを  
どしどしお載せ下さい。モデルは  
どうも真に迫るものに欠けており  
ます。いつの場合も小生一度やっ  
てみたいとも思いますが、本當に  
突立てると後に傷あとが残ると都  
合が悪いので遠慮します。中康弘  
通先生に「壮年男子の切腹特集」  
という様な臨時増刊を発行して頂  
けたら幸いと思います。児島輝彦  
氏。小生も貴方と同じ見解、即ち  
壮年男子の深刻悲痛な切腹に関す  
る記事を書いて頂く事に賛同する  
ものであります。一度お目にかゝ  
つて、切腹同性愛に関し御教えを

受けたいと思いますが、どの様な  
手段をとればよろしいのでしょうか、  
か、この誌上で御解答下さい。  
(切腹研究に賛同する男)

奇夕八月号及びKK二十一号を  
同時に入手致しましたので、感想  
やら希望やらを卒直に申し上げま  
す。今月の表紙は大変よく出来て  
いました。奇譚の誌名に適しい秀  
れた出来です。口絵及び写真は一  
覧さえたなら、誰でも欲しくなる  
ような質、量共に優れた出来栄え  
ですが、この上色彩画が加わると  
一段と光を添える事と思います。  
男のマゾ写真は醜悪で反ってマイ

## 代理部月報 今月の新版

### ◇沅腸三態◇

キヤビネ版三枚一組 三百円

出さずくして出なかつた沅腸の写真、沅腸  
マニアは勿論のこと、縛りマニアも挙げて待  
望の垂涎の苦心撮影の作品。

### ◇伊吹真佐子嬢

#### 股間縛り三態◇

キヤビネ版三枚一組 三百円

分譲品として特別に撮影した、他のモデル  
嬢とは一風変わったマゾヒスト伊吹嬢の得意の  
ポーズ。

### ◇萩千恵子嬢

#### 股間縛り三態◇

キヤビネ版三枚一組 三百円

乳房を出すのさえ恥しがらる淑やかなお嬢さ  
ん、千恵子嬢を特に観念させた股しぼり。

### ◇伊吹真佐子嬢 悦虐集◇

手札型 五枚一組 二百円

第二の川端多奈子としてマゾヒストツクな  
雰囲気をも十分に盛り上げた真佐子嬢の悦虐の  
姿態の中から特に強烈なものを選んだ。

# ☆ 奇譚クラブ十月特大号予告 ☆ 定価 140 円

読書の秋を迎えて本誌が愛読者の皆さまへ捧げる甘美なあぶの花束！  
堂々四十頁のアート口絵  
滝麗子 縛り方教室  
畔亭数久画  
仮題「彼女をめぐる」  
三人の男  
杉原虹児幻想画集  
都築峰子艶美画集  
南川和子画  
「ローソク責」  
滝麗子画  
新妻遊戯秋姿二題  
戯画「舞妓」畔亭数久  
縛り写真のアルバム  
モデルの得意なポーズ  
新作まぞひすちつく・ふおと  
切腹画と切腹擬態写真  
写真を元にした緊縛講座  
男性被縛写真と  
ヌードフォト  
組写真 女が女を  
縛り上げるまで  
新着外国あぶ・ふおと  
飛田良二縛絵「あんよは上手」  
絵物語等 他 各種

新構想による連載小説  
吾妻新夜光島  
絶讃の「感情教育」に引続い  
て特に執筆下だった珠玉篇  
○一席入選作品  
被虐願望の女 細川美也子  
○四席入選作品  
妖虫記 芳野眉美  
好評連載、  
○性液 伊藤晴雨  
○マゾヒストの手帖 沼正三  
○残虐なる女性達 森本愛造  
コレクション(私のノートから)  
女性の鼻の美 佐次 浩介  
体操教師 青葉 横一  
少年の禪美 山口 幸一  
女性の腕狂 森 卓志  
私のマゾヒズム断片 河真田子路  
愛と憎しみ 三根 耕二  
浣腸通信に寄せて 羽村京子  
欲義先生性愛相談欄  
女闘美考現 土俵四股平  
告白手記研究記事等満載！

○夕暮の窓辺にて 古川裕子  
○変の字夜ばなし 浮家鷹三  
○雄花の微笑 幹蘭次郎  
○夏子抄(罪ある女の日記) 桜井京一郎  
○初見世バイト 白金紅次  
きものシリ  
女腹切 雪模様鮎川  
おせん 瀬川泰子  
○モデル女の 辻村 隆  
まぞひすむ 二俣志津子  
○藤人間 硝子棒  
○耳かきと硝子棒 硝子棒  
○たのしきかな時代劇 角 皓子  
○中国女性のサジズム 藤木仙治  
○草双紙に見る女腹切 川合伊都子  
○続・被虐哀歓 真金鍛次郎  
○マリー・マドレー 寒川 緑

ナスになると思いますが、少数の  
熱望者の為我慢しましょう。それ  
から、総てをサドとマゾで割り切  
ってしまうのはどうかと考えます  
土俵四股平氏の御研究のような、  
双方真剣に斗うものゝ方が一層新  
鮮味があり、健康的で良きはない  
でしょうか。読物についても同様  
な感を抱くのですが幾分発刺さに  
乏しく、読み嗜みの老人向に出来  
ているのではないのでしょうか、余  
り極端に言い過ぎか？ この点、  
畔亭画伯や滝氏の美容体操などは  
健康的で若々しく、新時代の感覚  
にあって好感を持ちます。写真の  
モデルでは、中富嬢の若さと杉嬢  
の美しい表情が好きです。読物に  
ついて、非常に秀れている事に  
は間違いないのですが、口絵同様  
若さや、新鮮さに乏しいのではな  
いかと思います。何か変態者の為  
の雑誌といった方向へ行っていま  
うのではないかと懸念されるので  
すが、もっと広く大衆性を持たし  
て欲しい。奇譚クラブの誌名に適  
わしい怪奇譚や幻想物、大人の伽  
嘶的な奇抜なもの等望みます。最  
近の奇巧の傾向が、大体において  
価値の高い深みのある、凝った作  
品が多く、読み好みの中年以上の  
人の趣向に適い、若い人や奇を求



める人達にとっては幾分静的であり過ぎるように感じます。もっと動的なスリルに富んだものを多く取入れて欲しい。映画にしても、専門的評論家に好評な波味ある芸術作品より、余り好評でなくとも大衆性のある面白い異色作品に、より多くの観客があります。経済的に安定している年配者層の愛読者を持つ事は、確実な地盤を獲得する上に大変よい事です。書店を通し、色々な雑誌の中から選り出す新しい読者は若い層に多いのですから、この点も大いに考慮して下さい。又、挿絵は多くの読者を獲得する為には本文以上に大切ですから、十分気を配り力を入れて下さい。一部熱心な愛読者に釣られて、変態者のみの専門書にならぬよう、異色ある大衆雑誌として広範囲に発展するよう、重ねてお願い致します。尚編集部通信に書き直しを依頼してあるとか、削除を了承してもらったとかありますが、正直で大変結構には存じますが、読者の方から見れば、そんな凡作に改変されたものはどちらでもよい位の期待しか持てませんから、為念に申し上げます。又KK通信に伏字につきT・T氏の御苦心が述べられ御同情致します

が、大体の想像はつきましても、又それ以上に気を廻しても、矢張り印刷した字として書かれてないと実感は沸かないのです。十分想像が出来た様な写真の説明書を読んでも、実際の写真を見ない事には満足出来ないと同様です。最後にKK通信についてありますが、もっと特色を発揮して貰いたいと思います。発刊の目的は、編集部や代理部の便り、読者間の連絡、それに奇巧には掲載し難いものゝ補助といった点にあると存じます。今のうちに奇巧編集上非常な御苦労をされておられる時、大いにKKの活用を望みます。それから、他の広告はいらないとの事です。奇巧書の紹介はしてもええないでしょうか。自分の雑誌だという気になるのでつい無遠慮になりお許し下さい。(T・M生)

「とかくの指弾を受けながらも、困難なる情況下、最大の効果をあげるべく一生懸命に苦心しているつもりです。男性物には、一枚でもいゝからという熱心な読者も沢山あることを御諒解下さい。本誌並にKK通信の編集について、従来の数倍の努力と細心の注意を払い乍ら、尚且つ御期待にそい得ないことを歎きます」

○ 小生は一昨年夏以来の愛読者です。編集方針に就いて私見の一端を述べます故、お読み下さい。万が一編集上少しでも参考になりましたら、私の喜びは大きい事です。さて、御誌の最近の傾向は八月号で泰山氏も指導しておられる様に、殆どサドとマゾ傾向が大部分で、S、Mの強くない他のマニアの読者には、それが甚だ残念でなりません。自分の好きな記事や写真が出ていない時の失望や落胆は、他の方の想像以上です。そこで編集の基本を、次の様に考えてみました。SやMに偏しない様に、他のソドミーやレスボスやフェチズムやナルチズム(自己愛)やその他を基本の各項目にして、各項目毎に原稿と挿絵や写真を用意してそれを次の三通りの方法で編集してゆく。①、均一編集法。SやMやSD等々の各項目の記事及挿絵写真と同じ分量ずつ組合せて編集する。②、交換法。各項目を交替に掲載する方法ですが、この場合に記事の無い項目は、写真か挿絵は必ず挿入する事が必要です。例えばレスボスやナルチズムの記事がない場合は写真だけ掲載する。③、読者の与論調査を加味して分

量の加減をする方法。読者の希望の多いのを重点的に、他を減らし、て編集する。次に編集方法の中に代理部及びKK通信を拡張して、分譲品を増加させる。これは読者の増加と固定に役立つかと思われまします。④、写真の種類を増加させる。現在のMやSの外にナルチシズムやフェチズムの物を加える事。一例、女装や男装の絵画や写真等。⑤、各種マニア用品の取次販売。各マニアには必要な品(ゴム輪、下着類、ハイヒール、靴下ブラジャー、乳パット等々)は自由に買えそうですが、秘密を欲し内気な読者は店頭で買う勇気がなかなか出ないものです。殊に男性が女性のズロースやブラジャーや乳パット等は買えませんし、殊に女装用の髪や化粧品等は買うのに大変苦労します。これは一つの例で、他のマニアの方でも同様だと思っております。以上乱筆ですが考えの一端を述べました。御参考になれば幸甚です。(滋賀雄二)

〔編集部にては調査済の読者傾向の色分け統計を基に重点的に掲載しました。今後出来るだけ広範囲に発表出来るよう誌面の拡張、材料の蒐集等に努力いたします。〕

## 最寄有名書店へ御予約下さい

本誌は毎月、確実な定日発行を続けておりますが、熱狂的なファンが増えるため、各地で本誌の入手難を訴えられております。では是非最寄りの有名書店へ御予約下さい。

## 御願

雑誌や代理部の分譲品の購入或はその他の用件で直接発行所を御訪問下さる方がありますが、理由の如何を問わず、右は固くお断り申し上げます。編集者に対する面会等は必ず事前に諒解の上、御訪問下さるようお願いいたします。

## モデル嬢募集

本誌の口絵写真に出演を希望される婦人

## 原稿募集

一、創作、告白を問わず生きた人間像を描いたものであれば、如何なる内容形式にても可、世の所謂、アブノーマルと称するものも右の主旨を体したものであれば大いに歓迎する。

一、必ず未発表の作品に限る。

一、締切日は特に定めませんが、優秀作は即刻発表掲載する。

一、枚数は三十枚迄、但し内容によつては五十枚迄可。

一、投稿作品の返却の求めに

の方を募ります。年齢、身長、体重、略歴写真、等同封の上、編集部宛お申込み下さい。詳細につき御返事致します。

## 編集方針について

読者の皆様の御意向を最も迅速に誌面に反映させたい為、皆様の真面目な編集内容、編集方針一般に亘つての御意見を求めます。編集者は誌上或は直接の回答を行う外、今後の本誌の編集について活かしてゆきたいと思ひます。

## 挿絵画家を求む

雑誌の挿絵につき自信のある方を求む、作品、略歴、お送り下さい。

は応じられないが、努めて採否、批評等の連絡は出すようにする。

一、誌上の匿名は可、筆者の個人的秘密については厳守を誓う。

一、掲載篇は作品に応じ相当の謝礼を差し上げる外、優秀作者は本誌の寄稿家として優遇する。

一、特異な題材を以つて立つ新人の野心ある作品に期待するや切。

## ◎直接購読者募集◎

(普通号) 一月分一冊(送料共) 百円  
 三月分三冊(送料共) 三百円  
 半年分六冊(送料共) 六百円  
 一年分十二冊(送料共) 壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけておりますが、御買得のないよう是非直接購読を御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可  
 昭和二十六年一月廿四日 日本国有鉄道特別  
 取扱雑誌承認

## 奇譚クラブ

第八巻 第九号  
 毎月一回一日発行

九月号 定価 百円

昭和二十九年八月二十五日印刷  
 昭和二十九年九月一日発行

編集人 箕田 京二  
 印刷人 上田 庄之助  
 発行人 吉田 稔

発行所 曙書房

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇  
 振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。